

椎田バイパス関係 埋蔵文化財調査報告

— 2 —

福岡県築上郡椎田町所在遺跡群の調査

石堂中後ヶ谷古墳群
菜切古墳群
頭無古墳群

1990

福岡県教育委員会

椎田バイパス関係 埋蔵文化財調査報告

— 2 —

福岡県筑上郡椎田町所在遺跡群の調査

石堂中後ヶ谷古墳群
菜切古墳群
頭無古墳群



1. 石堂中後ヶ谷古墳群全景（南から）



2. 石堂中後ヶ谷古墳群全景（真上から）

1. 石堂中後々谷古墳群近景



2. 石堂中後々谷古墳群近景





1. 石堂中棧ヶ谷古墳群 2号墳



2. 石堂中棧ヶ谷古墳群 13号墳

序

福岡県教育委員会は、日本道路公団の委託を受けて、一般国道10号線椎田バイパス建設予定地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を昭和61年度以降実施しております。

本書は、昭和61年度に発掘調査を行った築上郡椎田町の石堂中後ヶ谷古墳群、菜切古墳群、頭無古墳群についての調査結果を「椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第2集として取りまとめたものであります。

発掘調査の報告としては、満足いくものではありませんが、本書が埋蔵文化財に対する認識と理解、文化財愛護思想の普及、さらには学術研究における活用の一助になれば幸いです。

なお、発掘調査にあたり数々のご協力を頂いた日本道路公団、椎田町教育委員会をはじめ関係各位に対し、心から感謝申し上げます。

平成2年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 御手洗 康

例 言

1. 福岡県教育委員会は、昭和61年度より日本道路公団から委託を受けて、一般国道10号線椎田バイパス建設で破壊される埋蔵文化財を発掘調査した。
2. 本書は、福岡県築上郡椎田町所在の石堂中後ヶ谷古墳群、菜切古墳群、頭無古墳群の調査報告書であり、「一般国道10号線椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告」の第2集目にあたる。

3. 本書の執筆分担は次の通りである。

第1章第1節	緒方 泉
第2節	緒方 泉
第2章第1節	緒方 泉
第2節1、4～12、14～16	田村 悟、緒方 泉
第2節2～3、13	馬田 弘稔
第3節	緒方 泉
第3章	緒方 泉
第4章	緒方 泉
第5章	田村 悟、緒方 泉

4. 遺構の実測図は、柳田康雄、馬田弘稔、小池史哲、緒方泉の調査担当者の他、伊崎俊秋、日高正幸、田村悟、長家伸、野田徹、西田大輔、大西智和、門田誠一、朴賢淑、川添佳子、田中光、今津啓子、犬塚カヲル、海津恵子、増田哲美、荒巻朋子の各氏が、遺物の整理・図面の作成には担当者の馬田、緒方の他に、岩瀬正信、豊福弥生、福嶋育子、原かよ子、森山シヅ子、若松三枝子の各氏が従事した。
5. 掲載写真のうち、遺構を柳田、馬田、小池、緒方が撮影したが、遺物の撮影は九州歴史資料館技術主査石丸洋氏と、須原悦子、矢野明美各氏の協力があつた。
6. 鉄器処理については、九州歴史資料館参事補佐横田義章氏にお願いした。
7. 本書の編集は、馬田の協力のもと、緒方が担当した。

本文目次

第1章	はじめに	
第1節	調査組織と調査の経過	1
1.	平成元年度の調査経過	1
2.	石堂中後ヶ谷古墳群、菜切古墳群、塚無古墳群の調査経過	6
第2節	遺跡の位置と環境	10
1.	遺跡の位置	10
2.	周辺の遺跡	10
第2章	石堂中後ヶ谷古墳群の調査	
第1節	はじめに	15
第2節	遺構と遺物	15
1.	1号墳	15
2.	2号墳	21
3.	3号墳	27
4.	4号墳	33
5.	5号墳	38
6.	6号墳	44
7.	7号墳	48
8.	8号墳	55
9.	9号墳	62
10.	10号墳	67
11.	11号墳	71
12.	12号墳	76
13.	13号墳	84
14.	14号墳	89
15.	15号墳	94
16.	16号墳	98
第3節	小結	101
1.	石堂中後ヶ谷古墳群の諸特徴	101

2. 石堂中後ヶ谷古墳群の造基期間とその消長	107
3. 石堂中後ヶ谷古墳群の羨道について	111
4. おわりに	113

第3章 菜切古墳群の調査

第1節 はじめに	115
第2節 遺構と遺物	115
1. 1号墳	115
2. 2号墳	120
3. 3号墳	126
4. 4号墳	130
5. 5号墳	133
6. 6号墳	136
第3節 小結	146
1. 菜切古墳群の諸特徴	146
2. 菜切古墳群の単位群抽出と墓道復元	150

第4章 頭無古墳群の調査

第1節 はじめに	151
第2節 遺構と遺物	151
1. 1号住居跡	151
2. 1号墳	151
第3節 小結	157

第5章 おわりに

第1節 石堂中後ヶ谷古墳群、菜切古墳群、頭無古墳群の諸特徴と今後の課題	159
第2節 石堂中後ヶ谷古墳群、菜切古墳群、頭無古墳群に対する若干の考察	161
1. 石室の規格性について	161
2. 墓域再編過程の差による類型	165

図 版 目 次

- 巻頭図版 1 1. 石堂中後ヶ谷古墳群全景 (南から)
2. 石堂中後ヶ谷古墳群全景 (真上から)
- 巻頭図版 2 1. 石堂中後ヶ谷古墳群近景
2. 石堂中後ヶ谷古墳群近景
- 巻頭図版 3 1. 石堂中後ヶ谷古墳群 2号墳
2. 石堂中後ヶ谷古墳群 13号墳

石堂中後ヶ谷古墳群

- 図版 1 椎田町所在の古墳群位置関係 (南西から)
- 図版 2 1. 石堂中後ヶ谷古墳群調査前状況 (南から)
2. 石堂中後ヶ谷古墳群調査後状況 (//)
- 図版 3 1. 石堂中後ヶ谷古墳群調査前状況 (真上から)
2. 石堂中後ヶ谷古墳群調査後状況 (//)
- 図版 4 1. 石堂中後ヶ谷古墳群調査前状況 (西から)
2. 石堂中後ヶ谷古墳群調査後状況 (//)
- 図版 5 1. 石堂中後ヶ谷古墳群調査前状況とその周辺の古墳群
2. 石堂中後ヶ谷古墳群全景 (西から)
- 図版 6 1. 石堂中後ヶ谷古墳群近景 (南から)
2. 石堂中後ヶ谷古墳群近景 (北西から)
- 図版 7 1. 1号墳調査前状況
2. 1号墳調査後状況
- 図版 8 1. 1号墳閉塞状況 (奥壁方向をみる)
2. 1号墳閉塞状況 (羨道方向をみる)
- 図版 9 1. 1号墳石室と外護列石
2. 1号墳石室と外護列石
- 図版 10 1. 1号墳石室 (奥壁方向をみる)
2. 1号墳石室奥壁
- 図版 11 1. 1号墳石室左側壁
2. 1号墳石室右側壁

- 図版 12 1. 1号墳全景（後方からみる）
2. 1号墳石室床石除去後（玄門方向をみる）
- 図版 13 1. 2号墳調査前状況
2. 2号墳調査後状況
- 図版 14 1. 2号墳閉塞状況（奥壁方向をみる）
2. 2号墳閉塞状況（羨道方向をみる）
- 図版 15 1. 2号墳石室と外護列石
2. 2号墳石室と外護列石
- 図版 16 1. 2号墳全景（後方からみる）
2. 2号墳全景（後方からみる）
- 図版 17 1. 2号墳玄門
2. 2号墳奥壁
- 図版 18 1. 2号墳右側外護列石
2. 2号墳奥壁（玄門からみる）
- 図版 19 1. 2号墳床石
2. 2号墳石室床石除去後
- 図版 20 1. 3号墳調査前状況
2. 3号墳調査後状況
- 図版 21 1. 3号墳閉塞状況（奥壁方向をみる）
2. 3号墳閉塞状況（羨道方向をみる）
- 図版 22 1. 3号墳石室と外護列石
2. 3号墳石室と外護列石
- 図版 23 1. 3号墳玄門（第1次床石）
2. 3号墳奥壁（第1次床石）
- 図版 24 1. 3号墳石室左側壁（第1次床石）
2. 3号墳石室右側壁（第1次床石）
- 図版 25 1. 3号墳全景（後方からみる）
2. 3号墳石室床石除去後
- 図版 26 1. 4号墳調査前状況
2. 4号墳調査後状況
- 図版 27 1. 4号墳閉塞状況（奥壁方向をみる）
2. 4号墳石室と外護列石（奥壁方向をみる）
- 図版 28 1. 4号墳全景（前方からみる）

2. 4号墳全景（後方からみる）
- 図版 29 1. 4号墳玄門
2. 4号墳奥壁
- 図版 30 1. 4号墳石室左側壁
2. 4号墳石室右側壁
- 図版 31 1. 5号墳調査前状況
2. 5号墳調査後状況
- 図版 32 1. 5号墳閉塞状況（奥壁方向をみる）
2. 5号墳閉塞状況（羨道方向をみる）
- 図版 33 1. 5号墳石室と外護列石
2. 5号墳石室と外護列石
- 図版 34 1. 5号墳玄門
2. 5号墳奥壁
- 図版 35 1. 5号墳石室左側壁
2. 5号墳石室左側壁
- 図版 36 1. 5号墳石室右側壁
2. 5号墳石室右側壁
- 図版 37 1. 6号墳全景
2. 6号墳石室
- 図版 38 1. 6号墳閉塞状況（奥壁方向をみる）
2. 6号墳閉塞状況（羨道方向をみる）
- 図版 39 1. 6号墳玄室と奥壁
2. 6号墳奥壁
- 図版 40 1. 6号墳石室左側壁
2. 6号墳石室右側壁
- 図版 41 1. 7号墳調査前状況
2. 7号墳調査後状況
- 図版 42 1. 7号墳閉塞状況
2. 7号墳閉塞石除去後
- 図版 43 1. 7号墳石室と外護列石
2. 7号墳石室と外護列石
- 図版 44 1. 7号墳玄門
2. 7号墳奥壁

- 図版 45 1. 7号墳石室左側壁
2. 7号墳石室左側壁
- 図版 46 1. 7号墳石室右側壁
2. 7号墳石室右側壁
- 図版 47 1. 8号墳調査前状況
2. 8号墳調査後状況
- 図版 48 1. 8号墳閉塞状況(奥壁方向をみる)
2. 8号墳閉塞状況(羨道方向をみる)
- 図版 49 1. 8号墳石室と外護列石
2. 8号墳石室と外護列石
- 図版 50 1. 8号墳玄門
2. 8号墳奥壁
- 図版 51 1. 8号墳石室左側壁
2. 8号墳石室右側壁
- 図版 52 1. 8号墳前庭部遺物出土状況
2. 8号墳右側外護列石
- 図版 53 1. 9号墳調査前状況
2. 9号墳調査後状況
- 図版 54 1. 9号墳閉塞状況(羨道方向をみる)
2. 9号墳閉塞状況(奥壁方向をみる)
- 図版 55 1. 9号墳石室と外護列石
2. 9号墳石室と外護列石
- 図版 56 1. 9号墳玄門
2. 9号墳奥壁
- 図版 57 1. 9号墳石室左側壁
2. 9号墳石室右側壁
- 図版 58 1. 10号墳調査前状況
2. 10号墳調査後状況
- 図版 59 1. 10号墳閉塞状況(奥壁方向をみる)
2. 10号墳閉塞状況(羨道方向をみる)
- 図版 60 1. 10号墳石室と外護列石
2. 10号墳石室と外護列石
- 図版 61 1. 10号墳玄門

2. 10号墳奥壁
- 図版 62 1. 10号墳左側壁
2. 10号墳右側壁
- 図版 63 1. 10号墳前底部遺物出土状況
2. 10号墳右側外護列石
- 図版 64 1. 11号墳調査前状況
2. 11号墳調査後状況
- 図版 65 1. 11号墳閉塞状況（奥壁方向をみる）
2. 11号墳閉塞状況（羨道方向をみる）
- 図版 66 1. 11号墳玄門
2. 11号墳奥壁
- 図版 67 1. 11号墳石室左側壁
2. 11号墳石室右側壁
- 図版 68 1. 12号墳全景
2. 12号墳と周辺古墳位置関係
- 図版 69 1. 12号墳閉塞状況（奥壁方向をみる）
2. 12号墳閉塞状況（羨道方向をみる）
- 図版 70 1. 12号墳石室と外護列石
2. 12号墳石室と外護列石
- 図版 71 1. 12号墳玄門
2. 12号墳奥壁
- 図版 72 1. 12号墳石室左側壁
2. 12号墳石室左側壁
- 図版 73 1. 12号墳石室右側壁
2. 12号墳石室右側壁
- 図版 74 1. 12号墳遺物出土状況
2. 12号墳遺物出土状況
- 図版 75 1. 13号墳調査前状況
2. 13号墳調査後状況
- 図版 76 1. 13号墳閉塞状況（奥壁方向をみる）
2. 13号墳閉塞状況（羨道方向をみる）
- 図版 77 1. 13号墳石室と外護列石
2. 13号墳石室と外護列石

- 図版 78 1. 13号墳玄門
2. 13号墳奥壁
- 図版 79 1. 13号墳石室左側壁
2. 13号墳石室左側壁
- 図版 80 1. 13号墳石室右側壁
2. 13号墳石室右側壁
- 図版 81 1. 14号墳調査前状況
2. 14号墳調査後状況
- 図版 82 1. 14号墳閉塞状況（奥壁方向をみる）
2. 14号墳閉塞状況（羨道方向をみる）
- 図版 83 1. 14号墳石室と外護列石
2. 14号墳石室と外護列石
- 図版 84 1. 14号墳玄門
2. 14号墳奥壁
- 図版 85 1. 14号墳石室左側壁
2. 14号墳石室右側壁
- 図版 86 1. 15号墳調査前状況
2. 15号墳調査後状況
- 図版 87 1. 15号墳閉塞状況（奥壁方向をみる）
2. 15号墳閉塞状況（羨道方向をみる）
- 図版 88 1. 15号墳石室と外護列石
2. 15号墳石室と外護列石
- 図版 89 1. 15号墳奥壁
2. 15号墳玄門
- 図版 90 1. 15号墳石室左側壁
2. 15号墳石室左側壁
- 図版 91 1. 15号墳石室右側壁
2. 15号墳石室右側壁
- 図版 92 1. 16号墳全景
2. 16号墳石室
- 図版 93 1. 石室中後ヶ谷古墳群正方形タイプ石室（2、3号墳）
2. 石室中後ヶ谷古墳群正方形タイプ石室（4、10号墳）
- 図版 94 1. 石室中後ヶ谷古墳群正方形タイプ石室（12、13号墳）

2. 石堂中後ヶ谷古墳群縦長方形タイプ石室 (1、6号墳)
- 図版 95 1. 石堂中後ヶ谷古墳群縦長方形タイプ石室 (7、9号墳)
2. 石堂中後ヶ谷古墳群縦長方形タイプ石室 (14、15号墳)
- 図版 96 1. 石堂中後ヶ谷古墳群長方形タイプ石室 (5、8、11号墳)
2. 石堂中後ヶ谷古墳群小石室 (16号墳)
- 図版 97 石堂中後ヶ谷古墳群各古墳出土土器①
- 図版 98 石堂中後ヶ谷古墳群各古墳出土土器②
- 図版 99 石堂中後ヶ谷古墳群各古墳出土土器③

葉切古墳群

- 図版 100 1. 葉切古墳群全景 (調査前)
2. 葉切古墳群全景 (調査後)
- 図版 101 1. 葉切古墳群全景 (調査前)
2. 葉切古墳群全景 (調査後)
- 図版 102 1. 1・2号墳全景 (調査前)
2. 1・2号墳全景 (調査後)
- 図版 103 1. 3・4・5・6・7号墳全景 (調査前)
2. 3・4・5・6・7号墳全景 (調査後)
- 図版 104 1. 3・4・5号墳全景 (調査後)
2. 6・7号墳全景 (調査後)
- 図版 105 1. 1号墳調査前状況
2. 1号墳調査後状況
- 図版 106 1. 1号墳閉塞状況 (奥壁方向をみる)
2. 1号墳閉塞状況 (羨道方向をみる)
- 図版 107 1. 1号墳石室と外覆列石
2. 1号墳石室奥壁
- 図版 108 1. 1号墳石室左側壁
2. 1号墳石室左側壁
- 図版 109 1. 1号墳石室右側壁
2. 1号墳石室右側壁
- 図版 110 1. 1号墳石室床石除去後
2. 1号墳石室床石除去後
- 図版 111 1. 2号墳調査前状況

2. 2号墳調査後状況
- 図版 112 1. 2号墳閉塞状況(奥壁方向をみる)
2. 2号墳閉塞石除去後
- 図版 113 1. 2号墳奥壁
2. 2号墳玄門
- 図版 114 1. 2号墳石室左側壁
2. 2号墳石室左側壁
- 図版 115 1. 2号墳石室右側壁
2. 2号墳石室床石除去後
- 図版 116 1. 3号墳調査前状況(4、5号墳未検出)
2. 3号墳調査後状況
- 図版 117 1. 3号墳閉塞状況(奥壁方向を見る)
2. 3号墳閉塞石除去後
- 図版 118 1. 3号墳石室と外護列石
2. 3号墳石室と外護列石
- 図版 119 1. 3号墳石室左側壁
2. 3号墳石室右側壁
- 図版 120 1. 4号墳石室(東から)
2. 4号墳石室(奥壁方向から前方をみる)
- 図版 121 1. 5号墳全景
2. 5号墳閉塞状況(奥壁方向をみる)
- 図版 122 1. 5号墳石室と外護列石
2. 5号墳石室と外護列石
- 図版 123 1. 5号墳石室左側壁
2. 5号墳石室右側壁
- 図版 124 1. 6号墳調査前状況
2. 6号墳調査後状況
- 図版 125 1. 6号墳閉塞状況(奥壁方向を見る)
2. 6号墳閉塞石除去後
- 図版 126 1. 6号墳奥壁
2. 6号墳玄門
- 図版 127 1. 6号墳石室左側壁
2. 6号墳石室左側壁

- 図版 128 1. 6号墳石室右側壁
2. 6号墳石室右側壁
- 図版 129 菜切古墳群6号墳出土土器
- 図版 130 1. 2、3号墳出土土器
2. 6号墳墓道出土遺物検出状況

頭無古墳群

- 図版 131 1. 頭無古墳群全景
2. 頭無古墳群作業風景
- 図版 132 1. 頭無古墳群調査区近景
2. 頭無古墳群住居跡と古墳
- 図版 133 1. 1住居跡全景(東から)
2. 1号墳全景(東から)
- 図版 134 1. 1号墳全景
2. 1号墳石室
- 図版 135 1. 1号墳遺物出土状況
2. 1号墳南東側所在破壊墳
- 図版 136 1. 1号墳出土土器
2. 1号墳出土遺物検出状況
- 図版 137 1. 石室中後ヶ谷古墳群墓道復元案①
2. 石室中後ヶ谷古墳群墓道復元案②
- 図版 138 1. 石室中後ヶ谷古墳群墓道復元案③
2. 石室中後ヶ谷古墳群墓道復元案④
- 図版 139 菜切古墳群墓道復元案
- 図版 140 1. 椎田バイパス建設工事に入った石室中後ヶ谷古墳群(1988.12.19)
2. 椎田バイパス建設工事に入った菜切古墳群(1988.12.19)

挿 図 目 次

- 第 1 図 国道10号線椎田バイパス路線図(1/200,000)..... 2
第 2 図 石堂中後ヶ谷古墳群、菜切古墳群、頭無古墳群と周辺遺跡分布図(1/50,000) ... 9

石堂中後ヶ谷古墳群

- 第 3 図 石堂中後ヶ谷古墳群調査前地形測量図 (1/300)14~15
第 4 図 石堂中後ヶ谷古墳群調査後地形測量図 (1/300)14~15
第 5 図 1号墳調査後地形測量図 (1/100)16
第 6 図 1号墳墳丘土層図 (1/60).....16~17
第 7 図 1号墳石室実測図 (1/60).....19
第 8 図 1号墳石室基底面実測図 (1/60).....20
第 9 図 1号墳出土土器実測図 (1/3)20
第 10 図 2号墳調査後地形測量図 (1/100)22
第 11 図 2号墳墳丘土層図 (1/60).....22~23
第 12 図 2号墳閉塞石実測図 (1/60).....23
第 13 図 2号墳排水施設・根石実測図 (1/60).....24
第 14 図 2号墳石室実測図 (1/60).....24~25
第 15 図 2号墳出土土器実測図 (1/3)25
第 16 図 3号墳調査後地形測量図 (1/100)28
第 17 図 3号墳墳丘土層図 (1/60).....28~29
第 18 図 3号墳閉塞石実測図 (1/60).....30
第 19 図 3号墳石室実測図 (1/60).....30~31
第 20 図 3号墳排水施設・根石実測図 (1/60).....31
第 21 図 3号墳出土土器実測図 (1/3)32
第 22 図 4号墳調査後地形測量図 (1/100)34
第 23 図 4号墳墳丘土層図 (1/60).....34~35
第 24 図 4号墳石室実測図 (1/60).....36
第 25 図 4号墳石室基底面実測図 (1/60).....37
第 26 図 4号墳出土土器実測図 (1/3)37
第 27 図 5号墳調査後地形測量図 (1/100)39
第 28 図 5号墳閉塞石実測図 (1/60).....40

第 29 图	5 号填丘土層图 (1/60).....	40~41
第 30 图	5 号填石室実測图 (1/60).....	41
第 31 图	5 号填石室基底面実測图 (1/60).....	43
第 32 图	5 号填出土土器実測图 (1/3)	43
第 33 图	6 号填調査後地形測量图 (1/100)	45
第 34 图	6 号填閉塞石実測图 (1/60).....	46
第 35 图	6 号填丘土層图 (1/60).....	46~47
第 36 图	6 号填石室、石室基底面実測图 (1/60).....	47
第 37 图	7 号填調査後地形測量图 (1/100)	49
第 38 图	7 号填丘土層图 (1/60).....	50~51
第 39 图	7 号填石室実測图 (1/60).....	51
第 40 图	7 号填石室基底面実測图 (1/60).....	52
第 41 图	7 号填出土土器実測图 (1/3)	53
第 42 图	8 号填調査後地形測量图 (1/100)	56
第 43 图	8 号填丘土層图 (1/60).....	56~57
第 44 图	8 号填石室実測图 (1/60).....	58
第 45 图	8 号填石室基底面実測图 (1/60).....	59
第 46 图	8 号填出土土器実測图 (1/3)	60
第 47 图	9 号填調査後地形測量图 (1/100)	61
第 48 图	9 号填丘土層图 (1/60).....	62~63
第 49 图	9 号填石室実測图 (1/60).....	63
第 50 图	9 号填石室基底面実測图 (1/60).....	64
第 51 图	9 号填出土土器実測图 (1/3)	65
第 52 图	10号填調査後地形測量图 (1/100)	66
第 53 图	10号填丘土層图 (1/60).....	66~67
第 54 图	10号填石室実測图 (1/60).....	69
第 55 图	10号填石室基底面実測图 (1/60).....	70
第 56 图	10号填出土土器実測图 (1/3)	71
第 57 图	11号填調査後地形測量图 (1/100)	72
第 58 图	11号填丘土層图 (1/60).....	72~73
第 59 图	11号填閉塞石実測图 (1/60).....	74
第 60 图	11号填石室実測图 (1/60).....	75
第 61 图	11号填石室基底面実測图 (1/60).....	76

第 62 図	12号墳調査後地形測量図 (1/100)	77
第 63 図	12号墳閉塞石実測図 (1/60)	78
第 64 図	12号墳墳丘土層図 (1/60)	78~79
第 65 図	12号墳石室実測図 (1/60)	79
第 66 図	12号墳石室基底面実測図 (1/60)	80
第 67 図	12号墳出土遺物状況図 (1/40)	82
第 68 図	12号墳出土土器実測図 (1/3)	82
第 69 図	13号墳調査後地形測量図 (1/100)	83
第 70 図	13号墳墳丘土層図 (1/60)	84~85
第 71 図	13号墳石室実測図 (1/60)	85
第 72 図	13号墳石室基底面実測図 (1/60)	86
第 73 図	13号墳出土土器実測図 (1/3)	87
第 74 図	14号墳調査後地形測量図 (1/100)	88
第 75 図	14号墳墳丘土層図 (1/60)	88~89
第 76 図	14号墳閉塞石実測図 (1/60)	89
第 77 図	14号墳石室実測図 (1/60)	90
第 78 図	14号墳石室基底面実測図 (1/60)	91
第 79 図	14号墳出土土器実測図 (1/3)	93
第 80 図	15号墳調査後地形測量図 (1/100)	94
第 81 図	15号墳墳丘土層図 (1/60)	94~95
第 82 図	15号墳石室実測図 (1/60)	96
第 83 図	15号墳石室基底面実測図 (1/60)	97
第 84 図	15号墳出土土器実測図 (1/3)	97
第 85 図	16号墳石室、墓墳実測図 (1/40)	99
第 86 図	石室中後ケ谷古墳群外護列石形態分類図 (1/300)	100~101
第 87 図	石室中後ケ谷古墳群玄室プラン分類図 (1/100)	105
第 88 図	石室中後ケ谷古墳群羨道形態分類図 (1/300)	106~107
第 89 図	石室中後ケ谷古墳群古墳築造過程図	110~111
第 90 図	石室中後ケ谷古墳群7、10、11、12号墳間土層図 (1/60、1/300)	112
第 91 図	石室中後ケ谷古墳群墓道復元図 (1) (1/300)	114~115
第 92 図	石室中後ケ谷古墳群墓道復元図 (2) (1/300)	114~115

菜切古墳群

第93図	1号墳調査後地形測量図 (1/100).....	116
第94図	1号墳墳丘測量図 (1/60).....	116~117
第95図	1号墳石室及び外護列石実測図 (1/60).....	116~117
第96図	1号墳閉塞石実測図 (1/60).....	118
第97図	1号墳石室基底面実測図 (1/60).....	119
第98図	2号墳調査後地形測量図 (1/100).....	121
第99図	2号墳墳丘土層図 (1/60).....	122
第100図	2号墳閉塞石実測図 (1/60).....	123
第101図	2号墳石室実測図 (1/60).....	124
第102図	2号墳石室基底面実測図 (1/60).....	125
第103図	2号墳出土土器実測図 (1/3).....	125
第104図	3、4、5号墳調査後地形測量図 (1/100).....	128
第105図	3、6号墳墳丘土層図 (1/60).....	128~129
第106図	3号墳石室及び外護列石実測図 (1/60).....	128~129
第107図	3号墳閉塞石実測図 (1/60).....	129
第108図	3号墳石室基底面実測図 (1/60).....	130
第109図	3号墳出土土器実測図 (1/3).....	130
第110図	4号墳石室実測図 (1/60).....	131
第111図	5号墳墳丘土層図及び石室実測図 (1/60).....	134
第112図	5号墳閉塞石実測図 (1/60).....	135
第113図	6号墳調査後地形測量図 (1/100).....	137
第114図	6号墳閉塞石実測図 (1/60).....	138
第115図	6号墳石室実測図 (1/60).....	139
第116図	6号墳石室基底面実測図 (1/60).....	140
第117図	6号墳出土遺物状況図 (1/20).....	142
第118図	6号墳出土土器実測図 (1/3).....	143
第119図	菜切古墳群玄室プラン分類図 (1/100).....	148
第120図	菜切古墳群墓道復元図 (1/300).....	148~149

頭無古墳群

第121図	1号住居跡実測図 (1/60)	152
第122図	1号墳調査後地形測量図 (1/100)	153
第123図	1号墳石室実測図 (1/60)	154
第124図	1号墳出土土器実測図 (1/3)	156
第125図	1号墳出土鉄器実測図 (1/2)	157
第126図	築上地域各古墳玄室プラン分類図 (1/100)	168

表 目 次

表 1	一般国道10号線椎田バイパス関係遺跡一覧表	5
表 2	石堂中後ヶ谷古墳群石室計測表	102~103
表 3	石堂中後ヶ谷古墳群玄室法量表	104
表 4	石堂中後ヶ谷古墳群造墓過程変遷表	110
表 5	菜切古墳群石室計測表	145~146
表 6	菜切古墳群玄室法量表	149
表 7	築上地域各古墳石室計測表	162~163
表 8	築上地域各古墳玄室法量表	164

付 図 目 次

付図 1	石堂中後ヶ谷古墳群、菜切古墳群、頭無古墳群発掘区地形図 (1/2,000)
付図 2	菜切古墳群調査前地形測量図 (1/300)
付図 3	菜切古墳群調査後地形測量図 (1/300)
付図 4	頭無古墳群調査後地形測量図 (1/200)

第1章

はじめに

第1節 調査の組織と調査の経過

第2節 遺跡の位置と環境

第1章 はじめに

第1節 調査の組織と調査の経過

1. 平成元年度の調査経過 (第1図、第1表)

平成元年度の発掘調査は、椎田バイパス(豊津-椎田間10.3km)が、平成2年度供用開始というタイムリミットの中で、昨年度からの継続調査である築城町安武・土井の内遺跡(第6-A地点)、同町安武・深田遺跡(第6-B地点)、同町赤橋・森ヶ坪遺跡(第7-B地点)、同町赤橋・十双遺跡(第7-C地点)、同町広末・安武遺跡(第8地点)計5箇所と今年度新たに築城町赤橋・塞ノ神遺跡(第7-A地点)1箇所を常時3~4班体制で、慌ただしく実施した。調査は、平成元年4月上旬の安武・深田遺跡に始まり、12月下旬の安武・土井の内遺跡をもって、椎田バイパス路線内における発掘調査全てが終了した。調査面積は、42,433㎡であった。

安武・深田遺跡の調査は、4月上旬から7月下旬までと8月下旬から11月上旬までの2回に分けて実施した。本遺跡は、城井川北岸の河岸段丘上に位置する。弥生時代の遺構は、弥生時代後期初頭の住居跡10軒、土壇基、塼基等5基からなる墓地群が検出された。遺物は、弥生土器、石庖丁などの石製品の他に、東部瀬戸内系の土器が出土し、海上交通での東西交流を物語る資料として注目された。古墳時代の遺構は、住居跡70軒、孤立柱建物34棟が検出され、当時の集落構成復元に貴重な資料を提示した。また、奈良時代では、谷部から土器と共に木製品、墨書土器が検出された。

赤橋・森ヶ坪遺跡の調査は、4月上旬から10月下旬まで実施した。城井川の氾濫原に形成された遺跡で、縄文時代から奈良時代までの遺構、遺物が重層的に検出された。特に、古墳時代後期以降奈良時代にかけての住居跡105軒、孤立柱建物16棟、鍛冶遺構3基の検出は、先述した安武・深田遺跡の集落と同様に、当時の集落構成復元さらには周辺の群集墳との有機的な関係の解明に当たって大いに参考となる。

広末・安永遺跡の調査は、4月上旬から6月上旬まで実施した。昨年度検出した縄文時代から弥生時代の遺構、遺物の広がりの確認に努め、宅地による削平が著しかったものの縄文時代の落とし穴状遺構4基、溝2条、弥生時代中期前半の土壇4基を検出した。

第3地点の調査は、5月下旬から6月上旬まで実施した。町道を挟んで同じ台地上の北側には、昭和62年度に調査した豊津町第2-E地点が所在する。台地上は削平を受け、遺構の残りが悪く、古墳時代後期の溝状遺構と土壇を検出するに留まった。



第 1 図 国道10号線椎田バイパス路線図(縮尺 1/200,000)

赤橋・塞ノ神遺跡の調査は、6月上旬から6月下旬まで実施した。遺構は、拳大から人頭大の河原石を積み上げた積石塚状のもので、地元住民から塞ノ神一遺祖神として信仰されていたが、調査の結果、周辺の河原石を集積したものであることが判明した。

赤橋・十双遺跡の調査は、7月中旬から10月下旬まで実施した。本遺跡は、城井川氾濫原の微高地上に立地する、縄文時代から奈良時代にいたる複合遺跡である。前年度からの継続調査であり、その成果をまとめれば、縄文時代後～晩期の住居跡1基、土墳1基、弥生時代中期初頭の住居跡2基、貯蔵穴8基、弥生時代後期の住居跡30軒、古墳時代初頭住居跡1基、古墳時代から奈良時代の掘立柱建物2棟になる。それぞれの遺構からは各時期の土器が出土したが、その他にも瓦質の漢式土器、用途不明の銀製品また大量の石磨丁等、貴重な資料を得ることができた。

安武・土井の内遺跡の調査は、7月下旬から8月下旬までと11月上旬から12月下旬までの2回に分けて実施した。本遺跡は、城井川に平行して、南北に細長く伸びた台地上に位置する遺跡であり、安武・深田遺跡とは谷部を挟んで北側に立地する。本遺跡は、縄文時代の落し穴状遺構30基、弥生時代の住居跡1基、古墳時代の住居跡9軒、掘立柱建物6棟からなり、先述した安武・深田遺跡と密接に結びついた一大集落になると推定される。

一方、県教育委員会は、文化財保護思想普及の為、築上郡中学校教頭会、社会科部会を対象にした文化講演会、築城町全小学校を対象にした臨地見学会を実施し、いずれも盛況のうちに終わることができた。

整理作業は、調査と併行して文化課太宰府事務所、九州歴史資料館で行った。調査報告書は、石堂中後ヶ谷古墳群・葉切古墳群・頭無古墳群（第2集）を刊行した。

なお、発掘調査にあたって、日本道路公団、築城町教育委員会、福岡県教育庁京築教育事務所から多大なご援助、ご協力を得た。ならびに作業員として参加して頂いた地元の方々には、多大なご協力を得て、調査が順調に進行した。ここに記して感謝の意を表したい。

平成元年度の調査関係者は下記の通りである。

日本道路公団福岡建設局

局 長	白井 信
次 長	吉岡 康行(前任) 進 哲美
総務部長	進 哲美(前任) 堀 義任
管理課長	副島 紀昭
管理課長代理	荒木 恒久

日本道路公団福岡建設局椎田バイパス工事事務所

所 長	山田 将博(前任) 大島 勲
-----	----------------

副所長（事務担当）	佐藤健一郎
副所長（技術担当）	国本 忠敬
庶務課長	梶川 敏博
用地課長	益岡 政夫
工務課長	佐々木俊治（前任） 飯田 文夫
築城工事区工事長	山口 宗雄
椎田工事区工事長	黒田 義樹

福岡県教育委員会

総 括	教育長	竹井 宏（前任）	御手洗 康
	教育次長	淵上 雄幸	
	指導第二部長	月森清三郎	
	文化課課長	葉石 勲（前任）	六本木聖久
	文化課課長補佐	平 聖峰	
	文化課課長技術補佐	宮小路賀宏	
	文化課参事補佐	柳田 康雄	
	文化課参事補佐	井上 裕弘	
庶 務	文化課主任参事	沢田 俊夫	
調 査	文化課調査班総括（兼）	柳田 康雄	
	同 調査班総括補佐（兼）	井上 裕弘	
	同 技術主査	木下 修	
	同 技術主査	中間 研志	
	同 主任技師	伊崎 俊秋	
	同 技 師	小田 和利	
	同 技 師	水ノ江和同	
	同 文化財専門員	日高 正幸	

表1 一般国道10号線田代バイパス関係遺跡一覧表

地点	遺跡名	所在地	内容	分布面積		調査地区と面積			備考	報告書
				(m ²)	(m ²)	61年度	62	63		
1	神手遺跡	豊津町湧水	弥生・古墳集落、墓地	1,200	試掘(1,200)	1,000			完了	
2-A	磐尾遺跡	〃 磐尾	弥生・古墳・奈良集落	9,600	試掘	9,600			完了	
2-B	八ツ重遺跡	〃 〃	〃	11,000	〃	11,000			豊津町委託完了	1集
2-C	弓田遺跡	〃 下原	〃	3,300	〃	3,300			完了	1集
2-D	下原遺跡	〃 〃	〃	2,000	〃	2,000			完了	
2-E	〃	〃 〃	〃	2,000	〃	2,000			完了	
2-F	カワラケ田遺跡	〃 磐尾	〃	3,000	〃	2,900			完了	
3	〃	磐城町船迫	古墳溝	4,683			4,683		完了	
4	〃	〃 〃	〃		試掘(3,600)				遺構なし完了	
5	双子池遺跡	〃 安武	弥生散布地	4,547	試掘		4,547		完了	
6-A	安武・土井の内遺跡	〃 〃	弥生・古墳集落	5,300	〃	800	4,500		完了	
6-B	安武・深田遺跡	〃 〃	弥生・古墳集落、墓地	22,000	〃	11,000	11,000		完了	
7-A	蕨ノ神遺跡	〃 赤楯	中世石段	460	〃		450		完了	
7-B	赤楯・森ヶ坪遺跡	〃 〃	古墳～平安集落	20,800	〃	2,000	18,800		完了	
7-C	赤楯・十双遺跡	〃 赤楯広米	弥生・古墳集落	9,500	〃	7,500	2,000		完了	
8	広米・安武遺跡	〃 広米	〃	5,900	〃	4,900	1,000		完了	
9	広楯城遺跡	〃 〃	弥生・中・近世城跡	13,800	〃	13,800			完了	
10	山崎遺跡	〃 櫻田町水原	縄文・奈良集落	7,200	7,200				完了	
11	尾久保原敷遺跡	〃 〃	古墳集落	160	160				完了	
13	守尾遺跡	〃 日奈古	〃	5,800	5,800				完了	
16	〃	〃 山本	〃		試掘				遺構なし完了	
18	〃	〃 上り松	〃		〃				遺構なし完了	
21	石堂中後ヶ谷古墳群	〃 石堂	古墳墓地	19,500	19,500				完了	2集
22	栗切古墳群	〃 福間	〃	11,000	11,000				完了	2集
23	頭無古墳群	〃 山邊	〃	15,000	15,000				完了	2集
24	〃	〃 石堂	〃			422			遺構なし完了	
			計	175,740	(4,800) 58,650	32,222	44,547	42,433		

2. 石堂中後ヶ谷古墳群、菜切古墳群、頭無古墳群の調査経過

一般国道10号線椎田バイパス（豊津町～椎田町間、10.3km）に関係する埋蔵文化財の調査は、日本道路公団からの委託により昭和61年度から開始された。

昭和61年度は、福岡県築上郡椎田町に所在する第21、22、23地点について調査が実施された（各地点の遺跡名は、椎田町教育委員会への遺跡名称照会により、第21地点を石堂中後ヶ谷古墳群、第22地点を菜切古墳群、第23地点を頭無古墳群と決定された）。

なお、本調査に先立って、昭和61年3月3日から3月25日まで日本道路公団に関係する椎田バイパス全体にわたって、分布・試掘調査が実施されており、その調査予定面積を確定している。各遺跡は周知の遺跡（福岡県遺跡等分布地図＜豊前市、築上郡編＞掲載）としてあげられており、分布・試掘調査では、以下の2つの方法が取られ、それぞれの結果を報告している。

①丘陵地の場合、樹林の伐採後に踏査して、文化財の有無を確認するもの（石堂中後ヶ谷古墳群、菜切古墳群）。

石堂中後ヶ谷古墳群 表面上15基程の小型古墳が確認できたが、未確認の古墳その他を合わせると、20基以上の古墳群となる可能性があった。調査予定面積19,500㎡。

菜切古墳群 現地はかつてみかん畑等で開墾された部分があるので、不明なところが多いが、数基の古墳が破壊されながら残っていた。調査予定面積11,100㎡。

②試掘調査（バックフォー、人力）を実施して、文化財の範囲を確認するもの（頭無古墳群）。

頭無古墳群 試掘の結果、丘陵の尾根上に土壇状遺構が2箇所で見出されたほか、南斜面で土取り工事のため破壊された古墳の石室が露出しており、古墳の数は増加するものと思われた。調査予定面積15,000㎡。

石堂中後ヶ谷古墳群の調査は、昭和61年5月から9月まで実施され、計16基の古墳を検出した。

本調査では、伐採後の表土、流土の除去（写真①）、焼却（写真②）の後、調査前の全景気球写真撮影を実施した。そして、安全祈願祭（写真③）を行なってから本格的な調査に入った。現地形の平板測量をし、バックフォーによる表土剥ぎ取り（写真④）、さらに各古墳石室内に落ち込む石材のチェーンブロックによる排除に始まり、石室内清掃、閉塞施設清掃、周溝土層観察（写真⑤）を行い、各部分について写真撮影を実施した。続いて、各古墳閉塞施設実測、除去、石室実測（写真⑥）、写真撮影、そして調査後の全景気球写真撮影を実施した。最後に、墳丘立ち割り、土層観察、実測、床石除去、実測、写真撮影という作業を梅雨から盛夏、残暑の時期刻々の天候に左右されながらも無事遂行し、9月15日をもって終了した。

菜切古墳群の調査は、昭和61年11月から昭和62年3月まで実施され、計6基の古墳を検出し

た。

本調査では、石室中後ヶ谷古墳群と同様な調査方法を取りながら、厳寒の中、事故もなく昭和62年3月31日をもって終了した。

頭無古墳群の調査は、昭和61年11月から昭和62年3月まで葉切古墳群と並行して実施され、住居跡1軒、古墳1基を検出した。

本調査では、みかん畑、梅林等の開墾作業で殆ど削平を受け、破壊的な状態で上記の遺構のみ検出したに過ぎず、昭和62年3月31日に無事終了した。

このほか、調査終了後、昭和62年6月、作業用道路建設で石室中後ヶ谷古墳群と同じ丘陵の先端部にあり、約35基からなる石室中原古墳群に工事の手が伸びる危険があったため、現地立ち会い調査を実施し、北側斜面には古墳群が存在しないことを確認した。

一方、石室中後ヶ谷古墳群では、京築地方初の古墳時代終末期群集墳の調査が行われたことから、現地説明会を昭和61年8月22日に実施し、椎田町教育委員会の協力のもと、地元小学校をはじめ、約300人の参加者を得、盛況の中に終わることが出来た（写真⑦、⑧）。

昭和61年度の調査関係者は下記の通りである。

日本道路公団福岡建設局

局長	今村 浩三（前任）	杉田 美昭
次 長	菱刈 庄二	
総務部長	安元 富次	
管理課長	森 宏之	
管理課長代理	佐伯 豊	

日本道路公団福岡建設局椎田バイパス工事事務所

所 長	山田 勝正（前任）	山田 将博
副所長（事務担当）	溝口 萩男（前任）	酒脇 志水
副所長（技術担当）	西村 剣（前任）	坂牧 高三
庶務課長	堀川 正基	
用地課長	工藤 有道（前任）	二神 鉄男
工務課長	佐々木俊治	
築城工事区工事長	坂牧 高三（前任）	山口 宗雄
椎田工事区工事長	鯉坂 佳晃（前任）	黒田 義樹

福岡県教育委員会

総 括	教育長	友野 隆
	教育次長	竹井 宏

	管理部長	大鶴 英雄
	文化課長	窪田 康徳
	文化課課長補佐	平 聖峰
	文化課課長技術補佐	宮小路賀宏
	文化課参事補佐	栗原 和彦
	文化課参事補佐	柳田 康雄
庶務	文化課庶務係長	平 聖峰 (兼任)
	文化課事務主査	竹内 洋征
調査	文化課調査班総括	柳田 康雄 (兼任)
	同 主任技師	馬田 弘稔 (現北九州教育事務所技術主査)
	同 主任技師	小池 史哲 (現福岡教育事務所技術主査)
	同 技 師	緒方 泉 (現主任技師)

調査補助 田村悟 (同志社大学、現直方市教育委員会)、野田徹 (佐賀大学)、長家伸 (九州大学、現福岡市教育委員会)、大西智和 (九州大学)、西田大輔 (奈良大学、現新宮町教育委員会)、田中光 (九州大学)、川添佳子 (九州大学)、朴賢淑 (同志社大学)、門田誠一 (同志社女子大学)。

整理補助 豊福弥生、福嶋育子、原かよ子、森山シズ子、有馬信子、植山洋子、鬼木美知子、若山和子、若松三枝子、横山康子。

発掘調査にあたっては、以下の人々の協力を得た。

荒巻君夫、池田三郎、加藤弘義、川上蔵之助、佐藤克巳、杉野政一、瀬口一郎、高見勲太、津田玉夫、津本正九郎、森征一郎。

荒巻朋子、荒石末子、井上富代、犬塚ガラル、上野トミ江、大石幸子、大石ミヨ子、海津恵子、柏木久子、亀田秀子、木本サツキ、佐藤一枝、谷口サキ、田原ふじ子、津本キヨ子、仲律子、中村節子、西森ヒサ子、西村綾子、馬場清子、前田笑子、前田嶋江、増田哲英、森恵、森八重子、森潤恵子、横井美智子、横山康子、渡辺カズエ。

発掘調査、整理事業では、一川淳江、川本義継、宮本工、濱島三司、森淵豊海、森貞次郎、渡辺正気、小田富士雄、西谷正、武末純一、田中勝の諸先生にご指導、ご助言をいただいた。記して感謝の意を表したい。

また、調査期間中、文化課の木下修 (当時京築教育事務所技術主査) 技術主査、伊崎利秋主任技師、日高正幸文化財専門員の援助を受けた。記して感謝の意を表したい。

調査報告書作成にあたっては、柳田康雄参事補佐、井上裕弘参事補佐、馬田弘稔技術主査、小池史哲技術主査、沢田俊夫主任主事、田村悟、豊福弥生、原かよ子、福嶋育子、森山シズ子の諸氏には格別の配慮をいただいた。記して感謝の意を表したい。



第 2 図 石室中後ヶ谷古墳群、菜切古墳群、頭無古墳群と周辺遺跡分布図(縮尺 1/50,000)

第2節 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置 (図版1、第1・2図)

石堂中後ヶ谷古墳群、菜切古墳群、頭無古墳群は、それぞれ福岡県築上郡椎田町大字石堂字中後ヶ谷、大字福岡字菜切、大字上の河内字頭無に所在する。

これらは、英彦山山系から周防護へ放射状に伸びる舌状丘陵の南側斜面に立地し、石堂中後ヶ谷古墳群を北端にして、南側へ細長い谷を挟みながら隣接して位置する。

椎田町は、福岡県東部、北東を周防護、南西を英彦山山系国見山(標高637m)から細長く幾重にも伸びる舌状丘陵に挟まれた、あまり平野部の発達しない農業と漁業を主産業とする人口約1.5万人の町である。北に人口6.6万人の行橋市、南に人口3.2万人の豊前市がある。町北部を国道10号線とJR日豊本線が並走している。海岸部の高塚には、菅原道真を祭神とした綱敷天満宮があり、今でも受験シーズンになると、各地から受験生が、多数拝観に訪れる。また、天満宮前の海岸は潮干狩りが有名で大潮の時期には、観光バスをしたての貝掘り人が参集する。今後、バイパスの完成で周辺地域の開発が飛躍的にのびることは必至であろう。

2. 周辺の遺跡 (第2図)

椎田町に所在するこれら古墳群の周辺は、従来ほとんど学術的発掘調査の手が伸びていなかったため、文化財の豊富な行橋市、豊前市に挟まれた埋蔵文化財のエポック地帯と言われていた。しかし、今回行った国道10号線椎田バイパス建設に伴う埋蔵文化財の大規模な発掘調査が椎田町に及び、前記の3遺跡のほかにも、広橋城遺跡(第9地点)、山崎遺跡(第10地点)、尾久保屋敷遺跡(第11地点)、寺尾遺跡(第13地点)等で発掘調査が実施され、縄文時代から歴史時代におよぶ遺構の検出がみられ、埋蔵文化財のエポック地帯の歴史が次第に解き明かされようとしてきている。

ここでは、石堂中後ヶ谷古墳群、菜切古墳群、頭無古墳群の所属する古墳時代の遺跡を中心に、周辺の遺跡を紹介していきたい。

頭無古墳 (第2図) 椎田町大字上の河内字頭無に所在する昭和50年8月、椎田町教育委員会は、土取り工事に伴い緊急発掘調査した(調査後すぐに破壊消滅)。上の河内丘陵の南東側斜面、標高45mに立地する古墳時代終末期の横穴式石室を有するものであるが、大半は既に破壊され、墳丘はなく、石室玄室の半分が残っているに過ぎず、奥壁の腰石2石、左右側壁の腰石

1石1段のみであった。玄室は単室と考えられ、主軸をN-10°-Eに向け開口する。現存長1.65m、奥幅1.6mを測る。床面は20~40cm程を敷石とし、隙間には小石を詰める。石材はいずれも安山岩である。

出土遺物には、玄室埋土中から高杯、椀、杯身、杯蓋があり、小田編年のV~VI期のもので、7世紀前半から後半に及び、何回かの追葬行為が考えられる（「頭無古墳」椎田町文化財調査報告書第1集、椎田町教育委員会、1975年）。

頭無古墳周辺の上の河内丘陵では、後述する頭無古墳群第1号墳と南西へ15m離れる。また北側の愛翠園に登る切り通しには、玄室を露頭させた破壊墳が1基存在する（頭無古墳群第1号墳とは30m離れる）。さらに、北側200mのところには山添古墳群（2基、未調査であるが、分布調査の結果、1基は横穴式石室を有する円墳で、南東に向け開口する。玄室長1.6m、玄室幅1.7m、玄室高1.4mを測り、一部残る羨道部は長0.4m、幅0.85mである。他の1基は既に破壊され、墳丘と石室の一部を残すのみである（「福岡県遺跡等分布地図」豊前市、築上郡編、福岡県教育委員会、1976年）。

黒部古墳群（第2図） 頭無古墳群から南東へ約5km離れた豊前市大字松江に所在する。福岡県教育委員会は、集合住宅建設に伴い昭和53年1月から3月、昭和54年2月の2回に分けて発掘調査した。その結果、6基の古墳時代終末期の古墳と1基の9世紀の周溝墓が検出された。

このうち、2、3、6号墳は昭和55年3月1日に県指定有形文化財に指定され現地保存されている。

2号墳は主軸をN-34°-Eに向け開口する単室の横穴式石室で、10×12mの隅丸長方形の墳丘を有している。

玄室は、長2.1m、奥幅1.35m、前幅1.15mの奥幅の狭い縦長方形プランである。床面は盗掘等でほとんど残っていない。玄門部は発達せず、玄門幅0.9mである。羨道部は墓道に向け跳ね上げ気味に続き、長2.1m、幅0.7~0.9mを測る。墓道は主軸方向に4m伸びる。

出土遺物には、墳丘上、墳丘下及び周溝内から玉類、須恵器（杯蓋、杯身、蓋、甌、高杯、壺、甕、提瓶、皮袋形土器）がある。小田編年のIV~V期に比定出来る。

3号墳は主軸をN-39°-Eに向け開口する単室の横穴式石室で、23.4×21.7mの長楕円形の墳丘を有している。

石室は既に徹底的に破壊されているが、石室長5.8m、玄室長2.7m、幅2.4mの正方形プランを有し、羨道幅は1.2m、それに続く墓道は主軸上に8.2m伸びる。床面からは排水溝が主軸上に奥壁中央から羨道部に向け走り、その上には蓋石が一直線に並んで配されていた。羨道部は墓道に向け、跳ね上げ気味になる。

出土遺物には、石室床面上、墳丘下から玉類、武器類（鉄鏃、圭頭式柄頭、噴出鏃）、馬具類

(銅留金具、雲珠、杏葉など)、須恵器(甕)がある。小田編年のIV期に比定出来る。

6号墳は主軸をN-32°-Eに向け開口する複室の横穴式石室で、16.2mの長楕円形の墳丘を有している。

石室長8.2mで、玄室は長1.7m、幅2mの正方形プランで玄門部は袖部が殆ど発達しないが、2石の柩石が置かれる。玄門幅1.6m。前室は、長1.2m、幅1.9mの横長方形プランで前門部にも第2柩石が置かれる。前門幅1m。羨道部は長4.3m、幅1~1.5mである。墓道は羨道部端から3mほど伸びるが、それ以後は削平により消失する。

6号墳では玄室左側壁と左右玄門に船の絵が線刻されていた。

出土遺物には、須恵器(甕)がある。小田編年のV~VI期に比定できる(『黒部古墳群』、玄洋開発株式会社、1979年)。

黒峰尾10号墳(第2図) 本墳は、豊前市大字松江に立地し、先述した黒部古墳群とは丘陵を同じくし、北西に約400m程離れて、ほぼ完存していた。東側同一等高線上には数基の破壊墳が見られる。福岡県教育委員会は、昭和62年6月から7月まで国道10号線椎田バイパス建設に伴い、本墳を発掘調査し、主軸を南東に向け開口する複室の横穴式石室を有する東西径11m程の円墳であることを確認した。

石室は、全長5.5m、玄室は長2.1~2.2m、幅1.75mの略正方形プランになる。玄門部は袖部が発達し、袖幅は右袖0.5m、左袖0.35m、玄門幅0.92mを測り、柩石が1石置かれる。床面は奥壁付近がかなり荒らされ、敷石は原位置にない。前室は長1.1m、幅1.3mの正方形プランで前門部にも第2柩石が4石置かれる。前門幅1.35m。羨道部は長1.5m、幅1.35mを測る。前室、羨道は玄室主軸から南西にややふれる。墓道は羨道部端に接続して4.5m伸びる(現在、福岡県教育委員会により整理中)。

以上、発掘調査により明らかになった古墳のほかにも、周辺には分布調査で発見された古墳が多数存在する。

石堂中後ヶ谷古墳群の周辺は、丘陵先端部に石堂中原古墳群がある。35基からなる群集墳で、石堂中後ヶ谷古墳群とは墓域を異にする。また、谷を挟んで北西には石堂集落の裏手に石堂古墳群がある。これは、55基ほどからなる群集墳で、等高線に沿って3列の列状配置をとる。

また、石堂から北西に位置する山本、合木地区では、真如寺川、極楽寺川流域の丘陵の凝灰岩質角礫岩の崖面に横穴が作られている。この地域では、横穴式石室墳は見られない。

こうしてみると、椎田町周辺に所在する古墳は、6世紀後半以降の律令政治確立へ向けての中央-地方一元化(個別人身支配)の波によって爆発的に増加していく群集墳ということが出来る。今後、このような終末期群集墳形成の波が、豊前地域でどのように展開していくかを明

らかにする上で、個別の古墳の分析と共に、集落地、土器生産地と消費地との関連を分析することでその具体相に迫れることと考えられる。

ところで、「日本書紀」安閑二年条によれば、527年の磐井の乱後、豊前国には膳碓屯倉（企救郡門司）、桑原屯倉（田川郡桑原）、肝等屯倉（京都郡珂田）、大技屯倉（企救郡賈）、我鹿屯倉（田川郡赤）が設置された。九州に設置された屯倉8ヶ所の大半を豊前国内に置いている。これは、ヤマト政権と豊前国との強力な結びつきを考えさせるもので、墓制についても十分にその関係をみてとれると思われる。

また、こうした中に秦氏を中心とした渡来人集団の介在も注意を要する。大宝二年（702年）の戸籍によると、豊前国には仲津郡丁里、上毛郡塔里、上毛郡加自久也里で秦氏関連の人名が見られる。これは、山国川以北から行橋に至る大部分の沖積平野に渡来人関連の集落、墓域が大きく広がっていたことを推測させる。特に、上記の三里はほぼ等間隔に存在しており、各地の拠点集落として展開していたと考えられる。石堂中後ヶ谷古墳群などは上毛郡加自久也里の渡来人と何らかの関係があったと推定でき、今後の資料集積でそれらの実像が明らかにされていくことが期待される。

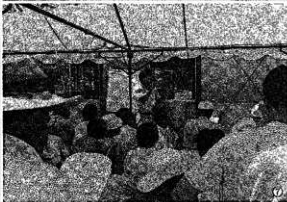


写真1 調査作業工程各光景

①草木除去 ②焼却 ③安全祈願祭 ④バックフォア表土剥ぎ取り ⑤石室、閉塞施設、岡溝掘削 ⑥実測 ⑦・⑧現地説明会

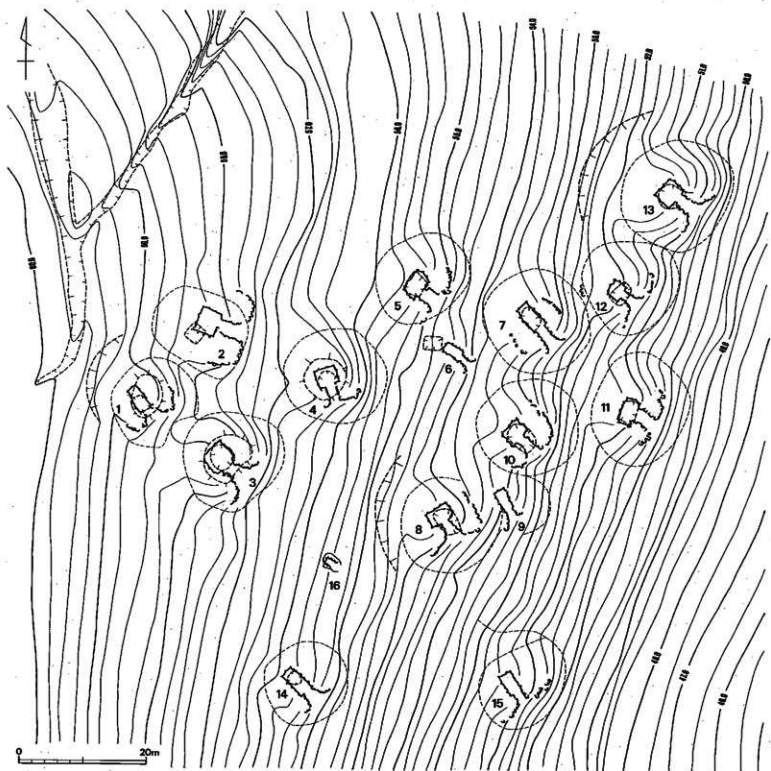
第2章

石堂中後ヶ谷古墳群の調査

第1節 はじめに

第2節 遺構と遺物

第3節 小 結



第 3 图 石堂中後ヶ谷古墳群調査前地形測量図(縮尺: 1/300)



第 4 圖 石堂中後谷古墳群調査後地形測量図(縮尺 1/300)

第2章 石堂中後ヶ谷古墳群の調査

第1節 はじめに

石堂中後ヶ谷古墳群は、葉切古墳群、頭無古墳群の所在する舌状丘陵の北側に位置し、他と同様の丘陵南東側斜面に位置する(付図1)。分布調査では表面上15基程の小円墳が確認された。丘陵先端部には周知の遺跡として、石堂中原古墳群(35基)がある。そのため、路線内調査区には、その他にもかなりの古墳が残っていると推定された(巻頭図版1、図版1、2-1、3-1、4-1、5-1、第2・3・4図、付図1)。

調査は、その対象面積を19,500㎡と定め、昭和62年5月11日から9月15日まで実施された。全面発掘をして遺構の検出を図った結果、石堂中原古墳群とは墓域を異にする典型的な密集型群集墳16基を確認した(図版2-2、3-2、4-2、5-2、6、第4図)。

第2節 遺構と遺物

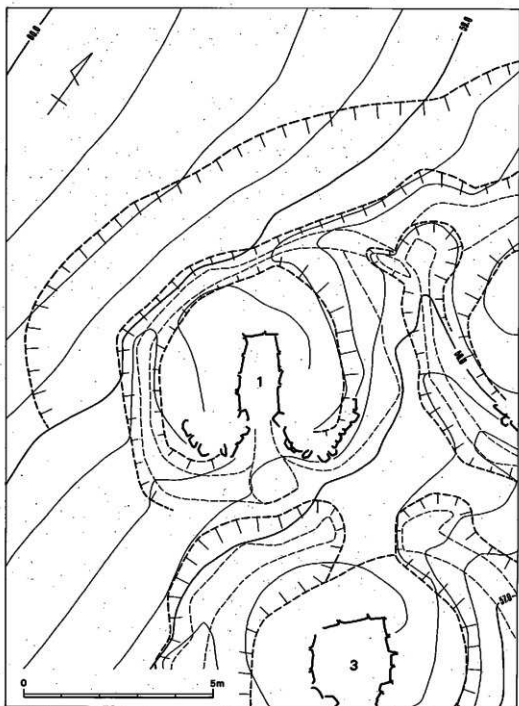
1. 1号墳

1) 位置と現状(図版7-1、第3図)

1号墳は、石堂中後ヶ谷古墳群中で最高位(標高59m)にあり、丘陵頂部(標高65m)からやや下がった南東側斜面に立地している。本墳の墳丘識別は、伐採後、天井部付近の石材露出と石材集積から確認できた。丘陵斜面東側に2号墳、南側に3号墳がある。両墳とは墳裾を接し、周溝を共有する。調査前の墳丘は、東西径6.8m、現高約1mをどむに過ぎず、盛土の流出、後世の削平があったことを伺わせた。1号墳墳裾から後方へ約2.35mのところ、墳丘に沿って、円弧状に地山削り出しのラインが見られた。発掘の結果、等高線にほぼ直角で、南南東側に向かって開口する横穴式石室の内部構造をもつ不整形墳であることがわかった。

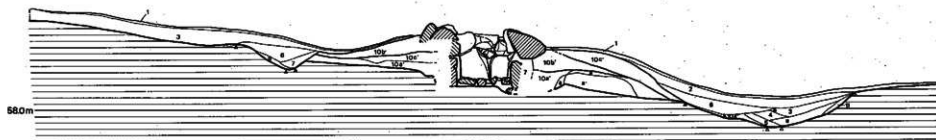
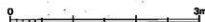
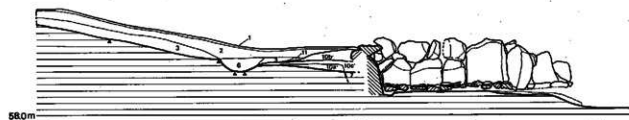
2) 墳丘(図版9、第5～7図)

墳形と周溝(第5図) 地山整形は、墳丘を完全に除去していないので、その詳細は明らかでないが、トレンチ観察によると、古墳構築における地山整形は、墳丘後側の傾斜面を半周する



第 5 圖 1 号墳調査後地形測量図(縮尺 1/100)

- 1 褐色土
- 2 赤褐色粘質土
- 3 褐色粘質土
- 4 暗褐色土(5mm次のマンガン粒、炭粒を含む)
- 5 褐色粘質土
- 6 赤褐色粘質土(炭粒を含む)
- 7 褐色土
- 8 黄褐色粘質土(風化5mm次の母岩ブロックを含む)
- 10a 暗褐色土(5~10mm次のマンガン粒を含む)
- 10b 赤褐色粘質土(1~3cm次の地山母岩ブロックを含む)
- 10c 黄褐色粘質土(5~10cm次の地山母岩を含む)
- 11 暗赤褐色粘質土
- a 赤褐色粘質土



第 6 図 1号墳横丘土層図(縮尺 1/60)

馬蹄形周溝の掘削とその内側の墳丘基底面の整地という二つの作業から成っていると推定される。

馬蹄形周溝は、約12度の傾斜面の標高約58.8m部分を上端として、傾斜面を削り出している。この周溝は、墳丘基底面を全周せず、傾斜面からの流水を上方から下方に送り出すものと考えられる施設で、前面側斜面では見られない。周溝は非常に浅く、北側で幅0.7m、深さ0.2m、東側で幅1.9m、深さ0.2m、西側で幅1.35m、深さ0.35mを測る。周溝外側上端部での東西径は、8.75m、周溝内側上端部での東西径は約6.05mである。また、東側周溝は、2号墳の周溝と共有するが、両墳に通したトレンチ土層観察から、1号墳周溝が2号墳周溝を切る状況がみられた。1号墳周溝では、周溝埋没後の掘り直しの跡が見える。そして、その時点で墳丘の一部を削っているところがある。

墳丘基底面は、現状では、北西から南東に向け傾斜する。

墳形は、周溝の回り方からみて、一辺6.05m前後の不整形方形墳とみられる。

墳丘（第6図） 墳丘は周溝内側の整地を基底面として、盛土を行っている。しかし、墳丘盛土自体かなり流出しているため、墳裾が周溝、地山整形面と一致するものではない。

墳丘形成過程は、大きく2段階に分けられると推定できる。第1段階は、石室構築の壁石の裏込め的なものである。第2段階は天井部の被覆と墳形の整形に係わるものである。本墳では、後述する他墳と異なり、墓壇が腰石の高さしか掘られていないので、その形成過程は第1段階と第2段階を併行させながら実施していると推定される。

第1段階は墓壇内の腰石設置後、それを支えるために、叩きしめながら盛り上げている。この段階の盛土は、墓壇上端部からさほど広がる事なく行われる。

第2段階は第1段階に比べさほど固く突きかためることがなく、盛土は地山層を削り出して使用している。天井石架構後、第1段階盛土を覆い更に墳丘平面形を整え、方墳を形成したと思われる。この段階の盛土は、本墳の立地が傾斜面上であることで、かなり流失している。

墳丘遺存高は、玄室床面から0.6mを測る。

外護列石（図版9、第7図） 狭道外端部に連結して墳裾を湾曲しながら巡る。左側に4石、右側に8石残る。右側より左側が発達せず、小ぶりの石が巡り、2、3号墳を意識してか、方形の墳裾を回らず、かなり制約されて置かれていることが分かる。

3) 主体部（図版7-2、8~12、第5~8図）

本墳の埋葬施設は、主軸をN-36.5°-Wにとり丘陵南南東側傾斜面に谷へ向かって等高線と

ほぼ直角に開口する単室の両袖式横穴式石室である。石室は既に盗掘や開墾で、天井部と壁石上部を消失している。石室内は側壁石の崩落や流土によって埋設していた。玄室内は、盗掘を受けているにもかかわらず、床面の敷石は20cm程度の転石をもっとも多く使い、表面は平坦なものを選んでいる。出土遺物は土器があった。

石室は縦長方形プランを有する玄室に「ハ」の字に開く短い羨道を接続する。玄門部に閉塞施設がみられる。石室全長は左壁3.06m、右壁3.04mを測る。石室を構築する石材には、安山岩の転石が使用されている。

閉塞施設 (図版8) 玄門部に閉塞施設が存在する。転石を積み上げて閉塞するもので、現存高0.5mである。閉塞施設の位置は、墓道側で奥壁中央から2.6m、羨道側で奥壁中央から1.5m、その間1.1mである。玄門部より前側に積み上げられる。墓道側からみた場合、石積みは雑然とした状態である。下部に40cm大の転石を置き、その上に20cm大の転石を積んでいる。

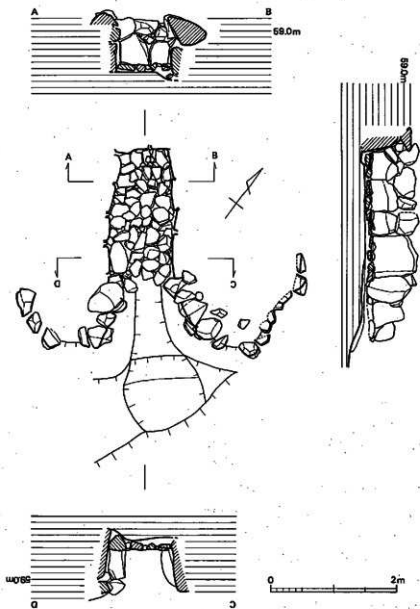
玄室 (図版9~12、第7図) 玄室は、奥幅0.74m、中央幅1.02m、前幅1.0m、左壁長1.09m、右壁長2.02mを測り、前幅の広い縦長方形プランをみる。奥壁は、0.5×0.4mの大ぶりの石と0.3×0.4mの小ぶりの石2石を面を揃えて腰石とする。石積みは、腰石上部一段目からはやや内傾しながら持ち送り、煉瓦積みと重箱積みを併用している。右側壁は4石を面を揃えて据える。玄門部側の1石は他の3石より2倍程大きい。そこで腰石上部の石積みは、まずこの1石上端にあわせるように煉瓦積みと重箱積みを併用し、目地を水平方向に通す。天井部は既にないが、さらに数段積上げてから天井石を架構したと推定できることから、床面からの高さは約1.4mと考えられる。

玄門部は両袖で特別な施設はない。袖幅は左袖0.22m、左袖0.18mで、玄門幅は0.6mを測る。袖石は転石を縦位に立てている。しかし、他墳と異なり、袖部がさほど発達しておらず、無袖式への途上の形態とみたい。

床面は0.2~0.4mほどの転石、割り石で敷かれる。それぞれの隙間には、小石が配される。両側壁方向に反り上がる。敷石除去後、下方より排水溝等の施設は検出できなかった。

石室基底面 (図版12-2、第8図) 中央より両側壁に行くに従って低くなる。腰石を配置する部分は、さらに低くし、根石で支え、それらの安定を図っている。

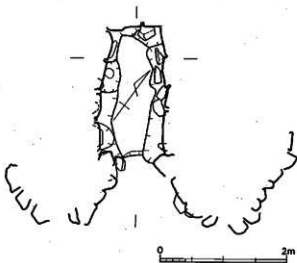
羨道 (図版7-2、第5・7図) 左右壁とも良好な状態で残っていない。壁体構成は奥壁と同様である。羨道長は右壁で1m、左壁で1.17mを測る。幅は玄門側で0.6m、墓道側で1.45mを測り、墓道側へ若干跳上がる。



第 7 图 1号墳石室尖副图(縮尺 1/60)

墓道 (図版7-2、第5・7図)

墓道は羨道外端部に接続し、3号墳裏部に向かって、やや南東に主軸をまげて伸びる。3号墳周溝を切る。最大幅1.2m、深さ0.3m、左側長1.4m、右側長1mを測り、「ハ」の字に広がり、3号墳周溝と接するところで内にすぼまる。断面形は「U」字形である。



第8図 1号墳石室基底面実測図(縮尺 1/60)

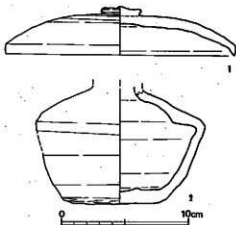
墓 墳 (第6図) 墓墳は墳丘を完全に除去することなく、左右側壁、奥壁側に設定したトレンチでの観察であったので、その全容は把握できなかった。墓墳は、玄室短軸幅2.5m、深さは玄室部奥壁側で0.3mを測る。

4) 出土遺物 (図版97、第9図)

出土遺物には土器があった。小田編年のVII期に属し、8世紀前半に当たる。

土 器 (図版97、第9図)

蓋 (1) 墓道東側より出土。口縁部内面にはかえりがなく、天井部はやや膨らむ。口縁端部は鳥嘴状になる。天井部上半部は窪削りで、その他は横なでである。口径18cm、器高3.9cmを測る。



平瓶 (2) 北側墳丘中段より出土 (3号墳墓道内出土の土器とも接合した)。胴肩部が扁平に張りだし、最大径部になる。肩部より上半で横なで、下半で窪削りである。底部はやや肥厚する。胴部最大径13.4cm、底径6.1cmを測る。

第9図 1号墳出土土器実測図(縮尺 1/3)

2. 2号墳

1) 位置と現状(図版2-1、3-1、4-1、13-1、第3図)

2号墳は、数小群からなる当古墳群のなかで最も標高が高い小群中に所在する。

調査前の現況地形測量の観察では、図4-1・図版13-1に示すように、墳頂部で玄室の遺存壁材や玄門天井石などが露出していた。

また、墳丘周囲の溝状の凹地は、奥壁の西後方でわずかに、側壁の南側では一部が明瞭に認められたが、南接する1号墳との所属関係は明確ではなく、概略径7m前後の古墳と思われた。

2) 墳丘(図版5-2、6-2、13-2、16、第10・11図)

調査は、石室内の落石の除去作業と併行して、墳丘に4本のトレンチを、奥壁後方(奥壁トレンチ)と、これと直交する左・右側壁外方(左・右側壁トレンチ)と、3号墳方向とに設けた。

したがって、第2図に各トレンチの位置を示すように、石室主軸と奥壁トレンチとは一致しない。

以上の各トレンチのなかで、3号墳方向トレンチは、周溝・基道などの重複がなかったので土層の観察のみとし、他の3トレンチの土層断面図(第11図)作成後、墳丘の盛土遺存面を検出し、周溝および周溝外周辺の表土・堆積土を除去し、その墳丘測量図(第10図)を作成した。

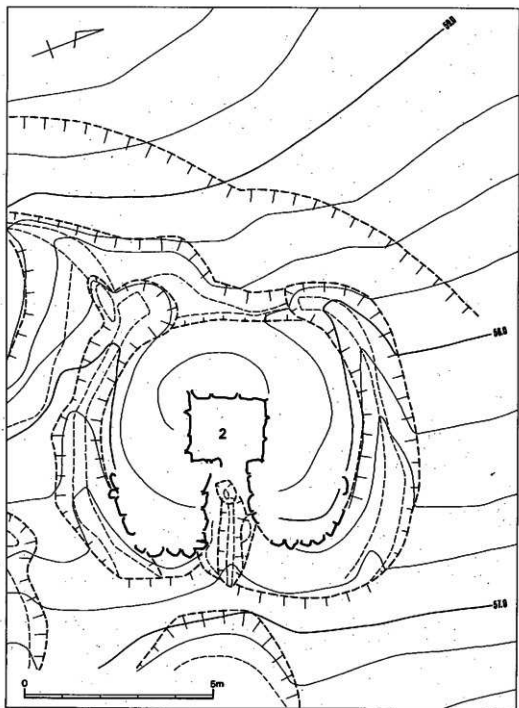
なお、1号墳の右側壁トレンチを2号墳まで延長しての土層図も作成した。

土層観察(第11図)

斜面上位(奥壁後方)の地山削り出しの状態は、奥壁トレンチ土層図に示すように、石室中心から測れば6.80m以下を削るが、その傾斜変換点はわずかに認められるもので、10°前後の旧斜面を若干削っただけで、第10図に示すように、変換線は石室中心から弧を描くように検出され、1号墳のそれと重複する。

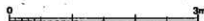
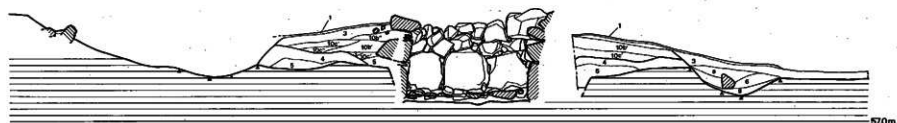
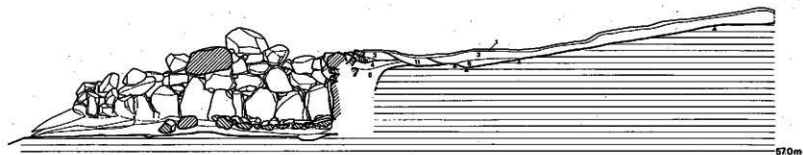
また、同様に測って3.74・2.93・2.75mの各測点は、両側壁側に配された周溝に続く、一段と浅く配された周溝の上・下端で、単に墳裾を画するだけに等しいこの周溝上端幅は0.99m、深さは0.1mほどである。

墳丘基底部は、石室掘り方上端が同様に、1.64mを測り、この上端から既述の2.75m間の地山面が示すように、ほぼ平坦に地山整形を施し、このことは左・右側壁トレンチでも観察でき



第 10 图 2号坝调查后地形测量图(缩尺 1/100)

- 1 積瓦土
- 2 茶褐色粘質土
- 4 暗褐色土 (5mm次のマンガン粒、炭粒を含む)
- 5 褐色粘質土
- 6 黒褐色粘質土 (炭粒を含む)
- 10⁰ 赤褐色粘質土 (1~3cm次の融山母岩ブロックを含む)
- 10⁰ 赤褐色粘質土 (1~3cm次の融山母岩ブロックを含む)
- 10^c 黄褐色粘質土 (5~10cm次の融山母岩を含む)
- 10^c 黄褐色粘質土 (5~10cm次の融山母岩を含む)
- 11 暗茶褐色粘質土
- 8 赤褐色粘質土



第 11 図 2号墳墳丘土層図(縮尺 1/60)

た。

盛土は、わずかに0.2m前後が遺存するだけであるが、奥壁腰石を裏詰め土で安定させた後に、腰石上に小ぶりの側壁石を積みつつ盛土した3層以下の盛土と、石室構築後の盛土11層に分けられる。

上記のように、平坦な基底部の地山整形面は石室掘り方上端～周溝内縁上端間が1.1mしかないために、別途盛土による盛土基底部の平坦化は施していない。

また、左・右側壁トレンチ土層図に示すように、右側壁部では、

石室中心から測って、石室掘り方上端1.80・周溝内縁上端3.38・同外縁上端4.80mを測り、1.80～3.38m間の基底部地山整形幅1.58mは、前述の奥壁側のそれよりも幅広くであるが、顕著な盛土基底部の平坦化工程はないようである。

左側壁部では、同様に測って、石室掘り方上端1.40・周溝内縁上端2.50・同外縁上端3.72mを測る。

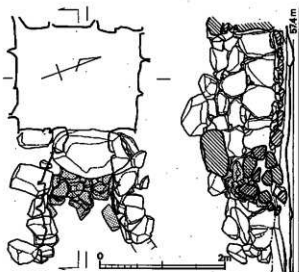
外護列石は、後述する狭道部左・右側壁から連続して、墳丘前面に配されていた。両列石端部を結ぶ線は、天井石中央を通り、主軸とほとんど直交する。

列石は、左側壁側の腰石がいずれも土圧で外傾するが、右側壁側は旧状を保っており、断面図に示すように、周溝内縁上端を若干掘り込んで内傾気味に腰石を配し、隣接する腰石上面との凹みに、斜方向に小口面を落し込んで積み、2段目以上も同様の積み方をし、3段ほどが遺存していた。

以上のことなどから、墳丘の規模は、主軸方向が奥壁トレンチ墳丘基底部周溝内縁上端から左・右外護列石の前面を結ぶ線までが5.95m、左・右側壁トレンチの墳丘基底部周溝内縁上端間が6.30mを測るもので、墳形プランは隅丸方形を呈す。

3) 主体部 (図版4-2、5-2、6-2、13-2、14～19、第10～14図)

本墳は、石室主軸をN-69°-Wにとり、東方向に開口する単室の両袖型横穴式石室で、主軸は北方向にのびる丘陵にほぼ直交する。



第12図 2号墳閉塞石実測図(縮尺 1/60)

掘り方の規模は、既述の左・右側壁断面部で上端幅3.20mを測り、深さは床面まで下げていないが、大略左側壁部で0.6m・右側壁部で0.5mである。

また、掘り方プランは、左・右・奥壁断面部を除いて、盛土を除去しての掘り方検出をしていないので、不明である。

しかし、後述するように、羨道部側壁の腰石が玄門石に対して小ぶりで、羨道部横断面図に示すように、側壁は外傾し、天井石を架さない構えで、左・右玄門石前面プランが整然としていることなどから、掘り方全体のプランは、石室中心から上端を測れば、奥壁後方1.64mから左・右玄門石前面1.60mまでの計3.24mが、玄室左・右側壁断面部幅3.20mとほぼ一致する正方形様を呈し、この両玄門石前面で幅1.80mほどに狭くなって羨道部掘り方へと続くものか。

閉塞施設は、当初に玄門天井石下を厚さ約20cm・横幅30cm弱の小ぶりの石を使用して横方向に3列、上・下に4段積み上げて閉塞し、これら石積みの間隙への小石の挿入はしていない。

この際、計12個の閉塞石全体の閉塞前面は、断面図に示すように天井石前面とほぼ直線的に揃え、玄室側は最下段のみ根石を加えているが、最上段中央の石1個は盗掘に際して除去されていた。

上記の閉塞石前面には、更に、小ぶりの石を縦・斜方向など不揃いに、10cm前後の小石を加えつつ積み増している。

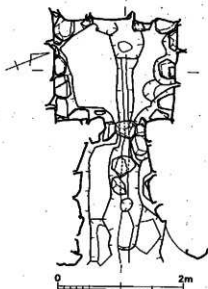
玄室の規模は、奥幅が1.96m、左・右側壁断面部が1.91m、前幅が1.83mで、やや前狭となり、左側壁長が1.59m・右側壁長が1.56mでわずかに右側壁が長い。

なお、玄門最小幅は0.63mを測る。

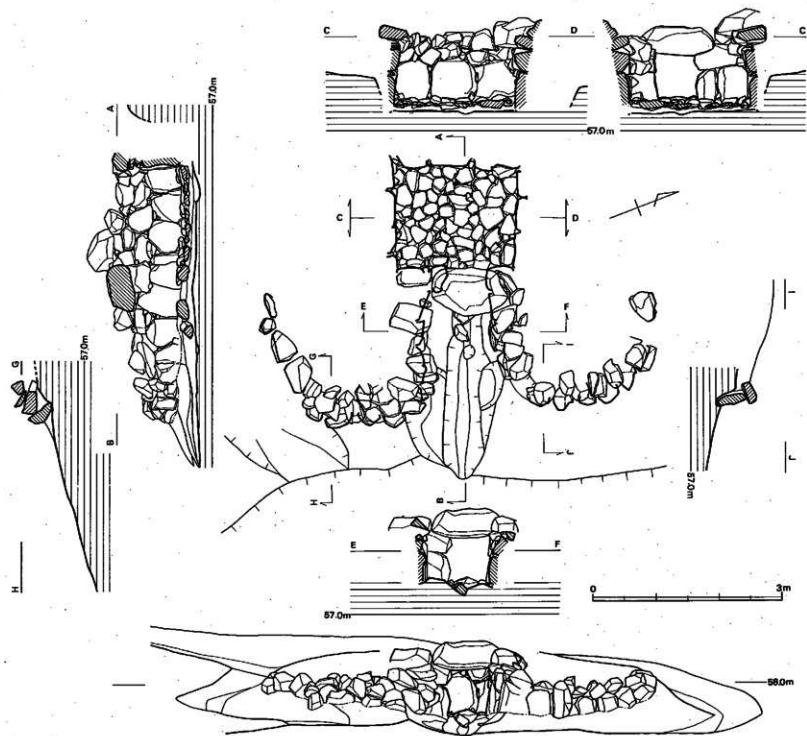
また、各壁の腰石は、奥壁では中央石が横幅0.76m・高さ約0.80m、側壁では左側壁奥壁寄りの石が横幅約0.65m・高さ約0.70mで最も大きい石材を配しているが、他の腰石材もやや小さい程度のほぼ同大の石材を使用している。

玄室のプランは、以上のように玄室計測値平均が、幅1.90m・側壁長1.58mで、0.32mだけ前者が大きいが、 $0.32\text{m} \times 2 = 0.64\text{m}$ は既述の玄門最小幅0.63mとほとんど一致する。

また、上記平均 $1.90\text{m} \div 0.32\text{m} = 5.9375$ 、 $1.58\text{m} \div 0.32\text{m} = 4.9375$ などから、0.32mにほぼ近似する基準単位を量とし、玄室幅は6倍、玄室長は5倍と設計したものが。



第13図 2号排水施設・根石面実測図(縮尺 1/60)

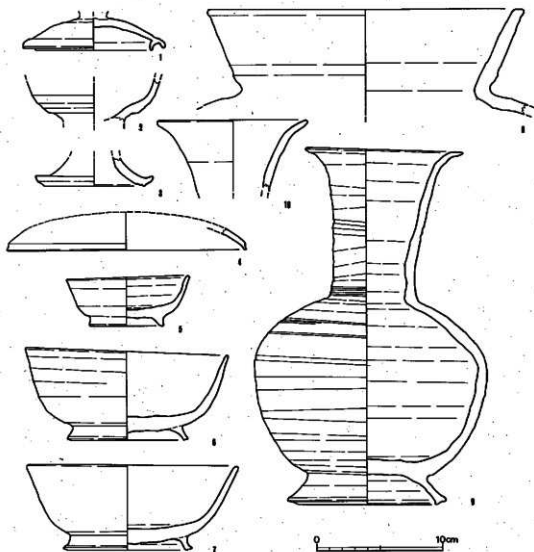


第 14 图 2号塔石质构造图(縮尺 1/60)

加えて、既述の掘り方幅約3.24mはその10倍に一致するに等しい。

なお、4個の左側壁プラン各石先端は直線に接し、玄門部側壁プラン各石先端も左玄門石を除いて直線に接し、両直線は90°を掘り、奥壁プランもほぼ側壁と直交するなど、計画ある玄室プランである。

床石は、径20~40cm・厚さ10cm大の扁平な転石を敷くが、主軸に沿って床面に配された排水溝の暗渠蓋石を兼ねた床石は、当初に横方向に8枚をやや大きめの石材で敷いた状態がよく看取できる。



第15図 2号墳出土土器実測図(縮尺 1/3)

また、玄門天井石下には、床石上面から10cm高く、上述の9枚目の排水溝の暗渠蓋石を架し、その両側に各1個を配すが、天井石奥壁面直下がこの3石の奥壁の面となるように揃えられており、概石の意図が看取される。

羨道部は、断面図に示すように、両側壁共に腰石上に横方向に積まれた石が内傾せずに大きく外傾することから、当初から天井石は架さず、腰石上には2・3段を積む程度で、ほぼ旧状に近い遺存状態であろう。

断面部での幅は1.06mを測り、石室中心から測れば、左側壁で3.09m・右側壁で2.98mまでハの字状に開口して、墳丘の外護列石へと続き、腰石は開口部に近いほど小ぶりなものを使用し、開口部近くの腰石材の厚さは20cm弱で、羨道掘り方壁に張り石として立石しただけに近い。

なお、開口プランは、左側壁部がほぼ直線的に若干開くのに対し、右側壁部は大きく弧を描きながらそのまま外護列石へと続き、5号墳の開口プランと類似し、墓道方向を考える一助となるものか。

掘り方床面は、玄室部から墓道遺存端部にかけて排水溝を主軸下に設け、端部は4号墳周溝に至る。

玄室部では、奥壁寄りに径50cm大の深さ10cmのピットを配し、このピット端から玄門中ほどまでは大路上端幅20cm・下端幅10cm、玄門中ほどから墓道端までは大路上端幅60cm・下端幅15cmを測る直線的な排水溝であるが、断面図に示すように、排水溝は床石下の整地盛土で埋めている。

4) 出土遺物 (図版97～99、第15図)

出土遺物には土器があった。小田編年のV～VII期に属し、7世紀前半～8世紀前半に当たる。

土 器 (図版97～99、第15図)

壺(1) 出土位置は不明。頂部の摘みが欠失する。天井部から内湾気味に口縁部に達する。口縁部の口縁部より内面のかえりがやや突出する。内外面共横なである。口径11.2cmを測る。

甗(2) 墳丘東南側より出土。口縁部下端から頸部に至る部分と思われる。4分の1残存する。

高杯(3) 墳丘東南側より出土。脚部のみ残存する。脚部は短く「ハ」の字に広がり、脚端部は斜目上方に跳ね上げる。内外面共横なである。底径9.4cmを測る。

盤(4) 墳丘前面右側第4区より出土。底部から外方にやや内湾気味に口縁部に達する。口縁部はやや摘み上げる。内外面共横なである。口径19cmを測る。

杯(5) 玄室内北西隅床面直上より出土。底部から口縁部へ斜目に立ち上げる。短く開く高

台が付く。口径9.6cm、器高3.9cm、底径5.7cmを測る。

杯(6) 墳丘前面右側より出土。底部から口縁部へ斜目に立ち上がる。短く開く高台が付く。端面はやや外方に向く。内外面共横なのである。口径16cm、底径8.9cm、器高7cmを測る。

杯(7) 墳丘前面右側より出土。底部から口縁部に斜目に立ち上がる。短く開く高台が付く。端面はやや外方に狭み上げる。内外面共横なのである。口径16.9cm、底径9.3cm、器高6.7cmを測る。

壺(8) 玄室内床面より出土。口縁部付近のみ残存する。頸部から直線的に立ち上がり、口縁部に達する。端部は平坦面を持つ。内外面共横なのである。口径25cmを測る。

長頸壺(9) 玄室内北西隅床面直上より出土。口径12cm、器高28.1cm、底径10.8cm、胴部最大径18.3cmを測る。頸部はやや直に立ち上がってから、口縁部に向かって斜目に進み、端部では朝顔形に若干広がる。頸部中央付近に2条の凹線が回る。胴部はその最大径を中央よりやや上に持つ。肩部から胴最大径部にかけては3条の凹線文を回し、二つの文様帯を作り、中央の凹線を中心にして綾杉状に刺突文を施す。底部には高台が付く。「ハ」の字に短く開き、端部は外側につまみだして上にあげ、そこに稜をつける。内外面共横なので調整を基本にするが、胴部下方では筒脰りになる。

長頸壺(10) 玄室内床面より出土。頸部上半部から口縁部にかけて残存する。口縁部に向け斜目に立ち上がるもので、端部は丸くおさまる。口径12cmを測る。

3. 3号墳

1) 位置と現状(図版3-1、4-1、20-1、第3図)

3号墳も、前述の2号墳と同じ小群中に所在する。

調査前の現況地形測量の観察では、図版4-1・図版20-1に示すように、墳頂部で玄室の遺存壁材や閉塞石の一部が露出し、玄門天井石は除去されていた。

また、墳丘周囲の溝状の凹地は、奥壁の西後方ではほとんど認められず、墳頂部からそのまま2号墳の墳裾へ続く状態で、左側壁の南方でもほとんど埋没していたが、周溝外縁部径が大略8m前後の円墳と思われた。

2) 墳丘(図版3-2、4-2、5-2、6-2、20-2、第16・17図)

調査は、石室内の落石の除去作業と併行して、墳丘に奥壁後方トレンチと、これに直交する左・右側壁トレンチと、2号墳方向トレンチの4本を設けたが、2号墳で既述したように、石



第 16 図 3号墳調査後地形測量図(縮尺 1/100)

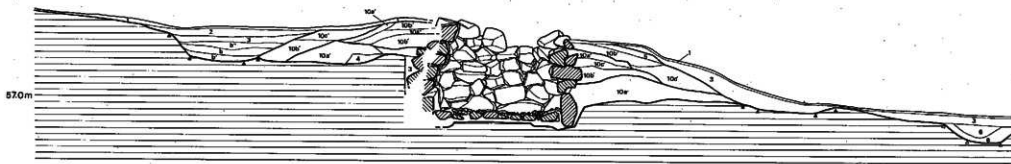
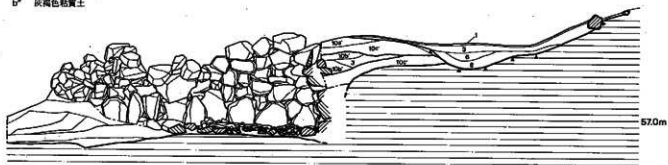
室主軸と奥壁トレンチとは一致しない。

第17図の土層断面図作成以降の作業は、2号墳で既述したとおりである。

土層観察 (第17図)

斜面上位(奥壁後方)の状態は、奥壁トレンチ土層図に示すように、石室中心から測れば、石室掘り方上端が1.41m・地山整形の墳丘基底部端が1.96mを測る。

- 1 埋戻土
- 2 黄褐色粘質土
- 3 褐色粘質土
- 4 暗褐色土(5mm次のマンガン粒、炭粒を含む)
- 5 褐色粘質土
- 6 黄褐色粘質土(炭粒を含む)
- 8 黄褐色粘質土(風化5mm次の母岩ブロックを含む)
- 10a 暗褐色土(5~10mm次のマンガン粒を含む)
- 10b 赤褐色粘質土(1~3cm次の地山礫層を含む)
- 10c 黄褐色粘質土(5~10cm次の地山礫層を含む)
- b 灰褐色粘質土
- b' 灰褐色粘質土
- b'' 灰褐色粘質土



第 17 図 3号填戻丘土層図(縮尺 1/60)

しかし、盛土と周溝埋土の状態および当古墳群全体の主体部プランや出土遺物を含めた新・古の検討などから、上述の地山整形端部の1.96mは以下のように考えられる。

後述する左側壁トレンチ土層では、墳丘基底部の地山整形面上には、最下の10a'・10c'層上面のように盛土が平坦であるが若干墳丘中心部の方に傾斜する平坦面が側壁の持送り石積み工程上認められ、また、最上層の10a'層以下の層による小墳丘が、その平坦面上に造られ、外表の10b'・10c'層が最終的な墳丘整形の盛土である。

奥壁トレンチでは、上記の最上層の10a'層に最下の10c'層が対応する。

しかし、10b'・10c'層に対応する最終的な墳丘整形の盛土は遺存せず、周溝の最下層の8層と上層の3層は、共に1号墳の墳丘流入土として看取できそうである。

以上のことから、先述の地山整形端部の1.96mは、1号墳の墓道によって切られた3号墳の地山整形遺存端部で、1号墳の墓道外縁上端は1.72mの3号墳の盛土上まで及び、その墓道内縁上端が3.00mと考えられるようである。

また、左・右側壁トレンチ土層図に示すように、右側壁部では、石室中心から測って、石室掘り方上端1.29m・周溝内縁3.85m・同外縁5.23mを測り、掘り方は31cmと深く、側壁腰石は中位までしか取まらない。

左側壁部では、同様に測って、石室掘り方上端1.55m・周溝内縁上端3.88m・同外縁上端5.28mを測り、基底部の地山削り出しの状態は、2号墳の左側壁部同様に、掘り方近くを一段高く削り残し、掘り方外周～周溝内縁間を深くしている。

上記の深まりは、盛土を除去していないので断定はできないが、墳丘左半部に設けた溝状遺構で、斜面上位からの雨水の漏水を考慮したもののか。

外覆列石は、後述する羨道部左・右側壁から連続して、墳丘前面に配されていたが、その配石のあり方は、既述の2号墳のそれと明瞭な差違が認められる。

列石は、羨道部側壁の腰石上から墳丘前面にかけて検出したが、羨道側壁腰石端から前面の両列石端までは、2号墳例のような下部に立石はなく、墳丘の地山基底部端に、小口を前面にして配列し、その上面に乱石積みしたままである。

また、左側壁側断面図に示すように、周溝部は墳丘盛土下部をも埋没しているが、断面部も含めて、周溝部内からの列石の転石の出土はなく、右側壁周溝部でも同様であった。

上記のことなどから、2号墳の例のような顕著な外覆列石ではなく、検出し得た左・右列石両端がほぼ旧状を示すプランを示すものと思われ、また、積み上げ高もほぼ原状に近いものか。

以上のことなどから、墳丘の規模は、主軸方向が奥壁トレンチ墳丘基底部の遺存部外端に0.3m前後を加味した地点から左・右外覆列石の前面を結ぶ線までが約5.38m、左・右側壁トレンチの墳丘基底部周溝内縁上端間が7.73mを測るもので、墳形プランは隅丸方形に近い。

3) 主体部 (図版20-2、21~25、第22~25図)

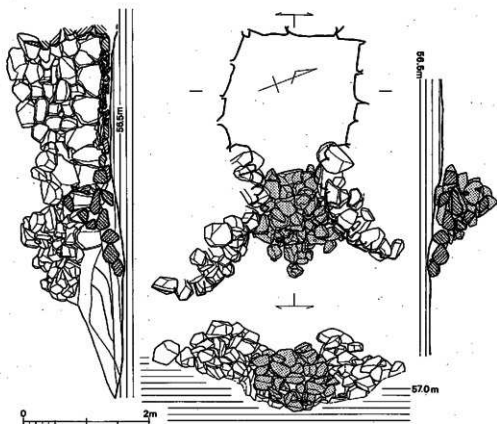
本墳は、石室主軸をN-69°-Wにとり、南東方向に開口する単室の両袖型横穴石室で、主軸は北東方向にのびる丘陵斜面に斜交する。

掘り方の規模は、既述の左・右側壁断面部で上端幅2.84mを測り、深さは床面まで掘り下げた右側壁部が0.31mで、左側壁部・奥壁部は大略1.10・1.20mである。

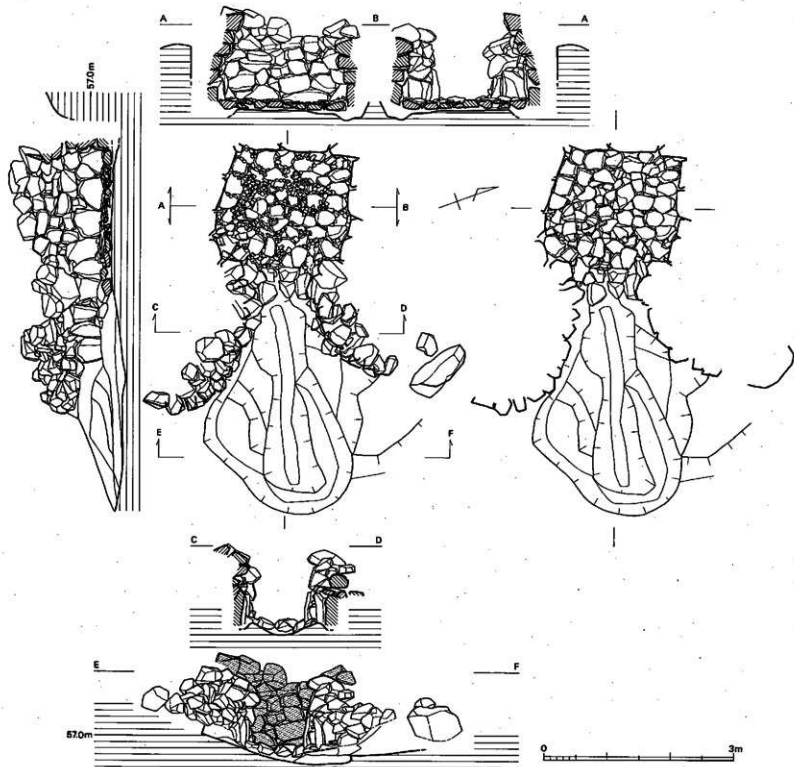
また、掘り方プランは、左・右・奥壁断面部を除いて、盛土を除去しての掘り方検出をしていないので不明である。

しかし、2号墳で既述したことと同様の理由から、奥壁後方1.41mから左・右玄門石前面約1.50mまでの計約2.90mが、左・右側壁断面幅2.84mとほぼ一致する正方形様を呈し、この両玄門石前面で幅1.80mほどに狭くなって羨道部掘り方へと続くものか。

なお、上記幅1.80mは2号墳のそれと一致し、掘り方幅約2.90mと2号墳の掘り方幅約3.24



第18図 3号墳閉塞石実測図(縮尺 1/60)



第 19 图 3号须石窟实例图(编尺 1/60)

mの差は、2号墳の玄室プランの説明項で得た0.32mとほとんど一致し、換言すれば、0.32mの9倍として設計されたものか。

閉塞施設は、玄門天井石は遺存しないが、2号墳の項で既述したように、閉塞全体の前面を直線的に崩壊することはせず、下部から上部へ、また前方へと施設全体では断面△字状に積み上げて閉塞している。

玄室の規模は、奥幅が1.83m、左・右側壁断面幅が2.05m、前幅が1.90mで、0.15m前後中腰みとなり、左側壁長が1.80m・右側壁長が1.65mで0.15mだけ左側壁が長い。

なお、玄門最小幅は0.80mを測る。

また、各壁の腰石は、奥壁では中央右寄りの石が横幅0.79m・高さ約0.40m、側壁では左側壁玄門寄りの石が横幅0.50m・高さ約0.80mで最も大きい石材を使用しているが、壁材の配じ方には著しい差違が認められる。

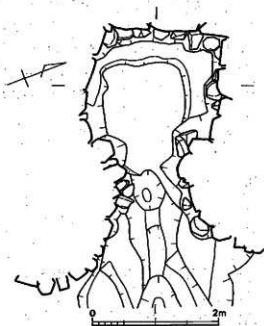
奥壁は、腰石3個をいずれも横位に配し、その上段の横位の壁材からすぐに持送りで積み上げ、床面からの腰石の比高（大きさ）と上部壁材の大きさに顕著な差違はない。

これに対し、両側壁は、腰石各4個をいずれも縦位に配し、その上段の横位の壁材からすぐに持送りで積み上げるが、腰石の大きさは、玄門材が厚いというだけで、玄室～羨道間の腰石材の大きさに顕著な差違はない。

玄室のプランは、以上のように玄室計測値平均が、幅1.93m・側壁長が1.73mで、0.20mだけ前者が大きいが、2号墳の玄室プランの説明項で得た0.32mを考慮すると、 $0.32\text{m} \times 2.5 = 0.80\text{m}$ は既述の玄門最小幅と一致する。

なお、上記平均のなかで、幅1.90mは、中央幅が2.05mと胴腰みを呈するからで、 $奥幅1.83\text{m} \div 0.32\text{m} = 5.7188$ 、 $前幅1.9\text{m} \div 0.32\text{m} = 5.94$ で、 $側壁長平均1.73 \div 0.32\text{m} = 5.4063$ となり、前述の掘り方プランが $2.90\text{m} \div 0.32\text{m} = 9.0625$ となることなどから、2号墳プランより若干小さく、0.32mの、玄室幅は6倍・玄室長は5.5倍として当初に設計したものか。

床石は、径20～30cm・厚さ10cm大の扁



第20図 3号墳排水施設・根石実測図(縮尺 1/60)

平な転石を敷きつめ、また、その間隙を埋め、一部は敷石上面を覆うように径5~10cm大の小石を検出した。

小石は、盗掘の際に一部壁寄りに集石されたり、床石検出前の上部埋土中からも出土したので、本来は全面に敷きつめられていたものであろうが、盗掘をうけて、その全様や遺物の出土状態が不明なため、当初からのものか、追葬時のものかは不明である。

また、床石のなかで、第19図に示すように、玄門天井石部下では、石室中心から1.19mで羨道部側石面が揃う床石3個のみが、玄室内の床石上面より10cm高く、右玄門石に接した床石と共に、2号墳例のように框石の意図が看取される。

なお、玄門部のプランは、玄室面幅1.31m・羨道部面幅0.86mを測り、逆ハの字状に前挟となる。

羨道部は、2号墳例のように、当初から天井石は架さなかったものと思われる。

幅は、玄門部前面で1.06mを測り、石室中心から測って、左側壁2.43m・右側壁で2.45mまでが腰石を縦位に配した羨道部端で、幅は1.72mを測るよう大きくハの字状に開口しつつ、小口を前面に横位に積み上げた外護列石へと続く。

また、列石プランは、石室中心から測ると左側前方の石面が3.30m・右側前方の石面が2.84mまで開口し、やや差位が認められるが、石室中心からは共に径3.74mの円に接する。

なお、右側列石端部の最下段の石は、玄室用材よりも大きなもので、墓道側を意図したものと認められ、墓道が右側壁部へと続くことを示唆するものか。

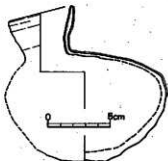
掘り方床面は、玄室中央に主軸に沿う排水溝は設けないが、第20図に示すように、中央部床面を外周よりも約5cm高く地山を削り出し、漏水を中央部床面から周辺部へ、そして、側壁腰石の掘り方へと通水し、羨道部の主軸下の排水溝へと集排水する。

4) 出土遺物

出土遺物には土器がある。

土 器 (図版97、第21図)

平瓶 墓道西側より出土。扁平な体部に片寄って口頸部が付く。頸部はやや外反してから内湾気味に口縁部へ達し、端部を丸くおる。体部の肩部は、顕著な稜を持たず丸くなる。表面には自然釉が体部上半部まで分厚くかかる。口径5.3cm、器高12.3cmを測る。



第21図
3号墳出土土器実測図(縮尺 1/3)

4. 4号墳

1) 位置と現状 (図版3-1、26-1、第3図)

4号墳は、中後ヶ谷古墳群中で丘陵頂部から下がった南南東側斜面中段位(標高58.25m)に立地している。本墳の墳丘識別は、伐採後、盗掘坑による天井部の窪み、石材の露出により確認できた。丘陵斜面南西側に5号墳があり、北東側に3号墳がある。5号墳と墳裾で約1m離れている。また、調査前の墳丘は、南北径7.5m、東西径8mの円形で、現高約1mをとどむに過ぎず、盛土の流出、後世の削平があったことを伺わせる。発掘の結果、等高線に斜角で、南南東側に向かって開口する横穴式石室の内部構造をもつ不整形墳であることがわかった。

2) 墳丘 (図版3-2、4-2、6-2、26-2、28、第4・22・23図)

墳形と周溝 (図版3-2、4-2、第4、22図) 4号墳は、墳丘を全面除去しておらず、トレンチ内土層観察のみであったが、古墳構築における地山整形は、地割区画のための地山削り出し、墳丘後側の傾斜面を半周する馬蹄形周溝の掘削(玄室真裏部には周溝は回らない)とその内側の墳丘基底面の整地という三つの作業から成っていると推定される。

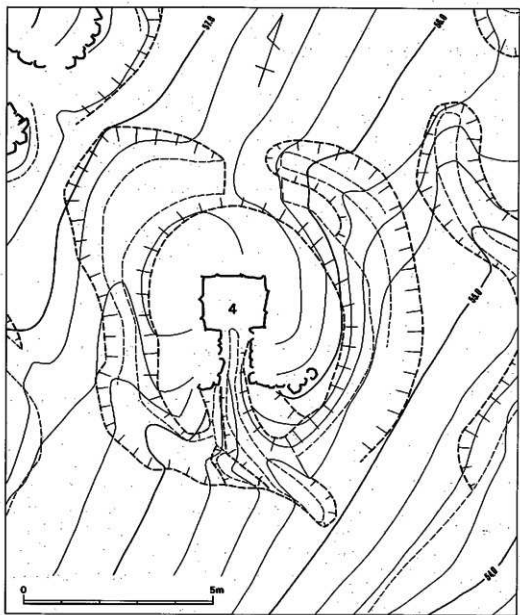
馬蹄形周溝は約5度の傾斜面に作られるが、先述したように墳丘前面部、真裏部には回っておらず、まさに、この周溝は、傾斜面からの流水を上方から下方に送り出す施設と考えられる。周溝は非常に浅く、僅かに西側で顕著に確認できるにすぎない。一番深いところで幅1.15m、深さ0.4mを測る。周溝外側上端部での東西径は約8.2mである。

墳丘基底面は、現状では、北西(標高56.50m)から南東(標高55.50m)徐々に傾斜するが、全体にテラス状に削り出される。ただ、左側トレンチと右側トレンチを見た場合、玄室中央から墳裾までの長さ(墳丘基底面端部を墳裾と仮定する)は、左側で2.45m、右側で3.35mとかなりの開きがある。これは、南西側の3号墳との先後関係を考える上で重要である。つまり、墳丘基底面整地作業に当たって、4号墳は3号墳に制約を受けて築造されたことが看取出来るのである。

墳形は、周溝の巡り方からみて、一辺6m程度不整形墳とみられる。

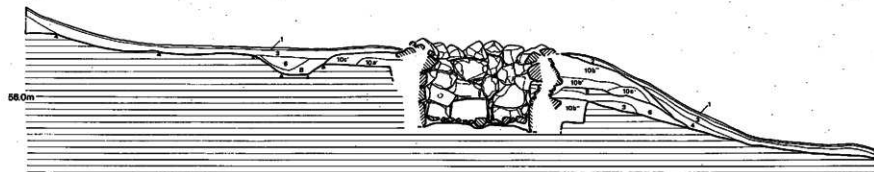
墳丘 (図版26-2、28、第23図) 墳丘は馬蹄形周溝内側の整地面を基底面として、盛土を行っていると思われる。

墳丘形成過程は、大きく2段階に分けられると推定できる。第1段階は、石室構築の壁石の



第 22 图 4号调查点地形测量图(缩尺 1/100)

- 1 現表土
- 2 茶褐色粘質土
- 3 褐色粘質土
- 4 褐色土(5mm次のマンガン粉、炭粒を含む)
- 6 黒褐色粘質土(炭粒を含む)
- 7 褐色土
- 8 黄褐色粘質土(粒径5mm次の母岩ブロックを含む)
- 10a 褐色土(5~10mm次のマンガン粉を含む)
- 10b 赤褐色粘質土(1~3mm次の地山母岩ブロックを含む)
- 10c 赤褐色粘質土(1~3mm次の地山母岩ブロックを含む)
- 10d 黄褐色粘質土(5~10mm次の地山母岩を含む)



第 23 図 4号墳墳丘土層図(縮尺 1/60)

第1段階は墓墳内の腰石設置後、壁石積上げに平行して、一段ずつ盛り上げている。壁石相互間には、礫石や小石を充填している。この段階の盛土は、墓墳上端部らさほど広がる事なく行われる。

第2段階は第1段階に比べさほど固く突きかためることがなく、墓墳より上に積上げる側壁石に平行し一層ずつ地山層を削って盛上げ、次第に墳形を整えていったようである。墳丘遺存高は、床面から約1mを測る。

外護列石(図版26-2、28-2、第22・23図) 羨道側壁端より左右に墳裾にしたがい、湾曲しながら巡る。右側に6石、左側に一石残る。

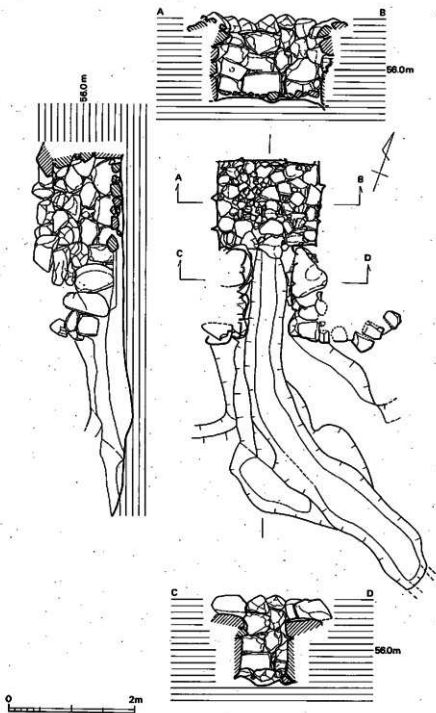
3) 主体部(図版26~30、第23~25図)

本墳の埋葬施設は、主軸をN-19°-Wにとり丘陵南東側傾斜面に谷へ向かって等高線と斜角に開口する単室の両袖式横穴式石室である。石室は既に盗掘や閉塞で、天井部と壁石上部を消失している。石室内は側壁の崩落や流土によって埋没していた。玄室内は、盗掘を受けているにもかかわらず、床面の敷石は10~40cm程度の転石を使い、空間に小石をおさめ、現位置に保っている。表面は平坦なものを選んでる。出土遺物は土器があった。

石室は正方形プランを有する玄室に細長い羨道を接続する。玄門部から羨道部にかけて、閉塞施設がみられる。石室全長は右壁2.76m、左壁2.82mを測る。石室を構築する石材は、安山岩の転石が使用されている。

閉塞施設(図版27-1) 玄門部から羨道部にかけて閉塞施設が存在する。転石を積み上げて閉塞するもので、現存高0.8mである。墓道から見た場合、石積みは雑然としている。上部に大ぶりの石があるので、一部は羨道部からの転落石を含むことも考慮せねばならないであろう。

玄室(図版27-2、28~30、第24図) 奥幅1.57m、前幅1.5m、左壁長1.34m、右壁長1.24mを測り、正方形プランをみる。奥壁は3石を腰石に据え、その上にやや持ち送りながら3段積み上げる。腰石は中央が左右腰石より大きい。石積み技法は、腰石から上1段目、2段目で、ほぼ水平方向に目地が通るように、煉瓦積みしている。左側壁は、3石を腰石に据え、その上にやや持ち送りながら4段積み上げる。腰石は奥壁のほうから次第に小さくなる。石積み技法は、水平方向に目地が通るように、腰石から上へ煉瓦積みしている。天井部は既にないが、さらに数段積上げてから天井石を架構したと推定できることから、床面からの高さは約2mと考えられる。



第 24 图 4 号墳石室実測図(縮尺 1/60)

玄門部は両袖で特別な施設はない。袖幅は左袖0.4m、右袖0.36mで、玄門幅は0.72mを測る。袖石は転石を縦位に立てている。

床面は径10~40cmほどの転石、割り石で敷石が施される。主軸上、一直線に通るように大ぶりの石が配される。床石除去後、排水溝施設が検出できた。幅20~30cm、深さ5cmで、浅い「U」字状をし、羨道方向に若干広がっていく。

石室基底面(第25図) 中央より両側壁に行くに従って、狭くなり低くなる。腰石を配置する部分は、さらに低くし、それらの安定を図っている。



第25図 4号墳石室基底面実測図(縮尺1/60)

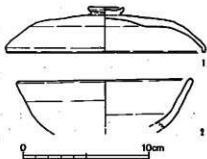
羨道(図版26-2、27-2、第24図) 羨道は、左右側壁とも比較的良好な状態で残っている。壁体構成は大ぶりの転石を腰石に縦位に据え、その上に転石を横積みする。羨道長は左壁で1.4m、右壁で1.4mを測る。奥幅は玄門側で0.72m、墓道側で0.8mを測る。羨道は、玄門部から直線的に伸びながら、墓道に向かって跳上がる。

墓道(図版26-2、27-2、28、第24図) 墓道は羨道前面から1mまでは主軸方向に進むが、そこから南東方向に曲がって等高線に直角に進む。墓道は、長さ4.5m、幅0.7m、深さ0.2~0.3mを測る。

墓墳(第23図) 墓墳は墳丘を完全に除去することなく、左右側壁、奥壁側に設定したトレンチでの観察であったので、その全容は把握できなかった。墓墳は、地山整形された部分からやや斜目に掘り込まれる。墓墳は、玄室短軸幅3.15m、深さは地山整形面が傾斜しているため、玄室部奥壁側で0.5mを測る。

4) 出土遺物(図版97、第26図)

出土遺物には土器があった。小田編年のⅦ期に属し、8世紀前半に当たる。



第26図 4号墳出土土器実測図(縮尺1/3)

土 器 (図版97、第26図)

蓋(1) 墳丘後面右側周溝より出土。口縁部内面のかえりはない。天井部はやや膨らみ、口縁端部は鳥嘴状になる。頂部には扁平の痛みが付く。内外面共横なである。口径13.8cm、器高3.6cmを測る。

5. 5号墳

1) 位置と現状 (図版3-1、31-1、第3図)

5号墳は、石堂中後ヶ谷古墳群中の丘陵頂部から下がった南東側斜面中段位(標高55.5m)に立地している。本墳の墳丘識別は、伐採後の盗掘坑による天井部の若干の窪み、石材の露出から確認できた。丘陵斜面北西側に4号墳、南東側に6号墳がある。現状では4号墳と墳裾で約1mしか離れていない。調査前の墳丘は、東西径7.8mの円形で、現高約0.5mを測るに過ぎず、盛土の流出、後世の削平があったことを伺わせる。発掘の結果、等高線に直角で、南南東側に向かって開口する横穴式石室の内部構造をもつ不整形墳であることがわかった。

2) 墳 丘 (図版3-2、4-2、6-2、31-2、33、第27・29・30図)

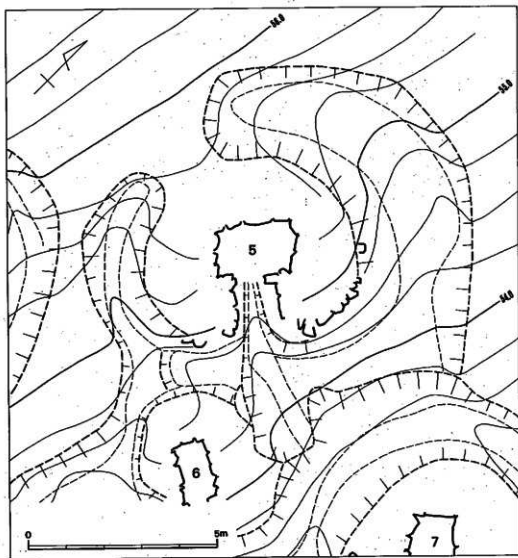
墳形と周溝(図版3-2、4-2、6-2、31-2、第27図) 5号墳の地形整形の確認は、調査期間の都合のため墳丘全面を除去することなく、玄室の長短軸上に設定したトレンチの土層観察で行った。その結果、墳丘後側の傾斜面を半周する馬蹄形周溝の掘削とその内側の墳丘基底面の整地という二つの作業から成っていると推定された。

馬蹄形周溝は約12度の傾斜面の標高約55.85mのところを上端として、傾斜面を削り出している。この周溝は、墳丘基底面を全周せず、傾斜面からの流水を上方から下方に送り出すと考えられる施設で、南側斜面では見られない。周溝は北側で幅2.5m、深さ0.2m、東側で幅1.95m、深さ0.2m、西側で幅2m、深さ0.3mを測る。西側周溝は、6号墳周溝により切られる。周溝内側上端部での東西径は6.55m、周溝外側上端部での東西径は10.55mを測る。

左側短軸上トレンチ土層観察では、4号墳周溝と0.9mで隣接するが、両者の切り合い関係は確認できない。

墳丘基底面は、現状では、北(標高55.5m)から南(標高54.5m)徐々に傾斜するが、全体にテラス状に削り出される。

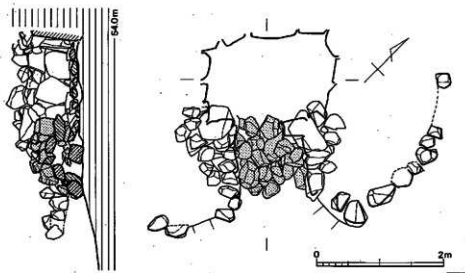
墳形は、周溝の巡り方からみて、一辺10m程の不整形墳とみられる。



第 27 図 5号墳調査後地形測量図(縮尺 1/100)

墳丘 (図版31-2、33-2、第29図) 墳丘は周溝内側の整地面を基底面として、盛土を行っている。しかし、墳丘盛土自体かなり流出しており、墳裾が周溝、地山整形面と一致するものではない。

墳丘形成過程は、大きく2段階に分けられると推定できる。第1段階は、石室構築の壁石の裏込め的なものである。第2段階は天井部の被覆と墳形の整形に係わるものである。本墳では、前述したように天井部が盗掘で盛土、天井石共消失しているため、その形成過程の全容は把握



第28図 5号墳囲壘石実測図(縮尺 1/60)

できなかった。

第1段階は墓墳内の腰石設置後、壁石積み上げに合わせながら平行して盛土する。この段階の盛土は、墓墳上端部からさほど広がる事なく行われる。

第2段階は墓墳上方の壁石積み上げに合わせ、一段一段盛られていき、全体の墳形を整えていくようである。この段階の盛土は、本墳の立地が傾斜面上であることから、かなり流失している。

墳丘遺存高は、玄室床面から約1.1mを測る。

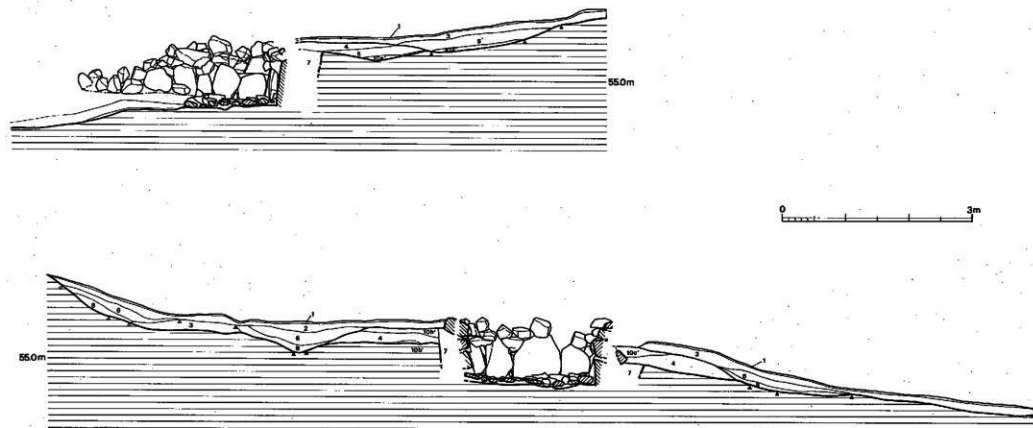
外圍列石 (図版33、第27・30図) 羨道側壁端部から、墳裾に従い湾曲しながら巡る。左側に4石、右側に9石残る。墳丘基底面端部にのるようである。

3) 主体部 (図版32~36、第28~31図)

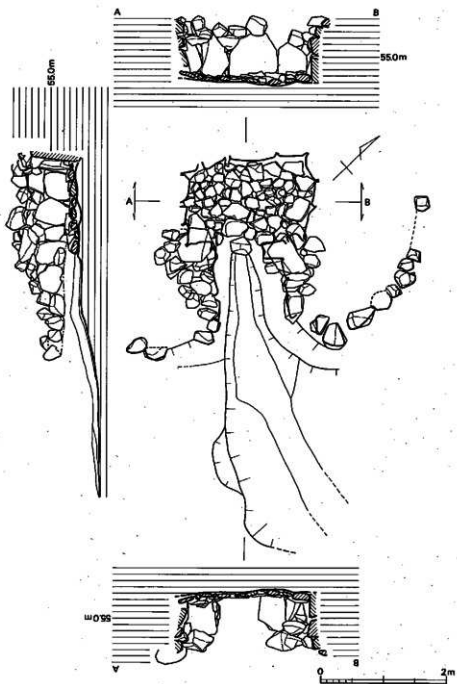
本墳の埋葬施設は、主軸をN-61°-Wにとり丘陵南東側傾斜面に谷へ向かって等高線と直角に開口する単室の両袖式横穴式石室である。石室は既に盗掘や開壁で、天井部と壁石上部を消失している。石室内は側壁の崩落や流土によって埋没していた。玄室内は、盗掘を受けているにもかかわらず、床面の敷石は20~40cm程度の転石をもっとも多く使い、空間に小石をおさめる。表面は平坦なものを選んでいますが、部分的に凹凸も見られる。出土遺物は土器があった。

石室は正方形プランを有する玄室に細長い羨道を接続する。玄門部からやや羨道部にてたと

- 1 厚黄土
- 2 紫褐色粘質土
- 3 褐色粘質土
- 4 暗褐色土 (5 mm大のマンガン粒、炭粒を含む)
- 5 褐色粘質土
- 6 紫褐色粘質土 (炭粒を含む)
- 7 褐色土
- 8 紫褐色粘質土 (風化5 mm大の珪岩ブロックを含む)
- 10a' 暗褐色土 (5~10mm大のマンガン粒を含む)
- 10b' 赤褐色粘質土 (1~3 cm大の珪山層を含む)
- 10c' 黄褐色粘質土 (5~10cm大の珪山層を含む)



第 29 図 5号填換丘土層図(縮尺 1/60)



第 30 图 5 号填石宝冢测图(缩尺 1/60)

ここに、閉塞施設がみられる。石室全長は右壁3.62m、左壁3.94mを測る。石室を構築する石材は、安山岩の転石が使用されている。

閉塞施設 (図版32、第28図) 玄門部からやや前面に閉塞施設が存在する。転石を積み上げて閉塞するもので、現存高0.8mであるが、元来は天井石との間が完全にふさがれていたであろう。閉塞施設の位置は墓道側で奥壁中央から2.53m、羨道側で奥壁中央から1.23m、その間約1.3mである。墓道側からみた場合、石積みは30cm大の石を雑然とした状態で積み上げる。

玄室 (図版33~36、第30図) 奥幅1.9m、前幅1.8m、左壁長1.12m、右壁長1.2mを測り、奥幅の広い横長方形プランをみる。壁体の構築法は、奥壁で腰石3石を据える。中央が左右より大きい。腰石から上は20cm大の転石を無造作に積み上げる。左側壁は、腰石3石を据えるが大きさにバラツキがある。腰石から上は、20~40cm大の転石を無造作に積み上げる。左側壁も同様である。各壁石共、腰石から上部はあまり持ち送りが顕著でない。また、天井部は既にないが、さらに数段積上げてから天井石を架構したと推定できるが、この状態では天井石の重量への耐久性は考えられず、天井部は木蓋で架構したと考えたい。床面からの高さは約1.5mと考えられる。

玄門部は両袖で特別な施設はない。袖幅は左袖0.4m、右袖0.66mで、玄門幅は0.76mを測る。袖石は転石を縦位に立てている。

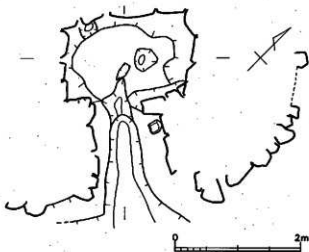
床面は径20~40cmほどの転石、割り石で敷石が施される。敷石除去後、下方より排水溝が検出できた。幅40cm、深さ2cmで、奥壁までは伸びていない。

石室基底面 (第31図) 中央より両側壁に行くに従って、狭くなる。高さはほぼ水平である。腰石を配置する部分は、さらに低くし、それらの安定を図っている。

羨道 (図版31、33、第30図) 崩落が激しく、左右壁とも腰石部分を残すのみである。玄門部からやや主軸方向を南へそらして接続する。羨道長は左右共1.25mを測る。奥幅は玄門側で1.1m、墓道側で1.12mを測り、20~30cm程の転石を前面に向かって、跳ね上げ気味に無造作に据える。

墓道 (図版31、33、第30図) 墓道は、羨道部端から主軸方向に伸びずに、やや南へ方向を変え進む。3mほどの長さを確認できたが、それから先は消える。幅1.2m、深さ0.2mを測る。6号墳とは周溝の切り合いから本墳が先行すると見られるが、最初から6号墳の築造を意識して、羨道、墓道も主軸をそらしているようにも考えられる。

墓 墳 (第29図) 墓
 墳は墳丘を完全に除去す
 ることなく、左右側壁、
 奥壁側に設定したトレン
 チでの観察であったの
 で、その全容は把握でき
 なかった。墓墳は、地山
 整形された部分から斜目
 に掘り込まれ、玄室短軸
 上での幅は3.25m、深さ
 は地山整形面が傾斜して
 いるので、玄室部奥壁側
 で0.85mを測る。



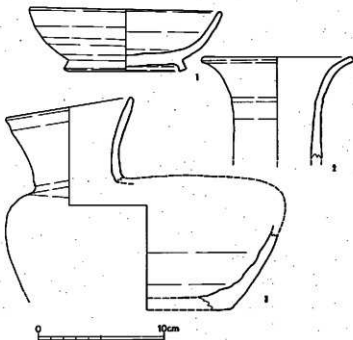
第 31 図 5号墳石室基底部実測図(縮尺 1/60)

4) 出土遺物 (図版97、 第32図)

出土遺物には土器があ
 った。小田編年のVI期に
 属し、7世紀後半に当た
 る。

土 器 (図版97、第32 図)

杯 (1) 墓道前面よ
 り出土。底部から斜目上
 方に若干内湾させながら
 口縁部に達する。口縁端
 部は丸くおさめる。底部
 は肥厚し、外方に短く張
 り出す高台が付く。端部
 はやや外方に摘みあげ
 る。内外面共横なであ



第 32 図 5号墳出土土器実測図(縮尺 1/3)

る。口径14.8cm、底径8.7cm、器高4.8cmを測る。

平瓶(2) 墳丘前面墓道左側より出土。扁球形の上部に片寄って、細い頸部をつける。口縁端部は丸くおさめる。口径10cmを測る。

長頸壺(3) 墳丘前面左側墳裾より出土(10号墳墳丘後面周溝北側より出土土器と接合)。頸部は直に立ち上がってから、斜目上方に広がり口縁部に達する。口縁端部は丸くおさめる。内外面共横なでである。口径12cmを測る。

6. 6号墳

1) 位置と現状(図版3-1、第3図)

6号墳は、石堂中後ヶ谷墳群中、丘陵頂部から下がった南側斜面中段位(標高54.5m)に立地している。本墳の墳丘識別は、伐採後も明らかに出来ず、他墳掘削作業中に石材が露出し確認できた。丘陵斜面北東側に5、7号墳、南南東側に10号墳がある。それぞれの古墳とは周溝を共有している。発掘の結果、等高線に直角で東南側に向かって開口する横穴式石室の内部構造をもつ円墳であることがわかった。

2) 墳丘(図版37-1、第33・34図)

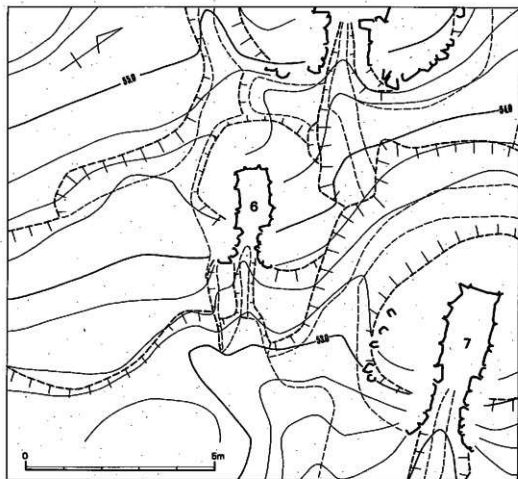
墳形と周溝(図版37-1、第33図) 前述したように6号墳は他墳掘削作業中に確認できたので、詳細な観察は出来なかったが、古墳構築における地山整形(調査の時間的都合で墳丘全体を削いでいないが)は、馬蹄形周溝の掘削とその内側の墳丘基底面の整地という二つの作業から成っていると推定された。

馬蹄形周溝は、54.95mのところを上端として、傾斜面を削り出しながら、基底面整地をしている。この周溝は、墳丘後面北側で顕著に見られ、幅1.7m、深さ0.2mを測る。墳丘前面側ではかなり間延びしていて、周溝と認められるか判断できなかった。周溝は、5号墳墓道、7号墳周溝の共有によって機能を果たしていたものと思われる。また、墳丘前面右側では、5号墳墓道が伸びてきていて、6号墳墳丘を切るように見える。

墳丘基底面は、全体的にテラス状に削り出され、東西方向はほぼ水平(標高54.3m)になる。

墳形は他墳の間に占地していることもあり、かなり乱れているが、墳裾と思われるところで長軸5.5m、短軸4mの長楕円形を呈する。

墳丘(図版37-1、第34図) 墳丘は周溝内側の整地面を基底面として、盛土を行っている。



第33図 6号墳調査後地形測量図(縮尺 1/100)

墳丘盛土自体ほとんど流出するが、墳裾は周溝、地山整形面と一致する。

墳丘形成過程は、大きく2段階に分けられると推定できる。第1段階は、石室構築の壁石の裏込め的なものである。第2段階は天井部の被覆と墳形の整形に係わるものである。本墳では、前述したように掘削途中の確認だったため、第1段階の形成過程しか観察できなかった。

第1段階は墓墳内の腰石設置後、壁石積上げに平行して、一段ずつ叩きしめながら盛り上げている。この段階の盛土は、墓墳上端面からさほど広がる事なく行われる。

墳丘遺存高は、玄室床面から約0.8mを測る。

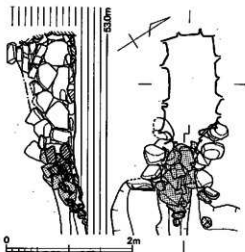
外護列石(第33図) 全く確認できなかった。

3) 主体部 (図版37~40、第34~36図)

本墳の埋葬施設は、主軸をN-55°-Wにとり丘陵南東側傾斜面に谷へ向かって等高線と直角に開口する単室の両袖式横穴式石室である。石室は既に盗掘や開鑿で、天井部と壁石上部を消失している。石室内は側壁の崩落や流土によって埋没していた。玄室内は、盗掘を受け床面の敷石はほとんど原位置になく、出土遺物も全く無かった。

石室は縦長方形プランを有する玄室に細長い羨道を連接する。玄門部に閉塞施設

がみられる。石室全長は右壁2.38m、左壁2.24mを測る。石室を構築する石材は、安山岩の転石が使用されている。



第34図 6号墳閉塞石実測図(縮尺 1/60)

閉塞施設 (図版38、第35図) 玄門部に閉塞施設が存在する。転石を積み上げて閉塞するもので、現存高0.5mである。閉塞施設の位置は墓道側で奥壁中央から3.05m、羨道側で奥壁中央から1.8m、その間約1.25mである。墓道側からみた場合、10~30cmの転石を雑然とした状態で積み上げている。

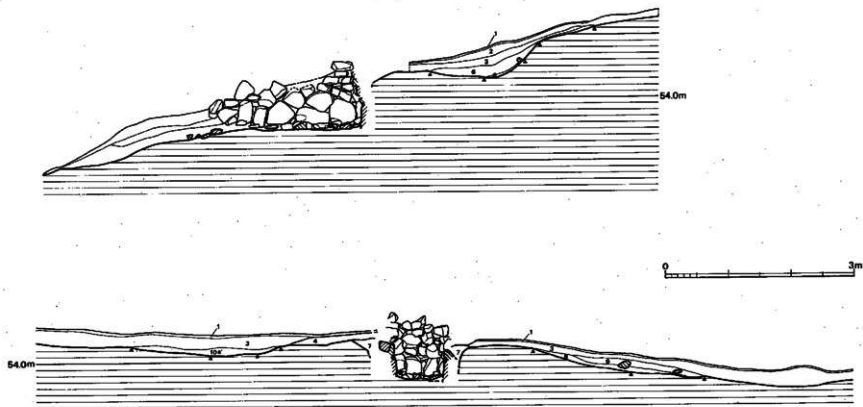
玄室 (図版37-2、39、40、第36図) 奥幅0.7m、前幅0.8m、左壁長1.4m、右壁長1.44mを測り、奥幅の広い縦長方形プランをみる。壁体の構築法は、各壁体共に共通している。奥壁および左側壁では3石の腰石を据え、その上3段目からやや持ち送りながら、無造作に積み上げる。右側壁の腰石は5石ある。天井部は既がないが、さらに数段積上げてから天井石を架構したと推定できることから、床面からの高さは1.5mと考えられる。

玄門部は両袖で特別な施設はない。袖幅は左右袖共0.25mで、玄門幅は0.4mを測る。袖石は転石を縦位に立てている。

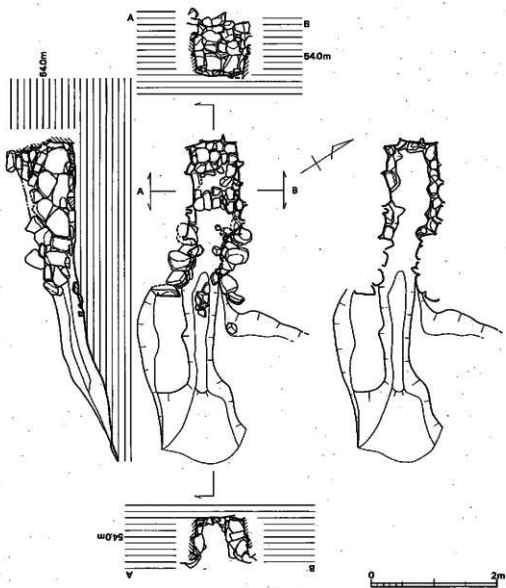
床面は径10~30cmほどの転石、割り石で敷石が施されるが、奥壁側のものしか原位置を保っていない。床石除去後、下方より排水溝等施設の検出はなかった。

石室基底面 (第36図) 基底面は標高53.6mでほぼ水平である。腰石を配置する部分は、さら

- 1 現土
- 2 茶褐色粘質土
- 3 褐色粘質土
- 4 暗褐色土(5mm次のマンガン粒、炭粒を含む)
- 5 黒褐色粘質土(炭粒を含む)
- 7 褐色土
- 8 黄褐色粘質土(直径5mm次の地山母岩ブロックを含む)
- 10F 暗褐色土(5~10mm次のマンガン粒を含む)



第 35 図 6号墳境丘土層図(縮尺 1/60)



第 36 図 6号墳石室、石室基底面実測図(縮尺 1/60)

に低くし、それらの安定を図り、根石で支えている。

羨 道 (図版37、第36図) 左右壁とも残存状態は良くない。玄門部端から主軸方向とはずれて連接する。壁体構成は玄室と同様に転石を無造作に積み上げる。右壁長0.92m、左壁長0.95mを測り、幅は玄門側で0.4m、基道側で0.7mで、玄室主軸上からそれる。

墓 道 (第36図) 墓道は羨道部が玄室主軸方向からそれていたのに反し、再び玄室主軸と

一致する。10号墳周溝に向かって進み、それを切る。長さ2.7m、幅0.5~1.3m、深さ0.1~0.3mを測る。

墓 墳 (第34図) 墓墳は墳丘を完全に除去することなく、左右側壁、奥壁側に設定したトレンチによる観察であったので、その全容は把握できなかった。

墓墳は、地山整形された部分から斜目に掘り込まれ、玄室短軸幅1.9m、深さは玄室部左側で0.6mを測る。

4) 出土遺物

土器等の出土遺物は全くなかった。

7. 7号墳

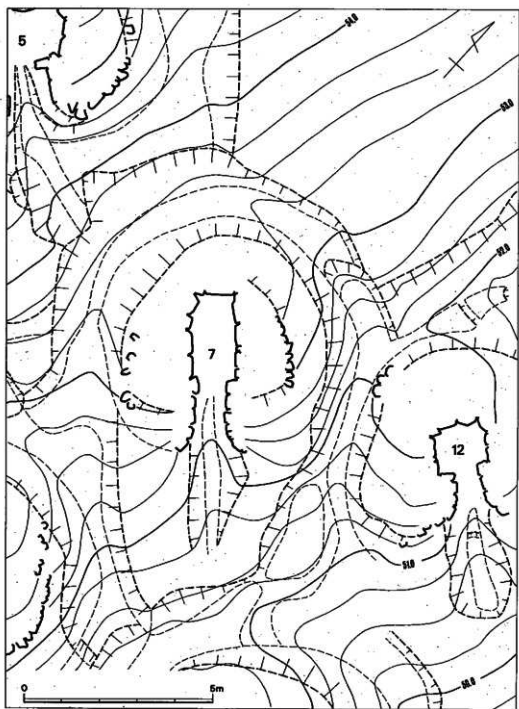
1) 位置と現状 (図版3-1、4-1、41-1、第3図)

7号墳は、石堂中後ヶ谷古墳群中、丘陵頂部から下がった南東側斜面中段位 (標高53.5m) に立地している。本墳の墳丘識別は、伐採後、盗掘坑による天井部の若干の窪み、石材の露出により確認できた。丘陵斜面南東側に12号墳、北西側に6号墳、南西側に10号墳がある。また、墓道側には、11号墳があり、それぞれ周溝を共有しながら立地する。調査前の墳丘は、東西径7.8mの楕円形を呈し、現高約0.5mをとどむに過ぎず、盛土の流出、後世の削平があったことを伺わせる。発掘の結果、等高線に直角で東南側に向かって開口する横穴式石室の内部構造をもつ楕円形墳であることがわかった。

2) 墳 丘 (図版3-2、4-2、6、41-2、第37~39・90図)

墳形と周溝 (図版3-2、4-2、6、41-2、第37・38・90図) 7号墳は墳丘全体を調査期間の都合で除去していないが、玄室長短軸上に設置したトレンチ土層観察から、墳丘構築における地山整形は、墳丘後側の傾斜面を半周する馬蹄形周溝の掘削とその内側の墳丘基底面の整地という二つの作業から成っていると推定された。

馬蹄形周溝は約13度の傾斜面の標高約53.6mのところを上端として、傾斜面を削り出している。この周溝は、墳丘基底面を全周せず、傾斜面からの流水を上方から下方に送り出すものと



第 37 图 7 号坝調查後地形測量圖(縮尺 1/100)

考えられる施設で、南側斜面では見られない。周溝は非常に浅く、僅かに痕跡をとどめるにすぎず、北側周溝は幅1.7m、深さ0.15mを測り、東側周溝は測定不能である。西側周溝は幅1.5m、深さ0.2mを測る。周溝内側上端部での東西径は約5.75m、周溝外側上端部での東西径は約 $8.2 + \alpha$ mを測る。

7号墳と10号墳とは、両墳に渡した土層観察用の土堀から、10号墳周溝が7号墳より新しいことがわかる。このことは、7号墳の墳形が10号墳側でその築造時の削平でいびつになっていることから首肯できよう。

墳丘基底面は、全体にテラス状に削り出され、北西方向でほぼ水平(標高53.4m)になる。墳形は、周囲の古墳によりかなり制約されるが、玄室短軸径5.75mほどの楕円形墳になる。

墳丘 (図版41-2、第38図) 墳丘は周溝内側の整地を基底面として、盛土を行っている。しかし、墳丘盛土自体かなり流出しているので、墳裾が周溝、地山整形面と一致するものではない。

墳丘形成過程は、大きく2段階に分けられると推定できる。第1段階は、石室構築の壁石の裏込め的なものである。第2段階は天井部の被覆と墳形の整形に係わるものである。本墳では、前述したように天井部が盗掘で盛土、天井石共消失しているため、その形成過程の全容は把握できなかった。

第1段階は基壇内の腰石設置後、壁石積上げに平行させながら、側壁石を一段置く毎に盛り上げている。壁石相互間には、礫石や小石を充填している。この段階の盛土は、基壇上端部からさほど広がる事なく行われる。

第2段階は第1段階に比べさほど固く突きかためることがなく、地山層を削った土を盛土として使用する。天井石架構前の側壁石設置に際して、側壁石と平行に盛土していくと同時に墳丘整形も行なう。天井石架構後、墳丘平面形を整え楕円形墳を形成したと思われる。

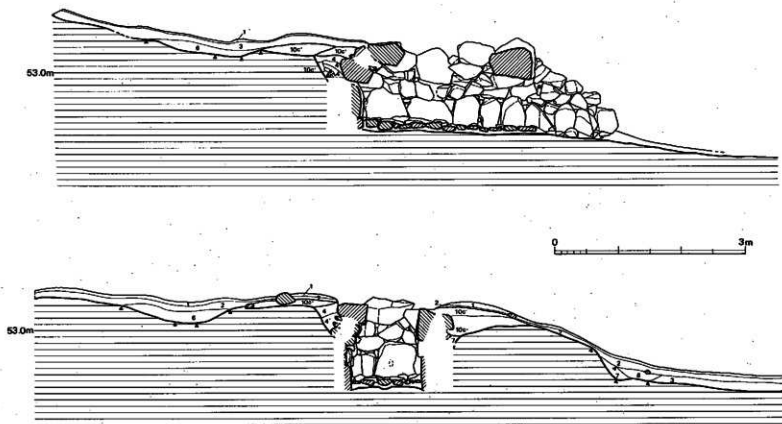
墳丘遺存高は、玄室床面から約1.3mを測る。

外護列石 (図版43、第37・39図) 羨道部側壁端より連接せず、やや間をおいて墳裾に従い湾曲しながら巡る。本来、羨道部端に連接して、外護列石があったと推定される。左側に5石、右側に9石残る。左側はかなり乱れる。左側外護列石は、玄室中央から2mのところであり、墳丘基底面外端にのっている。

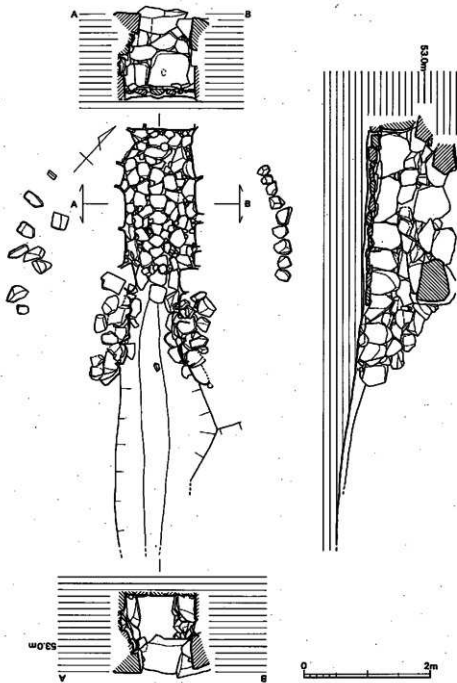
3) 主体部 (図版3、41-2、42~46、第37~40図)

本墳の埋葬施設は、主軸をN-42.5°-Wにとり丘陵南東側傾斜面に谷へ向かって等高線と

- 1 現状土
- 2 茶褐色粘質土
- 3 褐色粘質土
- 4 暗褐色土(5mm次のマンガング粒、炭粒を含む)
- 4' 暗褐色土(5mm次のマンガング粒、炭粒を含む)
- 6 黒褐色粘質土(炭粒を含む)
- 7 褐色土
- 10c 黄褐色粘質土(5~10cm次の隴山礫岩を含む)
- 10c' 黄褐色粘質土(5~10cm次の隴山礫岩を含む)



第 38 図 7号墳墳丘土層図(縮尺 1/60)

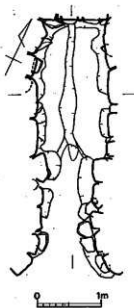


第 39 图 7号填石室实测图(缩尺 1/60)

直角に開口する単室の両袖式横穴式石室である。石室は既に盗掘や開墾で、天井部と壁石上部を消失しているが、他墳と比較して残りはよい。玄門部には眉石がある。石室内は側壁の崩落や流土によって埋設していた。玄室内は、盗掘を受けているにもかかわらず、床面の敷石は20cm程度の転石をもっとも多く使い、空間に小石をおさめる。表面は平坦なものを選んでいますが、部分的に凹凸も見られる。玄室内から須恵器が出土した。

石室は縦長方形プランを有する玄室に細長い羨道が接続する。玄門部に閉塞施設がみられる。石室全長は右壁3.7m、左壁3.72mを測る。石室を構築する石材は、安山岩の転石が使用されている。

閉塞施設 (図版42) 玄門部に閉塞施設が存在する。転石を積み上げて閉塞するもので、墓道側からみた場合、石積みは雑然とした状態であるが、下部に40cm大の転石を置き、その上に20cm大の転石を積上げている。



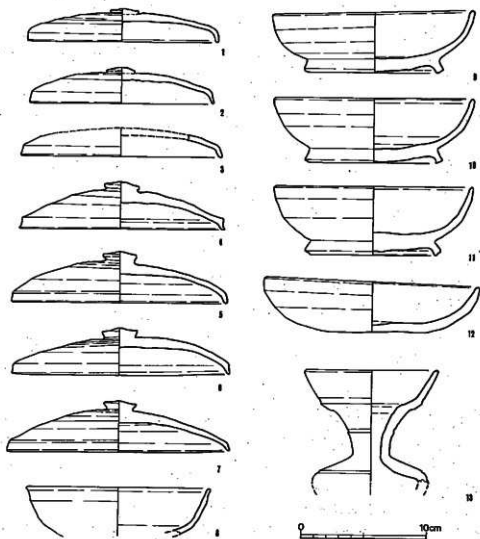
第40図 7号墳石室基底面
実測図(縮尺 1/60)

玄室 (図版43~46、第39~40図) 奥幅1.1m、前幅1.1m、左壁長2.1m、右壁長2.16mを測り、前幅が広い縦長方形プランをみる。壁体の構築法は、奥壁で2石の腰石を据えるが、一方が大きい。その上に煉瓦積みに3段の転石をやや持ち送りながら積み上げる。その内傾度はかなり高い。転石は横位に目地が水平に通るように積まれる。左側壁は4石の腰石を据え、奥壁に近い2石より玄門に近い2石が小さい。この2石は縦位に据えられる。腰石上2段目からは、やや内傾させ積み上げるが、3段目の転石は2段目の転石より大きい。2段目は目地が水平方向に通るが、3段目以上は無造作に積まれる。天井石は既にないが、さらに1~2段積み上げてから天井石を架構したと推定できることから、床面からの高さは約1.5mと考えられる。

玄門部は両袖で特別な施設はない。袖幅は左袖0.2m、右袖0.22mで、玄門幅は0.66mを測る。袖石は転石を縦位に立てている。玄門部には1m×0.5m程の眉石が架構される。

床面は径20~40cmほどの転石、割り石で敷石を施し、空間に小石を配す。主軸方向に一直線で床石が配される。敷石除去後、その下方より排水溝が検出された。幅10~30cm、深さ4cmを測る。

石室基底面 (第40図) 中央より両側壁に行くに従って、狭くなり低くなる。腰石を配置する部分は、さらに低くし、それらの安定を図っている。



第41図 7号墳出土土器実測図(縮尺 1/3)

羨道 (図版41-2、45、46、第37・39図) 左右壁とも比較的良好な状態で残っている。壁体構成は玄室と同様で大ぶりの石を腰石とし、縦位に据え、その上に転石を目地が水平方向に通るように横積みしている。羨道部の前面に向け、「ハ」の字に広がるが、跳ね上がりは顕著でない。羨道長は右壁で1.85m、左壁で2mを測る。奥幅は玄門側で0.78m、基道側で0.92mを測る。

基道 (図版47-2、第37・39図) 基道は、羨道部端から接続して主軸方向に伸び、2.8mの

ところで消える。幅1.2~1.5m、深さ4cmを測る。

墓 墳 (第38図) 墓墳は墳丘を完全に除去することなく、左右側壁、奥壁側に設定したトレンチによる観察であったので、その全容は把握できなかった。

墓墳は、地山整形された部分から斜目に掘り込まれる。墓墳は、玄室短軸幅2.3m、深さは地山整形面が傾斜しているため、玄室部奥壁側で1.15mを測る。

4) 出土遺物 (図版97、第41図)

出土遺物には土器があった。小田編年のVI期に属し、7世紀後半に当たる。

土 器 (図版97、第41図)

蓋(1) 出土位置不明。口縁部は内面のかえりがなく、天井部はやや膨らみ、端部は鳥嘴状になる。頂部には扁平の摘みが付く。天井部上半部は篋削り、その他は横なでである。口径15.1cm、器高2.6cmを測る。

蓋(2) 出土位置不明。口縁部は内面のかえりがなく、天井部はやや膨らみ、端部は鳥嘴状になる。頂部には扁平の摘みが付く。天井部上半部は篋削り、その他は横なでである。口径14.6cm、器高2.9cmを測る。

蓋(3) 墓道前面黒褐色粘質土下より出土。天井部は欠失している。口縁部は内面にかえりがなく、端部は鳥嘴状になる。口径16cmを測る。

蓋(4) 墓道前面より出土。口縁部は内面のかえりがなく、天井部はやや膨らみ、端部は外反気味に折り曲げる。頂部には扁平な摘みが付く。天井部上半部は篋削り、その他は横なでである。口径16.1cm、器高3.7cmを測る。

蓋(5) 墓道前面外護列石西側より出土。口縁部は内面のかえりがなく、天井部はやや膨らみ、端部は鳥嘴状になる。頂部には扁平の摘みが付く。天井部上半部は篋削り、その他は横なでである。焼成はやや軟質である。口径16.8cm、器高4.1cmを測る。

蓋(6) 墓道前面外護列石西側より出土。口縁部は内面のかえりがなく、天井部はやや膨らみ、端部は外反気味に折り曲げる。頂部には扁平の摘みが付く。天井部上半部は篋削り、その他は横なでである。焼成はやや軟質である。口径17.2cm、器高3.7cmを測る。

蓋(7) 墓道前面外護列石西側より出土。口縁部は内面のかえりがなく、天井部はやや膨らみ、端部は鳥嘴状になる。頂部には扁平の摘みが付く。天井部上半部は篋削り、その他は横なでである。焼成はやや軟質である。口径は17.4cm、器高は4.1cmを測る。

杯(8) 出土位置不明。底部は欠失している。口径14.6cmを測る。

杯(9、10、11) 9は墓道前面外護列石西側より出土。底部からやや内湾させて立ち上がり、口縁部にいたる。端部は丸くおさめる。底部中心部は肥厚する。短く開く高台が付き、端部の外側を積み出してあげる。焼成は軟質である。口径15.5cm、器高4.8cm、底径10cmを測る。10は墓道前面より出土。口径15.5cm、底径10cm、器高5.1cmを測る。11は墓道前面外護列石西側より出土。口径15.5cm、底径10cm、器高5.4cmを測る。

碗(12) 7号墳墓道前面外護列石西側より出土。土師器である。底部からやや内湾させながら口縁部にいたる。端部は丸くおさめる。口径16.6cm、器高4cmを測る。

甕(13) 7号墳と10号墳間より出土。胴部上半部から口縁部にかけて残存する。口径に対して頸部径が著しく細い。胴部上半部の肩部に1条の凹線が回る。頸部中央と頸部と口縁部の境に1条の凹線を施す。口縁端部は丸くおさめる。口径10.6cmを測る。

8. 8号墳

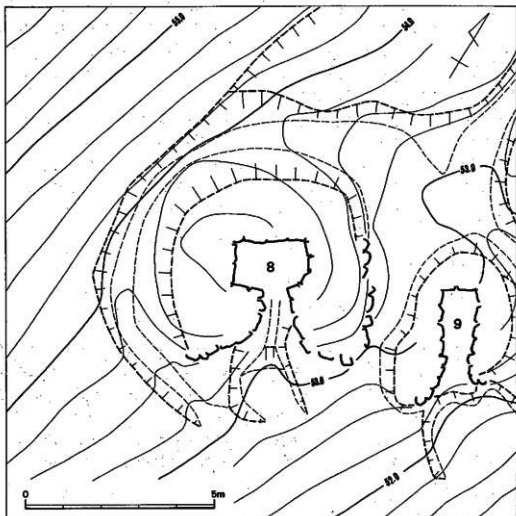
1) 位置と現状(図版3-1、47-1、第3図)

8号墳は、石堂中後ケ谷墳群中、丘陵頂部から下がった南側斜面中段位(標高53.5m)に立地している。本墳の墳丘識別は、伐採後、盗掘坑による天井部の若干の窪み、石材の露出により確認できた。9号墳は、丘陵斜面東側にあり、周溝を共有する。調査前の墳丘は径7.6mの円形を割り、現高約0.5mをとどめるに過ぎず、盛土の流出、後世の削平を伺わせた。また、本墳裏面側に地山削り出しライン(現状の墳裾から2m後方)が円弧状に回っていた。発掘の結果、等高線に斜角で、南南東側に向かって開口する横穴式石室の内部構造をもつ円墳であることがわかった。

2) 墳丘(図版3-2、4-2、6-2、47-2、49、52-2、第42~44図)

墳形と周溝(図版3-2、4-2、6-2、47-2、49、52-2、第42図) 8号墳は墳丘全体を除去せず、玄室長短軸上のトレンチ観察のみであるが、古墳構築における地山整形は、地割区画のための地山削り出し、墳丘後側の傾斜面を半周する馬蹄形周溝の掘削とその内側の墳丘基底面の整地という三つの作業から成っていると推定される。地割区画のための地山削り出しは、墳丘裏側の玄室中央から6mのところを確認した。

馬蹄形周溝は約10.5度の傾斜面、標高約55.15mのところを上端として、傾斜面を削り出している。この周溝は、墳丘基底面を全周せず、傾斜面からの流水を上方から下方に送り出す施設で、南側斜面では見られない(墳丘前面右側では墓道付近まで伸びる)。周溝は非常に浅く、東



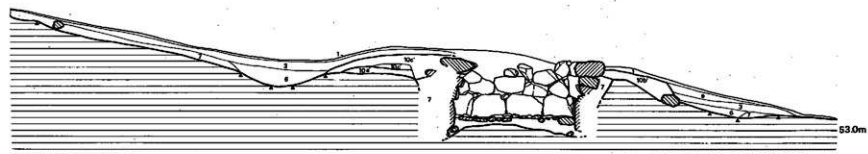
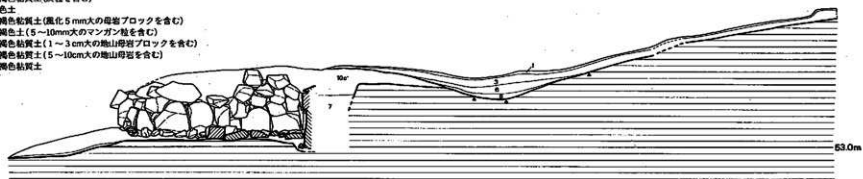
第 42 図 8号墳調査後地形測量図(縮尺 1/100)

側ではほとんど見られない。北側周溝は幅2.4m、深さ0.3m、東側周溝は幅1.65m、深さ0.2m、西側周溝は幅1.6m、深さ0.3mを測る。周溝内側上端部での東西径は5.65m、周溝外側上端部での東西径は約8.55mである。

墳丘基底面は、全体にテラス状に削り出され、玄室短軸方向では、南東(標高53.9m)から北西(標高53.8m)とほぼ水平である。

北側の墳形は南東側ではほぼ円形に回るが、9号墳と周溝を共有する東側では、円形に回らず9号墳に制約され外護列石を積み変えた状況が見られ、長楕円形状になる。元来、墳丘径は、西側墳裾と玄室中央間の長さが4.6mであるため、その2倍の9.2mの円墳だったと思われる。

- 1 埋藏土
- 3 褐色粘質土
- 6 黒褐色粘質土(炭粒を含む)
- 7 褐色土
- 8 黄褐色粘質土(直径5 mm以下の磁器ブロックを含む)
- 10a' 暗褐色土(5~10mm次のワラン粒を含む)
- 10b' 赤褐色粘質土(1~3 cm次の礫山母岩ブロックを含む)
- 10c' 黄褐色粘質土(5~10cm次の礫山母岩を含む)
- a 灰褐色粘質土



第 43 図 8号墩墳丘土層図(縮尺 1/60)

墳丘 (図版47-2、49、52-2、第43図) 墳丘は周溝内側の整地面を基底面として、盛土を行っている。しかし、墳丘盛土自体かなり流出しているので、墳裾が溝、地山整形面と一致するものではない。

墳丘形成過程は、大きく2段階に分けられると推定できる。第1段階は、石室構築の壁石の裏込め的なものである。第2段階は天井部の被覆と墳形の整形に係わるものである。本墳では、前述したように天井部が盗掘で盛土、天井石共消失しているので、第2段階についてはあまり把握できなかった。

第1段階は墓墳内の腰石設置後、壁石積上げに平行して、一段ずつ盛り上げる。壁石相互間には、礫石や小石を充填している。この段階の盛土は、墓墳上端部からさほど広がる事なく行われる。

第2段階は第1段階に比べさほど固く突きかためることがなく、地山層を削って盛土としていく。天井石架橋後、更に墳丘平面形を整え円墳を形成したと思われる。この段階の盛土は、本墳の立地が傾斜面上であるのでほとんど流失している。

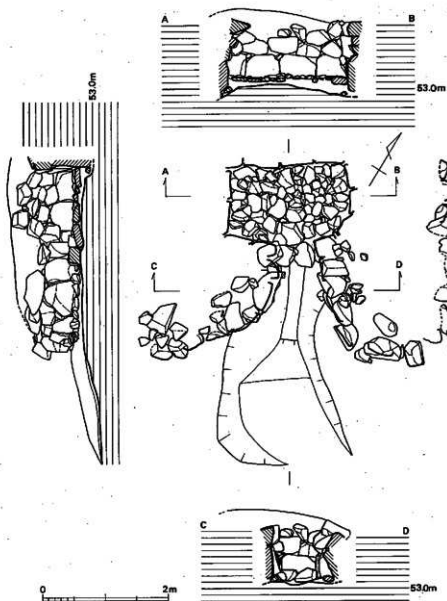
墳丘遺存高は、玄室奥壁側で約0.95mを測る。

外護列石 (図版47-2、49、52-2、第42、44図) 羨道部側壁端より墳裾に従い湾曲しながら巡る。右側に10石、左側に5石残る。左側はほぼ墳形にそって円形に回るが、右側は玄室主軸方向と一致するように、一直線に伸びる。先述したように、本来地山整形に当たって、西側では墳丘基底面として1.4m程の平坦面を作り出しているが、東側では0.22mを平坦面として、東に行くにしたがって傾斜していく。傾斜面端部に外護列石がおかれ、またこの部位の周溝は他の所と比べ、とても浅い状況を呈す。従って、本墳は、先述したように元来墳径9.2mの円墳だったものが、9号墳築造に当たり墳丘東側の削平を受けると共に、墳形に乱れをきたし、外護列石を新たに積み直したと言うことが看取できよう。

3) 主体部 (図版48~52、第44・45図)

本墳の埋葬施設は、主軸をN-31°-Wにとり丘陵南東側傾斜面に谷へ向かって等高線と斜角に開口する単室の両袖式横穴式石室である。石室は既に盗掘や開壁で、天井部と壁石上部を消失している。石室内は側壁の崩落や流土によって埋没していた。玄室内は、盗掘を受けているにもかかわらず、床面の敷石は原位置を保ち、20~40cm程度の転石をもっとも多く使い、空間に小石をおさめる。表面は平坦なものを選んでいる。出土遺物には土器があった。

石室は横長方形プランを有する玄室に「ハ」の字に開く羨道を接続する。玄門部の扉石を根



第 44 図 8号墳石室実測図(縮尺 1/60)

石にして、閉塞施設がみられる。石室全長は左壁2.6m、右壁2.88mを測る。石室を構築する石材は、安山岩の転石が使用されている。

閉塞施設(図版48) 玄門部から前面へでたところを中心に閉塞施設が存在する。転石を積み

上げて閉塞するものである。墓道側からみた場合、石積みは雑然とした状態であるが、転石の大きさがバラバラである。このことについては、羨道部側壁石、天井石の落石も考慮せねばならないであろう。

玄室 (図版47-1、49、50、第44図) 奥幅1.78m、前幅1.72m、右壁長1.15m、左壁長1.2mを測り、奥幅が広く、袖部がやや変形する横長方形プランをみる。壁体の構築法は、奥壁でほぼ大きさの同じ腰石4石を据えて、2段目から目地が通るように横位に煉瓦積みする。2段目からは持ち送り気味に積み上げる。左側壁は腰石2石を据えて、2段目から持ち送り気味に無造作に煉瓦積みする。天井部は既がないが、さらに数段積上げてから天井石を架構したと推定できることから、床面からの高さは約1.4mと考えられる。

玄門部は両袖で特別な施設はない。袖幅は右袖0.8m、左袖0.7mで、玄門幅は0.6mを測る。袖石は転石を縦位に立てている。40cm程の転石を2石玄門部に置き、根石としている。

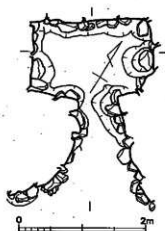
床面は径20~40cmほどの転石、割り石で敷石が施される。敷石除去後、10cm程の間層があり、地山整形面に達した。整形面は凹凸が激しいので客土することで平坦面を作ろうとしたのであろう。

石室基底面 (第45図) 中央より両側壁に行くに従って、低くなる。腰石を配置する部分は、さらに低くし、それらの安定を図り、また根石で腰石を支えるところがある。

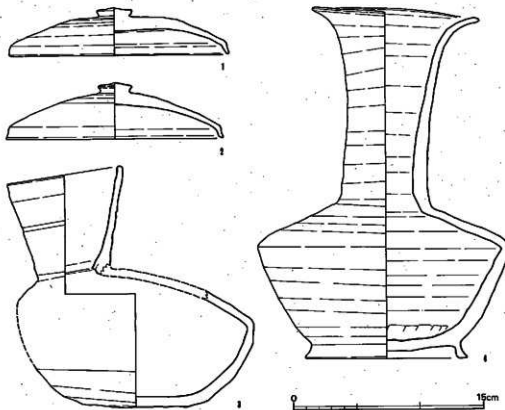
羨道 (図版47-2、第44図) 玄門部から大きく「ハ」の字に広がる。ほとんどが欠落し、左右壁とも腰石1段しか残していない。壁体構成は玄室と同様で大よりの転石を腰石とし、その上に転石を横積みする。羨道長は右壁で1.67m、左壁で1.47mを測る。奥幅は玄門側で0.68m、墓道側で1.85mを測り、墓道に向けてやや跳ね上げる。

墓道 (図版47-2、第44図) 墓道は羨道部端に接続して、主軸からやや南南東に曲げながら進み、長さ2.1mの所で消える。幅0.9~1.8m、深さ0.2~0.3mを測る。

墓墳 (第43図) 墓墳は墳丘を完全に除去することなく、左右側壁、奥壁側に設定したトレンチによる観察であったので、その全容は把握できなかった。



第45図 8号墳石室基底面実測図
(縮尺 1/60)



第 46 図 8号墳出土土器実測図(縮尺 1/3)

墓墳は、地山整形された部分から斜目に掘り込まれる。墓墳は、玄室短軸幅 3 m、玄室部奥壁側で 1.15 m を測る。

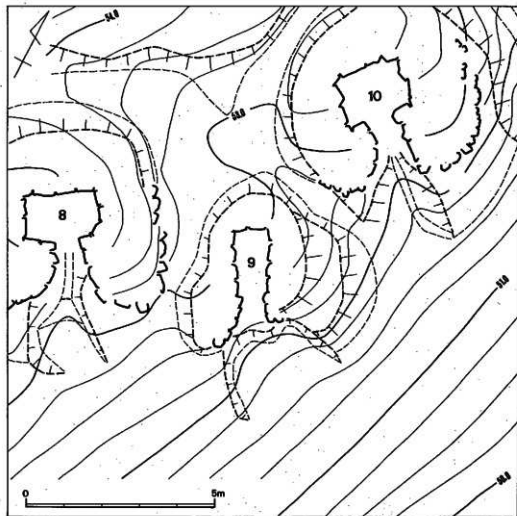
4) 出土遺物 (図版97、98、第46図)

出土遺物には土器があった。小田編年のⅦ期に属し、8世紀前半のものである。

土 器 (図版97、第46図)

甕 (1・2) 1は墓道右側より出土。口縁部内面のかえりはない。天井部はやや膨らみ、口縁端部は鳥嘴状になる。頂部には扁平の摘みが付く。天井部上半部は篋削りで、その他は横なである。焼成はやや軟質である。口径17cm、器高3.6cmを測る。2は墓道右側より出土。口径17.1cm、器高3.7cmを測る。

平瓶 (3) 墓道前面より出土。扁平の体部に片寄って、「ハ」の字に直線的に伸びる口頸部



第 47 図 9号墳調査後地形測量図(縮尺 1/100)

をつける。口縁端部は丸くおさめる。頸部中央に1条の凹線が回る。口径9.2cm、胴部最大径18.5cmを測る。

長頸壺(4) 基道左側外護列石より出土。底部から体部へ斜目外方に真っすぐ伸び、肩部で「く」の字に屈曲してから、頸部に達する。細い頸部は斜目上方へ直に伸びてから、口縁部付近で外反し、端部を丸くおさめる。底部外周辺に短く外側へふんばる高台が付く。頸部にはラセン状に横なでもしくは粘土輪積みによる凹線が回る。体部下半は篋削りである。口径12.7cm、器高17.7cm、底径12.1cm、胴部最大径19.8cmを測る。

9. 9号墳

1) 位置と現状 (図版3-1、53-1、第3図)

9号墳は、石堂中後ケ谷墳群中、丘陵頂部から下がった南側斜面中段位(標高53m)に立地している。本墳の墳丘識別は、伏採後、盗掘坑による天井部の若干の窪み、石材の露出により確認できた。丘陵斜面西側に8号墳、東側に10号墳があり、共に周溝を共有し、両墳の間に分け入るように占地される。調査前の墳丘は南東側でしか確認できなかった。墳丘は、円弧状に回り半径2.5m程を測り、現高約0.5mをとどめるに過ぎず、盛土の流出、後世の削平を伺わせた。発掘の結果、等高線に斜角で、南南東側に向かって開口する横穴式石室の内部構造をもつ楕円形墳であることがわかった。

2) 墳丘 (図版3-2、4-2、6、53-2、55、第47・48図)

墳形と周溝(図版6-1、53-2、55-2、第47図) 9号墳は墳丘全体を除去せず、玄室長短軸上3本のトレンチ観察のみであるが、古墳構築における地山整形は、墳丘基底面の整地と馬蹄形周溝掘削の一部しか把握できなかった。9号墳においては、顕著な周溝は回っておらず、8、10号墳と共有している。トレンチ土層観察で確認できた計測値をもとにすると、周溝内側上端部での東西径は3.1m、周溝外側上端部での東西径は明らかにし得ない。北側周溝は、周溝内側上端部とその下場を観察でき、比高差0.3mを測った。

墳形は、8、10号墳の間に割け入って占地するので、短軸径3.1m、長軸径5mの楕円形墳になる。

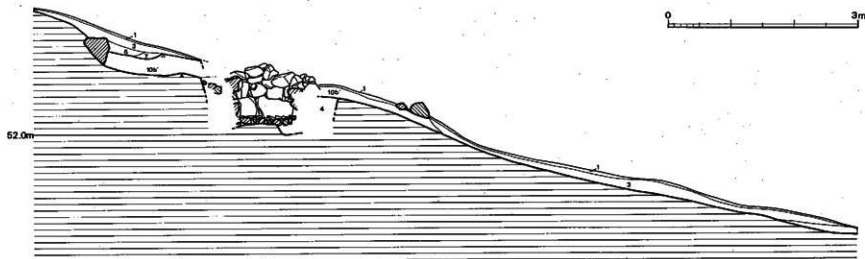
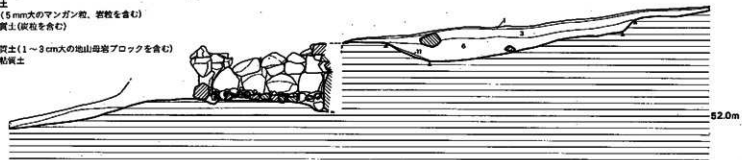
墳丘基底面は、全体にテラス状に削り出されるが、右側トレンチでは、基底面が傾斜面に沿ってほとんど削り出されていない。また、基底面の設定も各トレンチを見たところでは、バラバラで、なんとか8、10号墳間に入り込もうとした痕跡が伺われる。これは、後述する単位集団析出に大いに参考になる資料である。

土層観察では、9号墳西側周溝が8号墳周溝によって、切られるようになるが、8号墳の項で説明したように、8号墳の再構築によるもので新旧関係は9号墳が後出するのである。

墳丘 (図版53-2、第48図) 墳丘は周溝内側の整地面を基底面として、盛土を行っている。しかし、墳丘盛土自体はほとんど流出して、8、10号墳間に入るので、墳裾が一定しない。

墳丘形成過程は、大きく2段階に分けられると推定できるが、9号墳では第1段階の石室構

- 1 砂状土
- 3 褐色粘質土
- 4 暗褐色土 (5 mm 次のマンガング粒、若粒を含む)
- 5 黒褐色粘質土 (炭粒を含む)
- 7 褐色土
- 10b 黄褐色粘質土 (1~3 cm 次の地山母岩ブロックを含む)
- 11 暗褐色粘質土



第 48 図 9 号墳墳丘土層図 (縮尺 1/60)

築の壁石の裏込めのもの他、第2段階の墳丘被覆に関しては全く確認できなかった。

第1段階は墓墳内の腰石設置後、壁石横上げに平行して盛り上げている。壁石相互間には、礫石や小石を充填している。この段階の盛土は、墓墳上端面からさほど広がる事なく行われる。

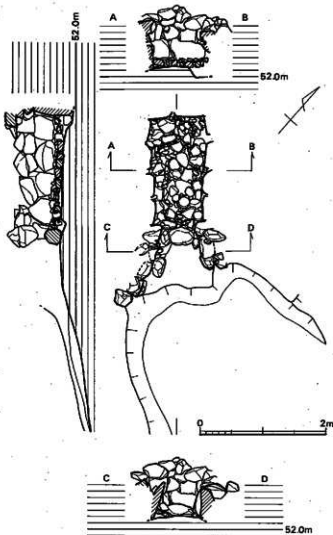
墳丘遺存高は、玄室床面から約0.5mを測る。

外護列石（図版7-1、55、第47・49図） 羨道部側壁端より右側に1石残るのみである。

3) 主体部（図版7-2、54～57、第48～50図）

本墳の埋葬施設は、主軸をN-27°-Wにとり、丘陵南東側傾斜面に谷へ向かって等高線と斜角に開口する単室の両袖式横穴式石室である。石室は既に盗掘や閉塞で、天井部と壁石上部を消失している。石室内は、側壁の崩落や流土によって埋没していた。玄室内は、盗掘を受けているにもかかわらず、床面の敷石は原位置にあり、20cm程度の転石と小石をもっとも多く使う。表面は平坦なものを選んで。出土遺物は土器があった。

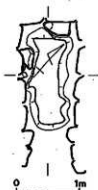
石室は縦長方形プランを有する玄室に、「ハ」の字に開く羨道を接続する。玄門部の框石を根石にして、閉塞施設がみられる。石室全長は左壁2.5m、右壁2.51m



第49図 9号墳石室実測図(縮尺 1/60)

を測る。石室を構築する石材は、安山岩の転石が使用されている。

閉塞施設 (図版54) 玄門部の転石を根石とした閉塞施設ではない。転石を積み上げて閉塞するもので、元来は天井石との間が完全にふさがれていたであろう。閉塞施設の位置は玄門部よりやや墓道側に出たところを中心としている。墓道側からみた場合、石積みは雑然とした状態であり、転石もバラツキが目立つ。



第50図 9号墳石室
基底面実測図(縮尺 1/60)

玄室 (図版55~57、第49図) 奥幅0.84m、前幅0.74m、右壁長1.65m、左壁長1.67mを測り、奥幅の広い縦長方形プランをみる。壁体の構築法は、奥壁で腰石2石を据えて、2段目から目地が通るように持ち送りながら煉瓦積みする。左側壁は腰石4石を据えて、2段目から持ち送り気味に目地が水平方向に通るように煉瓦積みする。上部に行くにしたがって、小ぶりの転石になる。奥壁と側壁間には力石の使用がある。天井部は既がないが、さらに数段積上げてから天井石を架構したと推定できることから、床面からの高さは約1.2mと考えられる。

玄門部は両袖で特別な施設はない。袖幅は左袖0.14m、右袖0.12mで、玄門幅は0.5mを測る。袖石は転石を縦位に立てている。

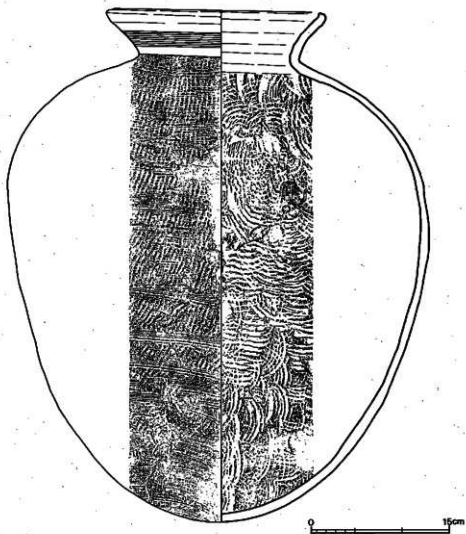
床面は径20~30cmほどの転石、その空間に小石が入れられる。小石の使用頻度は非常に高い。敷石除去後、すぐに地山整形面に達し、排水溝等の施設はなかった。

石室基底面 (第50図) 中央より両側壁へほぼ水平になる。腰石を配置する部分は、一段低くし、それらの安定を図っている。また、一部に根石の使用がある。

羨道 (図版7-2、55、57、第49図) 玄門部から大きく「ハ」の字に広がる。左右壁とも残存状態は良くない。左壁で3石、右壁で2石である。壁体構成は玄室と異なり、小ぶりの転石を無造作に積み上げる。羨道長は右壁で0.75m、左壁で0.86mを測る。奥幅は玄門側で0.5m、墓道側で1.3mを測る。

墓道 (図版7-2、55、57、第48図) 墓道は羨道部端に連接して、主軸方向から南南東にそれて、大きく広がって伸びるが、2.2mのところで消える。幅2.6~3.0m、深さ0.2mを測る。

墓墳 (第48図) 墓墳は墳丘を完全に除去することなく、左右側壁、奥壁側に設定したトレンチによる観察であったので、その全容は把握できなかった。



第 51 図 9号墳出土土器実測図(縮尺 1/3)

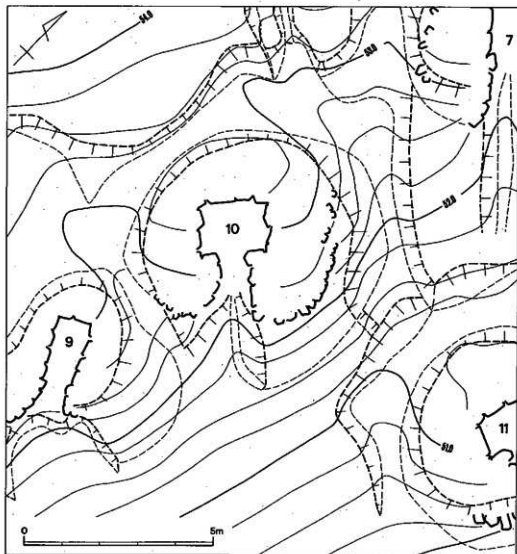
墓壇は、地山整形された部分から斜目に掘り込まれる。墓壇は、玄室短軸幅2.2m、深さは地山整形面が傾斜するので、玄室部右側で0.55m、左側で0.75m、裏側で1mを測る。

4) 出土遺物 (図版97、第51図)

出土遺物には土器があった。小田編年のVI期に属し、7世紀後半のものである。

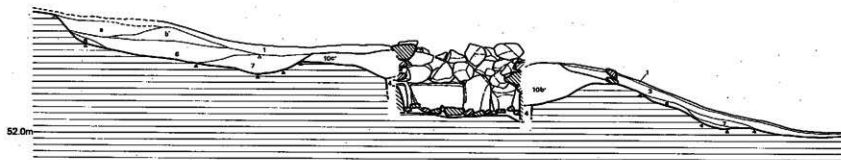
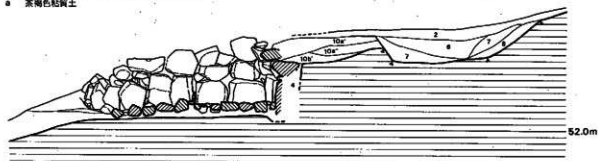
土 器 (図版97、第51図)

甕 墓道前面より出土。長胴で底部に行くにしたがってすばまる。胴最大径部は、胴中央より上にある。頸部から短く「く」の字に曲がる口縁部が続き、端部はやや内に向け、平坦面を作りそこに1条の凹線を回す。胴部は平行叩きを施した後、掻き目で仕上げる。口径20.6cm、器高54.4cm、胴部最大径44.9cm、頸部径16.9cmを測る。



第 52 図 10号墳調査後地形測量図(縮尺 1/100)

- 1 頂表土
- 2 黒褐色粘質土
- 3 黄褐色粘質土
- 4 暗褐色土(5mm次のマンガング粒、炭粒を含む)
- 5 黒褐色粘質土(炭粒を含む)
- 6* 黒褐色粘質土(炭粒を含む)
- 7 褐色土
- 8 黄褐色粘質土(細化5mm次の砕断ブロックを含む)
- 10a* 暗褐色土(5~10mm次のマンガング粒を含む)
- 10b* 暗褐色土(5~10mm次のマンガング粒を含む)
- 10c* 黄褐色粘質土(1~3cm次の崩山砕断ブロックを含む)
- 10c* 黄褐色粘質土(5~10cm次の崩山砕断ブロックを含む)
- a 黄褐色粘質土



第 53 図 10号墳頂丘土層図(縮尺 1/60)

10. 10号墳

1) 位置と現状 (図版3-1、58-1、第3図)

10号墳は、石室中後ケ古墳群中、丘陵頂部から下がった南東側斜面中段位 (標高53.25m) に立地している。本墳の墳丘識別は、伐採後、盗掘坑による天井部の若干の窪み、石材の露出、外護列石の存在から確認された。丘陵斜面南側に9号墳があり、周溝を共有している。さらに、6、7、11号墳共周溝を共有している。調査前の墳丘は径8mの円形で、現高約0.4mをとどむに過ぎず、盛土の流出、後世の削平を伺わせた。発掘の結果、等高線に斜角で、南東側に向かって開口する横穴式石室の内部構造をもつ円墳であることがわかった。

2) 墳丘 (図版3-2、4-2、6、58-2、60、63-2、第52・53図)

墳形と周溝 (図版58-2、第52図) 10号墳は墳丘全体を除去せず、玄室長短軸上のトレンチ観察のみであるが、古墳構築における地山整形は、墳丘後側の傾斜面を半周する馬蹄形周溝の掘削とその内側の墳丘基底面の整地という二つの作業から成っていると推定された。ただし、周辺に密集する古墳の存在でその把握は極めて困難であった。

馬蹄形周溝は標高53.75mを上端として、傾斜面を大きく削り出している。この周溝は、墳丘基底面を全周するものではない。傾斜面からの流水を下方に送り出す施設であり、南側では見られない。周溝は非常に浅く、幅広いものである。北側周溝は、6号墳墓道でかなり間延びしているが、幅2.6m、深さ0.3mで、土層観察では墳丘を再度削って周溝を作っている。東側周溝は幅1.7m、深さ0.15mでほとんど傾斜面に添わせ、削り出しは見られない。西側周溝は、9号墳と周溝を共有するが、土層観察から9号墳が後出することがわかる。西側周溝内側上端部とその下場との比高差は、0.3mある。周溝内側上端部での東西径は5.3mを測る。

墳形は玄室短軸径5.3mの円墳になる。

墳丘基底面は、全体にテラス状に削り出されるが、東側基底面は平坦でない。

墳丘 (図版58-2、第53図) 墳丘は周溝内側の整地を基底面として、盛土を行っている。墳丘盛土自体流出しているが、墳形は周溝、地山整形面とほぼ一致する。

墳丘形成過程は、大きく2段階に分けられると推定できる。第1段階は、石室構築の壁石の高込め的なものである。第2段階は天井部の被覆と墳形の整形に係わるものである。本墳では、前述したように天井部が盗掘で盛土、天井石共消失しているので、その形成過程の全容は把握

できなかった。

第1段階は墓墳内の腰石設置後、盛り上げている。壁石相互間には、礫石や小石を充填している。この段階の盛土は、墓墳上端部からさほど広がる事なく行われる。

第2段階は第1段階に比べ、さほど固く突きかためることがなく、地山層を削って盛土として使用する。この段階の盛土は、本墳の立地が傾斜面上であるのでかなり流失している。

墳丘遺存高は、玄室奥壁側で玄室床面から約1.25mを測る。

外護列石(図版60、63-2、第54図) 羨道部側壁端より接続して伸びる。右側がよく発達して3段積みしている。左側は0.2m程の転石を配す。トレンチ土層観察から、この列石は、墳丘基底面外端部に沿って積まれることがわかった。盛土流出を防ぐ目的が看取できる。

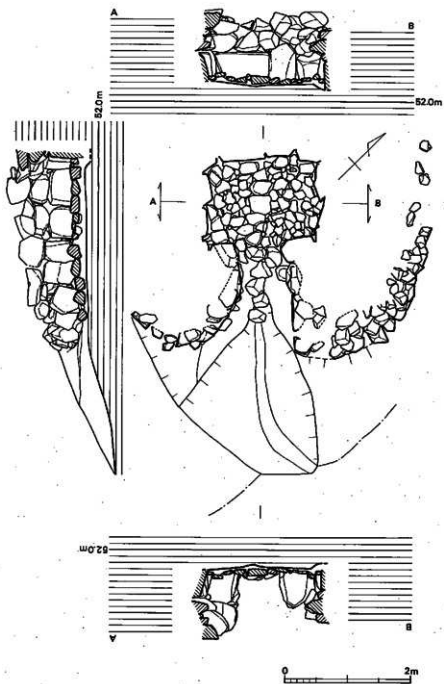
3) 主体部(図版58-2、59~63、第54・55図)

本墳の埋葬施設は、主軸をN-45°-Wにとり丘陵南東側傾斜面に谷へ向かって等高線と直角に開口する単室の両袖式横穴式石室である。石室は既に盗掘や開壁で、天井部と壁石上部を消失し、腰石から上2~3段残すのみである。石室内は側壁の崩落や流土によって埋没していた。玄室内は、盗掘を受けているにもかかわらず、床面の敷石は20cm程度の転石をもっとも多く使い、表面は平坦なものを選んでる。出土遺物は土器があった。

石室は、正方形プランを有する玄室に細長い羨道を接続する。玄門部に閉塞施設がみられる。石室全長は左壁2.62m、右壁2.76mを測る。石室を構築する石材は、安山岩の転石が使用されている。

閉塞施設(図版59) 玄門部の框石を根石とした閉塞施設ではない。転石を積み上げて閉塞するもので、元来は天井石との間が完全にふさがれていたのであろう。閉塞施設の位置は墓道側へやや出た所を中心としている。墓道側からみた場合、石積みは雑然とした状態であり、転石にバラツキがある。

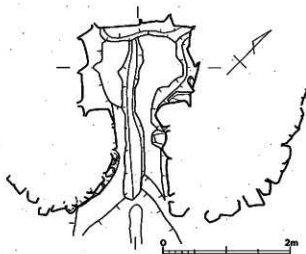
玄室(図版60~62、第54図) 奥幅1.7m、前幅1.68m、右壁長1.16m、左壁長1.22mを測り、正方形プランをみる。壁体の構築法は、奥壁で腰石3石を据えて、2段目から目地が通るように持ち送りながら煉瓦積みする。右側壁は腰石4石を据えて、重箱積みと煉瓦積みを併用させて目地を揃えつつ積み上げる。左側壁は腰石3石を据える。奥壁と側壁間に力石の使用がある。天井部は既がないが、さらに数段積上げてから天井石を架構したと推定できることから、床面からの高さは約1.5mと考えられる。



第 54 图 10号填石室夷刻图(缩尺 1/60)

玄門部は両袖で特別な施設はない。袖幅は左袖0.36m、右袖0.48mで、玄門幅は0.66mを測る。袖石は転石を縦位に立てている。玄門部には転石が3石見られる。中央の1石は主軸上に奥壁から一直線に並んだ排水溝施設の覆い石をも兼ねているようである。

床面は径20~40cmほどの転石、割り石で敷石が施される。主軸方向に一直線に並ぶ床石除去後、羨道側に伸びる排水溝を検出した。幅0.3m、深さ0.1m程で、奥壁から2.55m羨道に向け下がっていく。奥壁側と羨道部側の比高差は0.1m程ある。



第55図 10号墳石室基底面実測図(縮尺 1/60)

石室基底面(第55図) 中央より両側壁にほぼ水平である。腰石を配置する部分は、さらに低くし、それらの安定を図っている。

羨道(図版58-2、第54図) 左右壁とも比較的残存状態は良い。左壁で3石、右壁で2石である。壁体構成は玄室と同様で、大ぶりの転石を腰石とし、その上に転石を横積みにし、玄室と一体としている。墓道方向へ跳上がらない。羨道長は右壁で1.45m、左壁で1.35mを測る。幅は玄門側で0.6m、墓道側で1.3mを測る。

墓道(図版58-2、第54図) 墓道は羨道部端に接続して、主軸方向から南東にそって「ハ」の字に広がって伸びるが、1.9mのところでは消える。幅1.0~2.1m、深さ0.3mを測る。

墓壇(第53図) 墓壇は墳丘を完全に除去することなく、左右側壁、奥壁側に設定したトレンチでの観察であったので、その全容は把握できなかった。墓壇は、地山整形された部分から斜目に掘り込まれる。墓壇は、玄室短軸幅2.4m、玄室部奥壁側で0.85mを測る。

4) 出土遺物(図版63-1、97、第57図)

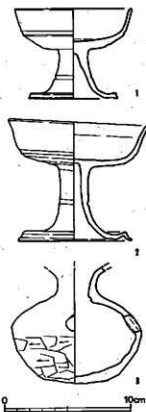
出土遺物には土器があった。小田編年のVI期に属し、7世紀後半のものである。

土 器 (図版63-1、97、第57図)

高杯 (1) 墓道前面より出土。杯部は逆台形状になり、屈曲部に凹線を回す。口縁端部は丸くおさめる。脚部は短く斜目に広がり、端部付近で水平方向に外反し、端部は面を持つ。脚中央部に1条の凹線を持つ。内外面共横なでである。口径9.2cm、底径7cm、器高7.1cmを測る。

高杯 (2) 墳丘前面左側より出土。杯部は逆台形状になり、屈曲部に凹線を回す。口縁端部は丸くおさめる。脚部はやや直に伸びてから大きく外反し、脚端部は鳥嘴状になる。脚中央部に1条の凹線を回す。内外面共横なでである。口径11.1cm、底径9cm、器高9.3cmを測る。

甕 (3) 墓道前面および右側より出土。平底に近い扁球形の胴部にラッパ状に広がる頸部が付く。胴最大径部に1孔を穿つ。胴下半部は篋削り、上半部は横なでである。胴部最大径10.4cmを測る。



第56図 10号墳出土土器実測図

(縮尺 1/3)

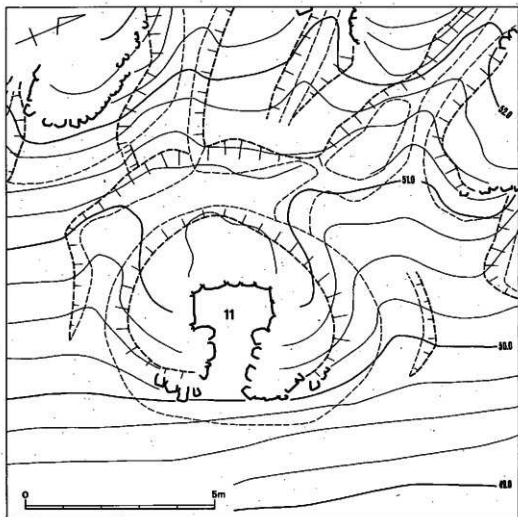
11, 11号墳

1) 位置と現状 (図版3-1、64-1、第3図)

11号墳は、石室中後ヶ谷墳群中、丘陵頂部から下がった南東側斜面最下位(標高51m)に立地している。本墳の墳丘識別は、伐採後、盗掘坑による天井部の若干の窪みや、石室石材、外護列石の露出から確認された。丘陵斜面西側に10号墳、北西側の7号墳は墓道が周溝北側に伸びてきている。調査前の墳丘は南北径9m、東西径7.8mを測る楕円形で、現高約0.3mをとどむに過ぎず、盛土の流出、後世の削平があったことを伺わせた。発掘の結果、等高線に直角で南東側に向かって開口する横穴式石室の内部構造をもつ円墳であることがわかった。

2) 墳 丘 (図版3-2、4-2、6-2、64-2、65-2、第57・58、60図)

墳形と周溝 (図版3-2、4-2、6-2、64-2、第57・90図) 11号墳は墳丘全体を除去せず、玄室

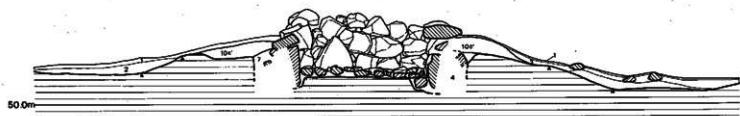
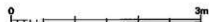
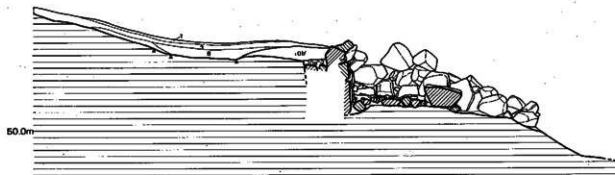


第 57 図 11号墳調査後地形測量図(縮尺 1/100)

長短軸上のトレンチ観察のみ実施した。古墳構築における地山整形は、傾斜面に立地するため盛土が流出し、墳丘が高く出来ないので、前面側の墳丘基底面下方を削り出し、より高い墳丘を確保する作業の他、墳丘後側の傾斜面を半周する馬蹄形周溝の掘削とその内側の墳丘基底面の整地という三つの作業から成っていると推定された。

馬蹄形周溝は標高51.3mを上端として、傾斜面を削り出している。この周溝は、墳丘基底面を全周するものではない。傾斜面からの流水を下方に送り出すものと考えられる施設であり、南側では見られない。北側周溝は幅2.2m、深さ0.1m、東側周溝は幅2.3m、深さ0.1mで、西側周溝は幅1.5m、深さ0.25mを測る。周溝内側上端部での東西径は5.58mを測り、周溝外側上

- 1 填土
- 2 赤褐色粘質土
- 3 褐色粘質土
- 4 暗褐色土(5mm次のマンガン粒、炭粒を含む)
- 7 褐色土
- 8 黄褐色粘質土(風化5mm次の母岩ブロックを含む)
- 10a 暗褐色土(5~10mm次のマンガン粒を含む)
- 10c 赤褐色粘質土(1~3cm次の地山母岩ブロックを含む)
- 10e 黄褐色粘質土(5~10cm次の地山母岩を含む)



第 58 図 11号墳墳丘土層図(縮尺 1/60)

端部での東西径は12.1mを測る。

墳丘北側では7、10、12号墳の占地で墳形がかなり乱れている。土層観察では、11号墳は10号墳より後出し、12号墳より先行することが分かる。

墳丘基底面は全体にテラス状に削り出され、東西方向でほぼ水平（標高50.75m）になる。墳形は玄室短軸径7.5mの楕円形墳になる。

墳丘（図版3-2、64-2、第58図） 墳丘は、まず前面側で地山削り出しを行い、径8m、高さ0.4m程を確保した後、墳丘基底面の整地を行い盛土をし、より高い墳丘を作る。傾斜面にあるので、墳丘盛土自体かなり流出しているが、墳裾は周溝、地山整形面と一致している。

墳丘形成過程は、大きく2段階に分けられると推定できる。第1段階は、石室構築の壁石の裏込めのもの。第2段階は天井部の被覆と墳形の整形に係わるものである。本墳では、前述したように天井部が盗掘で盛土、天井石共消失しているため、その形成過程の全容は把握できなかった。

第1段階は墓墳内の腰石設置後、側壁石に平行して盛り上げている。壁石相互間には、礫石や小石を充填している。この段階の盛土は、墓墳上端部からさほど広がる事なく行われる。

第2段階はほとんど流失しているが、地山層を削って盛土として使用している。

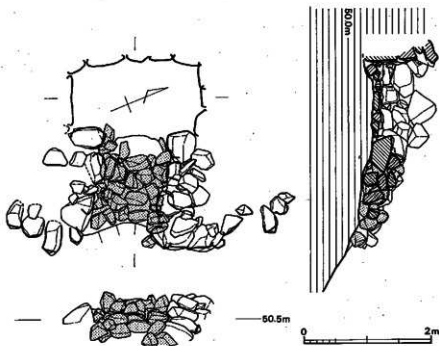
墳丘遺存高は、玄室床面から約0.9mを測る。

外覆列石（図版3-2、65-2、第60図） 羨道部側壁端より接続してL字状に伸びる。左側で4石、2.6m程間隔をおいて1石がある。右側は7石ある。左側の離れた列石は、墳丘基底面外端にある。

3) 主体部（図版64-2、65～67、第58～61図）

本墳の埋葬施設は、主軸をN-67-Wにとり、丘陵南側傾斜面に谷へ向かって等高線と直角に開口する単室の両袖式横穴式石室である。石室は既に盗掘や開墾で、天井部と壁石上部を消失し、腰石から上2～3段しか残っていない。石室内は側壁の崩落や流土によって埋没していた。玄室内は、盗掘を受けているにもかかわらず、床面の敷石は20～40cm程度の転石をもっとも多く使い、表面は平坦なものを選んでいる。出土遺物は、全く無かった。

石室は、横長方形プランを有する玄室に短い羨道を接続する。玄門部に他墳に見られない巨大な榎石を根石にして閉塞施設がみられる。石室全長は左壁2.4m、右壁2.3mを測る。石室を構築する石材は、安山岩の転石が使用されている。

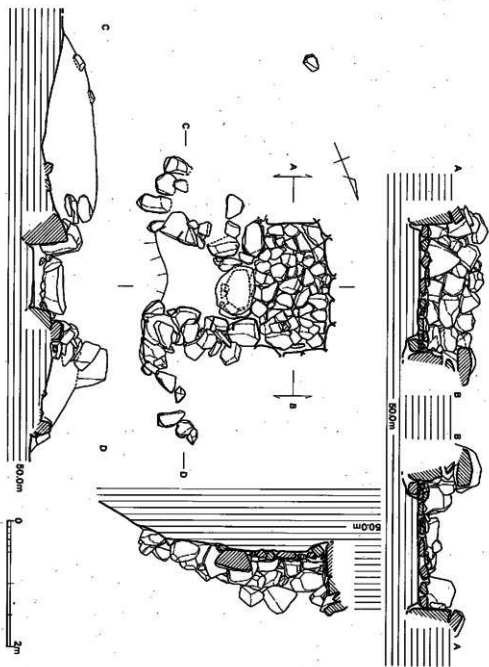


第 59 図 11号墳閉塞石実測図(縮尺 1/60)

閉塞施設(図版65、第59図) 玄門部の框石を根石とした閉塞施設が存在する。転石を積み上げて閉塞するもので、現存高0.7mであるが、元来は天井石との間が完全にふさがれていたであろう。閉塞施設の位置は墓道側で奥壁中央から2.58m、羨道側で玄門部の框石を根石として奥壁中央から1.48m、その間約1.1mである。墓道側からみた場合、石積みは20cm大の転石が整然と積まれる。下部に大ぶりの石を、上部に行くにしたがって小ぶりの石を積み上げる。

玄 室(図版66、67、第60図) 奥幅1.94m、前幅1.9m、左壁長0.96m、右壁長1mを測り、横長方形プランをみる。壁体の構築法は、奥壁で腰石5石を据えて、左側壁隅角から2番目の腰石が大きく、他の石は小さい。2段目からは大きな腰石に合わせるように目地を揃えて煉瓦積みする。3段目から上で持ち送る。腰石は両隅でやや湾曲する。右側壁は腰石3石を据えるがそれぞれ大きさが異なる。2段目からは無造作に積み上げる。袖部際の腰石はやや内に向く。天井部は既不在だが、さらに数段積上げてから木蓋を架構したと推定できることから、床面からの高さは約1.6mと考えられる。

玄門部は両袖で特別な施設はない。袖幅は左袖0.5m、右袖0.4mで、玄門幅は0.94mを測る。袖石は転石を縦位に立てている。框石は他墳に例を見ない80×60×30cmの大きなもので、特徴



第 60 图 11号填石室实测图(绘尺 1/60)

的な存在である。

床面は径20~40cmほどの転石、割り石で敷石が施される。敷石除去後、すぐに地山整形面に達し、排水溝等の施設はなかった。

石室基底面(第61図) 中央より両側壁に行くに従って、低くなる。腰石を配置する部分は、さらに低くし、それらの安定を図っている。根石を床石に併用する例もある。



第61図 11号墳石室基底面
実測図(縮尺 1/60)

羨道(図版64-2、第60図) 羨道部は主軸方向から南西に曲げ墓道に向かって跳ね上げにならず、玄室基底面と同レベルである。羨道部は他墳と比べ、いびつである。左右壁とも2段目まで残っている。右壁で3石、左壁で2石である。壁体構成は大ぶりの転石を腰石とし、その上に転石を煉瓦積みする。羨道長は右壁で1.25m、左壁で1.36mを測る。幅は玄門側で0.94m、墓道側で1mを測る。

墓道(図版64-2、第57図) 墓道は削平を受けて確認できなかった。

墓墳(第58図) 墓墳は墳丘を完全に除去することなく、左右側壁、奥壁側に設定したトレンチによる観察であったので、その全容は把握できなかった。

墓墳は、地山整形された部分から斜目に掘り込まれる。墓墳は、玄室短軸幅3.6m、深さは玄室部奥壁側で0.7mを測る。

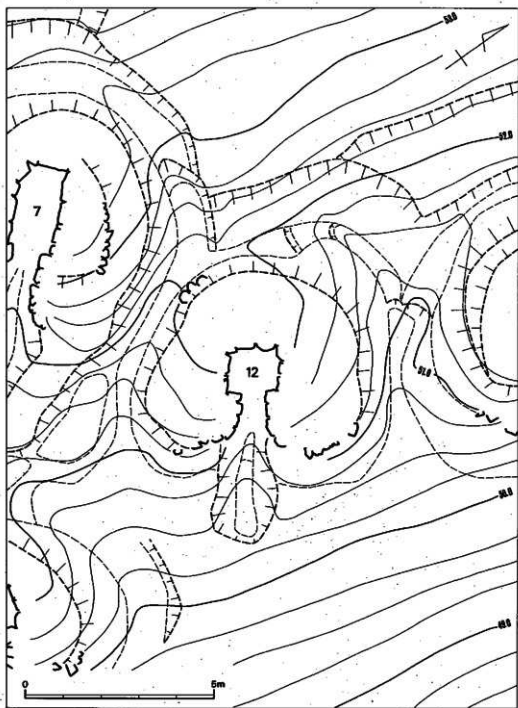
4) 出土遺物

土器等の出土遺物は全くなかった。

12. 12号墳

1) 位置と現状(図版68-2、第3図)

12号墳は、石堂中後ヶ谷墳群中、丘陵頂部から下がった南側斜面下段位(標高52m)に立地している。本墳の墳丘識別は、伐採後、盗掘坑による天井部の若干の窪み、石材の露出により



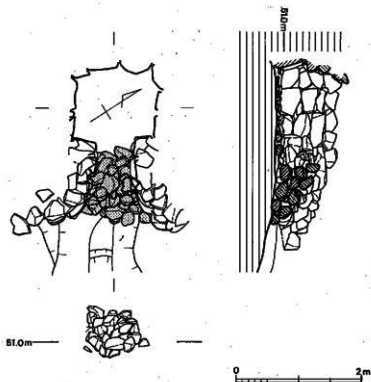
第 62 图 12号墳調査後地形測量図(縮尺 1/100)

確認された。丘陵斜面北東側に13号墳、西側に7号墳にあり、それぞれの周溝を共有している。両墳の間に差し込むように占地している。調査前の墳丘は径7.5m程の卵形をし、現高約1mをとどめるに過ぎず、盛土の流出、後世の削平があったことを伺わせた。発掘の結果、等高線に直角で南東側に向かって開口する横穴式石室の内部構造をもつ不整形墳であることがわかった。

2) 墳 丘 (図版68-1、70、第62・64・65・90図)

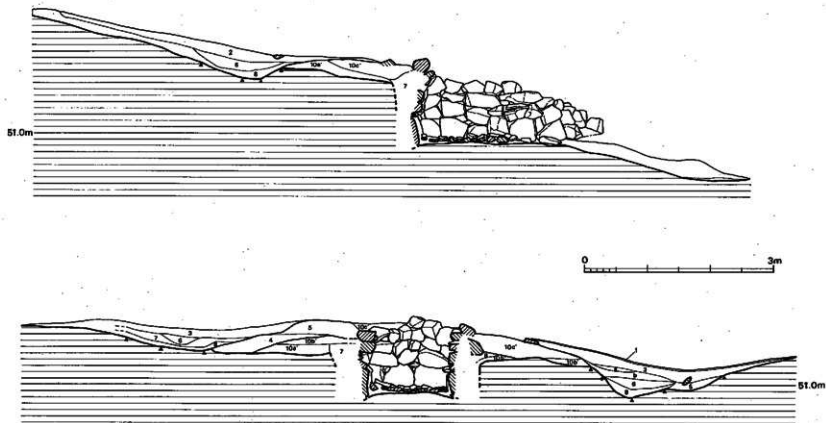
墳形と周溝 (図版68-1、第62図) 12号墳は墳丘全体を除去せず、玄室長短軸上のトレンチ観察のみであるが、古墳構築における地山整形は、墳丘後側の傾斜面を半周する馬蹄形周溝の掘削とその内側の墳丘基底面の整地という二つの作業から成っていると推定された。

馬蹄形周溝は標高52.1mのところを上端として、傾斜面を削り出している。この周溝は、墳丘基底面を全周するものではなく、傾斜面からの流水を下方に送り出す施設であり、南側では

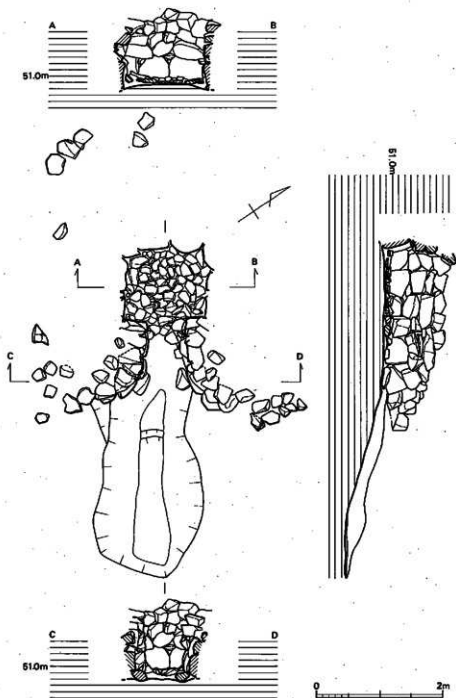


第 63 図 12号墳閉塞石室測図(縮尺 1/60)

- 1 黒褐色土
- 2 赤褐色粘質土
- 3 褐色粘質土
- 4 暗褐色土 (5mm大のマンガング粒、炭粒を含む)
- 5 褐色粘質土
- 6 黒褐色粘質土 (炭粒を含む)
- 7 褐色土
- 8 黄褐色粘質土
- 10a 暗褐色粘質土
- 10b 赤褐色粘質土
- 10c 黄褐色粘質土
- a 赤褐色粘質土
- b 灰褐色粘質土



第 64 図 12号墳遺丘土層図 (縮尺 1/60)



第 65 图 12号填石窟实测图(缩尺 1/60)

見られない。玄室短軸側では7、13号墳と周溝を共有している。周溝は非常に浅く、僅かに痕跡をとどめるに過ぎない。北側周溝は、幅1.25m、深さ0.3m、東側周溝は幅1.4m、深さ0.4mで、西側周溝は幅2m、深さ0.2mを測る。土層観察から12号墳の周溝は7号墳墳丘、13号墳墳丘を削り、11号墳周溝に切られる。墳丘基底面は、全体にテラス状に削り出され、東西方向でほぼ水平（標高51.5m）になる。

墳形は、前面部墳裾が直線的に整形されていることや7、13号墳の間に差し込んでいることから、定形化された墳形にならない一辺6.5mの不整形墳と考えられる。

墳丘（図版68-1、第64図） 墳丘は周溝内側の整地を基底面として、盛土を行っている。しかし、墳丘盛土自体流出したり、周溝の掘り直して、墳裾が溝、地山整形面と一致するものではない。墳丘形成過程は、大きく2段階に分けられると推定できる。第1段階は、石室構築の壁石の裏込め的なものである。第2段階は天井部の被覆と墳形の整形に係わるものである。本墳では、前述したように天井部が盗掘で盛土、天井石共消失しているため、その形成過程の全容は把握できなかった。

第1段階は墓壇内の腰石設置後、壁石横上げに平行して、一層一層盛り上げている。壁石相互間には、礫石や小石を充填している。この段階の盛土は、墓壇上端部からさほど広がる事なく行われる。

第2段階は地山層を削り出し、盛土として使用している。この段階の盛土は、本墳の立地が傾斜面上であることからかなり流失している

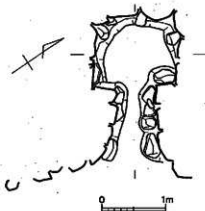
13号墳間との土層観察で、12号墳墳丘が13号墳の墳裾上まで覆っていることがわかった。

墳丘遺存高は、玄室側壁側で約1.15mを測る。

外護列石（図版70、第65図） 羨道部側壁端より連続して左右に広がる。左側で4石、4m程間隔をおいて列石が存在する。右側では5石が残り、2段積みになるようである。

3) 主体部（図版69～73、第63・65・66図）

本墳の埋葬施設は、主軸をN-55°-Wにとり、丘陵南東側傾斜面に谷へ向かって等高線と直角に開口する単室の両袖式横穴式石室である。石室は既に盗掘や閉塞で、天井部と壁石上部を消失しているが、



第66図 12号墳石室基底面実測図
（縮尺 1/60）

他墳に比べ、腰石上3～4段を残し、比較的遺存状態が良い。石室内は側壁の崩落や流土によって埋没していた。玄室内は、盗掘を受けているにもかかわらず、床面の敷石は20cm程度の転石をもっとも多く使い、空間に小石をおさめる。表面は平坦なものを選んでいるが、部分的に凹凸も見られる。出土遺物は玄室内で土器が出土した。

石室は、正方形プランを有する玄室に「ハ」の字に開く羨道を接続する。玄門部に閉塞施設がみられる。石室全長は右壁2.51m、左壁2.4mを測る。石室を構築する石材は、安山岩の転石が使用されている。

閉塞施設（図版69、第63図） 玄門部に閉塞施設が存在する。20cm大の転石を積み上げて閉塞するもので、現存高0.6mであるが、元来は天井石との間が完全にふさがれていたであろう。閉塞施設的位置は墓道側で奥壁中央から2.24m、羨道側で奥壁中央から1.2m、その間約1.25mである。ほぼ同じ大きさの転石が整然と積み上げる。

玄室（図版70～73、第65図） 奥幅1.2m、前幅1.08m、右壁長1.1m、左壁長0.98mを測り、正方形プランをみる。壁体の構築法は、奥壁で腰石3石を据えて、その上に目地を水平方向に揃え、やや小ぶりの転石で持ち送り気味で、3～4段煉瓦積みと重箱積みを併用する。腰石はやや湾曲して据えられる。右側壁は腰石3石でその上を目地を水平方向に揃え、やや小ぶりの転石で持ち送りを際立たせず重箱積みする。左側壁は右側壁に比べ持ち送りが著しい。天井部は既ないが、さらに数段積上げてから天井石を架構したと推定できることから、床面からの高さは約1.8mと考えられる。

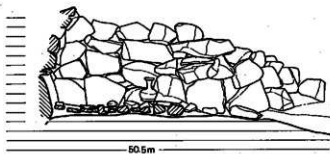
玄門部は両袖で特別な施設はない。袖幅は左袖0.38m、右袖0.28mで、玄門幅は0.6mを測る。袖石は転石を縦位に立てている。

床面は径20cmほどの転石、割り石で敷石が施される。敷石除去後、すぐに地山整形面に達し、排水溝等の施設はなかった。

石室基底面（第66図） 中央より両側壁に行くに従って低くなる。腰石を配置する部分は、さらに低くし、それらの安定を図っている。根石を床石に併用する例もある。

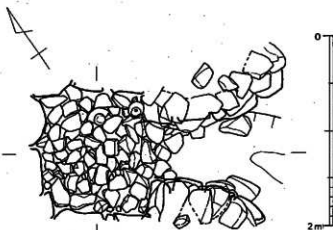
羨道（第65図） 羨道部は墓道に向かって跳ね上がり、「ハ」の字に広がる。羨道部は他墳に比べ、左右壁とも比較的よく残る。壁体構成は大ぶりの転石を腰石とし、その上に転石を煉瓦積みする。羨道長は右壁で1.48m、左壁で1.23mを測る。幅は玄門側で0.6m、墓道側で1.15mを測る。

墓道 (第65図) 墓道は、羨道部端から連接して主軸方向へ直線的に2.8m伸びる。幅1.5m、深さ0.3mを測る。



墓壇 (第64図) 墓壇は墳丘を完全に除去することなく、左右側壁、奥壁側に設定したトレンチでの観察であったので、その全容は把握できなかった。

墓壇は、墳丘基底面から斜目に掘り込まれる。墓壇は、玄室短軸幅2.5m、深さは玄室左側壁側で0.75mを測る。



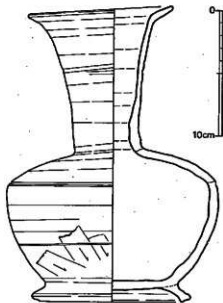
4) 出土遺物 (図版97、第67・68図)

第 67 図 12号墳出土遺物状況図 (縮尺 1/40)

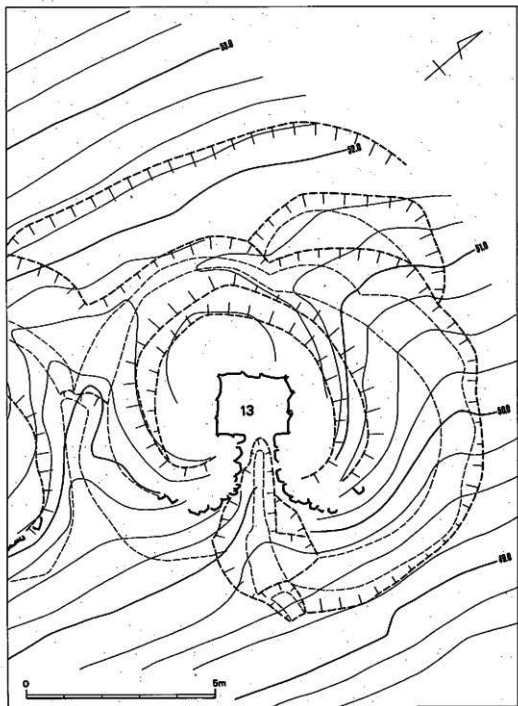
出土遺物には土器があった。小田穰年でVI期に属し、7世紀後半にあたる。

土器 (図版97、第67・68図)

長頸壺 (1) 玄室右袖隅角より出土。口頸部は頸部から斜目上方に直線的に伸び、口縁部辺で緩やかに「く」の字に曲がる。口縁端部は丸くおさめる。体部は胴部最大径を中央よりやや上に持ち、頸部から張り出し気味に広がってから、底部に向かって内湾しながら達する。底部にはその外周に高台が付く。外側に張り出し、端部を上を持ち上げ面を作る。口頸部、体部上半は横なで、体部下半は回転篋削りののち、斜目方向に手持ちの篋削りをする。口径11.4cm、底径12.4cm、器高23.4



第 68 図 12号墳出土土器実測図 (縮尺 1/3)



第 69 图 13号填调查後地形測量图(縮尺 1/100)

cm、頸部径5.4cmを測る。

13. 13号墳

1) 位置と現状 (図版3、4-1、75-1、第3図)

13号墳は、数小群からなる当古墳群のなかで最も標高が低く密集する小群中に所在する。

調査前の現況地形測量の観察では、図版75-1、第2図に示すように、墳頂部で玄室の遺存壁材の一部が露出し、玄門天井石は除去されていた。

また、墳丘周囲の溝状の凹地は、奥壁の西後方では幅広くわずかに、側壁の南側では明瞭に認められたが、南接する12号墳との所属関係は明確ではなく、概略径9m前後の古墳と思われる。

2) 墳丘 (図版75-2、77、第69～71図)

調査は、石室内の落石の除去作業と併行してトレンチを、奥壁後方(奥壁トレンチ)に設け、石室床面検出後に、石室主軸と直交しその中心を通る左・右側壁外方(左・右側壁トレンチ)にも設けた。

したがって、第2図に各トレンチの位置を示すように、石室主軸と奥壁トレンチとは一致しない。

第70図の土層断面図作成以降の作業は、2号墳で既述したとおりである。

土層観察 (第70図)

斜面上位(奥壁後方)の地山削り出しの状態は、奥壁トレンチ土層図に示すように、石室中心から測れば7.49m以下を削るが、その傾斜変換点はわずかに認められるもので、第69図に示すように、変換線は石室中心から弧を描くように検出されたが、12号墳のそれから切られる。

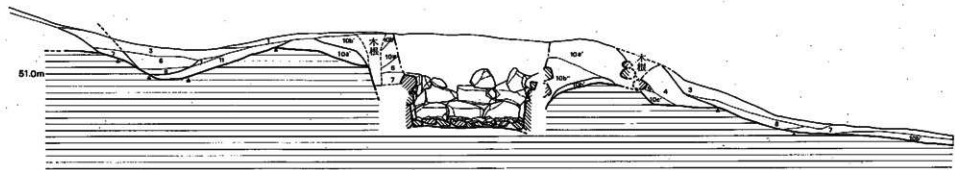
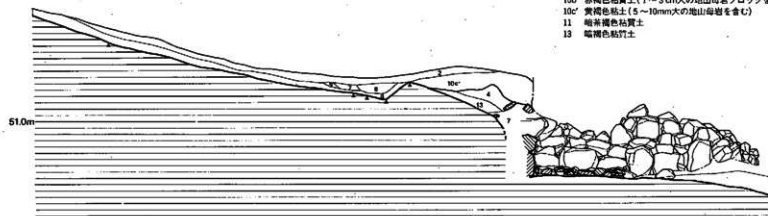
また、同様に測って2.10mは周溝の下端であるが、上記の変換点からこの下端間に周溝外縁上・下端と明瞭には認められないが、断面部以外では顕著に認められる。

墳丘基底部は、石室掘り方上端が同様に1.38m・周溝内縁上端が2.70mを測り、この間の地山面が示すように、直線的に20°の傾斜面に地山整形を施し、左・右側壁トレンチでも約10°の傾斜が同様に認められることから、いずれも石室構築作業上、意図的に整形したものと思われる。

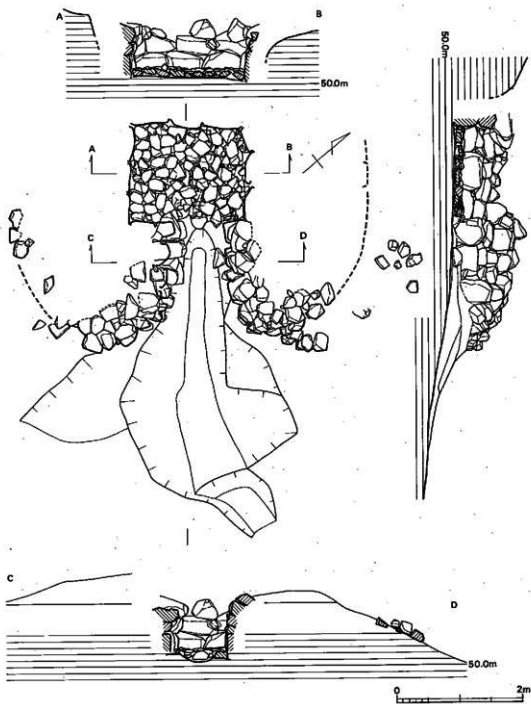
なお、3壁トレンチ共に、別途盛土による盛土基底部上面も、同様に傾斜する。

また、左・右側壁トレンチ土層図に示すように、石室中心から測って、左側壁部では、石室掘り方上端が1.54m・周溝内縁上端が3.06m・同外縁上端が5.34mで、周溝埋土7層を切って、

- 1 礫石土
- 2 赤褐色粘質土
- 3 黄褐色粘土
- 4 暗褐色土 (5 mm 次のマンガング粒、炭粒を含む)
- 5 暗褐色粘質土
- 6 黄褐色粘質土 (炭粒を含む)
- 7 礫石土
- 8 黄褐色粘質土 (風化 5 mm 次の母岩ブロックを含む)
- 9 暗褐色土 (5 ~ 10 mm 次のマンガング粒を含む)
- 10a 赤褐色粘質土 (1 ~ 3 cm 次の礫山母岩ブロックを含む)
- 10b 赤褐色粘質土 (1 ~ 3 cm 次の礫山母岩ブロックを含む)
- 10c 黄褐色粘土 (5 ~ 10 mm 次の礫山母岩を含む)
- 11 暗褐色粘質土
- 12 暗褐色粘質土



第 70 図 13号墳埋土層図(縮尺 1/60)



第 71 图 13号填石室实测图(缩尺 1/60)

12号墳の周溝を設けており、6・8層は2号墳の周溝埋土である。

右側壁部では、同様に測って、石室掘り方上端が1.31m・上段上端が2.77m・下端が3.00m・周溝内縁上端が4.03m・同内縁下端が約5.22mで、墳丘基底部の地山は段状に整形され、上段上端縁に径20cm大の積み上げられた石を3個検出した。

最下段の石は、木根によってやや動いているが、ほぼ旧状を保ち、この部分のトレンチの拡幅を試みたが、木根の除去により拡幅部でも確認された石積み(内護列石)・段状の地山整形変換線の第69図による図示はできなかった。

外護列石は、後述する羨道部左・右側壁から連続して、墳丘前面に配されていたが、その配石のあり方は、既述の3号墳との類似点も多いが、上述した内護列石へも連続するなどの特徴がある。

外護列石は、石室主軸から測って、左側壁部で1.67m・右側壁部で2.41mまでを検出したが、ほぼ旧状のプランを呈するものと考えられる。

また、同様に測って、右側壁部で1.46m～2.52m間の上段の石列は、既述の右側壁トレンチ土層断面図で図示した内護列石に連続するものと考えられ、4層は、この内護列石を覆う最終的な墳丘整形の盛土層と思われる。

この内護列石は、左側壁部では玄門左方でも最下段の3石が旧状のまま検出された。

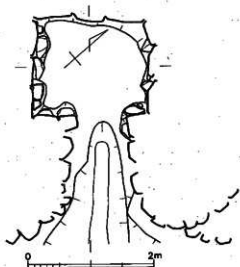
以上のことなどから、墳丘の規模は、主軸方向が奥壁トレンチ墳丘基底部周溝内縁上端から左・右外護列石の前面を結ぶ線までが5.52m、左・右側壁トレンチの墳丘基底部周溝内縁上端間が7.09mを測るもので、墳形プランは左・右側壁方向に長円形を呈し、左・右側壁部内護列石プランが奥壁部周溝内縁上端プランに連なる形状がほぼ円形を呈す。

3) 主体部 (図版75-2、76～80、第69～72図)

本墳は、石室主軸をN-49°-Wにとり、南東方向に開口する単室の両袖型横穴式石室で、主軸は北東方向にのびる丘陵斜面に若干斜交する。

掘り方の規模は、既述の左・右側壁断面部で上端幅2.85mを測り、深さは左側壁で約1m、右側壁で約0.60mである。

また、掘り方プランは、左・右・奥壁断面部を除いて、盛土を除去しての掘り方検出をして



第72図 13号墳石室基底面実測図(縮尺 1/60)

いないので不明である。

しかし、2号墳で既述したことと同様の理由から、奥壁後方1.38mから左・右玄門石前面約1.50mまでの計2.88mが、左・右側壁断面幅2.85mとほぼ一致する正方形様を呈し、この玄門石前面で幅1.80mほどに狭くなって羨道部掘り方へと続くものか。

なお、上記掘り方幅2.88mは、3号墳の同2.90mとほとんど一致し、2号墳の玄室プランの説明項で得た $0.32\text{m} \times 9 = 2.88\text{m}$ と一致し、換言すれば、0.32mの9倍として設計されたものと言えるか。

閉塞施設は、図版76に示すように、高さ0.8mほどが3号墳同様に、乱石積み状態で羨道部前面にまで、施設全体では断面△字状に積み上げて閉塞していた。

玄室の規模は、その接線を、奥壁部では左・右端石の玄門側最前面、前壁部（玄門部）では左・右端石の奥壁側最前面、左側壁部では玄門側2石の右側壁側最前面、右側壁部では玄門側2石の左側壁側最前面にそれぞれ設け、各接線の交点間をその測点として測れば、以下のとおりである。

奥幅は1.76m、左・右側壁断面部プラン幅は1.79m、前幅は1.79mで、わずかに奥幅が狭く、左側壁長が1.51m・右側壁長が1.42mで9cmだけ左側壁が長い。

なお、上記の接線のなかで、前幅部と右側壁部は直交し、左側壁部もほとんど直交するに等しく、玄門左・右石の奥壁面後間は0.79mを測る。

また、各壁の腰石は、奥壁では左側壁寄りの石が横幅約0.70m・高さ約0.50mで、左側壁の中央石の横幅0.61m・高さ0.51mの石材に比べて顕著に大きいと言えるものではない。

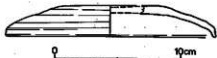
玄室のプランは、以上のように玄室計測値平均が、幅1.78m・側壁長が1.47mで、0.31mだけ前者が大きく、その差は2号墳の玄室プランの説明項で得た0.32mとほとんど一致し、 $0.32\text{m} \times 2.5 = 0.8\text{m}$ も既述の玄門幅0.79mとほとんど一致する。

なお、上記平均は、幅 $1.78\text{m} \div 0.32\text{m} = 5.5625$ 、側壁長 $1.47\text{m} \div 0.32\text{m} = 4.5934$ となり、前述の掘り方プラン $2.88\text{m} \div 0.32\text{m} = 9$ となることなどから、3号墳プランより若干小さく、0.32mの、玄室幅は5.5倍・玄室長は4.5倍として当初に設計したものか。

床石は、径10～30cm大・厚さ5～10cm大の扁平な転石を敷き、その間隙の小石の図示は少ないが、床石上の盗掘の際の攪乱土中には多数の小石が出土したことから、3号墳同様に小石も別途敷かれたものと思われる。

玄門部の樞石は、盗掘の際に除去されたものと思われ、2・3号墳同様に、床石材よりも若干厚手のもの数個を配したものか。

なお、玄門部～羨道部のプランは、直線的に小さくハの字状に開口し、2号墳玄室プランのように、



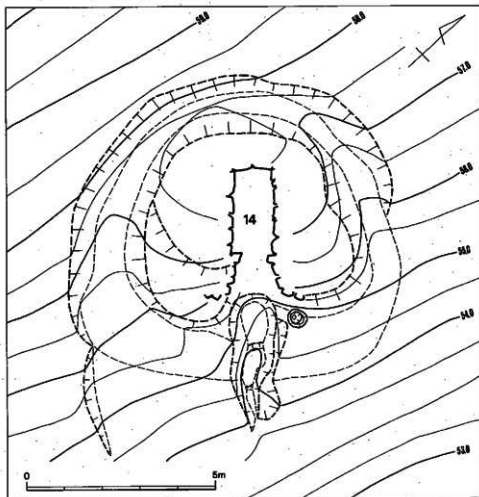
第73図 13号墳出土土器実測図(縮尺 1/3)

玄門部が逆ハの字状に狭まり、羨道部玄門側で一担広がってのちハの字状に羨道部が開口する型式ではない。

なお、左側の玄門腰石2個と羨道腰石1個の計3個の石面は、特に一直線に接しており、右側部でも計4個の石稜は一直線に接していることから、玄門～羨道部全体で当初からの設計プランがなされており、既述の玄室プラン計測接線（玄室前壁腰石接線）から羨道部腰石前面の左・右を結ぶ線間（玄門～羨道間）は1.26mで、 $1.26\text{m} \div 0.32\text{m} = 3.9375$ となり、0.32mの4倍として設計されたものか。

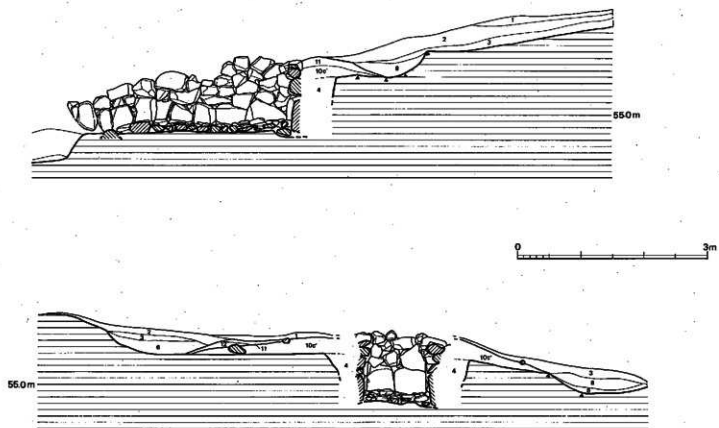
外護列石は、左・右列石前面を結ぶ線と石室主軸は直交し、石室中心から2.82mを測る。

掘り方床面は、玄室に、2号墳例のような主軸に沿う排水溝や、3号墳例のような中央部の削り出し面などを別途に設けていないが、第71図の石室実測図中の主軸断面図に示すように、



第74図 14号墳調査後地形測量図(縮尺 1/100)

- 1 残積土
- 2 赤褐色粘質土
- 3 褐色粘質土
- 4 暗褐色土 (5 mm次のマンガン粒・炭粒を含む)
- 5 黒褐色粘質土 (樹皮を含む)
- 6 黄褐色粘質土 (風化5 mm次の母岩ブロックを含む)
- 7 黄褐色粘質土 (5~10mm次の地山母岩を含む)
- 8 暗茶褐色粘質土
- 9 淡茶褐色粘質土



第 75 図 14号墳墳丘土層図 (縮尺 1/60)

床面全体が奥壁部から羨道部へと若干の傾斜をするように削平されている。

4) 出土遺物 (図版97、第73図)

出土遺物には土器があった。

土 器 (図版97、第73図)

蓋 玄室床面より出土。天井部は欠失する。口縁部内面にはかえりがない。口縁部は鳥嘴状になる。口径15.7を測る。

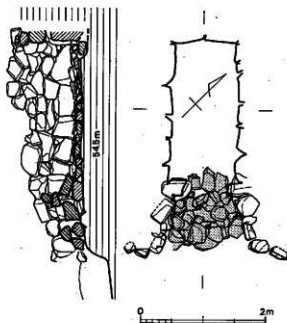
14. 14号墳

1) 位置と現状 (図版3-1、81-1、第3図)

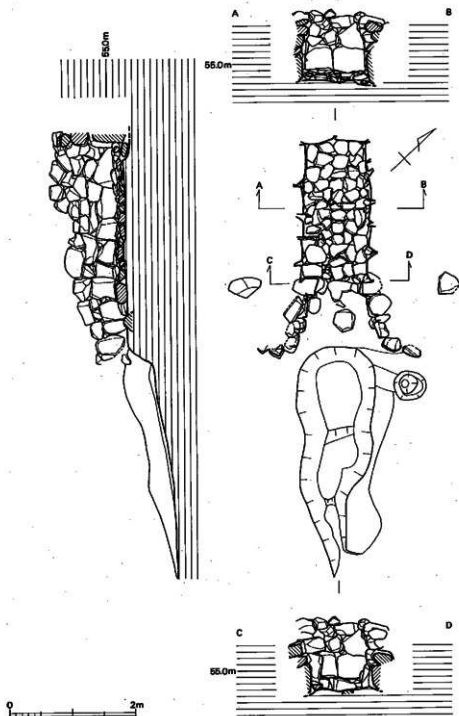
14号墳は、中後ヶ谷古墳群中、丘陵頂部から下がった南側斜面下段位 (標高55.75) に立地している。本墳の墳丘識別は、伐採後、盗掘坑による天井部の若干の窪み、石材の露出から確認できた。他墳とは離れ、やや独立している。北東側にある8号墳とは約11m、東側の15号墳とは12m離れる。また北側の16号墳と一番近接するが、6m離れる。調査前の墳丘は径6.5mの不整形円形で、現高0.4mを測るに過ぎず、盛土の流出、後世の削平があったことを伺わせる。発掘の結果、等高線に斜角で南東側に向かって開口する横穴式石室の内部構造をもつ不整形円墳であることがわかった。

2) 墳 丘 (図版3-2、4-2、81-2、83、第74・75・77図)

墳形と周溝 (図版3-2、4-2、81-2、



第76図 14号墳閉塞石尖測図 (縮尺 1/60)



第 77 圖 14号墳石室実測圖(縮尺 1/60)

83-2、第74図) 14号墳は墳丘全体を除去せず、東西北のトレンチ観察のみであるが、古墳構築における地山整形は、墳丘後側の傾斜面を半周する馬蹄形周溝の掘削とその内側の墳丘基底面の整地という二つの作業から成っていると推定される。

馬蹄形周溝は約10度の傾斜面(標高56.0m)を上端として、傾斜面を削り出している。この周溝は、墳丘基底面を全周するものではない。傾斜面からの流水を下方に送り出す機能を果たせば良いもので、古墳前面部では見られない。周溝は非常に浅く、僅かに痕跡をとどめるに過ぎない。北側周溝は、幅1.2m、深さ0.2m、東側周溝は幅1.45m、深さ0.25mで、西側周溝は幅1.0m、深さ0.2mを測る。周溝内上端部での東西径は6.4mを測り、周溝外上端部での東西径は8.45mを測る。

北側周溝、西側周溝では、周溝内上端部を墳丘上に持ってくる。

墳丘基底面は全体にテラス状に削り出され、東西方向(標高55.5m)ではほぼ水平になる。

墳形は長軸径7.2m、短軸径8.1mの不整形円形を呈する。前面部はやや直線的になる。

墳丘(図版81-2、83-2、第75図) 墳丘は周溝内側の整地を基底面として、盛土を行っている。しかし、墳丘盛土自体かなり流出しているので、墳裾が周溝、地山整形面と一致するものではない。

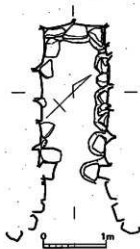
墳丘形成過程は、大きく2段階に分けられると推定できる。第1段階は、石室構築の壁石の裏込め的なものである。第2段階は天井部の被覆と墳形の整形に係わるものである。本墳では、前述したように天井部が盗掘等で盛土、天井石共消失しているため、その形成過程の全容は把握できなかった。

第1段階は墓室内の腰石設置後、壁石横上げに平行して盛り上げている。壁石相互間には、礫石や小石を充填している。この段階の盛土は、墓壇上端面からほとんど広がる事なく行われる。

第2段階は黄褐色粘土と暗茶褐色粘質土を積み上げる。この段階の盛土は、本墳の立地が傾斜面上であるのでほとんど流失している。

墳丘遺存高は、玄室床面から約1.0mを測る。

外圍列石(図版81-2、83、第77図) 羨道部側壁端より連結して左右に広がる。右側で2石、左側で2石残る。



第78図 14号墳石室基底面実測図

(縮尺 1/60)

3) 主体部(図版81-2、82~85、第76~78図)

本墳の埋葬施設は、主軸をN-47°-Wにとり丘陵南等側傾斜面に谷へ向かって等高線と直角に開口する単室の両袖式横穴式石室である。石室は既に盗掘や開墾で、天井部と壁石上部を消失している。石室内は側壁の崩落や流土によって埋没していた。玄室内は、盗掘を受けているにもかかわらず、床面の敷石は20~30cm程度の転石をもっとも多く使い、空間に小石をおさめる。表面は平坦なものを選んでいる。出土遺物は土器があった。

石室は、縦長方形プランを有する玄室に、「ハ」の字に開く短い羨道を連接する。玄門部は框石を根石にして閉塞施設がみられる。石室全長は右壁3.1m、左壁3.2mを測る。石室を構築する石材は、安山岩の転石が使用されている。

閉塞施設(図版82-1、第76図) 玄門部は框石を根石とし、やや前面へ出たところを中心にして閉塞施設が存在する。20cm大の転石を積み上げて閉塞するもので、現存高0.6mであるが、元来は天井石との間が完全にふさがれていたのであろう。閉塞施設の位置は基道側で奥壁中央から3.35m、羨道側で奥壁中央から2.1m、その間約1.25mである。基道から見た場合、石積みは雑然とした状態であるが、下部に大きな石を、上部に行くにしたがって小さい石を積み上げる。羨道部からの転落石も考慮しておきたい。

玄室(図版81-2、83~85、第77図) 奥幅0.94m、中央幅1.04m、幅1.04m、右壁長2.21m、左壁長2.13mを測り、奥幅の狭い縦長方形プランをみる。壁体の構築法は、奥壁で50×50cm程の腰石2石を面を揃えて据え、その上に2段目からすぐ持ち送る。左腰石の上2段目の石は、他の2段目の石より2倍ほど大きいのが、その差をなくするため3段目で目地が水平方向に通そうと転石を選択している。煉瓦積みにする。左側壁は0.7×0.5m~0.4×0.4m程の転石5石を腰石として、面を揃えて据え、その上からすぐに持ち送り、0.3×0.2m程の小ぶりの石を水平方向に目地が揃うように、煉瓦積みしていく。基本的に転石は横位に積まれる。残りの良いところで、腰石から4段確認できた。奥壁左右側と左右側壁隅角が交わるころでは隅三角持ち送り技法が見られる。

天井部は既がないが、さらに敷石積上げてから天井石を架構したと推定できることから、床面からの高さは約1.5mと考えられる。

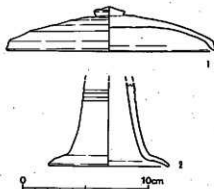
玄門部は両袖で特別な施設はない。袖幅は左袖0.28m、右袖0.16mで、玄門幅は0.68mを測る。袖石は転石を縦位に立てている。玄室部より大ぶりの石を袖石として使用しているのが特徴である。

床面は径20~40cmほどの転石、割り石で敷石が施される。主軸方向に一直線に並ぶ床石が見られたので、他墳のような排水溝等の施設を推定したが、敷石除去後、すぐに地山整形面に達

し、排水溝等の施設はなかった。

石室基底面 (第78図) 他墳と異なり、やや凹凸がある。腰石を配置する部分は、さらに低くし、それらの安定を図っている。根石を床石に併用する例もある。

羨道 (図版81-2、82-2、83-2、第77図) 左右壁とも比較的良好に残る。壁体構成は玄室と同様に大よりの転石を縦位に据え腰石とし、その上に転石を重ね積みする。羨道長は左壁で1.08m、右壁で1.04mを測る。幅は玄門側で0.68m、墓道側で1.28mを測る。



第79図 14号墳出土土器実測図(縮尺 1/3)

墓道 (図版81-2、83-2、第77図) 墓道は、羨道部端から比高差0.3mで一段下って接続して主軸方向に3.6m伸びる。幅1.2m、深さ0.1~0.2mを測る。削平とは見られず、他墳と異なる墓道形態をとる。

墓墳 (第75図) 墓墳は墳丘を完全に除去することなく、左右側壁、奥壁側に設定したトレンチによる観察であったので、その全容は把握できなかった。

墓墳は、地山整形された部分から斜目に掘り込まれる。墓墳は、玄室幅3.3m、深さは地山整形面が傾斜しているので、玄室短軸部奥壁側で0.9mを測る。

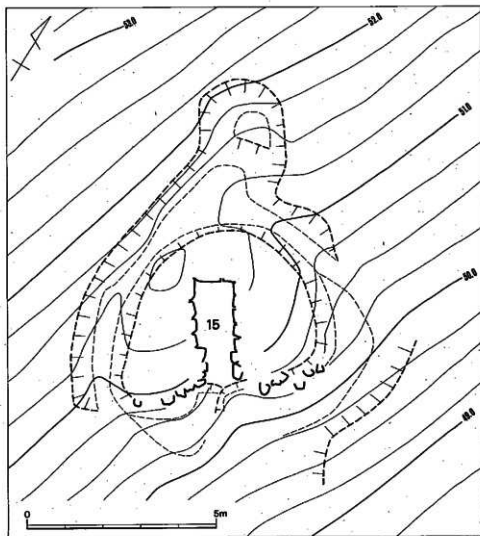
4) 出土遺物 (図版97、第79図)

出土遺物には土器があった。

土器 (図版97、第79図)

蓋 (1) 墓道西側より出土。口縁部内面にはかえりがない。天井部はやや膨らみ、口縁端部は鳥嘴状になる。頂部には扁平の摘みが付く。天井部上半部は回転削り、その他は横なである。口径16.2cm、器高3.6cmを測る。

高杯 (2) 墓道と墓道西側より出土。脚部のみ残存する。斜目外方に直線的に伸び、脚端部は鳥嘴状になる。脚上方には、2条の凹線が回る。内外面共横なである。底径9.6cmを測る。この器種については反転させ、瓶になるとも考えられる。



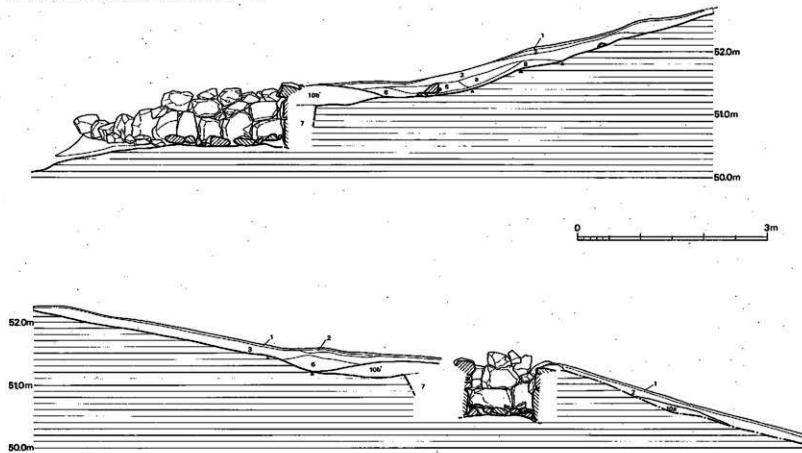
第 80 図 15号墳調査後地形測量図(縮尺 1/100)

15. 15号墳

1) 位置と現状 (図版3-1、86-1、第3図)

15号墳は、石堂中後ヶ谷古墳群中、丘陵頂部から下がった南側斜面最下段(標高51.25m)に立地している。本墳の墳丘識別は、伐採後、盗掘坑による天井部の若干の窪み、石材の露出か

- 1 雑草土
- 2 赤褐色粘質土
- 3 褐色粘質土
- 4 赤褐色粘質土(軽石を含む)
- 5 褐色土
- 6 黄褐色粘質土(風化5mm次の母岩ブロックを含む)
- 7 褐色土
- 8 赤褐色粘質土
- 9 赤褐色粘質土
- 10a 赤褐色粘質土(1~3cm次の電山母岩ブロックを含む)



第 81 図 15号墳横丘土層図(縮尺 1/60)

ら確認できた。他墳とは離れ、やや独立している。14号墳は西側にあり、8、9、10号墳のグループは、北西にあり、約11m離れる。調査前の墳丘は、7.5×6mの楕円形で、現高0.4m程を残すに過ぎず、盛土の流出、後世の削平や盗掘があったことを伺わせた。発掘の結果、等高線に斜角で南東側に向かって開口する横穴式石室の内部構造をもつ不整形墳であることがわかった。

2) 墳丘 (図版3-2、6-2、86-2、第80～82・88図)

墳形と周溝 (図版86-2、第80図) 15号墳は墳丘全体を除去せず、玄室長短軸上のトレンチ観察のみであるが、古墳構築における地山整形は、墳丘後側の傾斜面を半周する馬蹄形周溝の掘削とその内側の墳丘基底面の整地という二つの作業から成っていると推定された。

馬蹄形周溝は、約16度の傾斜面の標高51.85mのところを上端として、傾斜面を削り出している。この周溝は、墳丘基底面を全周するものではない。傾斜面からの流水を下方に送り出す機能を果たせば良いもので、古墳前面部では見られない。溝は非常に浅く、僅かに痕跡をとどめるに過ぎない。北側周溝は、幅3.15m、深さ0.2m、東側周溝は不明、西側周溝は幅1.3m、深さ0.3mを測る。周溝内側上端部を墳丘上に持つてくる。

調査後地形測量図を見ると、周溝は墳丘周囲で見ることが出来るが、墳丘後側でかなり乱れる。また、墳丘後側でも残りが悪い。墳丘前面右側ではほぼ円弧状に回るようである。

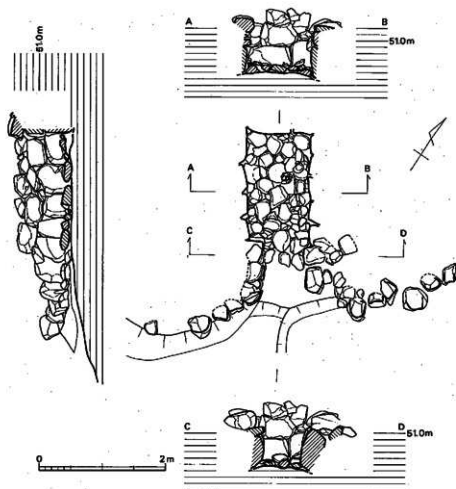
墳丘基底面は全体にテラス状に削り出され、東西方向(標高51.1m)ではほぼ水平になる。墳形は短軸径6.8m程の不整形墳となる。

墳丘 (図版86-2、第81図) 墳丘は溝内側の整地面を基底面として、盛土を行っている。しかし、墳丘盛土自体かなり流出しているので、墳裾が周溝、地山整形面と一致するものではない。

墳丘形成過程は、大きく2段階に分けられると推定できる。第1段階は、石室構築の壁石の裏込め的なものである。第2段階は天井部の被覆と墳形の整形に係わるものである。本墳では、前述したように天井部が盗掘等で盛土、天井石共消失しているため、その形成過程の全容は把握できなかった。

第1段階は墓墳内の腰石設置後、壁石積上げに平行して盛り上げている。壁石相互間には、礫石や小石を充填している。この段階の盛土は、墓墳上端部からほとんど広がる事なく行われる。

第2段階は地山層を削って盛土として使用する。この段階の盛土は、本墳の立地が傾斜面上であるのでほとんど流失している。



第 82 図 15号墳石室実測図(縮尺 1/60)

墳丘遺存高は、玄室床面から約0.85mを測る。

外護列石(図版88、第82図) 後道部側壁端より連接して湾曲しながら左右に広がる。左側4石は残りが良く、右側は崩落しているものの、6石確認した。

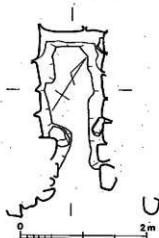
3) 主体部(図版86-2、87~91、第81~83図)

本墳の埋葬施設は、主軸をN-32°-Wにとり丘陵南等側傾斜面に谷へ向かって、等高線と直角に開口する単室の両袖式横穴式石室である。石室は既に盗掘や開壁で、天井部と側壁石上部

を消失している。石室内は側壁の崩落や流土によって埋没していた。玄室内は、盗掘を受けているにもかかわらず、床面の敷石は10~30cm程度の転石をもっとも多く使い、空間に小石をおさめる。表面は平坦なものを選んでいる。出土遺物は土器があった。

石室は縦長方形プランを有する玄室に細長い羨道を接続する。玄門部に框石を根石にして閉塞施設がみられる。石室全長は右壁2.5m、左壁2.7mを測る。石室を構築する石材は、安山岩の転石が使用されている。

閉塞施設 (図版87) 玄門部に框石を根石とし、やや前面に出たところを中心にして閉塞施設が存在する。墓道から見た場合、石積みは雑然とした状態であるが、下部に大きな石を、上部に行くにしたがって小さい石を積み上げる。羨道部からの転落石も考慮しておきたい。



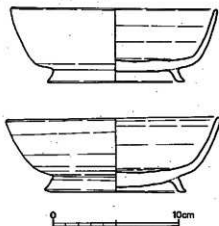
第83図 15号墳石室基座面実測図
(縮尺 1/60)

玄室 (図版86-2、88~91、第82図) 奥幅1m、前幅0.92m、右壁長1.68m、左壁長1.76mを測り、奥幅の広い縦長方形プランをみる。壁体の構築法は、奥壁で70×50cm、30×50cm程の腰石2石を面を揃えて据え、その上に2段目から大小の転石を混ぜながら煉瓦積みで、目地が水平に揃うようにしている。3段目から内傾させ持ち送る。腰石から上部に2段残る。左側壁は40×50cm程の転石を面を揃え4石腰石とし、その上2段目からは内傾させ持ち送りながら横位に煉瓦積みする。

天井部は既がないが、さらに敷積上げてから天井石を架構したと推定できることから、床面からの高さは約1.5mと考えられる。

玄門部は両袖で特別な施設はない。しかし、他墳と異なり、袖部左右が対称にならず、またほとんど発達せず片袖式と言っても良い状況を呈す。袖幅は左袖0.14m、右袖0.22mで、玄門幅は0.64mを測る。袖石は転石を縦位に立てている。玄門部に3石の框石が置かれる。中央の1石が大きい。

床面は径20~40cmほどの転石、割り石で敷石



第84図 15号墳出土土器実測図(縮尺 1/3)

が施される。奥壁から40cm程の床石が主軸方向に一直線に並ぶ状況が見られたので、他墳のような排水溝等の施設を推定したが、敷石除去後、すぐに地山整形面に達し、排水溝等の施設はなかった。

石室基底面（第83図） 中央から両側壁にいくに従って低くなる。腰石を配置する部分は、さらに低くし、それらの安定を図っている。根石を床石に併用する例もある。

羨道（図版86-2、88-2、90、91、第82図） 左右壁とも1段の腰石を残すのみである。壁体構成は玄室と同様に大ぶりの転石を縦位に据え腰石とし、その上に転石を煉瓦積みする。羨道長は左壁で0.44m、右壁で0.66mを測る。幅は玄門側で0.64m、墓道側で0.7mを測る。

墓道（図版86-2、第82図） 墓道は羨道部端から1段下がり、主軸方向よりやや南東に曲げて連接する。しかし、一段下がってから、その伸びは終えなくなる。

墓墳（第81図） 墓墳は墳丘を完全に除去することなく、左右側壁、奥壁側に設定したトレンチによる観察であったので、その全容は把握できなかった。墓墳は、地山整形された部分から斜目に掘り込まれる。墓墳は、玄室短軸幅3.1m、深さは玄室部奥壁側で0.35mを測る。

4) 出土遺物（図版97、第84図）

出土遺物には土器があった。小田編年でⅦ期に属し、8世紀前半に当たる。

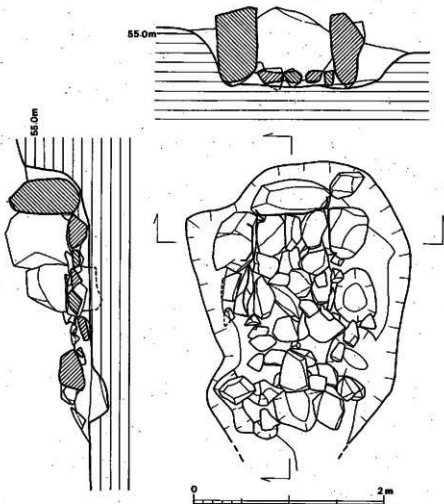
土器（図版97、第84図）

杯（1、2）玄室右奥床面より出土。底部から斜目方向に直線的に伸びて口縁部に達する。端部は丸くおさめる。1より2が底部が肥厚になる。底部外周よりやや内に高台を付ける。斜目下方に張り出し、端部は水平になる。内外面共横なでである。1は口径16.3cm、底径12.6cm、器高6cmを測る。2は口径16.9cm、底径11cm、器高5.9cmを測る。

16. 16号墳

1) 位置と現状

16号墳は、石堂中後ヶ谷墳群中、丘陵頂部から下がった南側斜面中段位に、北側に14号墳、



第 85 図 16号墳石室、墓墳実測図(縮尺 1/40)

北西側に3号墳、東側に8号墳、南東側に15号墳があり、それぞれのちょうど中間に位置する。それぞれの墳裾で約9m離れている。本墳の墳丘識別は、伐採後も全く確認できず、バックフォーによる表土、流土の剥ぎ取り時に確認できた。発掘の結果、等高線に直角で南東側に向かって位置する小石室の古墳であることがわかった。

2) 墳 丘 (図版92-1、第85図)

16号墳では墳丘は全く確認できず、外覆列石もなかった。

3) 主体部 (図版92-2、第85図)

本墳の埋葬施設は、主軸をN-57-Wにとり、丘陵南側傾斜面に谷へ向かって等高線と直角に位置する小石室である。石室は既に盗掘や開壁で、天井部と右側壁腰石の一部、壁石上部、さらに前面部の腰石を消失している。石室内は側壁の崩落や流土によって埋没していた。玄室内は、盗掘を受け、床面の敷石は奥壁側のものが原位置にあり、前半部は大部分散乱状態にあった。出土遺物は全くなかった。

石室は縦長方形プランを有する玄室である。横穴式の小石室か竪穴式の小石室かは判断しにくい。が、前面部主軸上で腰石の抜き取り跡が検出されたことで、竪穴式小石室である可能性が高い。石室全長は右壁1.74m、左壁1.64mを測る。石室を構築する石材は、安山岩の転石が使用されている。

閉塞施設 (図版92) 全く存在しない。

玄室 (図版92-2、第85図) 奥幅0.74m、前幅0.9m、左壁長1.64m、右壁長1.74mを測り、奥幅の狭い縦長方形プランをみる。壁体の構築法は、それぞれの壁石が腰石しか残っていないので、判然としない。腰石は奥壁に1石、左右側壁に3石、前壁に1石が使用されていたと思われる。

床面は径20~40cmほどの転石、割り石で敷石が施されていたと推定できるが、既に大半が原位置にない。

石室基礎面 (第85図) ほぼ水平 (標高56.4m) であり、腰石を配置する部分は、一段低くし、それらの安定を図っている。

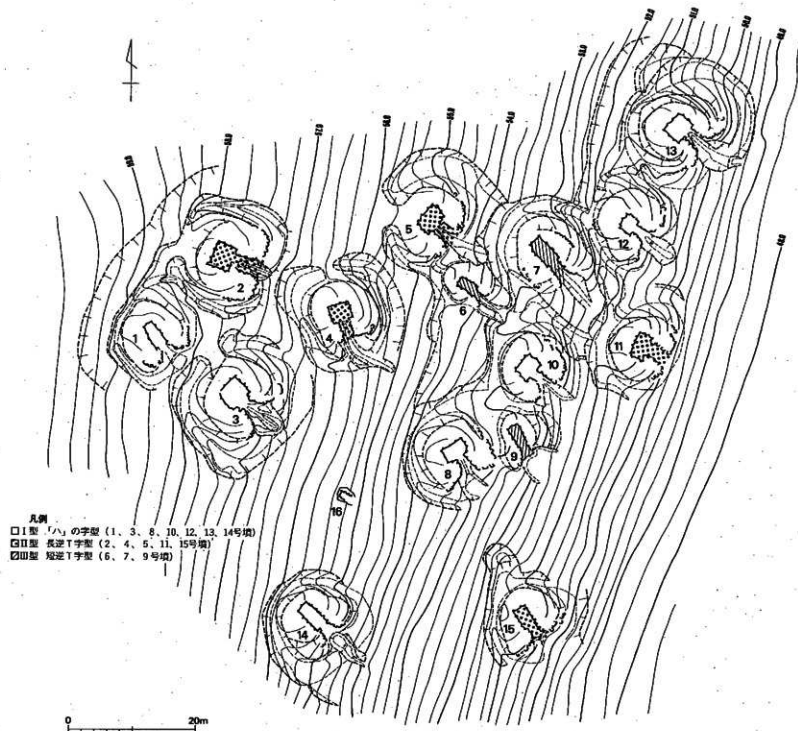
羨道 (第85図) 羨道は、接続しないと思われる。

墓道 (第85図) 墓道は、全く分からなかった。

墓壇 (第85図) 墓壇は北側標高55.2mのところから垂直に0.7m掘り込み、L字状に平坦面を作る。南北幅2.8m、東西幅1.6~2.3mを測る。

4) 出土遺物

出土遺物は全くなかった。



第 96 図 石室中後ヶ谷古墳群外環列石形態分類図 (縮尺 1/300)

第3節 小 結

以上のように、古墳時代終末期の典型的な密集型群集墳である石堂中後ヶ谷古墳群16基について、その内容を位置と現状、墳丘、主体部、出土遺物という項目に分けて説明してきた。

ここでは、16基の古墳を通して、特徴的な事項をいくつかまとめて整理してみたい（第2、3表）。

1. 石堂中後ヶ谷古墳群の諸特徴

1) 墳丘と墳形（第3図）

各古墳の墳丘盛土は、丘陵斜面（標高49m～59m、傾斜角度10度～15度）に立地していることからほとんど流出し、また、後世の盗掘やJ R日豊本線建設に伴う古墳石材搬出等で、原形を留めるものはない。従って、墳丘高は、現状で0.5m～1.2mを測るに過ぎない。斜面上にあるため、元来、さほど高い墳丘は望めないが、墳裾に外護列石を巡らす事で、墳丘盛土を意識的に高く積み上げようとしている。さらに、地山削り出しによる墳丘高確保という作業が11号墳でみられる。

墳形は、典型的な密集型群集墳であり、古墳と古墳との間に割け入って築造されるもの（6、9号墳）があるので、築造時の墳形を探る事は困難である。しかし、概ね、円形（8、10、13、14、15号墳）、楕円形（6、7、9、11号墳）、不整形（1、2、3、4、5、12号墳）に分けられる。

墳丘径の最大のもは、5号墳で長径10mを測る。また、墳丘径の最小のもは、9号墳で、長径5m、短径3.1mを測る。

また、墳形は外護列石によって区画され、一見して方形に見えるものがあるが、これは先述しているように、古墳の立地により制約されてくるもので、畿内地域等で見られる古墳時代終末期の有力豪族の多角形墳採用とは全く無縁のものである。

2) 外護列石（第86図）

外護列石は、墳丘土層断面観察から、墳丘基底面端部（墳裾部）にのることがわかった。墳丘盛土積み上げ時には、まずこの外護列石を一段ないし数段積み重ねてから盛土を開始する。従って、この外護列石は、斜面上の墳丘築造にあたっての盛土流出防止用、そして、墳丘を少しでも高く盛り上げることで、正面観の偉容さを得るのに必要な施設であったようである。

外護列石は、羨道部先端から連結して墳裾を巡るが、その形態は大きく2つのタイプに分けられる。

表2 石室中後ヶ谷古墳群石室計測表

号数	墳形	主軸方位	墳丘規模		石室長		玄室長		玄室幅		羨道長	
			長径	短径	右	左	右	左	奥	前	右	左
1	不整方形	N-36.5°-W	7	-	3.04	3.06	2.02	1.9	0.74	1.02	1	1.17
2	不整方形	N-69°-W	6.9	-	4.54	-	1.56	1.50	1.96	-	2.98	3.09
3	不整方形	N-69°-W	5.8	-	4.18	-	1.73	-	1.93	-	2.45	2.43
4	不整方形	N-19°-W	6	-	2.76	2.82	1.24	1.34	1.57	1.5	1.44	1.4
5	不整方形	N-61°-W	10	-	3.62	3.94	1.2	1.12	1.9	1.8	1.25	1.25
6	楕円形	N-55°-W	5.5	4	2.38	2.24	1.44	1.4	0.7	0.8	0.92	0.95
7	楕円形	N-42.5°-W	-	5.75	3.7	3.72	2.16	2.1	1.1	1.1	1.85	2
8	円形	N-31°-W	9.2	-	2.88	2.6	1.15	1.2	1.78	1.72	1.67	1.47
9	楕円形	N-27°-W	5	3.1	2.51	2.5	1.65	1.67	0.84	0.74	0.75	0.86
10	円形	N-45°-W	-	5.3	2.76	2.62	1.16	1.22	1.7	1.68	1.45	1.35
11	楕円形	N-67°-W	-	7.5	2.3	2.4	1	0.96	1.94	1.9	1.25	1.36
12	不整方形	N-55°-W	6.5	-	2.51	2.4	1.1	0.98	1.2	1.08	1.48	1.23
13	円形	N-49°-W	6	-	2.62	2.51	1.42	1.51	1.76	1.79	1.2	1.0
14	不整円形	N-47°-W	8.1	7.2	3.1	3.2	2.21	2.13	0.94	1.04	1.04	1.08
15	不整円形	N-32°-W	-	6.8	2.5	2.7	1.68	1.76	1	0.92	0.66	0.44
16	不明	N-57°-W	-	-	1.74	1.64	1.74	1.64	0.74	0.9	-	-

I型（「ハ」の字型）

1、3、8、10、12、13、14号墳。

II型（長逆T字型）

2、4、5、11、15号墳。

III型（短逆T字型）

6、7、9号墳。

である。

また、この外護列石の形態は、石室羨道部平面形態に制約される。つまり、羨道部平面形態は、大きく2つのタイプ（A型＝「ハ」の字型、B型＝「||」型）に分かれるが、A型はI型に、B型はII、III型に通じる。しかし3、13号墳は例外で、外護列石は「ハ」の字型だが、羨道形態は「||」型になる。

単位：m

築道幅	袖幅			玄門幅	玄室床面高	閉塞	排水溝	玄室形式	築道形式	外護列石形式
	奥	前	右							
0.6	1.45	0.18	0.22	0.6	58.45	有	無	縦長方形b類	I-B	I
1.06	—	0.4	0.77	0.61	57.45	有	有	正方形b類	I-A	II
1.06	1.72	0.33	0.4	0.86	57.35	有	無	〃	II-A	I
0.72	0.8	0.36	0.4	0.72	56.85	有	有	正方形c類	II-B	II
1.1	1.12	0.66	0.4	0.76	55.65	有	無	横長方形a類	II-B	II
0.4	0.7	0.25	0.25	0.4	56.65	有	無	縦長方形d類	II-A	III
0.78	0.92	0.22	0.2	0.66	53.60	有	有	縦長方形b類	II-A	III
0.5	1.3	0.12	0.14	0.5	52.30	有	無	横長方形a類	I-A	III
0.68	1.85	0.8	0.7	0.6	52.30			縦長方形c類	I-B	I
0.6	1.3	0.48	0.36	0.66	53.20	有	有	横長方形a類	I-A	I
0.94	1	0.4	0.5	0.4	50.55	有	無	横長方形b類	II-A	II
0.6	1.15	0.28	0.38	0.6	50.90	有	無	正方形d類	I-B	I
0.75	1.01	0.55	0.65	0.75	50.30	有	無	正方形c類	II-B	I
0.68	1.28	0.16	0.28	0.68	54.80	有	無	縦長方形b類	I-B	II
0.64	0.7	0.22	0.14	0.64	50.65	有	有	〃	II-A	II
—	—	—	—	—	54.60	不明	無	縦長方形c類	—	—

3) 閉塞施設

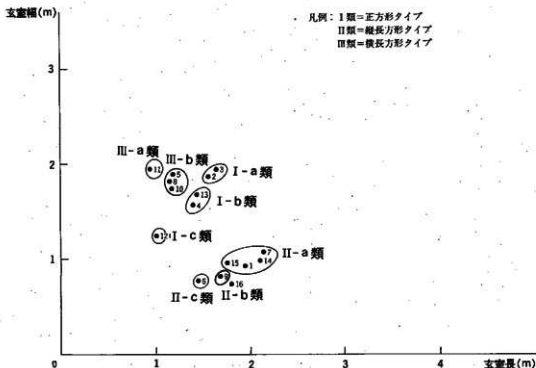
石堂中後ヶ谷古墳群では、16号墳を除いて、すべて閉塞施設が存在した。これらは、玄門部根石を中心にして、積み上げられるものではなく、やや前方に出たところ(玄門部から0.8~1m)を中心としている。石積みは、大よりの転石を下に、小よりのものを上に置く事を原則としているが、一部では、逆転しているもの(1、3、6、7、14、15号墳)もある。これは羨道部側壁石等の転落を考慮しなければならない。

4) 玄室形態(第87図)

石堂中後ヶ谷古墳群では、小石室の16号墳を除くと、すべて小型の横穴式石室である。

玄室平面プランは、大きく3つのタイプに分かれる(図版93~96、第87図)。

表3 石室中後ヶ谷古墳群玄室法量表



I型 (正方形タイプ)

2、3、4、12、13号墳。

II型 (縦長方形タイプ)

1、6、7、9、14、15号墳。

III型 (横長方形タイプ)

5、8、10、11号墳。

それぞれのタイプは、玄室の長さ・幅を第3表に示してみると、大きく正方形タイプが3つ、縦長方形タイプが2つ、横長方形タイプが2つに細分されることがわかる。

I-a類 (正方形タイプ、玄室長、幅1.8m内外、2、3号墳)

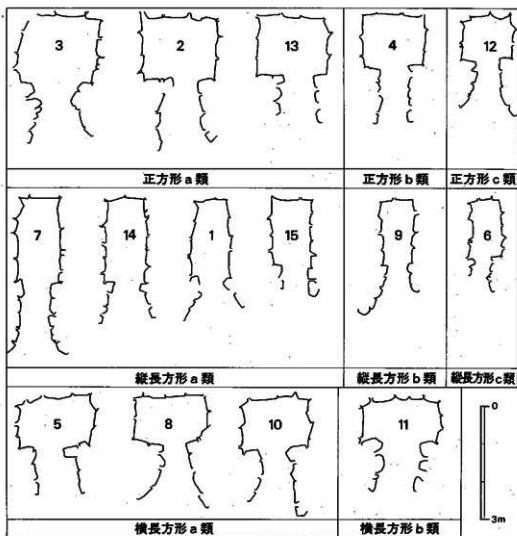
I-b類 (正方形タイプ、玄室長、幅1.5m内外、4、13号墳)

I-c類 (正方形タイプ、玄室長、幅1m内外、12号墳)

II-a類 (縦長方形タイプ、玄室長2m内外、玄室幅1m内外、1、7、14、15号墳)

II-b類 (縦長方形タイプ、玄室長1.7m内外、玄室幅0.8m内外、9号墳)

II-c類 (縦長方形タイプ、玄室長1.4m内外、玄室幅0.7m内外、6号墳)



第 87 図 石室中後ヶ谷古墳群支室プラン分類図(縮尺 1/100)

Ⅲ-a 類 (横長方形タイプ、玄室長 1m 内外、玄室幅 2m 内外、11号墳)

Ⅲ-b 類 (横長方形タイプ、玄室長 1.2m 内外、玄室幅 1.8m 内外、5、8、10号墳)

これらの類型の先後関係、一支群における単位集団については、後述する。

5) 玄室主軸方向

玄室開口方向は、南東方向である。各古墳は、丘陵南東側斜面に立地し、等高線に直角ないし斜角で、谷部に向け開口している。但し、4号線だけは、玄室主軸方向を南南東に向け、他

墳と異なる。

6) 羨道形態 (第88図)

羨道部は、玄室玄門部に接続して作られるが、外護列石の項で述べたように、その形態は、A、B 2つのタイプに分かれる。さらに、羨道部先端から墓道部へのつながりを立面的に見た場合、2つのタイプ (水平型、跳ね上げ型) に細分され、それらを組み合わせると以下のようになる。

I-A型 (「ハ」の字型、水平型、2、9、10号墳)

I-B型 (「ハ」の字型、跳ね上げ型、1、8、12、14号墳)

II-A型 (「I」型、水平型、3、6、7、11、15号墳)

II-B型 (「I」型、跳ね上げ型、4、5、13号墳)

羨道から墓道への伸びが、主軸上に続かず曲がるものがみられる (4、8、9、13号墳)。これらについては、那珂川町の観音山古墳群でもあるような、墓道がコンターに直角になるようにとられ、排水行為を第1義として築造したことに起因するものと同じと考えられる。

7) 排水溝施設

排水溝施設は、2、4、5、7、10号墳で検出された。これらは、玄室床石に特徴的な並べ方を確認できる。その並べ方は、奥壁中央から玄室主軸方向へ一直線に排水溝の蓋石を兼ねた床石 (他の床石より大ぶりの転石) が置かれる。排水溝は、奥壁中央際付近から玄門部へ続くもの (2、4、7号墳) と玄室中央付近から玄門部へ続くもの (5、10号墳) の二つのタイプがある。また、羨道方向へ、必ずしも低くなって続かないもの (7号墳) があり、その用途が本格的な水抜きよりも湿気抜きだったことを伺わせる。

8) 天井石

天井石は、先述のように盗掘や石材搬出のため残っていない。玄室奥壁、両側壁石は、腰石上からすぐに内傾させ持送りながら積み上げるが、一部のもの (6、9、11号墳) は、二段目以降も内傾せず、立ち上がりながら積み上げる。これは、側壁の傾斜角から考え、腰石上には、側壁石を5～6段積んでから天井石を架構すると推定されるので、こうした両側壁石の立ち上がりの強いものは、天井石を使用せず、天井板 (木蓋) を使用した可能性を指摘しておきたい。

9) 玄室石積み技法

石積み技法は、基本的に煉瓦積み、重箱積み、乱積みの三つのタイプに分かれ、それぞれが組み合わさって、玄室壁面を構成している。

以下にまとめてみると、

I型（煉瓦積みと重箱積み併用タイプ）

1、2、3、10、12、13号墳。

II型（煉瓦積みタイプ）

4、8、9、14、15号墳。

III型（煉瓦積みと乱積み併用タイプ）

7、11号墳。

IV型（乱積みタイプ）

5、6号墳。

となる。

従来、玄室石積み技法については、6世紀後半まで煉瓦積みが主流と成し、それ以降は重箱積み、乱積みへと移行すると考えられているが、石堂中後ヶ谷古墳群においては、こうした傾向が看取できず（安山岩の丸味を帯びた転石を使用するため）、三者が一体となり壁面を構成しているようである。

10) 副葬品

副葬品は土器のみで、他のものは出土していない。これは、周辺の菜切古墳群（1、6号墳より鉄鍬出土）、頭無古墳群（1号墳より鉄刀出土）とは様相を異にし、各古墳間の均質性が看取できる。

出土土器のうち、2、3号墳より、小田編年V期のものが出土し、古墳群中一番古く、古墳立地からみても、上段を中心にして、造墓活動を開始したことがわかる。

出土土器のうち、2、3号墳より、小田編年V期のものが出土し、古墳群中一番古く、古墳立地からみても、上段を中心にして、造墓活動を開始したことがわかる。

2. 石堂中後ヶ谷古墳群の造墓期間とその消長

1) 各古墳出土土器からみた造墓順位

石堂中後ヶ谷古墳群では、1、2、3、4、5、7、8、9、10、12、13、14、15号墳から須恵器、土師器が出土している。

それぞれの器種をあげれば、杯身、杯蓋、高杯、甕、甕、瓶、長頸壺である。

以下、それぞれの器種毎にまとめて、各土器の編年的位置付けを検討してみる。

a. 杯

2号墳の3点、5号墳の1点、7号墳の3点、15号墳の2点計9点がある。

全て高台付の杯である。高台の付き方等により大きく2つに分けられる。

Aタイプ…5、7号墳出土土器で、高台が体部と底部の外周に付く。また、体部は、底部からやや内湾気味に立ち上がる。

Bタイプ…2、15号墳出土土器で、高台が体部と底部の境より内側に付き、さらに体部と底部境に明瞭な稜を持ち、体部下半から斜め上方に直に立ち上がる。

Bタイプの2号墳と15号墳出土土器では、2号墳の方がシャープで、器高が高く、より古い様相を呈している。従って、Bタイプを2つに細分し、2号墳出土土器をB-1タイプ、15号墳出土土器をB-2タイプとしておく。

そこで、それぞれの編年の位置付けであるが、各タイプの土器の形態からB-1タイプ→B-2タイプ→Aタイプという変遷が看取でき、それぞれの時期は、7世紀後半→7世紀末→8世紀前半と推定される。

b. 杯蓋

1号墳の1点、2号墳の1点、4号墳の1点、7号墳の7点、8号墳の2点、13号墳の1点、14号墳の1点、計14点がある。

杯蓋は、古墳時代終末期の形態変化を知る上で、最も有効な資料である。石室中後ヶ谷古墳群でも、出土土器中42%を占めている。

各古墳出土土器は口縁端部の形態から3つのタイプに分けられる。

Aタイプ…7号墳出土土器で、口縁部内側にかえりを持つ。

Bタイプ…4、7、8号墳出土土器で、天井部がやや丸味を帯び、天井部から口縁端部へは若干丸味をもって、斜め上方につまみあげる。

Cタイプ…1、2、7、8、13、14号墳出土土器で、天井部は扁平になり、天井部から口縁端部へは明瞭な稜をもち、ほぼ直に立ち上がる。Cタイプの中では、口縁端部が直角に立ち上がり、さらに外側にやや屈曲する傾向を示す土器（7、14号墳出土土器）の抽出が可能であり、これらをC-2タイプとし、前者をC-1タイプとしておく。C-2タイプは8世紀中葉の口縁端部が完全に鳥嘴状になるものへの過渡的様相をみせる。

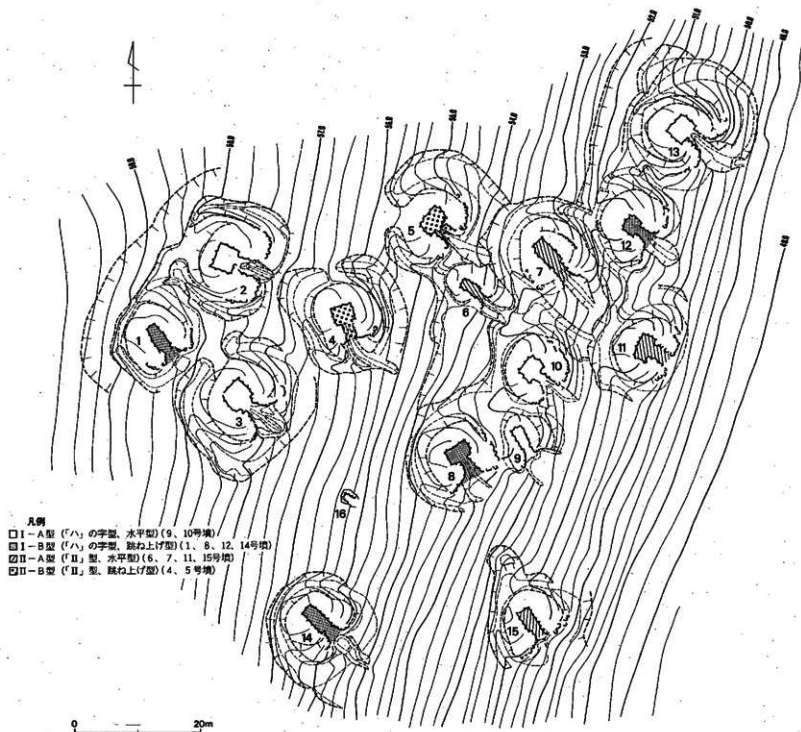
従って、その形態変化は、Aタイプ→Bタイプ→C-1タイプ→C-2タイプという変遷を看取でき、それぞれの時期は、7世紀後半→7世紀末→8世紀初葉→8世紀前葉とみることができ。

c. 高杯

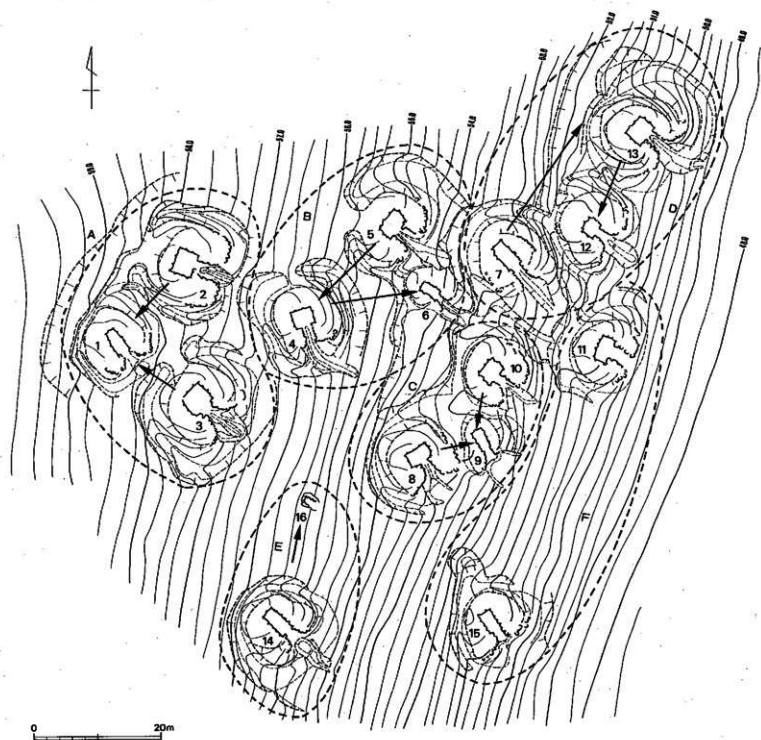
2、10号墳から計3点出土している。10号墳出土土器は完形で共に小形の短脚の高杯で、脚端部の形態は、脚部から大きく外反してから、斜めに屈曲させながら二重口縁風に開く。2、10号墳出土土器は7世紀後半に位置付けられる。

d. 平瓶

1、3、5、8号墳から計4点出土している。体部に付く口頸部の位置と体部最大径部の位



第88図 石室中鏡ヶ谷古墳群洪遺形分類図(縮尺 1/300)



第 89 圖 石堂中樓々谷古墳群古墳築造過程圖(縮尺 1/300)

置・張り出しから二つのタイプに分けられる。

Aタイプ…1号墳出土土器で体上部中央に口頸部をつけ、体部上半部に胴最大径があり、その部位で強く屈曲しながら口頸部へむかう。

Bタイプ…3、5、8号墳出土土器で、体上部中央より偏って口頸部を付ける。体部と底部の形態により、さらに3つのタイプに分けられる。

B-1タイプは、3号墳出土土器で、体部上半に胴最大径部をもち、体部下半からあまり屈曲せず、丸いカーブをつけて口頸部へむかう。底部は丸底である。

B-2タイプは、5号墳出土土器で、B-1タイプと異なるのは、底部が丸底でなく平底になることである。

B-3タイプは、8号墳出土土器で、体部上半に胴最大径部をもち、体部下半から強く「く」の字に屈曲させて、口頸部へむかう。

それぞれの変遷は、体部の丸いものから、扁平なものへ、底部の丸底から平底へという形態変化の流れからみて、B-1タイプ→B-2タイプ→Aタイプ、B-3タイプになる、また、それらの時期は、7世紀中葉→7世紀後半→8世紀前半と推定できる。

e. 長頸壺

2、8、12号墳から計3点出土している。それぞれ台付きの長頸壺であるが、体部の形態により3つのタイプに分類できる。

Aタイプ…2号墳出土土器で、体部中央に胴最大径部をもち、体部下半から丸味をもって頸部へむかう。

Bタイプ…8号墳出土土器で、体部上半部（体部中央より上）に胴最大径部をもち、体部下半から緩やかに「く」の字に屈曲しながら頸部へむかう。

Cタイプ…12号墳出土土器で、体部上半部（体部中央より上）に胴最大径部をもち、体部下半から強く「く」の字に屈曲しながら頸部へむかう。

形態変遷は、Aタイプ→Bタイプ→Cタイプとなり、各タイプの時期は、7世紀中葉→7世紀後半→8世紀前半になる。

以上のように、石堂中後ヶ谷古墳群出土土器について、各器種毎に、その形態分類と変遷、そして時期についてまとめた。次に各古墳毎に出土土器の年代から各古墳の存続期間を推定してみたい。

2号墳…杯B-1、杯蓋C-1、高杯、長頸壺Aタイプ、7世紀中葉～8世紀初葉。

3号墳…平瓶B-1タイプ、7世紀中葉。

4号墳…杯蓋Bタイプ、7世紀末葉。

5号墳…杯Aタイプ、平瓶B-2タイプ、7世紀後半～8世紀前半。

7号墳…杯Aタイプ、杯蓋A、B、C-2タイプ、7世紀後半～8世紀前半。

8号墳…杯蓋Bタイプ、平瓶B-3タイプ、長頸壺Bタイプ、7世紀後半から8世紀前半。

10号墳…高杯、7世紀後半。

12号墳…長頸壺Cタイプ、8世紀前半。

13号墳…杯蓋C-1タイプ、8世紀初頭。

14号墳…杯蓋C-2タイプ、8世紀前半。

15号墳…杯B-2タイプ、7世紀末葉。

こうしてみると、石室中後ヶ谷古墳群の存続期間は、出土土器から、概ね7世紀中葉から8世紀前半ということになる。しかし、追葬時の片付け、また、玄室平面形分類で最も後出すると思われる6、9号墳から土器が出土していないということを勘案すれば、その存続期間は、7世紀前半から8世紀中葉までの一世紀半ということになるだろう。

さて、これら出土土器の時期毎に、グループを抽出してみると、

7世紀中葉グループ…2、3号墳。

7世紀後半グループ…5、7、8、10号墳。

7世紀末葉グループ…4、15号墳。

8世紀初頭グループ…13号墳。

8世紀前半グループ…12、14号墳。

という、5つのグループになる。

こうしたグループの抽出と変遷を、各古墳の玄室平面形分類と変遷と照合させると、概ね玄室平面形の縮小化傾向と整合的に結びつくことが看取できる。

2) 石室中後ヶ谷古墳群の単位集団の析出と集団内の変遷

ここでは、石室中後ヶ谷古墳群の単位集団析出にあたり、先述した出土土器と玄室平面形の変遷関係に各古墳の占地状況を加えて、検討していきたい。

石室中後ヶ谷古墳群では、出土土器そして玄室平面形の大きさから、最上段に立地する2、3号墳をもって、群集墳の造営が開始され、副葬品を持たず、玄室平面形分類の最小グループ

表4 石室中後ヶ谷古墳群造墓過程変遷表

年代 単位	A.D.650	700	750	800
A	2号墳 3号墳	1号墳		
B		5号墳	4号墳	6号墳
C		8号墳 10号墳		9号墳
D		7号墳	13号墳	12号墳
E			14号墳	16号墳
F			11号墳 15号墳	

に入る6、9号墳の造営完了をまって、古墳群の造墓活動を停止する。

そこで、この2、3、6、9号墳を核にして単位集団の析出を試みてみると、

Aグループ…1、2、3号墳。

Bグループ…4、5、6号墳。

Cグループ…8、9、10号墳。

Dグループ…7、12、13号墳。

Eグループ…14、16号墳。

Fグループ…11、15号墳。

の6グループとなる。

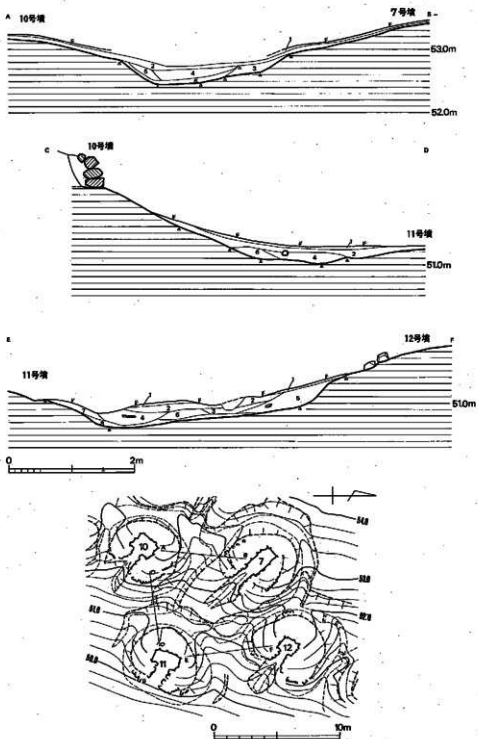
これらの単位集団中における変遷については、出土土器、玄室平面形、占地（周溝等の切り合い関係）関係から、第89図のようになる。

以上のことから、石堂中後ヶ谷古墳群の墓道復元を行なってみると、古墳群の単位集団、単位集団の列状配置、等高線配置等から、いくつかの試案が呈示できる（図版137・138*、第91・92図）。

3. 石堂中後ヶ谷古墳群の羨道について

横穴式石室の「羨道」の概念は、通常両側壁に天井石を伴うもので、天井石が最初から架構されなかった場合、それを羨道と呼ぶことは適当ではないとされている。竪穴系横口式石室の研究では、これに対して「前庭側壁」という概念を設けている。また、後期古墳群の場合、那珂川町観音山古墳群の調査では、羨道に続き天井石の存在が考えられない空間として、「石組墓道」と呼称している。しかし、後世の破壊によって天井部を失っている横穴式石室の場合、玄室の前面にのびている空間が、「羨道」であるか「石組墓道」であるかを決定するには、多分に推測に頼らざるを得ず、平面形のみで分離することは困難である。従ってここでは「石組墓道」と推測される部分も含めて「羨道」と呼称したい。

ところで、石堂中後ヶ谷古墳群の場合、先述したとおり石室の天井石を完全に残す古墳はなく、2号墳と7号墳に、玄門部の天井石が残存していたに過ぎないが、「羨道」部の天井の構造は次のように観察される。つまり、いずれの古墳でも玄室は腰石上部の石材を持ち送って、天井の面積が出来るだけ少なくなるように構築している。これに対し、「羨道」の平面形はハの字状を呈しているため前端部の幅は3号墳で約2m、8号墳でも約1.6mを測る。従ってこの部分に天井石を架構するには、持ち送りの幅を差し引いても幅1m～1.5mの大形の石材を要することになる。当古墳群のような小規模な群集墳で、羨道の前端にこのような大形の天井石を想定することは極めて不自然であり、閉塞が玄門部で行われていることを考慮しても、「羨道」の前端に天井石が用いられたとは考え難い。



第 90 图 石堂中後ヶ谷古墳群 7、10、11、12号墳間土層図(縮尺 1/60、1/300)

また、いずれの古墳も玄門部には天井石が存在したと推測されるが、「羨道」が極端にハの字状になる3号墳や14号墳には「羨道」に天井石がなかったものと思われる。平面形の側壁の状態から判断すると、狭長な「羨道」を持つ7号墳など一部の例外を除いて、ほとんどの古墳は、「羨道」に天井石を有していなかったものと考えられ、「羨道」の形骸化が進んでいたと見られる。石室中後ヶ谷古墳群と同時期で、石室規模も2号墳や3号墳と近似する宗像市浦谷F-4号墳で「羨道」の大半が閉塞石で埋められており、空間としての羨道は存在しない。こうした特徴も、終末期群集墳の特質を表しているものと思われる。

ところで、近畿～中国地方の横穴式石室墳では、羨道は単に玄室に至る墓道ではなく、追葬が可能な空間として利用された。このため時期が下るに従って玄室袖部は退化し、羨道の幅は増大した。そして7世紀前半頃には無袖の横穴式石室が一般化する。このことは、羨道部の墓室化＝形骸化を示している。一方、北部九州の小型横穴式石室墳では、袖部の退化という現象はほとんど見られない。従って、近畿～中国地方では「羨道」～「玄室」＝「墓道」～「墓室」と質的な変化が見られるのに対し、北部九州では、「羨道」は天井石を失うといった形骸化は見られるが、あくまでも、「墓道」としての位置を失っていないといえよう。このことは、北部九州において、古墳祭祀の中で終末段階まで「羨道」の存在が重要な位置を占めていたことを示している。

4. おわりに

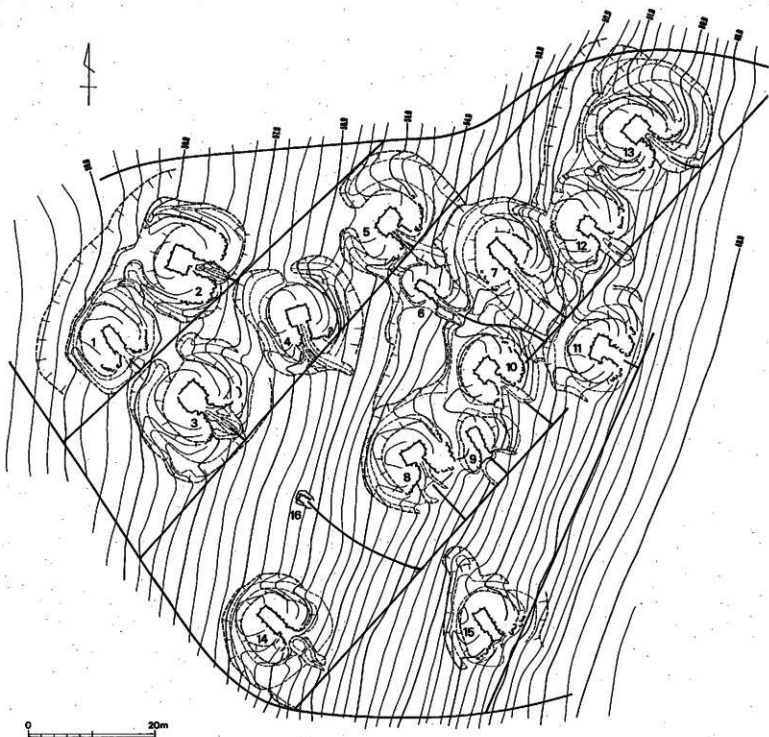
石室中後ヶ谷古墳群の造営された、7世紀前半～8世紀中葉という時期は、律令政治確立へむけての日本古代国家の揺籃期であった。6世紀代から畿内の有力豪族の力が強大化する一方で、地方の中小豪族もその勢力を拡大し、従来の支配体制は様々な矛盾を表出する。そうした中、645年の大化の改新を大きな契機として、中央政權は、一元的な支配体制の確立をめざして、国造制の解体、そして評制の成立という支配体制の再編が断行する。これは、畿内地域の終末期群集墳を論じた白石太一郎の言う6世紀中葉以降逐次築造され増加の一途をたどった群集墳の造営に7世紀初めプレーキのかかる「高安型」群集墳の終焉と、7世紀になって始めて群集墳の造営が始まる「長尾山型」群集墳の成立が、全国的にみても、この時期に合致するのは単なる偶然とは言えないだろう。

石室中後ヶ谷古墳群は典型的な「長尾山型」群集墳で、しかも「密集型」の分布状態を示すことから、その造営は強い規制力の下で造営されたと考えられる。しかし、新たな「律令社会」の基本理念は「公地公民制」であるのに対し、堅固な横穴式石室を有する群集墳の造営は、一定の集団による土地の永続的な占有を意味するため、こうした「公地公民制」の基本理念とは全く相入れぬものである。それでは、このような「長尾山型」群集墳の出現は何を意味するのだろうか。

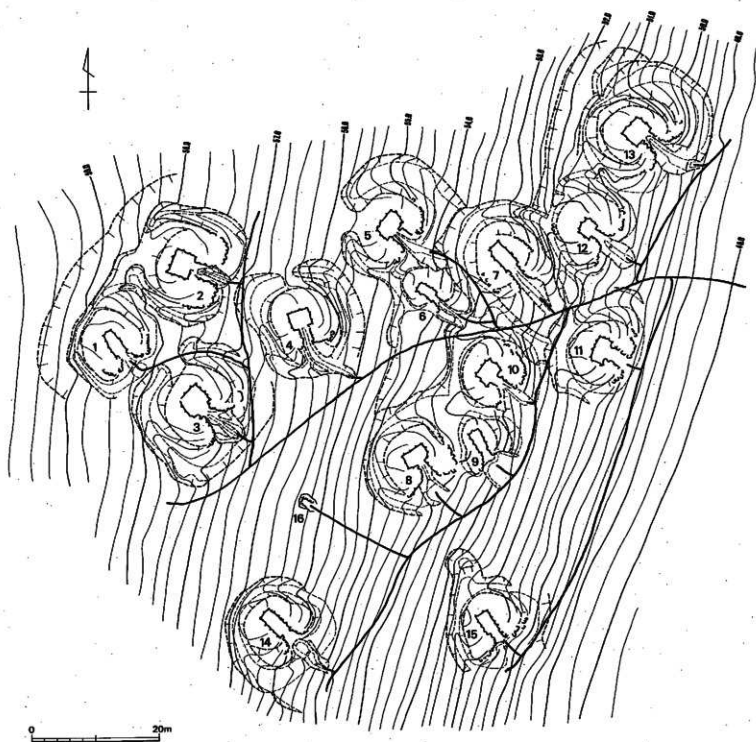
文献史学の成果では、大化の改新によって、中央政権は一元的な支配体制の確立を一大指針とし打ち出していく。しかし、そうした中央政権もそれを一時に全国的に敷衍するだけの権力を未だ持ち得ず、加えて地方豪族からの反発も当然予測されたことから、中央政権は先にみた国造制から評制への移行といった地方支配体制の再編を断行し、地方豪族の在地支配権を直接否定せずに彼らを評の官人として、支配機構の内部に位置づけ、徐々にしかも緩やかに地方豪族の権力を抑制していったと考えられている。

石堂中後ヶ谷古墳群に限らず、終末期の群集墳は強い規制力の下に、先述したとおり段階的に石室規模等を縮小していく傾向が窺えるが、このような傾向は、まさにこうした律令政治確立へむけての攝監期における地方支配体制の変容を如実に反映しているものと考えられよう。そして、その規制力は、筑紫太宰の設置、白村江の戦いの敗北、戸籍の成立、大宝律令の制定という幾つかの大きな画期とともに次第に強化されていく。こうした中、群集墳は中央政権による個人身支配の貫徹に伴い、その歴史的な意義を完全に失い、終焉を迎えるのである。

このように、石堂中後ヶ谷古墳群について、その内容と若干の検討を述べてきたが、以上の成果を踏まえ、第3章の葉切古墳群、第4章の頭無古墳群をみていきたい。



第 91 図 石室中後・谷古墳群墓造復元図(1) (縮尺 1/300) 相列状配置を強調した場合の墓造復元案



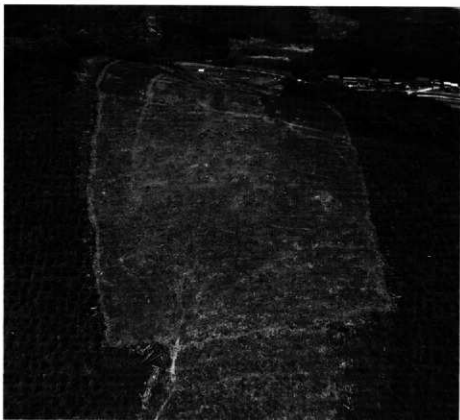
第 52 図 石堂中後ヶ谷古墳群墓道復元図(2) (縮尺 1/300) ※開溝を墓道として、利用した場合の墓道復元案

圖 版



椎田町所在の古墳群位置関係（南西から）

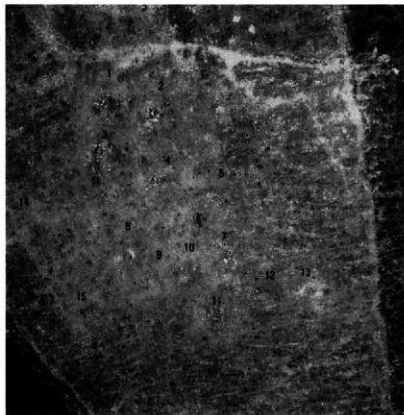
1. 石堂中後ヶ谷古墳群調査前状況（南から）



2. 石堂中後ヶ谷古墳群調査後状況（南から）



1. 石堂中後々谷古墳群調査前状況(真上から) ○は調査前未検出



2. 石堂中後々谷古墳群調査後状況(真上から)



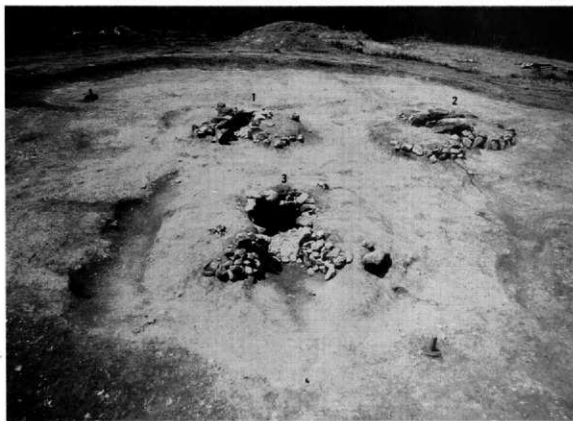


1. 石堂中後ヶ谷古墳群近景（調査前）（西から）



2. 石堂中後ヶ谷古墳群近景（調査後）（西から）

1. 石堂中後ヶ谷古墳群とその周辺の古墳群(調査前)



2. 石堂中後ヶ谷古墳群近景(南から)



1. 石堂中後ヶ谷古墳群近景（南から）



2. 石堂中後ヶ谷古墳群近景（北西から）



1. 1号墳 調査前状況



2. 1号墳 調査後状況



1. 1号墳 閉塞状況(奥壁方向をみる)



2. 1号墳 閉塞状況(羨道方向をみる)



1. 1号墳 石室と外護列石



2. 1号室 石室と外護列石



1. 1号墳 石室（奥壁方向をみる）



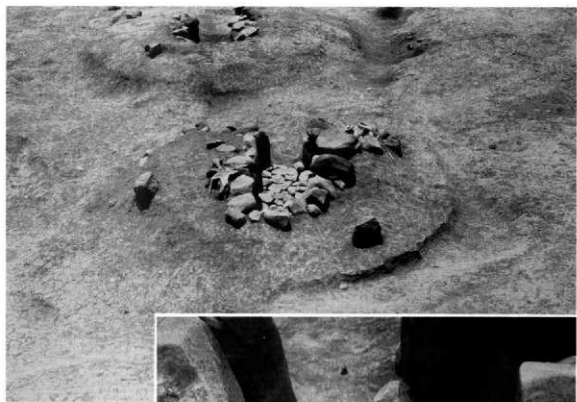
2. 1号墳 石室奥壁



1. 1号墳 石室左側壁



2. 1号墳 石室右側壁



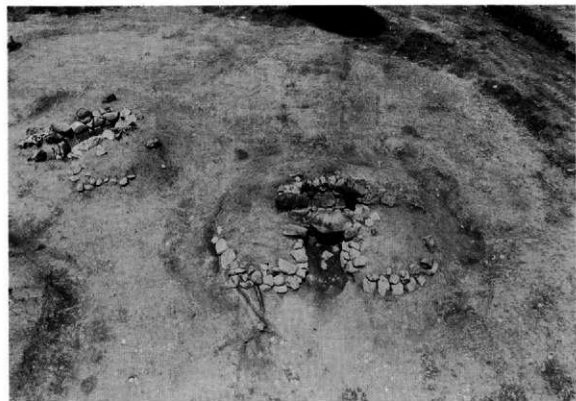
1. 1号墳 全景
(後方からみる)



2. 1号墳 石室床石除去後(玄門方向をみる)



1. 2号墳 調査前状況



2. 2号墳 調査後状況



1. 2号墳 閉塞状況(奥壁方向をみる)



2. 2号墳 閉塞状況(羨道方向をみる)



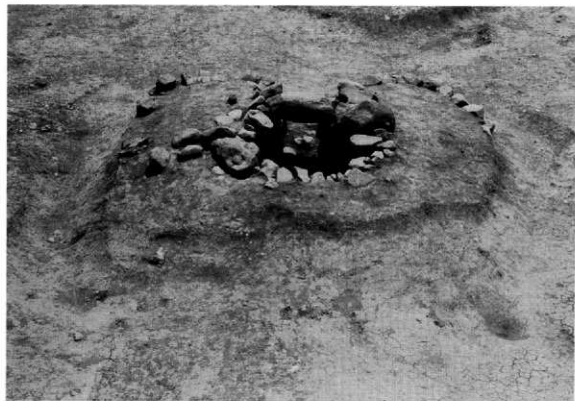
1. 2号墳 石室と外護列石



2. 2号墳 石室と外護列石



1. 2号墳 全景 (後方からみる)



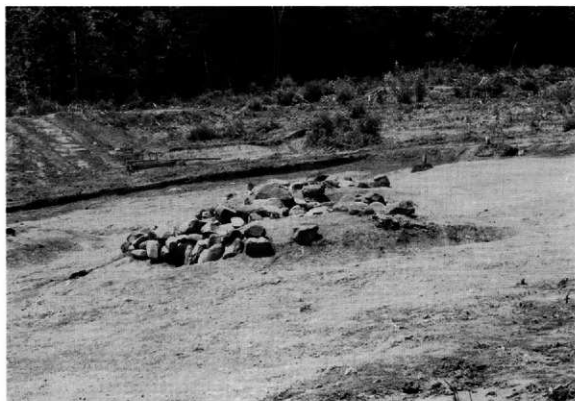
2. 2号墳 全景 (後方からみる)



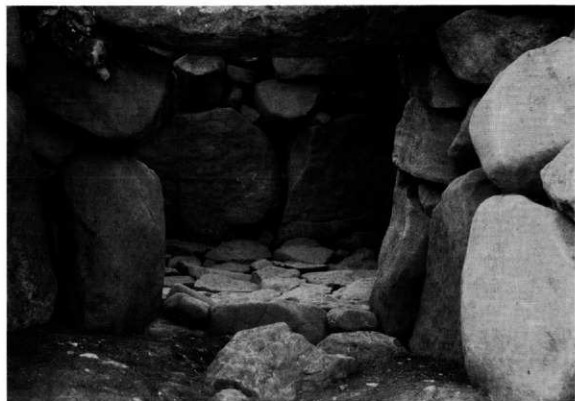
1. 2号墳 玄門



2. 2号墳 奥室



1. 2号墳 右側外護列石



2. 2号墳 奥壁(玄門からみる)



1. 2号墳 石室床石(第2次床面)



2. 2号墳 石室床石除去後



1. 3号墳 調査前状況



2. 3号墳 調査後状況



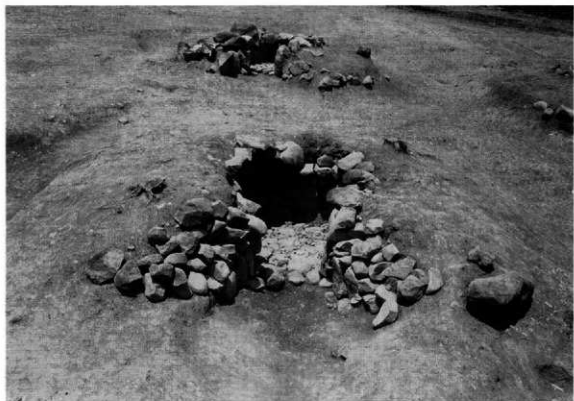
1. 3号墳 閉塞状況（奥壁方向をみる）



2. 3号墳 閉塞状況（羨道方向をみる）



1. 3号墳 石室と外護列石



2. 3号墳 石室と外護列石



1. 3号墳 玄門 (第1次床面)



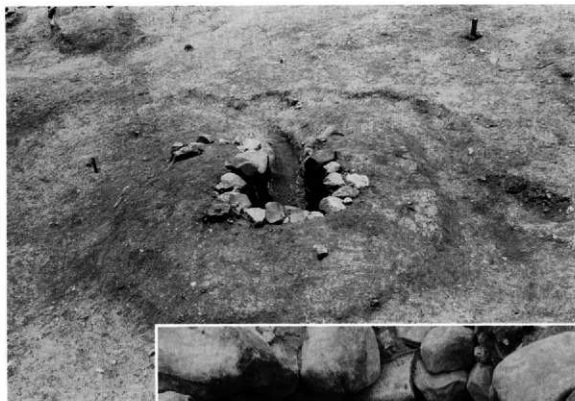
2. 3号墳 奥壁 (第1次床面)



1. 3号墳 石室左側壁(第1次床面)



2. 3号墳 石室右側壁(第1次床面)



1. 3号墳 石室全景
(後方からみる)



2. 3号墳 石室床石除去後



1. 4号墳 調査前状況



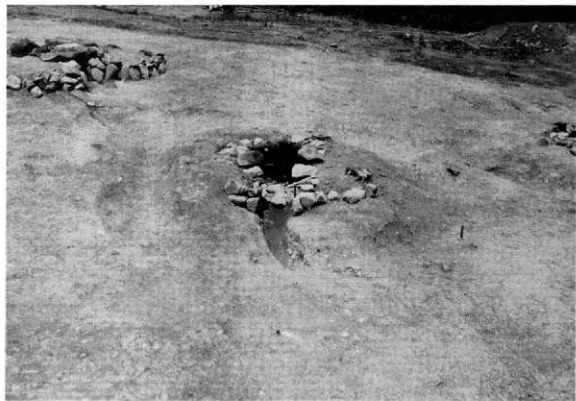
2. 4号墳 調査後状況



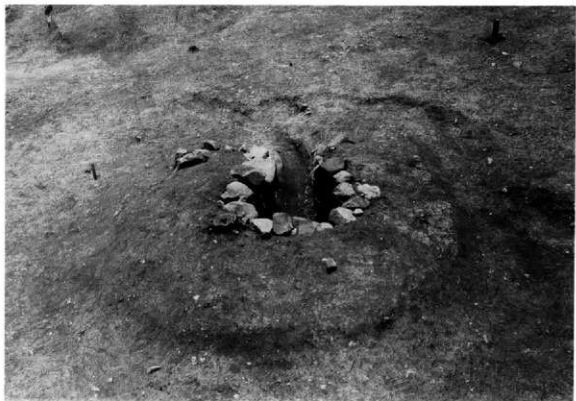
1. 4号墳 閉塞状況（奥壁方向をみる）



2. 4号墳 石室と外護列石（奥壁方向をみる）



1. 4号墳 全景（前方からみる）



2. 4号墳 全景（後方からみる）



1. 4号墳 玄門



2. 4号墳 奥壁



1. 4号墳 石室左侧壁



2. 4号墳 石室右侧壁



1. 5号墳 調査前状況



2. 5号墳 調査後状況



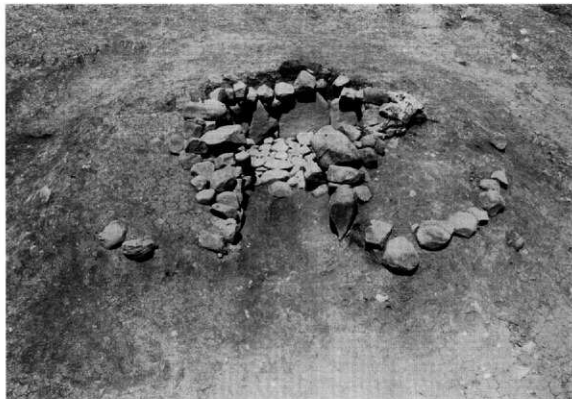
1. 5号墳 閉塞状況(奥壁方向をみる)



2. 5号墳 閉塞状況(羨道方向をみる)



1. 5号墳 石室と外護列石



2. 5号墳 石室と外護列石



1. 5号墳 玄門



2. 5号墳 奥壁



1. 5号墳 石室左側壁



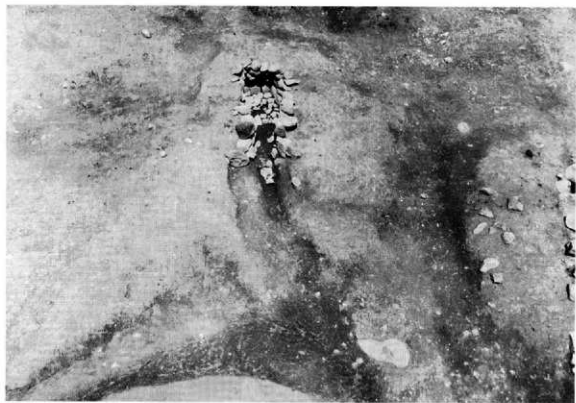
2. 5号墳 石室左側壁



1. 5号墳 石室右側壁



2. 5号墳 石室右側壁



1. 6号墳 全景



2. 6号墳 石室

1. 6号墳 閉塞状況（奥壁方向をみる）



2. 6号墳 閉塞状況（羨道方向をみる）



1. 6号墳 石室と奥壁



2. 6号墳 奥壁



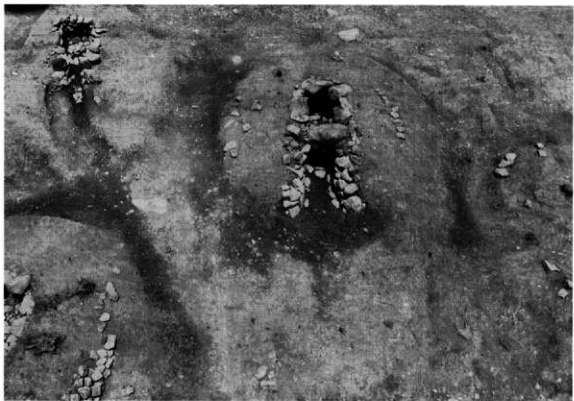
1. 6号墳 石室左側壁



2. 6号墳 石室右側壁



1. 7号墳 調査前状況



2. 7号墳 調査後状況



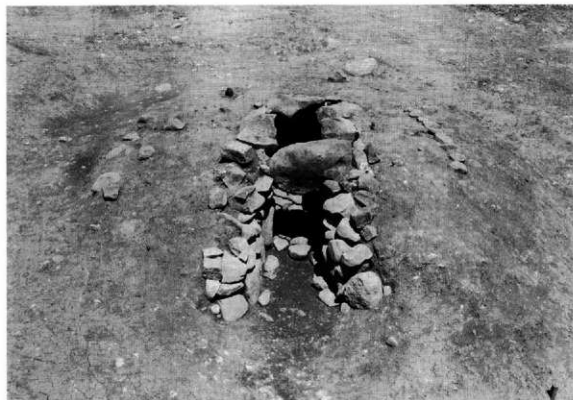
1. 7号墳 閉塞状況



2. 7号墳 閉塞石除去後



1. 7号墳 石室と外護列石



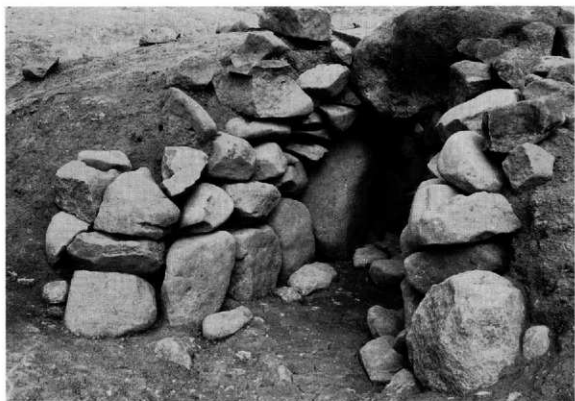
2. 7号墳 石室と外護列石



1. 7号墳 玄門



2. 7号墳 奥壁



1. 7号墳 石室左侧壁



2. 7号墳 石室左侧壁



1. 7号墳 石室右側壁



2. 7号墳 石室右側壁



1. 8号墳 調査前状況



2. 8号墳 調査後状況



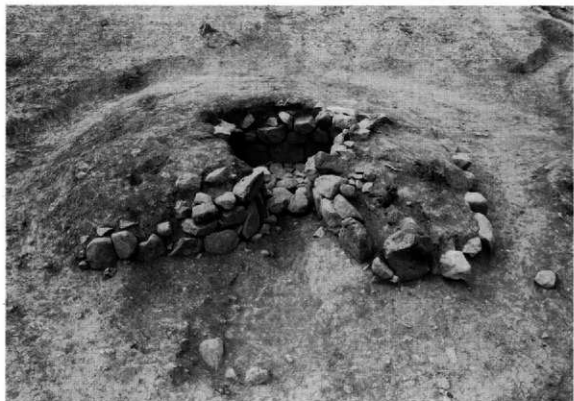
1. 8号墳 閉塞状況（奥壁方向をみる）



2. 8号墳 閉塞状況（羨道方向をみる）



1. 8号墳 石室と外護列石



2. 8号墳 石室と外護列石



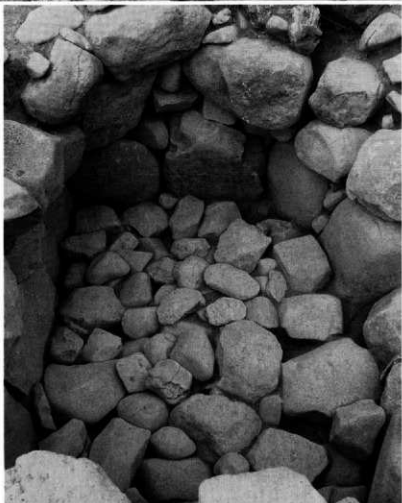
1. 8号墳 玄門



2. 8号墳 奥壁



1. 8号墳 石室左側壁



2. 8号墳 石室右側壁

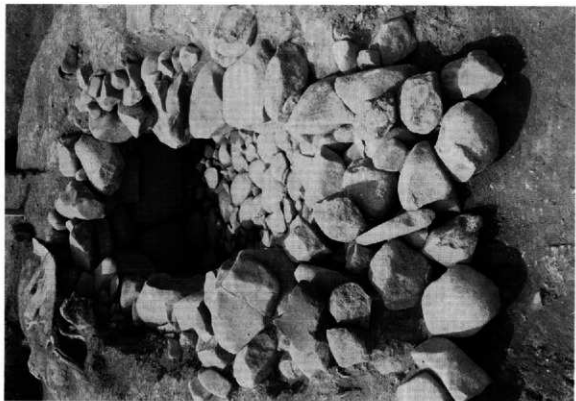




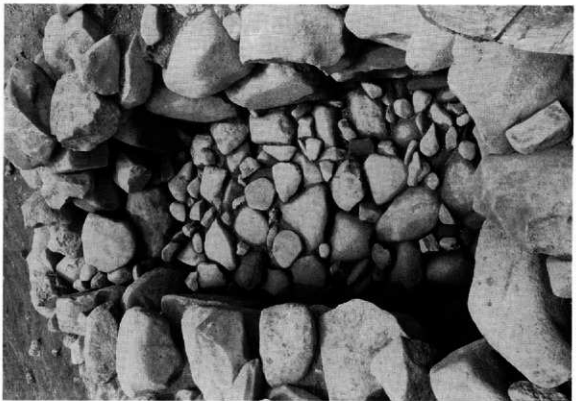
1. 9号墳 調査前状況



2. 9号墳 調査後状況



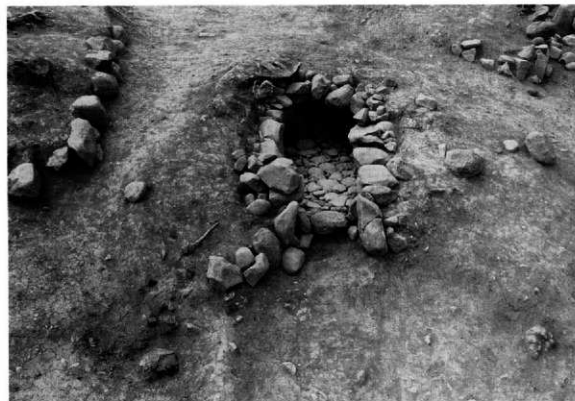
2. 9号墳 閉塞状況（東壁方向をみる）



1. 9号墳 閉塞状況（東道方向をみる）



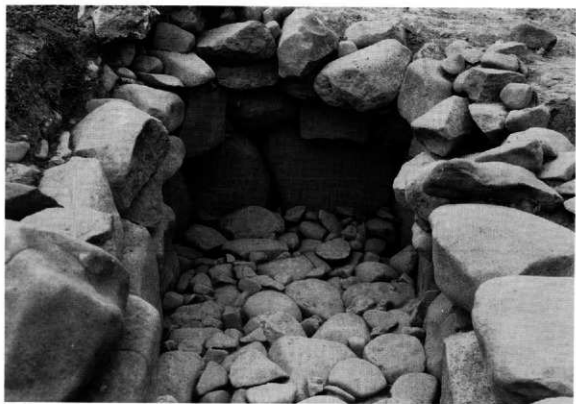
1. 9号墳 石室と外護列石



2. 9号墳 石室と外護列石



1. 9号墳 玄門



2. 9号墳 奥壁



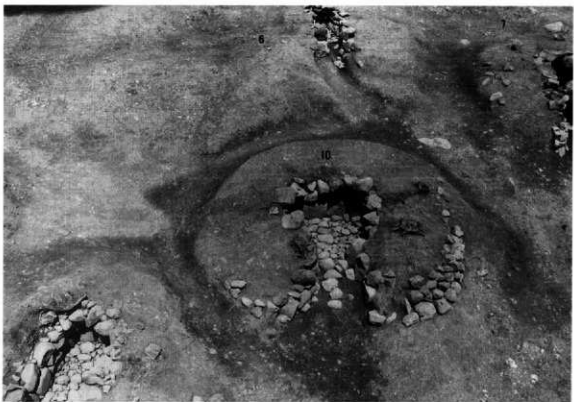
1. 9号墳 石室左側壁



2. 9号墳 石室右側壁



1. 10号墳 調査前状況



2. 10号墳 調査後状況



1. 10号墳 閉塞状況（奥壁方向をみる）



2. 10号墳 閉塞状況（狭道方向をみる）



1. 10号墳 石室と外護列石



2. 10号墳 石室と外護列石



1. 10号墳 玄門



2. 10号墳 奥壁



1. 10号墳 石室左側壁



2. 10号墳 石室右側壁



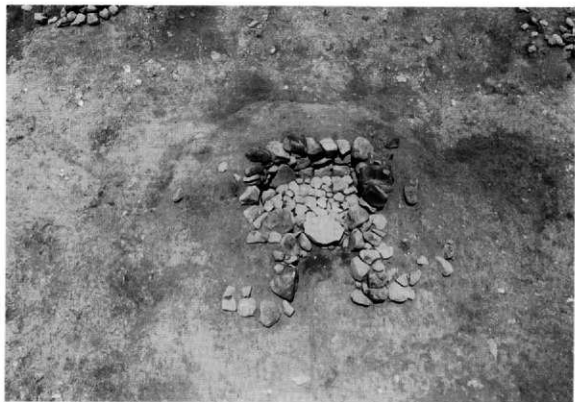
1. 10号墳 前庭部遺物出土状況



2. 10号墳 右側外護列石



1. 11号墳 調査前状況



2. 11号墳 調査後状況



1. 11号墳 閉塞状況（奥壁方向をみる）



2. 11号墳 閉塞石除去後



1. 11号墳 玄門



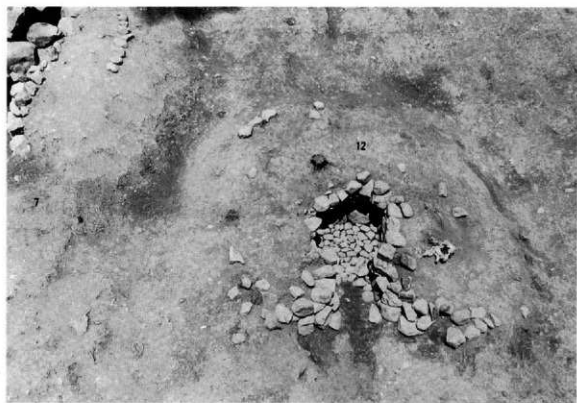
2. 11号墳 奥壁



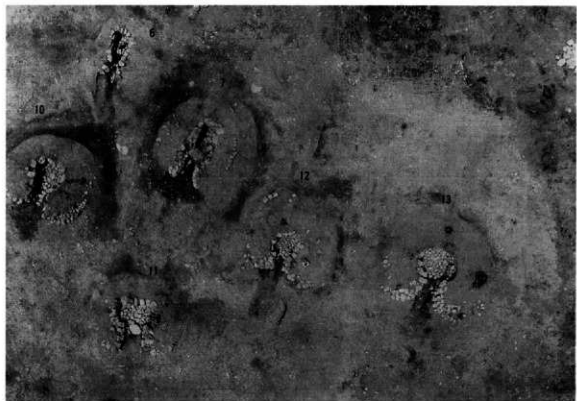
1. 11号墳 石室左侧壁



2. 11号墳 石室右侧壁



1. 12号墳 全景



2. 12号墳と周辺古墳位置関係



1. 12号墳 閉塞状況（奥壁方向をみる）



2. 12号墳 閉塞状況（羨道方向をみる）



1. 12号墳 石室と外護列石



2. 12号墳 石室と外護列石



1. 12号墳 玄門



2. 12号墳 奥壁



1. 12号坑 石室左侧壁



2. 12号坑 石室左侧壁



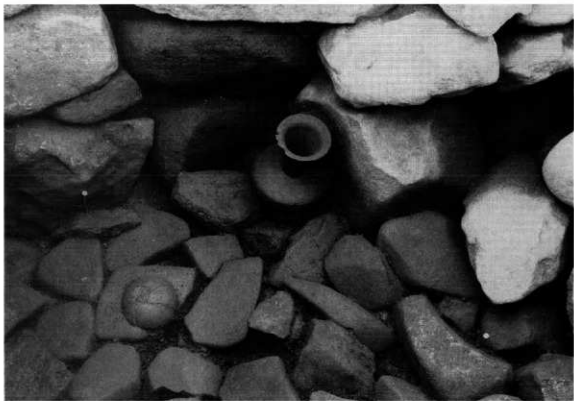
1. 12号墳 石室右側壁



2. 12号墳 石室右側壁



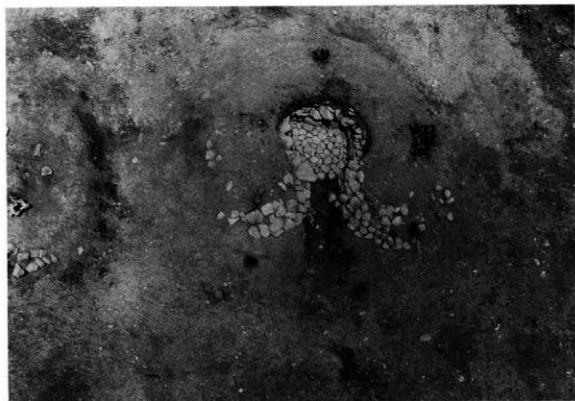
1. 12号墳 遺物出土状況



2. 12号墳 遺物出土状況



1. 13号墳 調査前状況



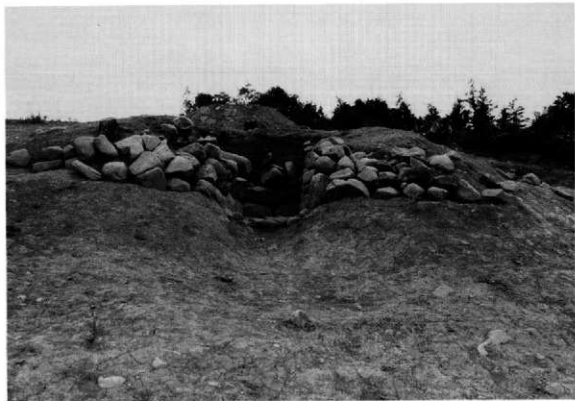
2. 13号墳 調査後状況



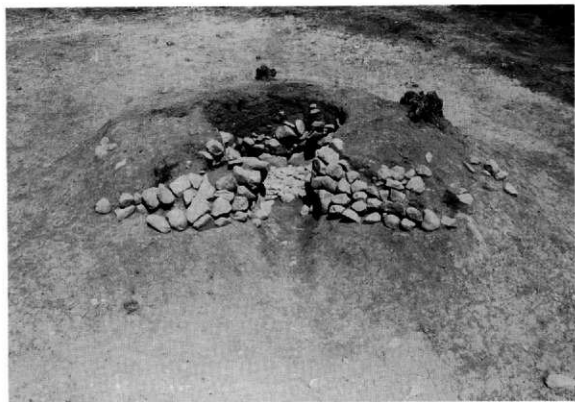
1. 13号墳 閉塞状況（奥壁方向をみる）



2. 13号墳 閉塞状況（排水方向をみる）



1. 13号墳 石室と外護列石



2. 13号墳 石室と外護列石



1. 13号墳 玄門



2. 13号墳 奥壁



1. 13号填 石室左側壁



2. 13号填 石室左側壁



1. 13号墳 石室右側壁



2. 13号墳 石室右側壁



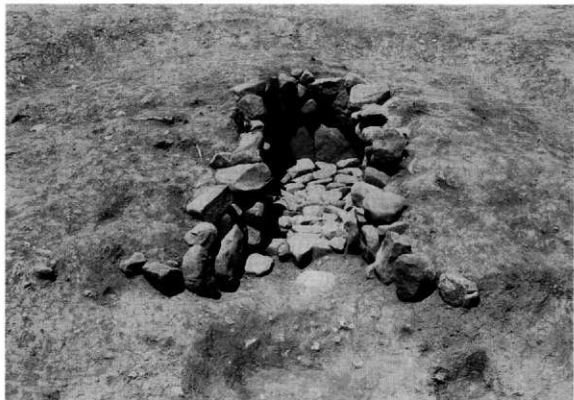
1. 14号墳 調査前状況



2. 14号墳 調査後状況



1. 14号墳 閉塞状況（奥壁方向をみる）



2. 14号墳 閉塞状況（狭道方向をみる）



1. 14号墳 石室と外溝列石



2. 14号墳 石室と外溝列石

1.
14号墳
玄門



2. 14号墳 奥壁



1. 14号墳 石室左側壁



2. 14号墳 石室右側壁



1. 15号墳 調査前状況



2. 15号墳 調査後状況



1. 15号墳 閉塞状況（奥壁方向をみる）



2. 15号墳 遺物出土状況



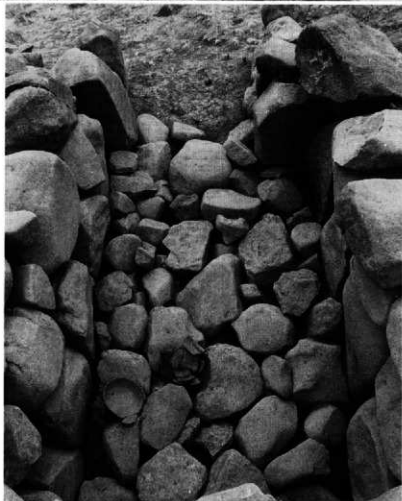
1. 15号墳 石室之外護列石



2. 15号墳 石室之外護列石



1. 15号墳 奥壁



2. 15号墳 玄門



1. 15号墳 石室左侧壁



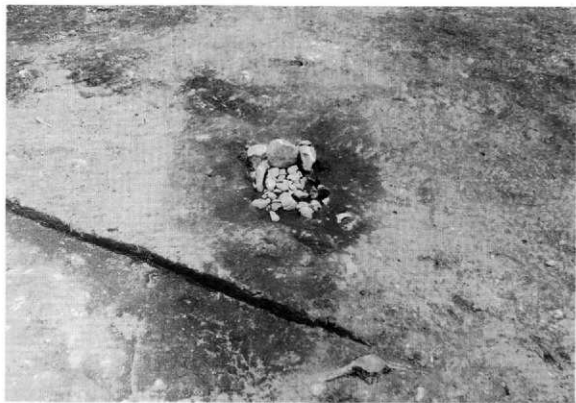
2. 15号墳 石室左侧壁



1. 15号墳 石室右側壁



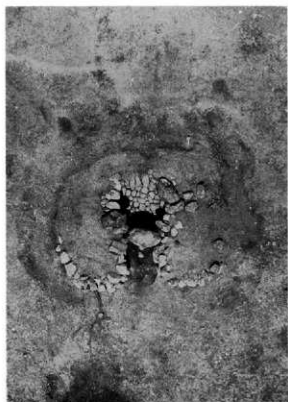
2. 15号墳 石室右側壁



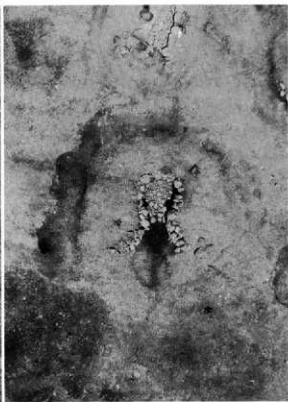
1. 16号室 全景



2. 16号坑 石室

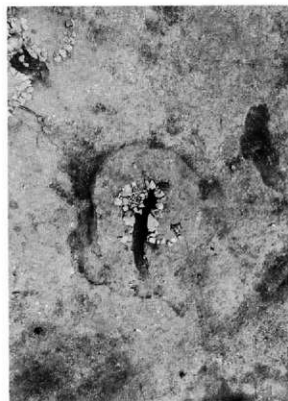


2号墳

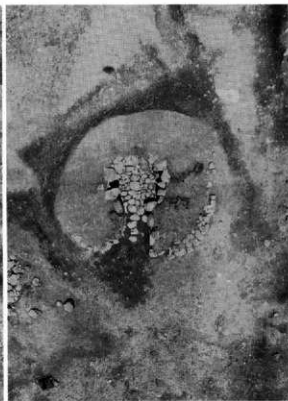


3号墳

正方形タイプ石室

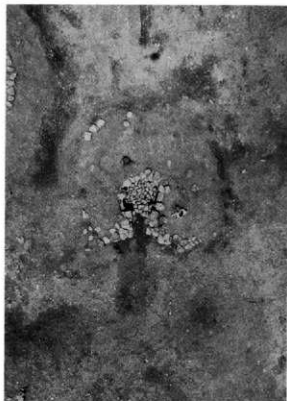


4号墳

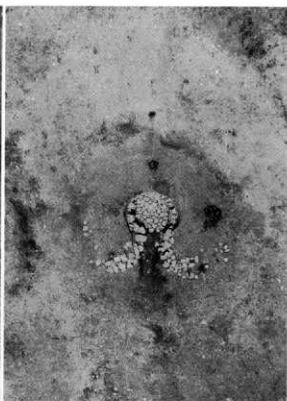


10号墳

正方形タイプ石室



12号墳

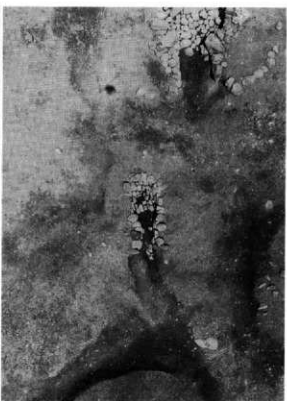


13号墳

正方形タイプ石室

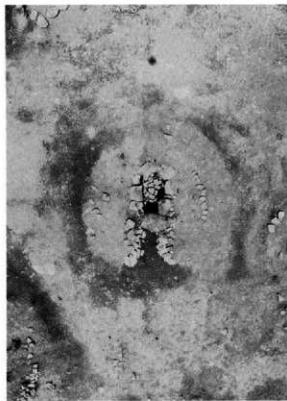


1号墳



6号墳

縦長方形タイプ石室

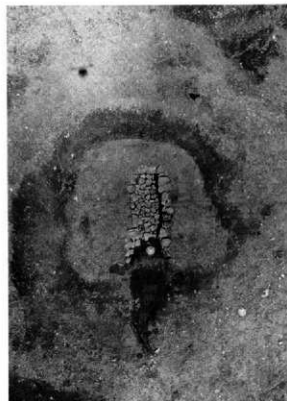


7号墳

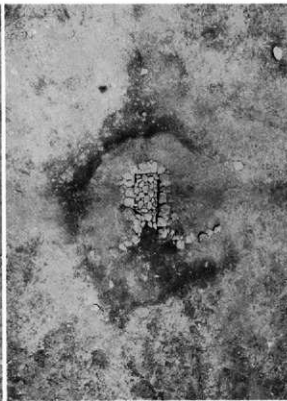


9号墳

縦長方形タイプ石室

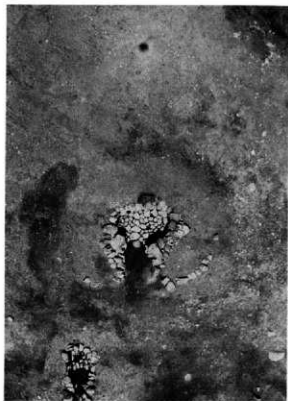


14号墳

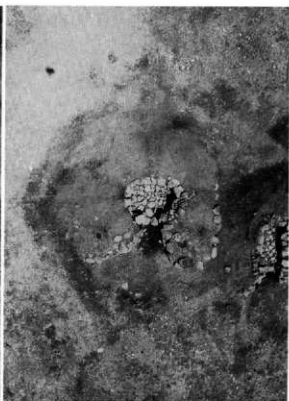


15号墳

縦長方形タイプ石室



5号墳



8号墳

横長方形タイプ石室

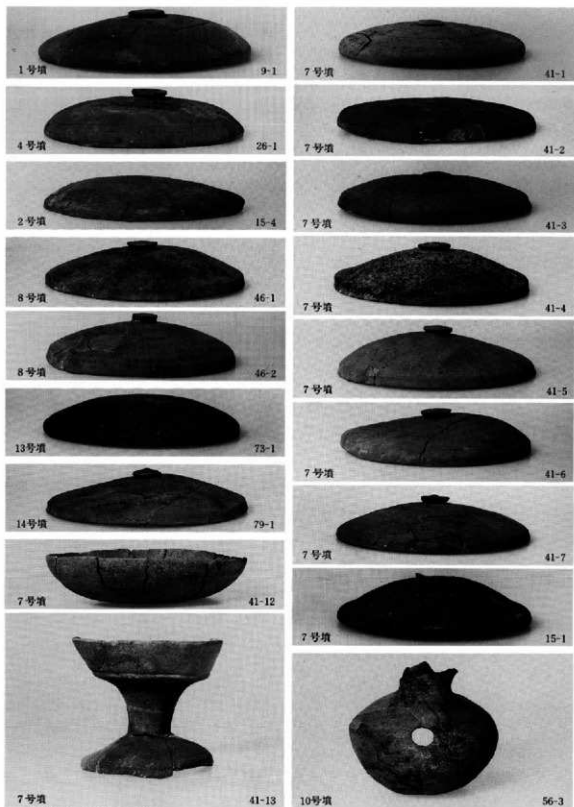


11号墳

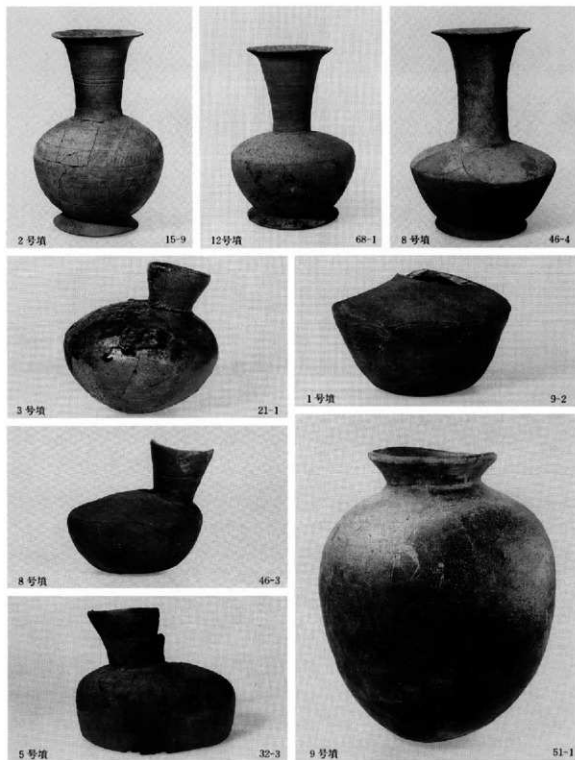


16号墳

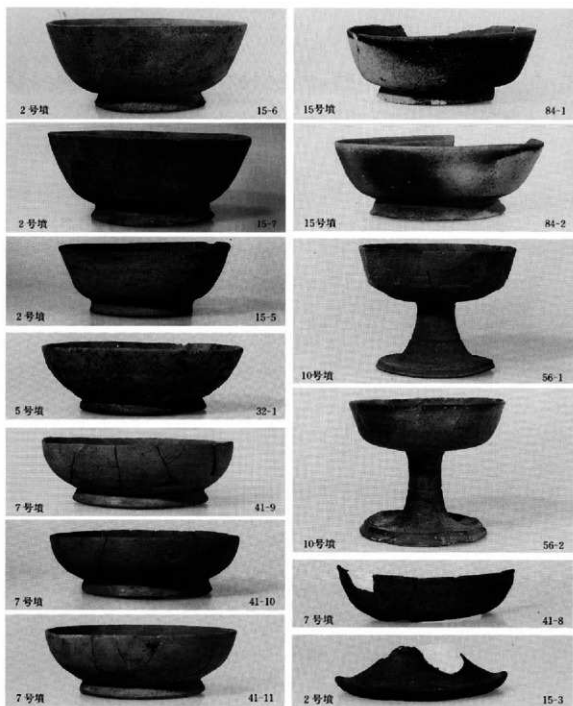
横長方形タイプ石室 小石室



石堂中後ヶ谷古墳群各古墳出土土器 ① (右側数字は挿入番号を示す)



石堂中後・谷古墳群各古墳出土土器 ② (右側数字は挿図番号を示す)



石堂中後々谷古墳群各古墳出土土器 ③ (右側数字は挿図番号を示す)

第3章

菜切古墳群の調査

第1節 はじめに

第2節 遺構と遺物

第3節 小 結

第3章 菜切古墳群の調査

第1節 はじめに

菜切古墳群は、石堂中後ヶ谷古墳群、頭無古墳群の所在する舌状丘陵に、南北から挟まれた同様の丘陵南東斜面に位置する。丘陵は、みかん畑等の開墾で段々に著しく削平されているが、事前の調査で、墳丘の存在や石室石材の露出等から数基の古墳が確認された。また、丘陵先端部にかけての分布調査では、破壊墳が4基程確認でき、さらに墓域を異にすると思われるが、先端部には福岡古墳群（福岡県遺跡等分布地図〈築上郡、豊前市編〉）が存在する。こうしたことから、路線内には多数の古墳が残っていると推定された（図版100、101-1、付図2）。調査は、その対象面積を11,000㎡と定め、昭和61年11月1日から昭和62年3月31日まで実施された。全面発掘をして遺構の検出を図った結果、甚大な削平のなか6基の古墳を発掘し、その他路線外にあるが、丘陵斜面最下段で6号墳に接して、ほぼ完存状態の墳丘を持つ円墳1基（径10m）を確認した（図版100、101-2、付図3）。

第2節 遺構と遺物

1. 1号墳

1) 位置と現状（図版100-1、101-1、102-1、105-1、付図2）

1号墳は、菜切古墳群中で2号墳と共に、丘陵頂部（標高52m程）からやや下がった南東側斜面最高位（標高48.4m）に立地している。本墳の墳丘識別は、伐採後、低い墳丘、盗掘坑による天井部の若干の窺み、石材の露出から確認できた。丘陵斜面北東側に、2号墳がある。現状では2号墳と墳裾で約7.5m離れている。墳丘の前面はみかん畑造成時の削平で、墓道は大半消失している。調査前の墳丘自体も南北径4+ α m、東西径2mと不整形で、現高約0.7mを測るに過ぎず、盛土の流出、後世の削平が甚大であったことを伺わせた。発掘の結果、等高線に直角で南南東側に向かって開口し、横穴式石室の内部構造をもつ円墳であることがわかった。

2) 墳丘（図版102-2、105-2、107-1、第93・94図、付図3）

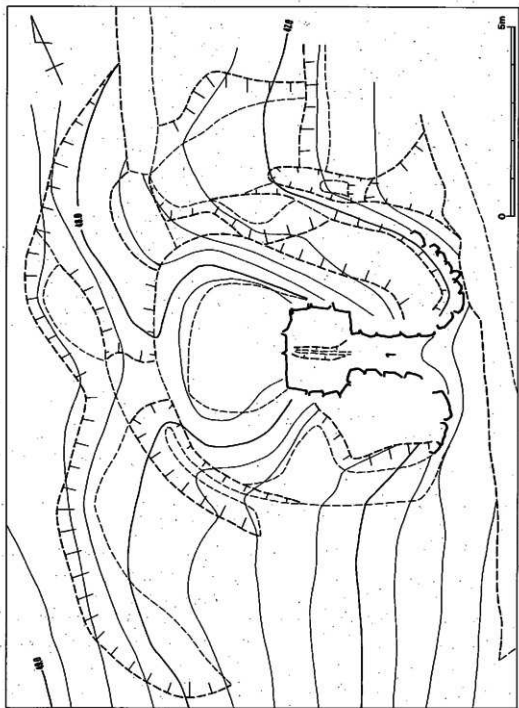
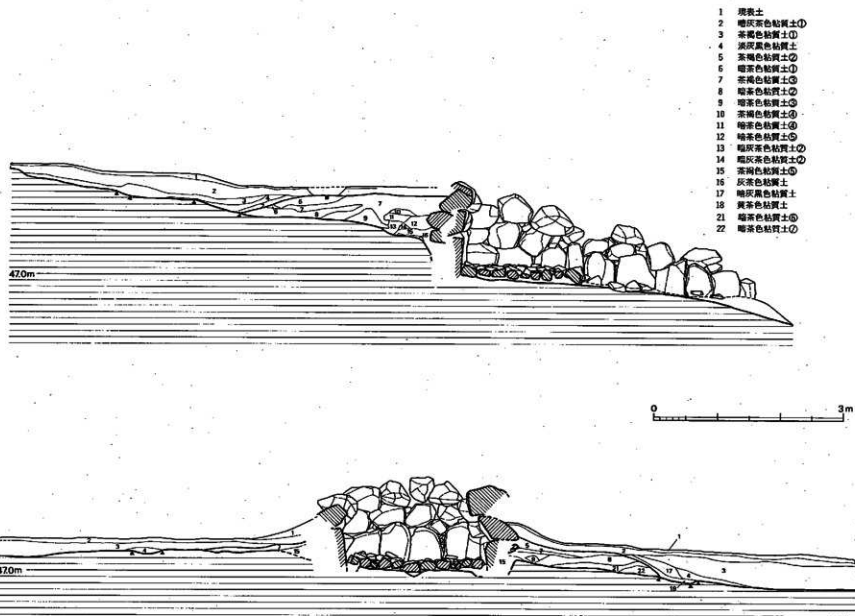
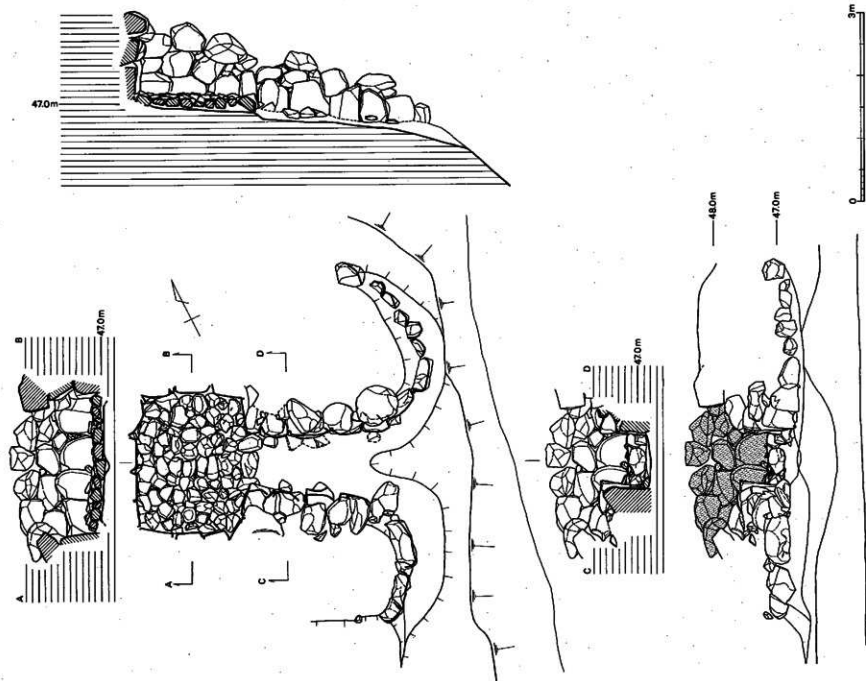


图 93 1号坝址地形断面图(比例 1/100)



第 94 图 1号旗旗丘测量图(縮尺 1/60)



第 95 图 1号石室及以外壁列石尖副图(縮尺 1/60)

墳形と周溝（図版102-2、105-2、第93図） 1号墳はミカン畑等の開墾で前面部、後面部の墳丘がかなり削平されている。しかし、古墳構築における地山整形（調査の時間的都合で墳丘全体を削いでいないが）は、土層観察から墳丘後側の傾斜面を半周する馬蹄形周溝の掘削とその内側の墳丘基底面の整地という二つの作業から成っていると推定された。

馬蹄形周溝は約8度の傾斜面の標高約48.25mのところを上端として、傾斜面を削り出している。この周溝は、墳丘基底面を全周せず、傾斜面からの流水を上方から下方に送り出すものと考えられる施設だが、南側前面では削平で見られない。残りの良い墳丘前面側を見ると、周溝は幅1m、深さ0.4mを測り、周溝内側上端部での東西径は約7.4m、周溝外側上端部での東西径は約9.6mを測る。

墳丘基底面は、墳丘前面のみかん畑開墾時の削平で消失しているが、現状では、北西（標高48.25m）から南東（標高46.50m）へ徐々に傾斜するが、全体にテラス状に削り出され、東西方向ではほぼ水平（標高47.2m）になる。

墳形は、墳丘左側の周溝の巡り方からみて、墳径7.4mのほぼ円形とみられる。

墳丘（第94図） 墳丘は周溝内側の整地面を基底面として、盛土を行っている。しかし、墳丘盛土自体かなり削平、流出しているため、墳裾が溝、地山整形面と一致するものではない。墳丘形成過程は、大きく2段階に分けられると推定できる。第1段階は、石室構築の壁石の裏込め的なものである。第2段階は天井部の被覆と墳形の整形に係わるものである。しかし本墳では、前述したように天井部が盗掘で盛土、天井石共消失しているため、その形成過程の全容は把握できなかった。

第1段階は墓墳内の腰石設置後、壁石積上げに平行して、一段ずつ叩きしめながら盛り上げている。壁石相互間には、礫石や小石を充填している。この段階の盛土は、墓墳上端部から0.6mほど広がる。

第2段階は第1段階に比べ、さほど固く突きかためることがなく、地山層を削って盛土として使用する。天井石架橋後、更に墳丘平面形を整え、円墳を形成したと思われる。この段階の盛土は、本墳の立地が傾斜面上であることやみかん畑開墾で、ほとんど流失している。

墳丘遺存高は、玄室床面から1.7mを測る。

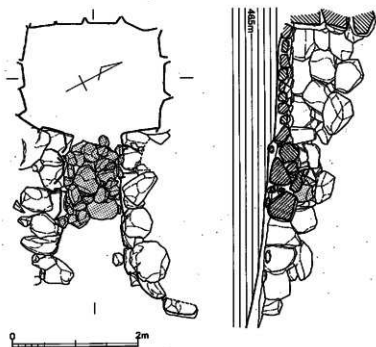
外覆列石（図版107-1） 鉄道部側壁端に接続して墳形にしたがって、左側に8石、右側に3石置く。それぞれは、墳丘基底面外端部にのる。

3) 主体部（図版106～110、第95～97図）

本墳の埋葬施設は、主軸をS-26-Eにとり、丘陵南東側傾斜面を谷に向かって開口する単室の両袖式横穴式石室である。石室は既に天井部と壁石上部を消失しているものの、当初の予想より遺存状態が良く、外護列石が整然と巡っていた。石室内は天井石、側壁石の崩落や流土によって埋設していた。玄室内は、既に盗掘を受けていたにもかかわらず、床面の敷石は原位置にあり、20~40cm程の転石を敷く。表面は凹凸を無くそうと平坦な転石を選ぶ。盗掘で出土遺物は全く無いと思われたが、鉄鍔片が右袖石と右側壁石の隅角付近の床石間に転落して出土した。

石室は正方形プランを有する玄室に細長くやや「ハ」の字に開く羨道を連接する。玄門部の転石から羨道部へやや出て閉塞施設がみられる。石室全長は右壁3.62m、左壁3.94mを測る。石室を構築する石材は、安山岩の転石が使用されている。

閉塞施設（図版106、第96図） 玄門部から前面へ0.8m出たところに閉塞施設が存在する。大小の転石を積み上げて閉塞するもので、現存高0.7mを測る。閉塞施設の位置は、墓道側で奥壁中央から3.05m、羨道側で奥壁中央から1.95m、その間約1.15mである。墓道側からみた場合、石積みは雑然とした状態である。下部に40cm大の石を、上部に行くに従って、小さい石が使用



第96図 1号墳閉塞石実測図(縮尺 1/60)

されている。

玄室 (図版107~109、第95図) 奥幅2.1m、中央幅2.22m、前幅2.2m、左壁長1.56m、右壁長1.55mを測り、略正方形プランをみる。壁体の構築法は、各壁体共に共通している。奥壁および左右壁には0.5m×0.6m程度の大ぶりの転石を、奥壁に4石、左右壁に3石、面を揃えて据える。腰石から上部はやや小ぶりの転石を積上げ、水平に目路が通るように煉瓦積みしている。腰石から上部はやや内傾しながら持ち送られる。また、奥壁隅角では、腰石から上の転石積上げで、奥壁と側壁に斜目に渡して積上げる三角持ち送り手法が取られる。天井部は既がないが、さらに数段積上げてから天井石を架構したと推定できることから、床面からの高さは約2mと考えられる。

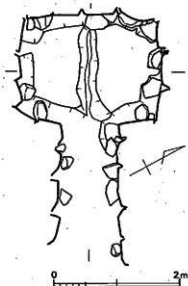
玄門部は両袖で特別な施設はない。袖幅は右袖0.57m、左袖0.75mで、玄門幅は0.9mを測る。袖石は転石を縦位に立てている。玄門部樞石は、3石を使用し中央部の転石を横位に、左右を縦位に置く。床面主軸上の高さより5cm程高い。

床面は径20~40cmほどの転石、割り石で敷かれている。奥壁から玄室主軸上一直線に床石が並び、樞石中央まで連なる。また、床面は壁面に向かい、10cm程高くなっていく。床石除去後、主軸上に奥壁際から玄門に向かう排水溝施設が検出できた。幅20~30cm、深さ10cmでレベルは必ずしも奥壁から狭道に向かって低くなっていない。一直線に並んだ床石が排水溝蓋石になっていたことがわかった。

石室基底面 (図版110、第97図) 主軸上より側壁面に行くにしたがって高くなる。腰石を配置する部分は一段低くなり、腰石を支える根石がある。一部は床石と併用している。

羨道 (第95図) 左右壁とも比較的良好な状態で残っている。羨道長は右壁で2.22m、左壁で1.9mを測る。奥幅は玄門側で0.9m、墓道側で1mを測る。壁体の構成は玄室と同様で大ぶりの転石を腰石とし、その上に転石を煉瓦積みになっている。羨道部腰石は、墓道に向かって跳ね上がらず、ほぼ水平に据えられる。

墓道 (第95図) 墓道は羨道前面で、みかん畑造成時の削平により切断され消失している。



第97図 1号墳石室基底面実測図
(縮尺 1/60)

墓 墳 (第94図) 墓墳は墳丘を完全に除去することなく、左右側壁、奥壁側に設定したトレンチによる観察であったので、その全容は把握できなかった。

墓墳は、地山整形された部分からやや斜目に掘り込まれる。玄室石材は、腰石上2段目までが墓墳内に収まる。玄室短軸幅は不明、深さは玄室部奥壁側で0.6mを測る。

4) 出土遺物

出土遺物には鉄製品(鉄鏃)があった。

鉄製品

鉄鏃 玄室右前隅角付近で検出したが、腐食が著しく、図示し得なかった。

2. 2号墳

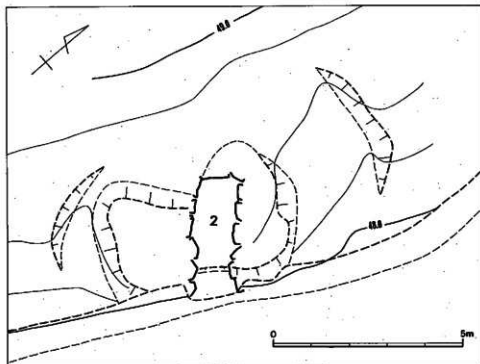
1) 位置と現状(図版111-1、付図2)

2号墳は、菜切古墳群中、最高位(標高50.5m)に立地し、南西側に1号墳がある。1号墳とは墳裾で約7.5m離れている。本墳の墳丘識別は、伐採後、石材の集積により古墳の存在を推定できた。しかし、墳丘の高まりや盜掘坑も無かったので、石室プランの確認に時間を要したが、陥入石材を取り除くうち、等高線に直角で東南側に向かって開口した、横穴式石室の内部構造をもつ円墳であることを確認した。墳丘の前面は1号墳と同様にみかん畑の開墾で大部分削平されていた。また、調査前の墳丘自体も南北径4m、東西径4m、現高約0.3mをとどめるに過ぎず、盛土の流出、後世の削平が著しかったことを伺わせた。

2) 墳 丘(図版111-2、第98・99図、付図3)

墳形と周溝(図版111-2、第98図、付図3) 2号墳は1号墳以上にミカン畑の開墾による被害が著しく、墳丘はほとんど削平され、また、羨道前面部は全く無い。しかし、古墳構築における地山整形(調査の時間的都合で墳丘全体を削いでいないが)は、墳丘後側の傾斜面を半周する馬蹄形周溝の掘削(墳丘前側に一部残る)とその内側の墳丘基底面の整地という二つの作業から成っていると推定された。

馬蹄形周溝は墳丘削平で殆ど残っておらず、墳丘前側で一部分見られるにすぎない。この周溝は、1号墳と同様に墳丘基底面を全周せず、傾斜面からの流水を上方から下方に送り出すも



第 98 図 2号墳調査後地形測量図(縮尺 1/100)

のと考えられる施設で、南東側斜面では無くなると思われる。周溝は非常に浅く、僅かに痕跡をとどめるに過ぎない。残りの良い墳丘前面左側を見ると、周溝幅1.5m、深さ0.2mを測る。周溝外側上端部での東西径は約9.2mを測り、周溝内側上端部での東西径は4.6mを測る。

墳丘基底面は、墳丘前面のみかん畑開墾時の削平で消失しているが、現状では、北西(標高48.25m)から南東(標高46.50m)へ徐々に傾斜するが、全体にテラス状に削り出され、東西方向でほぼ水平(標高48.3m)になる。

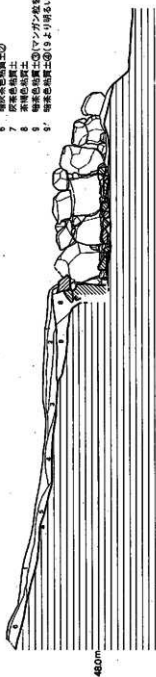
墳形は、周溝の巡り方からみて、墳径5m程のほぼ円形とみられる。

墳丘(第99図) 墳丘は周溝内側の整地面を基底面として、盛土を行っている。しかし、墳丘盛土自体ほとんど削平、流出しているので、墳裾は周溝内側上端部、墳丘基底面と一致しない。

墳丘形成過程は、大きく2段階に分けられると推定できる。第1段階は、石室構築の壁石の裏込め的なものである。第2段階は天井部の被覆と墳形の整形に係わるものである。本墳では、前述したように天井部が盗掘で盛土、天井石共消失しているので、その形成過程の全容は把握できなかった。

第1段階は墓墳内の掘削が十分でなかったため、その様子は明らかに出来なかった。

- 1 黒土
- 2 暗茶色粘質土①
- 3 暗茶色粘質土②
- 4 暗茶色粘質土③
- 5 暗茶色粘質土④
- 6 暗茶色粘質土⑤
- 7 暗茶色粘質土
- 8 茶褐色粘質土
- 9 暗茶色粘質土⑥(マンガン酸を含む)
- 9' 暗茶色粘質土⑦(9より厚い)

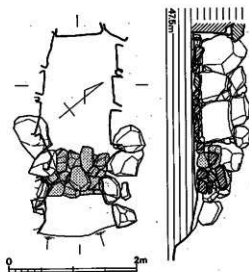


第 99 図 2号墳塚丘土層図(縮尺 1/60)

第2段階は固く突きかためることがなく、地山層を削り盛土として使用する。天井石架構後、墳丘平面形を整え、円墳を形成したと思われる。この段階の盛土は、本墳の立地が傾斜面上であることやみかん畑開墾で、ほとんど消失している。墳丘遺存高は、玄室床面から0.7mを測る。

外護列石(図版111-2、第98図) 墳丘がほとんど削平されているので、全く検出されなかった。

3) 主体部(図版112~115、第98~102図)



第100図 2号墳閉塞石実測図(縮尺 1/60)

本墳の埋葬施設は、主軸をS-29°-Eにとり、丘陵南東側傾斜面に谷へ向かって開口する単室の両袖式横穴式石室に見えるが、袖部はほとんど発達しておらず、無袖式横穴式石室への途上の石室であろう。既に天井部と壁石上部を消失している。石室内は天井石、側壁石の崩落や流土によって埋没していた。玄室内は、既に盗掘を受けていたが、床面の敷石は原位置にあり、奥壁側に30cmの大ぶりの石を、玄門部側に15cmの小ぶりの石を配している。出土遺物には土器があった。

石室は縦長方形プランを有する玄室に、玄室幅とほぼ同じ羨道を連接する。玄門部には框石を有しないものの、閉塞施設がみられる。石室全長は右壁3.1m、左壁3mを測る。石室を構築する石材は、安山岩の転石が使用されている。

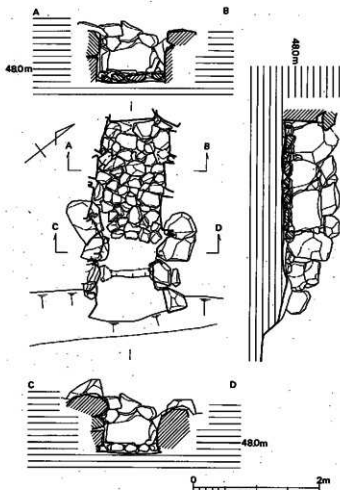
閉塞施設(図版112-1、第100図) 玄門部の框石はないが、ほぼその部位に閉塞施設が存在する。20~40cmの転石を積み上げて閉塞するもので、現存高0.4mであるが、元来は完全にふさがれていたであろう。閉塞施設的位置は墓道側で奥壁中央から2.3m、羨道側で奥壁中央から1.6m、その間約0.7mである。墓道側からみた場合、石積みは雑然とした状態である。

玄室(図版112-2、113~115、第100図) 奥幅1m、前幅1.12m、右壁長1.6m、左壁長1.56mを測り、奥幅の広い長方形プランをみる。壁体の構築法は、各壁体共に共通している。奥壁で1石、左右壁で3石を配し腰石としている。腰石から上部はやや小ぶりの転石を積み上げ、ほ

は水平方向に目路が通るように横位に煉瓦積みしている。腰石から上部の2段目からは、やや内傾しながら持ち送られる。天井部は既にないが、さらに3~4段積上げてから天井石を架構したと推定できることから、床面からの高さは約1.4mと考えられる。

玄門部は両袖で特別な施設はない。袖幅は左袖0.1m、右袖0.2mで、玄門幅は0.96mを測る。袖石は転石を縦位に立てている。玄室内の壁石はすべて平坦面を内側にむけて配されているが、袖石は転石を縦位にし、平坦面をうちに向けるという作業をしていない。無袖式横穴式石室へむかう、形骸化した両袖式横穴式石室と考えたい。

床面は径20~30cmほどの転石、割り石で敷かれている。床石除去後、排水溝などの施



第101図 2号墳石室実測図(縮尺 1/60)

設はなかった。

石室基底面 (図版115-1、第102図) 腰石を配置する部分は少し低くなり、腰石を支える根石がある。

羨道 (図版112-2、114、115-1、第101図) 天井部が欠落して、腰石1段しか残っていない。また、前面の部分は、みかん畑の開墾で崩落していたので、左右壁に2石の小ぶりの転石を横位に置くに留まる。羨道長は右壁で1.2m、左壁で1.5mを測る。奥幅は玄門側で0.96m、墓道側で1.12mを測り、墓道側に向かって広がっていく。

羨道部腰石は、墓道に向かって跳ね上がる。

墓道 墓道は羨道前面のみかん畑造成時の削平で切断され消失している。

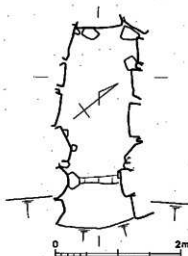
墓墳 (第101図) 墓墳は墳丘を完全に除去することなく、左右側壁、奥壁側に設定したトレンチによる観察であったので、その全容は把握できなかった。墓墳は、地山整形された部分から斜目に掘り込まれる。墓墳は、玄室幅不明、深さは玄室部奥壁側0.35mを測る。

4) 出土遺物 (図版130-1、第103図)

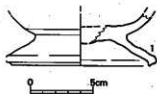
出土遺物には、土器(杯)がある。小田編年のVI期に属し、7世紀後半に当たる。

土器

杯(図版130-1、第103図) 前面墳裾より出土。2分の1残存。外方に開く高台が付く。外方にふんばった脚端の外側を摘み出して上にあげ、そこに稜をつける。底径12cmを測る。



第102図 2号墳石室基底面実測図
(縮尺 1/60)



第103図 2号墳出土土器実測図
(縮尺 1/60)

3. 3号墳

1) 位置と現状 (図版103-1、116-1、付図2)

3号墳は、菜切古墳群中の4、5号墳と共に丘陵南東側斜面、中段位(標高36.5m)に立地している。丘陵斜面北北西側に4、5号墳がある。5号墳とは墳裾で約4m離れて、その間に小石室の4号墳が割り込む。本墳の墳丘識別は、伐採後、盗掘坑による天井部の若干の窪み、石材の露出から確認できた。墳丘の前面は、北西から南東に掘られた谷水の流路によって墓道部は削平されている。また、後面も谷水路とミカン畑造成で削平され、墳丘裾部辺はかなり乱れるが、主体部の遺存は良好で、調査前の墳丘は東西径12.2m、現高約0.6~1.6mまで測り得た。伐採掘削時には4、5号墳の存在は知り得なかった。発掘の結果、等高線に直角で、南南東側に向かって開口する横穴式石室の内部構造をもつ円墳であることがわかった。

2) 墳丘 (図版104-1、116、第104~106、付図3)

墳形と周溝 (図版104-1、116-1、第104・105図) 前述したように3号墳は墳丘前後での削平が著しく、墳丘左側前後面と右側前面でしか墳丘の様子が確認できない。しかし、古墳構築における地山整形(調査の時間的都合で墳丘全体を削いでいないが)は、墳丘後側の傾斜面を半周する馬蹄形周溝の掘削(墳丘左側に一部残る)とその内側の墳丘基底面の整地という二つの作業から成っていると推定された。

馬蹄形周溝は前後からの削平で、墳丘左側で一部分見られるにすぎない。墳丘右前側では削平を受けていないにもかかわらず、玄室短軸上のトレンチ土層観察で周溝が確認できなかった。この部分は等高線が密になるので、傾斜も急になり上方からの流水は、墳丘右後側までの周溝で十分であったのだろう。周溝は残りが良い部分で、幅1.3~2.2m、深さ0.5mを測る。この部分の数値から墳丘の大きさを復元してみると、周溝内側上端部での東西径は5m、周溝外側上端部での東西径は8.9mを測る。

ただし、墳丘左側の周溝は、ある時期掘り直されている。それは、流土による埋没と4、5号墳の築造による再築と考えられ、墳丘を削って従来よりやや内側に再掘削している。

墳丘基底面は、墳丘前後部が谷水路、ミカン畑開墾時の削平で消失しているが、現状では、全体にテラス状に削り出され、東西方向でほぼ水平(標高36.9m)になる。

墳形は、周溝の巡り方からみて、墳径9m程度のほぼ円形とみられる。

墳丘(第105図) 墳丘は周溝内側の整地面を基底面として、盛土を行っている。しかし、墳丘盛土自体かなり流出しているため、墳裾が周溝、地山整形面と一致するものではない。

墳丘形成過程は、大きく2段階に分けられると推定できる。第1段階は、石室構築の壁石の裏込め的なものである。第2段階は、天井部の被覆と墳形の整形に係わるものである。本墳では、前述したように天井部が盗掘で盛土、天井石共一部消失しているが、かなり上部まで墳丘が遺存しているため、その状況を把握することが出来た。

第1段階は墓墳内の腰石設置後、壁石横上げに平行して、一段ずつ叩きしめながら盛り上げている。さほど強く叩いている痕跡は見られず、それぞれはボソボソした感じであった。壁石相互間には、礫石や小石を充填している。この段階の盛土は、他墳と異なり墓墳が浅いので、その上部から連続して第2段階へ移るようである。

第2段階は第1段階に比べさほど固く突きかためることがなく、土層は地山層(バイラン土を含む茶褐色粘土)を4層程盛り上げる。天井石架橋後、更に墳丘平面形を整え円墳を形成したと思われる。この段階の盛土は、本墳の立地が傾斜面上であることやみかん畑開墾で、かなり流失している。墳丘径と奥壁にある天井石近くの壁石からみて、かなり突出した墳丘盛土だったと思われる。

墳丘遺存高は、玄室床面から1.35mを測る。

外護列石(図版116-2、第107図) 羨道端部に接続して右側で4石、左側で2石、さらに間を置いて2石が残る。

3) 主体部(図版117~119、第104、106~108図)

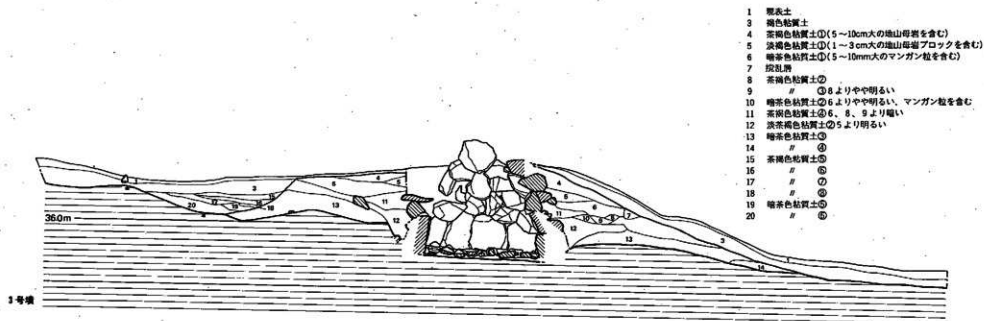
本墳の埋葬施設は、主軸をN-44°-Eにとり、丘陵南東側傾斜面に谷に向かって開口する単室の両袖式横穴式石室である。石室は既に天井部と壁石上部を一部消失しているものの、ほぼ完存状態にある。玄室内は空間があったが、羨道は側壁の崩落や流土によって埋没していた。玄室内は、既に盗掘を受けているにもかかわらず、床面の敷石は原位置にある。玄室中心ライン左右に20~30cmの大ぶりの石を配し、奥、左右側壁付近に小ぶりの石を配す。出土遺物には土器があった。

石室は、正方形プランを有する玄室に細長い羨道を接続する。玄門部の榫石はなく、玄門部より羨道側1mのところを中心に閉塞施設がみられる。石室全長は右壁3.52m、左壁3.42mを測る。石室を構築する石材は、安山岩の転石が使用されている。

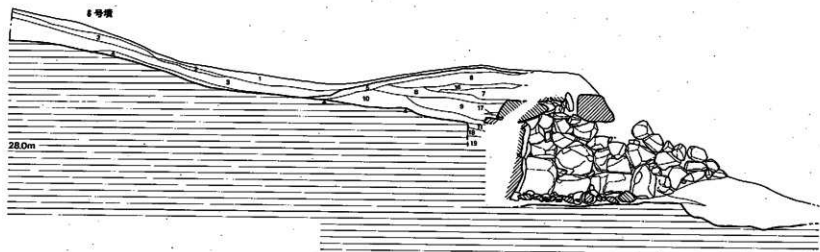
閉塞施設(図版117-1、第107図) 玄門部から羨道側にて、閉塞施設が存在する。転石を積



新 104 图 3、4、5 号坝基址地形测量图 (缩尺 1/100)



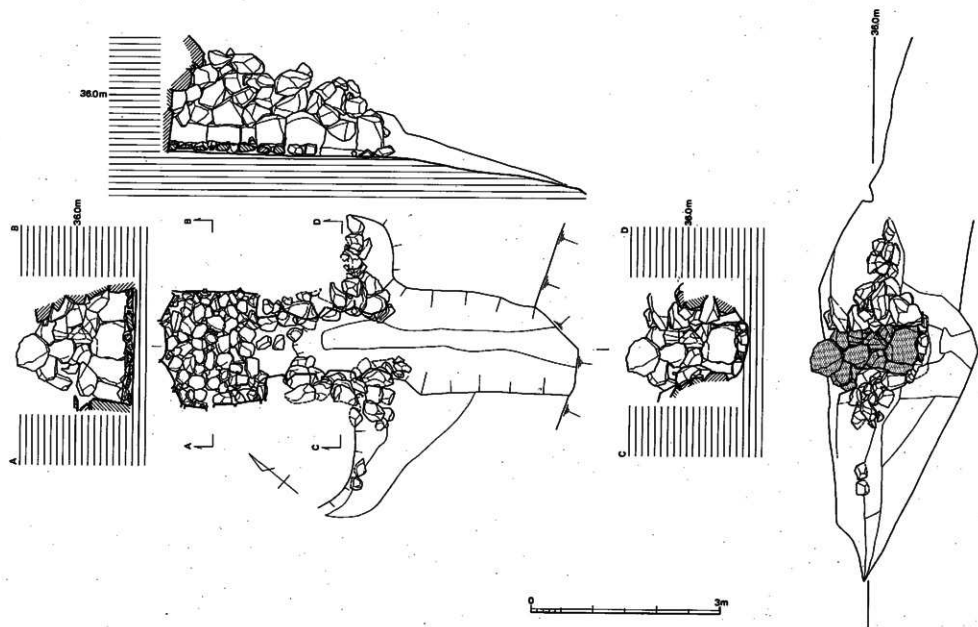
- 1 褐色土
- 2 褐色粘質土
- 3 高褐色粘質土①(5~10cm大の礫山程度を含む)
- 4 高褐色粘質土②(1~3cm大の礫山毎層アロックスを含む)
- 5 暗褐色粘質土①(5~10mm大のマンガン粒を含む)
- 6 暗褐色粘質土②
- 7 暗褐色粘質土③
- 8 暗褐色粘質土④
- 9 # ⑧よりやや明るい
- 10 暗褐色粘質土⑤⑥よりやや明るい、マンガン粒を含む
- 11 高褐色粘質土⑦、⑧、⑨より暗い
- 12 高褐色粘質土⑤より明るい
- 13 暗褐色粘質土④
- 14 # ④
- 15 暗褐色粘質土④
- 16 # ④
- 17 # ④
- 18 # ④
- 19 暗褐色粘質土④
- 20 # ④



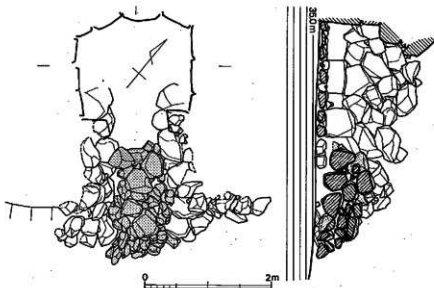
- 1 褐色土
- 2 暗褐色粘質土①
- 3 暗褐色粘質土②
- 4 暗褐色粘質土③
- 5 暗褐色粘質土④
- 6 暗褐色粘質土⑤
- 7 暗褐色粘質土⑥
- 8 暗褐色粘質土⑦
- 9 暗褐色粘質土⑧
- 10 暗褐色粘質土⑨
- 11 暗褐色粘質土⑩
- 12 暗褐色粘質土⑪
- 13 暗褐色粘質土
- 14 高褐色粘質土②
- 15 高褐色粘質土③
- 16 暗褐色粘質土④
- 17 暗褐色粘質土⑤
- 18 暗褐色粘質土⑥
- 19 暗褐色粘質土



第 105 図 3、4号墳墳丘土層図(縮尺 1/60)



第 106 図 3 号墳石室及び外環列石実測図(縮尺 1/60)



第 107 図 3号墳閉塞石奥側図(縮尺 1/60)

み上げて閉塞するもので、現存高 1 m であるが、元来は天井石との間が完全にふさがれていた
のであろう。閉塞施設の位置は墓道側で奥壁中央から 3 m、羨道側で奥壁中央から 1.26 m、そ
の間の約 1.74 m である。墓道側からみた場合、石積みは雑然とした状態であるが、3 段にわた
って積上げられ、最下段と 3 段目に 40 cm 程の大ぶりの石を、中段に 20 cm 程の小ぶりの石を積む。
また、最下段下には、地山層との間に黄褐色土が 15 cm 程詰まる。この閉塞施設がある時期に開
口していたことを窺わせる。

玄 室 (図版 117~119、第 106 図) 奥幅 1.78 m、前幅 1.66 m、左壁長 1.4 m、右壁長 1.56 m
を測り、奥幅の広い正方形プランをみる。壁体の構築法は、各壁体共に共通している。奥壁お
よび左右壁には 0.5 m × 0.5 m 程度の大ぶりの転石を、奥壁に 4 石、左右側壁に 3 石、面を揃え
て配し、腰石としている。腰石から上部は、やや小ぶりの転石を積上げ水平に目路が通るよ
うに煉瓦積みしている。腰石から上部は 2 段目からやや内傾しながら持ち送られる。天井部は既
にないが、さらに 4~6 段積上げてから天井石を架構したと推定できることから、床面からの
高さは約 1.6 m と考えられる。

玄門部は両袖で特別な施設はない。袖幅は左袖 0.34 m、右袖 0.35 m で、玄門幅は 0.94 m を測
る。袖石は転石を内側に平坦面を向けて、縦位に立てている。

床面は径 20~40 cm ほどの転石、割り石で敷石が施されている。

石室基底面 (第 108 図) 腰石を据えるための顕著な掘り方は見られない。腰石を支える根石が

4箇所にある。奥壁左隅から前壁右隅に向かって5cm傾斜する。

羨道(図版117-2、第106図) 側壁上部は欠落しているが、左右壁とも比較的良好な状態で残っている。左右壁とも3石の大ぶりの石を腰石に据え、その上に3段に小ぶりの石を横積みする。羨道長は左壁で2.02m、右壁で1.96mを測る。奥幅は玄門側で0.94m、墓道側で0.86mを測る。壁体の構成は、玄室と同様で大ぶりの転石を腰石とし、その上に転石を煉瓦積みになっている。

墓道(図版117-2、第106図) 墓道は、羨道前面で谷水路の造成で削平、切断され消失している。

墓墳(第105図) 墓墳は墳丘を完全に除去することなく、左右側壁、奥壁側に設定したトレンチによる観察であったため、その全容は把握できなかった。墓墳は、左側壁側では地山整形された部分から斜目に浅く掘り込まれる。しかし、右側壁側では自然地形を利用するので、ほとんど掘り込まれない。墓墳は、玄室短軸幅2.8m、深さは右側壁部で0.4mを測る。

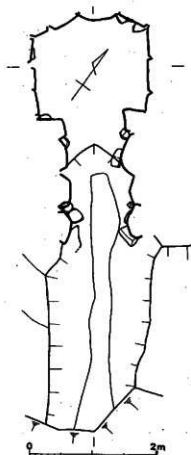
4) 出土遺物(図版130-1、第109図)

出土遺物には土器(高杯)がある。小田福年のVI期に属し、7世紀後半に当たる。

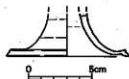
土器

高杯 墓道から出土。杯部は欠失している。脚部は短く「ハ」の字に広がり、脚端部では鳥嘴状に下方へ突出する。底径9.6cmを測る。

4. 4号墳



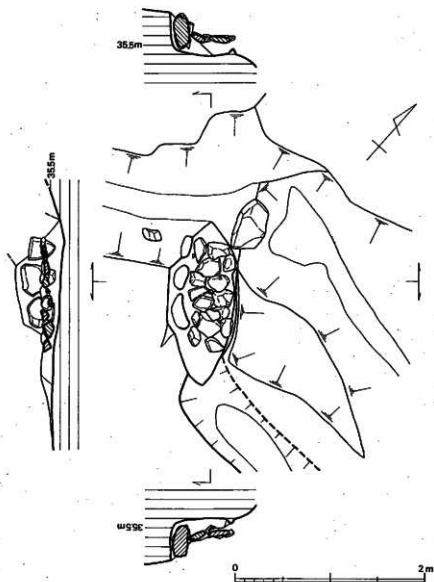
第108図 3号墳石室基底面実測図(縮尺1/60)



第109図 3号墳出土土器実測図(縮尺1/3)

1) 位置と現状 (図版103-1、付図3)

4号墳は、菜切古墳群中で3、5号墳と共に、丘陵頂部からやや下がった南東側斜面中段位(標高35.5m)に立地している。4号墳の南北に3、5号墳があり、それぞれの墳裾に割り込むようにして築造される。東側面、後面は西から東へ流れる谷水路で甚だしく削平されていた。



第110図 4号墳石室実測図(縮尺 1/60)

墳丘は全くなく、その識別も表土スキトリ時まで確認できなかった。発掘の結果、等高線に直角で南南東側に向かって開口する横穴式石室の内部構造をもつ小石質であることがわかった。

2) 墳 丘 (第110図)

墳形と周溝 (第110図) 周溝は削平のため、全く検出できなかった。しかし、古墳構築における地山整形は、石室基底面の整地が確認できた。丘陵傾斜面をL字状にカットして、平坦面を造り出してから、墓壇を作る。

墳 丘 削平等で全く確認できなかった。

外護列石 全く存在しなかった。

3) 主体部 (図版120、第110図)

本墳の埋葬施設は、主軸をN-39°-Eにとり丘陵南東側傾斜面に谷へ向かって等高線と直角に開口する単室の小石室墳である。石室は東側壁、奥壁、前面が谷水路により大きく削平され、西側壁1段と床石を残すのみであった。玄室内は、盗掘を受けているにもかかわらず、床面の敷石は、20cm程度の転石をもっとも多く使う。表面は平坦なものを選んでいるが、部分的に凹凸も見られる。盗掘等で出土遺物は全く無い。

石室は、縦長方形プランを有する玄室に細長い墓道を接続する。閉塞施設は確認できなかった。石室全長は左壁0.95mを測る。石室を構築する石材は、安山岩の転石が使用されている。

閉塞施設 前面部削平のため、確認できなかった。

玄 室 (図版120、第110図) 左側壁の腰石3石と床面敷石が残るのみであった。奥幅0.35m、前幅0.44m、左壁長0.95mを測り、奥幅の狭い長方形プランをみる。

玄門部は、袖部が既に破壊され、確認できなかった。

床面は径20cmほどの転石、割り石で敷石が施される。床石除去後はすぐに地山整形面で、下方より排水溝等の施設は検出できなかった。

石室基底面 (第110図) 中央より両側壁に行くに従って、狭くなり低くなる。腰石を配置する部分は、さらに低くし、それらの安定を図っている。

羨道 確認できなかった。石室と墓道の位置関係からみて、存在しなかったと見るほうが適当であろう。

墓道(第110図) 墓道は石室主軸上から南南東へ向け、曲がって伸びる。幅30cm、深さ10cmである。5号墳の周溝を避けるように掘られる。

墓墳(第110図) 墓墳は左側壁で確認できた。墓墳は、地山整形された部分のやや東側から垂直に掘り込まれる。

4) 出土遺物

土器等の出土遺物は全く無かった。

5. 5号墳

1) 位置と現状(図版103-1、付図2)

5号墳は、菜切古墳群中で3、4号墳と共に、丘陵頂部から下がった南東側斜面中段位に立地している。北側の3号墳とは、墳裾で約4m離れている。墳丘の後面は谷水流路で削平されている。従って、墳丘自体も現高約0.3mをとどめるに過ぎず、その識別は、伐採後、バックフォアによる表土及び流土除去作業中、石室石材の露出で確認された。発掘の結果、等高線に直角で南南東側に向かって開口し、横穴式石室の内部構造をもつ小円墳であることがわかった。

2) 墳丘(図版121、122、第104・111図、付図3)

墳形と周溝(図版121、第104・111図、付図3) 前述したように5号墳は、古墳後面を谷水路で大きく削平されている。しかし、玄室短軸上に設定したトレンチ土層観察では、古墳構築における地山整形(調査の時間的都合で墳丘全体を削いていないが)はほとんど成されず、自然地形を利用したものであることが分かった。馬蹄形周溝は確認できなかった。墳丘規模は、4号墳側でやや間延びするものの、東西径4.2mを測る。

墳形は、墳径5m程のほぼ円形とみられる。

墳丘(第111図) 墳丘盛土はほとんどなかった。墳丘形成過程は、大きく2段階に分けられると推定できる。第1段階は、石室構築の壁石の裏込め的なものである。第2段階は天井部の被覆と墳形の整形に係わるものである。しかし、本墳では、前述したように、墳丘盛土がかなり削平を受けていたので、その形成過程の全容は把握できなかった。第1段階のみ観察できた。

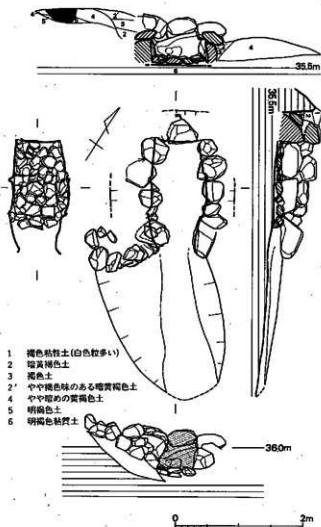
第1段階は墓墳内の腰石設置後、壁石積上げに平行して、一段ずつ盛り上げている。この段階の盛土は、墓墳上端部からさほど広がる事なく行われる。

墳丘遺存高は、玄室床面から約0.7mを測る。

外護列石(第111図) 羨道部右側壁端より連続して湾曲しながら巡る。列石は2段階みで、20cm程転石を面を揃えて積み上げる。

3) 主体部(図版121~123、第111・112図)

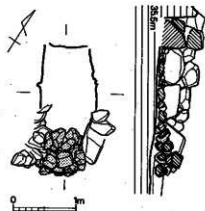
本墳の埋葬施設は、主軸をN-52°-Eにとり、丘陵南側傾斜面に谷へ向かって等高線と直角に開口する単室の両袖式横穴式石室と推定でき、袖部がほとんど発達しない、いわゆる無袖式横穴式石室と言ってもよい。石室は既に盗掘や開墾で、天井部と壁石上部を消失している。石室内は、側壁の崩落や流土によって埋没していた。玄室内は、盗掘を受けているにもかかわらず



第111図 5号墳墳丘土層図及び石室実測図(縮尺 1/60)

ず、床面の敷石は20cm程度の転石をもっとも多く使う。表面は平坦なものを選んでいますが、部分的に凹凸も見られる。盗掘等で出土物は全く無い。

石室は、縦長方形プランを有する玄室に、それと幅を同じくする短い墓道が接続する。玄門部の框石はない。玄門部に閉塞施設がみられる。石室全長は右壁1.68m、左壁1.7mを測る。石室を構築する石材は、安山岩の転石が使用されている。



第112図 5号墳閉塞石室測図(縮尺 1/60)

閉塞施設 (図版121-2、第112図) 転石を積み上げて閉塞するもので、現存高0.4mを測るが、元来は天井石との間が完全にふさがれていたであろう。閉塞施設の位置は、墓道側で奥壁中央から2m、羨道側で玄門部の框石を根石として奥壁中央から1.3m、その間約0.7mである。墓道側からみた場合、石積みは雑然とした状態である。下部に小ぶりの石、上部には大ぶりの石を積上げる。

玄室 (図版122、123、第111図) 奥幅0.7m、中央幅0.88m、前幅0.84m、左壁長1.12m、右壁長1.12mを測り、前幅の広い縦長方形プランをみる。奥壁および左右壁は、0.5m×0.4m程度の大ぶりの転石を面を揃えて、奥壁に1石、左右壁に3石配し腰石とする。腰石から上部は、やや小ぶりの転石を無造作に積上げている。腰石から上部二段目からは、やや内傾しながら持ち送られる。天井部は既がないが、さらに数段積上げてから天井石を架構したと推定できることから、床面からの高さは約0.9mと考えられる。

玄門部は無袖で特別な施設はない。玄門幅は0.56mを測る。ただ、左右側壁の腰石2石を比較するならば、大ぶりの石で玄門部を意識して、やや内側へ向けて配置していることから、両袖形態の形骸化したものと考えられる。

床面は、径20cmほどの転石、割り石で敷石が施される。敷石除去後、下方より排水溝等の施設は検出されなかった。

石室基底面 (第111図) 中央より両側壁に行くに従って、狭くなり低くなる。腰石を配置する部分は、さらに低くし、それらの安定を図っている。

羨道 (第111図) 羨道は、玄室部からすぐに墓道につながるので存在しない。

墓 道 (図版121-1、122、第111図) 墓道は玄門部より長さ2m、深さ0.2~0.4mで北側へ伸びる。

墓 墳 (第111図) 墓墳は墳丘を完全に除去することなく、左右側壁、奥壁側に設定したトレンチによる観察であったため、その全容は把握できなかった。東西方向では、その傾斜面でそれぞれ平坦面を作り、緩やかに掘り込む。北側では谷水路でほとんど削平され、確認できなかった。墓墳は、玄室短軸幅1.96mを測る。

4) 出土遺物

土器等の出土遺物は全く無かった。

6. 6号墳

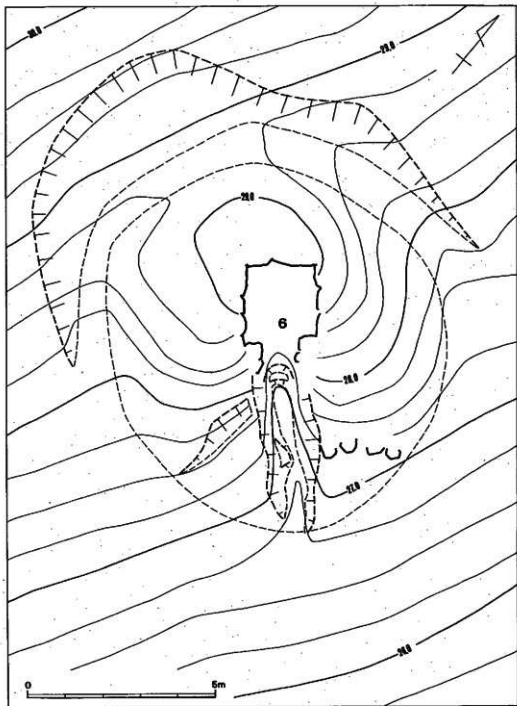
1) 位置と現状 (図版100-1、101-1、103-1、124-1、付図2)

6号墳は、菜切古墳群中で最下位(標高28.75m)に立地している。丘陵緩斜面北東側に7号墳(仮称、路線外にある、未発掘、現地保存)があり、7号墳と、墳裾で約4mしか離れていない。本墳の墳丘識別は、他墳と異なり、開墾等による削平がなく、墳丘の遺存状態が良いことから、伐採前から認識できた。伐採後も盗掘坑による天井部の若干の窪み、石材の露出から、より明らかになった。また、古墳後側では馬蹄形周溝らしい窪みも見られた。調査前の墳丘は、南北径14m、東西径12.5m(墳裾径8m)の不整形で、現高1.7mを測る。6号墳の馬蹄形周溝は、7号墳の周溝を切るように見えた。発掘の結果、等高線に直角で、南南東側に向かって開口する横穴式石室の内部構造をもつ円墳であることがわかった。

2) 墳 丘 (図版100-2、101-2、103-2、104-2、124-2、第105・113図、付図3)

墳形と周溝 (図版100-2、101-2、103-2、104-2、第105・113図、付図3) 前述したように6号墳は、ほとんど削平を受けていないため、墳丘そして周溝の遺存状態が極めて良い。墳丘は、丘陵南東側の傾斜面の傾斜角12.5°に構築される。古墳構築における地山整形(調査の時間的都合で墳丘全体を削いでいないが)は、古墳後側の傾斜面を半周する馬蹄形周溝の掘削とその内側の墳丘基底面の整地という二つの作業から成っていると推定された。

馬蹄形周溝は、傾斜角12.5°の傾斜面(標高29.5m)を上端として、傾斜面を削り出している。

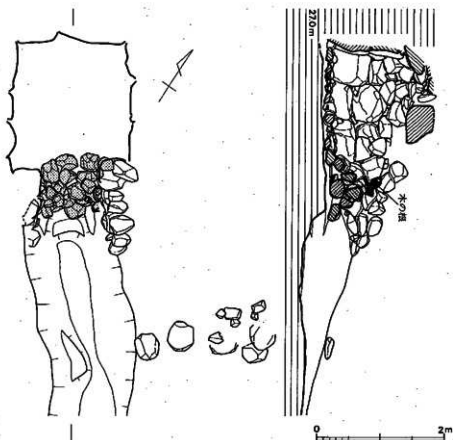


第 113 图 6 号墩冢遗址地形测量图(缩尺 1/100)

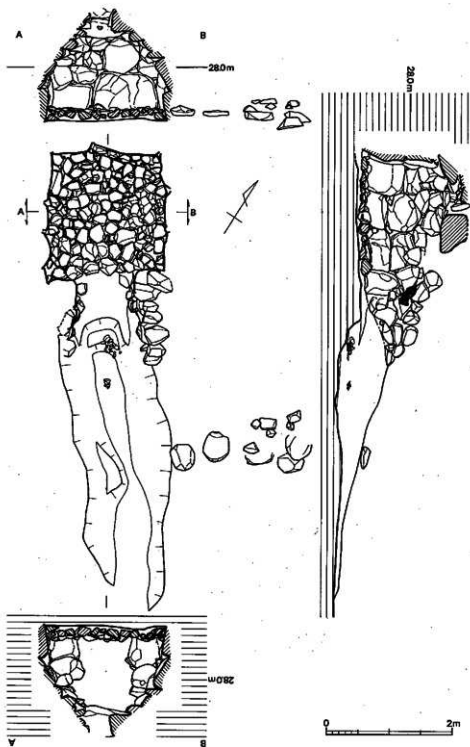
この周溝は、墳丘基底面を全周しない。これは、傾斜面からの流水を上方から下方に送り出すことを第一義とする施設であるため、開口部側前面には回らないのである。そして、6号墳の場合、玄室長軸上、短軸上に入れた3本のトレンチ土層観察から、地割区画のための地山削り出しは見られるものの、直ぐに墳丘基底面を作るための平坦面造成に移っている。従って、他墳でみられた墳丘基底面以下への顕著な周溝掘削が成されていない。こうして、馬蹄形周溝は、地割区画の削り出しと墳丘傾斜からなる構造をとり、周溝幅2.5~4m、深さ0.2~3mを測る。

墳丘基底面は、現状では、北西(標高29.5m)から南東(標高26.75m)へ徐々に傾斜するが、全体にテラス状に削り出され、東西方向でほぼ水平(標高28.05m)になる。

墳形は、平板測量による墳形形態から判断せざるを得ないが、南北墳裾径9.6m、東西墳裾径8.8m、周溝外上端部での東西径10.8mを測り、径10m程の円墳だったと推定される。



第114図 6号墳閉塞石実測図(縮尺 1/60)



第 115 图 6号筑石室实测图(缩尺 1/60)

墳丘(第105図) 墳丘は整地面を基底面として、盛土を行っている。墳丘は多少の盛土流出はあるものの、ほぼ原形を保っていると思われる。

墳丘形成過程は、大きく2段階に分けられると推定できる。第1段階は、石室構築の壁石の裏込め的なものである。第2段階は天井部の被覆と墳形の整形に係わるものである。本墳では、前述したように天井部が一部崩落しているが、その形成過程のほぼ全容は把握できた。

第1段階は墓室内の腰石設置後、壁石積上げに平行して、一段ずつ叩きしめながら盛り上げている。壁石相互間には、礫石や小石を充填している。この段階の盛土は、墓壇上端部からほとんど広がる事なく行われる。

第2段階は、第1段階に比べさほど固く突きかためることがなく、地山層を削って盛土として利用する。この段階でも、壁石積上げに平行して盛土されており天井石架構築後にはじめて、墳丘平面形を整える作業に移り、円墳を形成したと思われる。

墳丘遺存高は奥壁側で、玄室床面から約1.95mを測る。

外護列石(図版124-2、第116図) 羨道部側壁端よりやや離れて、墳裾に従い湾曲しながら巡る。右側に4石残る。本墳の外護列石は、墳丘自体が丘陵緩斜面にあるので、本来の盛土流出防止という機能を果たしておらず、墳丘外部の表象施設として考えたい。

3) 主体部(図版124-2、125~128、第114~117図)

本墳の埋葬施設は、主軸をN-51.5°-Wにとり、丘陵南東側傾斜面に谷へ向かって等高線と直角に開口する単室の両袖式横穴式石室である。石室はほぼ完存状態である。石室内は玄門部が流土によって埋没していた。玄室内は、閉塞部から盗掘を受けているにもかかわらず、床面の敷石は20cm程度の転石をもっとも多く使い、空間に小石をおさめる。表面は平坦なものを選んでいますが、部分的に凹凸も見られる。盗掘で出土遺物は全く無いと思われたが、墓道で土器、鉄器が出土した。

石室は、正方形プランを有する玄室に短い羨道を連接する。玄門部に閉塞施設がみられる。石室全長は右壁3.2m、左壁3.3mを測る。石室を構築する石材は、安山岩の転石が使用されている。



第116図 6号墳石室基底面実測図(縮尺 1/60)

閉塞施設 (図版125-1、第114図) 玄門部に閉塞施設が存在する。転石を積み上げて閉塞するもので、現存高0.5mであるが、元来は天井石との間が完全にふさがれていたであろう。閉塞施設の位置は墓道側で奥壁中央から1.8m、羨道側で奥壁中央から2.9m、その間約1.1mである。下部に大きな石を、上部に小さな石を積上げている。

玄室 (図版125-2、126～128、第115・116図) 奥幅1.7m、前幅1.9m、左壁長1.98m、右壁長1.8mを測り、前幅の広い正方形プランをみる。他墳と異なり、壁体構成を完全な形で観察できた。奥壁は2個の腰石を据えるが、右腰石は左より大きい。しかし、腰石上の4段の石はそれぞれ目地を揃えて、内傾させながら煉瓦積みする。隙間には小ぶりの石を配している。右側壁では、3個の腰石が据えられるが、奥壁に近い1石は他の2石より大きい。腰石の上の4段の石は目地を揃えて、内傾させて積み上げられる。隙間には、小ぶりの石を配している。左側壁も同様な壁体構成をする。側壁石を積上げる場合、大ききの異なる転石を使用しても何段か上で目地を水平に揃えようという苦心の跡が看取できる。天井石は一部消失しているが、ほぼ完全な天井架構法が見られた。天井石は3石載せていたようである。床石からの高さは約1.6mである。

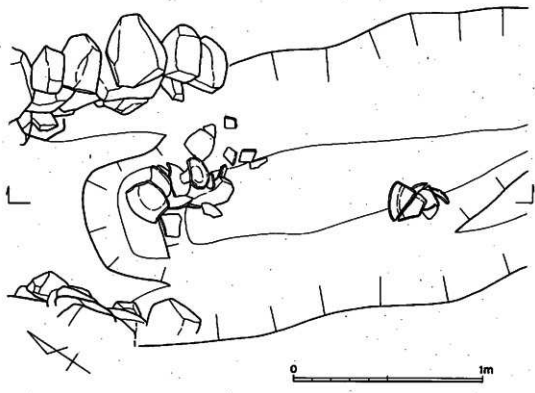
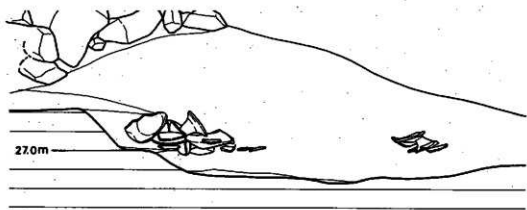
玄門部は両袖で特別な施設はない。袖幅は右袖0.46m、左袖0.46mで、玄門幅は0.92mを測る。袖石は転石を縦位に立てている。

床面は径20～40cmほどの転石、割り石で敷石が施されている。奥壁から玄門間の主軸上には比較的大ぶりの石を配す。床石除去後にはすぐ地山整形面が検出でき、排水溝などの施設は確認できなかった。

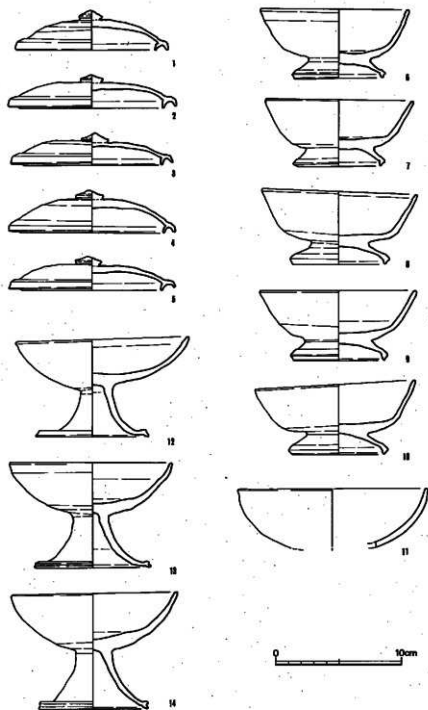
石室基底面 (図版126-1、第115図) 中央より両側壁に行くに従って、狭くなり低くなる。腰石を配置する部分は、さらに低くし、それらの安定を図っている。

羨道 (図版124-2、第116図) 天井部が欠落しているが、左右壁とも比較的良好な状態で残っている。壁体構成は玄室と異なり、腰石を省略せず、小ぶりの転石を無造作に3段積み上げる。前方に行くに従って、やや跳上がる。羨道長は左壁で1.25m、右壁で1.5mを測る。奥幅は玄門側で0.92m、墓道側で1.14mを測り、墓道側へ若干広がり気味になる。

墓道 (図版124-2、第116・117図) 墓道は羨道前面南側に伸びる。墓道は羨道部端から南側に3.8m伸びている。幅1.5m、深さ0.5mを測り、その先端部と羨道端部との比高差は0.3mある。この墓道からは、土器、鉄器等の出土遺物があった。追葬時の墓前祭祀または追葬時の



第 117 图 6 号发掘出土遗物状况图(缩尺 1/20)



第 118 图 6号墳出土土器実測図(縮尺 1/3)

かき出しによるものかは判断できなかった。

墓 墳 (図版105図) 墓墳は墳丘を完全に除去することなく、左右側壁、奥壁に設定したトレンチでの観察であったので、その全容は把握できなかった。また、墓墳は、地山整形された部分の平坦面から垂直に掘り込まれる。墓墳は、全掘していないので、一部でしか計測していないが、玄室幅2.5m、深さは玄室左壁側で0.8mを測る。

4) 出土遺物 (図版129、130-2、第117・118図)

土器 (高杯、蓋、杯)、鉄製品 (鉄鏃) が出土した。

土 器 (図版129、第118図)

蓋 (図版129-1、第118図1) 墓道から出土。口径12cm、器高3.1cmを測る。口縁部の口端部と内面のかえりは1対1で、頂部に扁平な摘みが付く。天井部は回転筒削りである。

蓋 (図版129-2、5、第118図2、5) 墓道から出土。口径13.2cm、器高2.6cmを測る。口縁部の口端部より内面のかえりがやや突出する。頂部に扁平な摘みが付く。天井部は横なである。5は口径13.1cm、器高2.7cmを測る。

蓋 (図版129-3、第118図3) 墓道から出土。口径12.7cm、器高2.5cmを測る。口縁部の口端部より内面のかえりがやや突出する。頂部に扁平な摘みが付く。天井部は上半部が回転筒削りで、下半部が横なである。

蓋 (図版129-4、第118図4) 墓道から出土。口径13.2cm、器高2.2cmを測る。口縁部の口端部と内面のかえりは1対1で、頂部に扁平な摘みが付く。天井部は横なである。

杯 (図版129-6、7、9、第118図6、7、9) 墓道から出土。6は口径11.8cm、底径7.1cm、器高5.4cmを測る。体部が高台から内湾しながら広がり、ゆるやかに立ち上がる。高台は外方にふんばった脚端の外側をつまみだして上にあげ、そこに稜をつける。内外面共横なである。7は口径11.7cm、底径6.7cm、器高5.2cmを測る。9は口径12.4cm、底径7.2cm、器高5.5cmを測る。

杯 (図版129-8、10、第118図8、10) 墓道から出土。8は口径12.2cm、底径7.3cm、器高5.7cmを測る。底部が高台よりわずかに張りだし、斜目に立ち上がる。底部と体部との境に稜が付く。高台は外方にふんばった脚端の外側をつまみだして上にあげ、そこに稜をつける。内外面共横なである。10は口径12.6cm、底径7.3cm、器高5.6cmを測る。

高杯 (図版129-12、第118図12) 墓道から出土。口径13.8cm、底径9cm、器高7.7cmを測る。杯部は底部から口縁部に斜目に緩やかに立ち上がる。脚部は外方に向け、短く広がり脚端部は

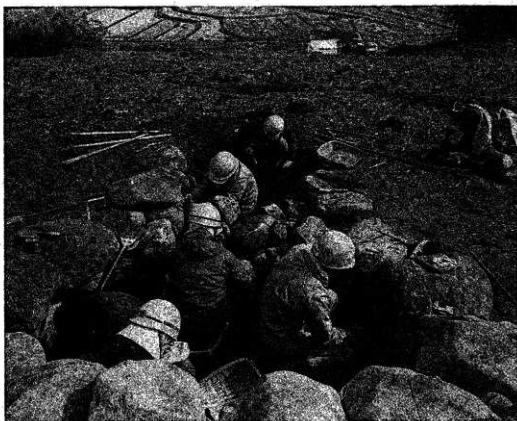
鳥嘴状に下方に突出する。内外面共横なでである。

高杯 (図版129-13、14、第118図13、14) 墓道から出土。13は口径12.9cm、底径9.3cm器高8.3cmを測る。杯部は底部からやや内湾気味に立ち上がる。脚部は外方に向け、「ハ」の字に広がり脚端部はやや肥厚になり、1条の凹線が回る。内外面共横なでである。14は口径13.2cm、底径8.6cm、器高9.1cmを測る。

甕 (図版129-11、第118図11) 出土位置不明。口径15cmを測る。

鉄製品 (図版130-2)

鉄鏃 墓道から出土。墓道出土土器の上層から検出されたが、腐食が甚大で図示し得ない。



菜切古墳群発掘作業風景

第3節 小 結

以上のように、古墳時代終末期の典型的な密集型群集墳である菜切古墳群6基について、その内容を位置と現状、墳丘、主体部、出土遺物という項目に分けて説明してきた。

本節では、6基の古墳を通して、特徴的な事項をいくつかまとめておく。

1. 菜切古墳群の諸特徴

1) 墳丘と墳形

各古墳の墳丘盛土は丘陵斜面に立地するため、6号墳を除いてほとんど流出していた。さらに、後世の開墾や盗掘で原形を留めるものはない。6号墳は、墳頂部一部が壊れるものの、ほぼ原形を残し、古墳墳丘築造過程を復元する上で参考になった。しかし、6号墳は、丘陵傾斜面上に占地されず、標高26.75~29.5mの緩斜面(傾斜角12.5度)上にあるため、他墳と墓墳、周溝の在り方が異なる。

6号墳は墳径9~10m程の円墳で、墳丘高2.1mを測る。墳丘基底面は標高28.05mでほぼ水平になり、そこから墓墳が掘り込まれ、その深さが0.8mを測る。6号墳では、腰石1石を据えるだけの墓墳しか掘られない。他墳の墓墳が腰石上1~2段目までの深さで墓墳を掘ることは大きく異なる。これは、先述したように、6号墳の立地に起因するものだろう。

2) 外護列石

外護列石は、1、5、6号墳で確認した。古墳墳丘土層断面観察から、墳丘基底面端部に(墳裾部)にのり、墳丘盛土の流出防護用の列石を有するもの(1、5号墳)、また他墳と異なり、

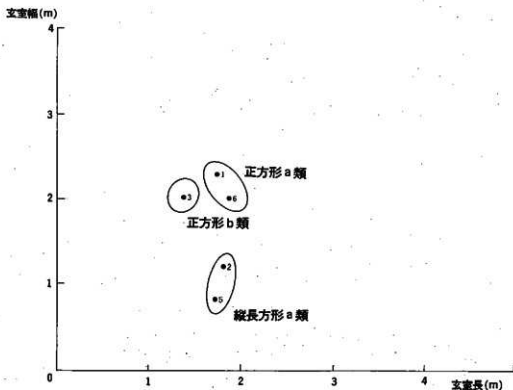
表5 菜切古墳群石室計測表

号数	墳形	主軸方位	墳丘規模		石室長		玄室長		玄室幅		羨道長	
			長径	短径	右	左	右	左	奥	前	右	左
1	円形	N-26°-W	9.6	-	3.62	3.9	1.55	1.56	2.1	2.2	2.22	1.9
2	円形	N-29°-W	9.2	5	3.1	3	1.6	1.56	1	1.12	1.2	1.5
3	円形	N-44°-W	9	-	3.52	3.42	1.56	1.4	1.78	1.66	1.96	2.02
4	-	N-39°-W	-	-	-	0.95	-	0.95	0.35	0.44	-	-
5	円形	N-52°-W	5	-	1.68	1.7	1.12	1.12	0.7	0.84	-	-
6	円形	N-51.5°-W	9.6	8.8	3.2	3.3	1.8	1.96	1.7	1.9	1.5	1.25

丘陵斜面に立地せず、最下段の緩斜面上にあるため、葺石のような外部表象施設として機能しているもの（6号墳）の二つのタイプに分けられる。

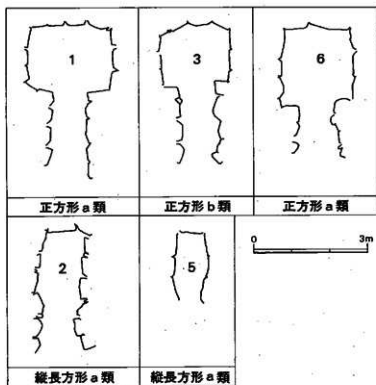
また、1、5号墳の外蔵列石は、羨道部先端から接続して墳裾を巡るが、その形態は、石堂

表6 桑切古墳群支室法量表



(単位：m)

羨道傾		袖幅		文・門幅	玄室床面高	閉・窓	排水溝	玄室形式	羨道形式	外蔵列石形式
奥	前	右	左							
0.9	1	0.57	0.75	0.9	47.1	有	有	正方形b類	II-A	I型
0.96	1.12	0.2	0.1	0.96	47.9	有	無	縦長方形b類	I-A	-
0.94	0.86	0.35	0.34	0.94	35.6	有	無	正方形c類	II-A	-
-	-	-	-	-	35.45	-	無	-	-	-
-	-	0	0	0.56	35.5	有	無	縦長方形c類	II-A	I型
0.92	1.14	0.46	0.46	0.92	27.3	有	無	正方形b類	II-B	-



第 119 図 菜切古墳群支室プラン分類図(縮尺 1/100)

中後ヶ谷古墳群でみたような 3 つのタイプのうち、I 型 (ハの字型) にあたるものである。

3) 閉塞施設

菜切古墳群では、4 号墳を除いて、すべて閉塞施設が存在した。

1、3 号墳は、玄門部よりやや墓道側に出たところに中心をもつが、2、5、6 号墳では玄門部辺にその中心をもつ。

5 号墳では、閉塞石が下方で小さく、上方で大きい。他墳は、下方が大きく、上方が小さい転石を使用している。

4) 玄室形態 (第 119 図、表 3・4)

菜切古墳群では、6 基の古墳を調査したが、4 号墳の小石室を除くと、すべて小型の横穴式石室である。

玄室形態は、大きく正方形と縦長方形の二つのタイプに分けられる。

I型（正方形タイプ）1、3、6号墳。

II型（縦長方形タイプ）2、5号墳。

それぞれのタイプは、玄室長・幅の法量により、さらに細分できる。

I-a類（正方形タイプ、玄室長、幅1.8m内外）1、6号墳。

I-b類（正方形タイプ、玄室長、幅1.5m内外）3号墳。

II-a類（縦長方形タイプ、玄室長1.7m内外、幅1m内外）2、5号墳。

以上の2型3類である。

5) 玄室主軸方向

横穴式石室開口方向は、南南東方向である。各古墳は丘陵斜面に立地し、谷側に向け開口する。等高線に平行に玄室主軸方向を向けるものはない。

6) 羨道部形態

羨道部は石室玄門部から接続して作られるが、その形態は、「ハ」の字型、「I」型に分けられる。さらに、羨道部先端から墓道部への連がりを立面的にみた場合、二つのタイプ（水平型、跳ね上り型）が認められ、それらを組みあわせて、細分すると以下の通りになる。

I-A型（「ハ」の字型、水平型）2号墳。

II-A型（「I」型、水平型）1、3、5号墳。

II-B型（「I」型、跳ね上り型）6号墳。

以上の2型3類である。

7) 排水溝施設

排水溝施設は、石堂中後ヶ谷古墳群でみたように、床石が排水溝の蓋石を兼ねて、玄室主軸方向に一直線に並べられる。その下層から排水溝が検出できるが、必ずしも奥壁部から羨道部に向けて傾斜していない。

8) 玄室石積み技法

石積み技法は、石堂中後ヶ谷古墳群で、煉瓦積み、重箱積み、乱積みの中の三つのタイプを確認したが、葉切古墳群では、すべて煉瓦積みタイプであった。

9) 副葬品

副葬品は、土器、鉄製品があった。鉄製品は最上段の1号墳、最下段の6号墳から出土しており、各グループの中での優位性を示す資料として注目したい。

出土土器は、小田編年のV～VI期であり、7世紀中葉から8世紀前半にわたるものである。造墓・追葬期間は、ほぼ1世紀あったと思われる。

以上のように、菜切古墳群について、その諸特徴をまとめてきた。これらをもとに、次に菜切古墳群の単位集団の抽出、墓道復元、造墓の消長についてまとめてみたい。

2. 菜切古墳群の単位集団抽出と墓道復元 (図版139、第120図)

菜切古墳群では、丘陵斜面の上・中・下段の古墳占拠から三つの単位集団が抽出できる(みかん畑等による開墾による削平で、完全な抽出作業ではないが)。

上段グループは、1・2号墳から成り、中段グループは、3・4・5号墳、下段グループは、6号墳と7号墳(未発掘墳)から成っている。

1・2号墳では、墳丘、石室規模・構造、副葬品から、1号墳が優位に立ち、2号墳が付随するという関係が看取できる。つまり、中心的な1家族(1号墳)と血縁的紐帯関係をもつ1家族(2号墳)という図式が認められる。

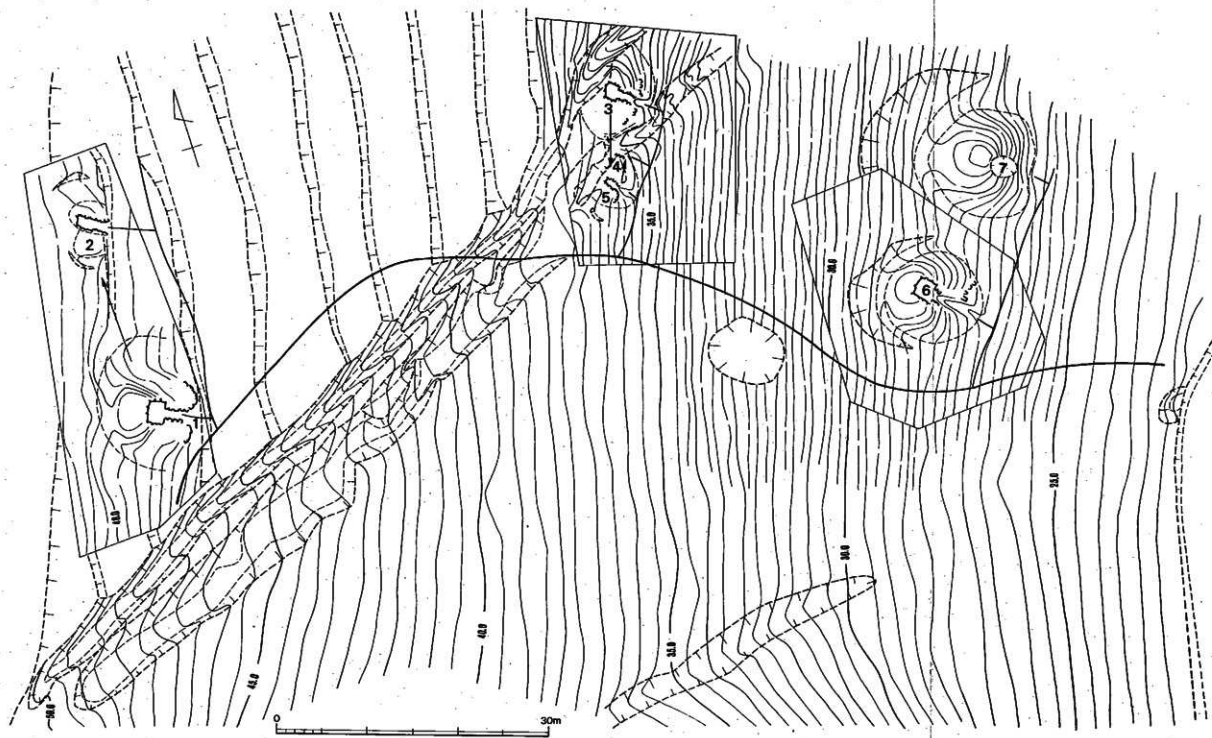
中段グループの3・4・5号墳では、4号墳が最も後出することは、土層観察、古墳占拠関係、墳丘、石室規模・構造(両袖式→無袖式への変化等)から判断できる。また、3、5号墳では、5号墳の石室形態が両袖式から無袖式へむかう途上の形骸化した両袖式横穴室となることから、5号墳が後出することがわかる。従って、三者の先後関係は3号墳→5号墳→4号墳になる。中段グループ、1単位集団の内部構造は、より優位な1基(3号墳)とそれに従う2基(4・5号墳)によって構成されている。換言すれば、これは、中心的な1家族(3号墳)と血縁的紐帯関係にある2家族(4・5号墳)から成り立っていると推定できる。

最後に、6・7号墳紐帯関係については、7号墳が未掘のため、不明である。

以上のことから、菜切古墳群の墓道復元を行なうと、古墳群の単位集団の抽出、単位集団の列状配置より、図版139、第120図のような墓道が推定できる。

石堂中後ケ谷古墳群の単位集団の内部構造と比較すると、単位集団内における等質性を示す石堂中後ケ谷古墳群と単位集団内における隔差性を示す菜切古墳群の二者に区分できる。

こうして、菜切古墳群は、石堂中後ケ谷古墳群とほぼ同時期に造墓を開始するものの、その内部構造は、石堂中後ケ谷古墳群と異なり、1家族を中心とした血縁的紐帯関係を持ちながらも、隔差性を有するものであることがわかった。



第 120 図 栗切古墳群排水過程図(縮尺 1/300)矢印は新田開係を示す

目 录

1. 柔切古墳群全景（調査前）
○は調査前未検出



2. 柔切古墳群全景（調査後）





1. 菜切古墳群全景（調査前）○は調査前未検出



2. 菜切古墳群全景（調査後）

1. 1・2号墳 全景（調査前）



2. 1・2号墳 全景（調査後）



1. 3・4・5・6・7号墳 全景（調査前） ○は調査前未検出



2. 3・4・5・6・7号墳 全景（調査後）



1. 3・4・5号墳 全景（調査後）



2. 6・7号墳 全景（調査後）





1. 1号墳 調査前状況



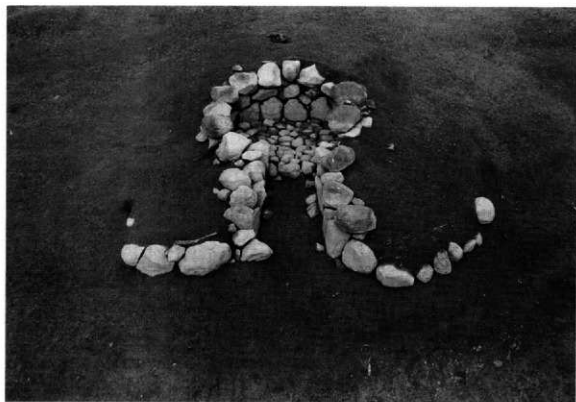
2. 1号墳 調査後状況



1. 1号墳 閉塞状況（奥壁方向をみる）



2. 1号墳 閉塞状況（羨道方向をみる）



1. 1号墳 石室と外護列石



2. 1号墳 奥壁



1. 1号墳 石室左側壁



2. 1号墳 石室左側壁



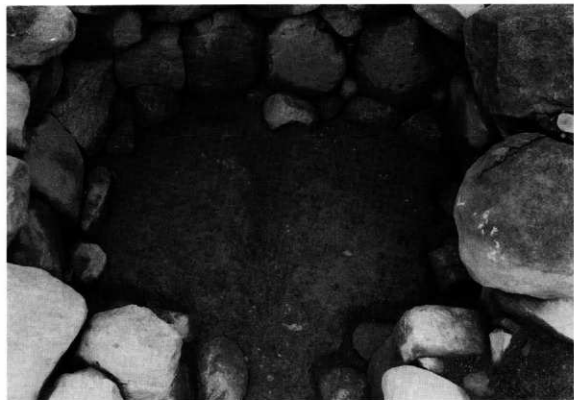
1. 1号墳 石室右側壁



2. 1号墳 石室右側壁



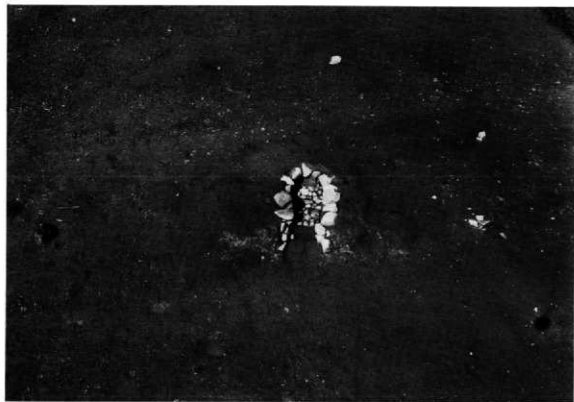
1. 1号墳 石室床石除去後



2. 1号墳 石室床石除去後



1. 2号墳 調査前状況



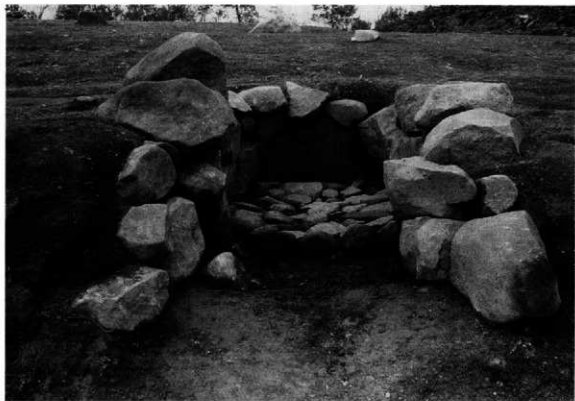
2. 2号墳 調査後状況



1. 2号墳 閉塞状況（奥壁方向をみる）



2. 2号墳 閉塞石除去後



1. 2号墳 奥室



2. 2号墳 玄門



1. 2号墳 石室左側壁



2. 2号墳 石室左側壁



1. 2号墳 石室右側壁



2. 2号墳 石室床石除去後

1. 3号墳 調査前状況 ○は調査前未検出



2. 3号墳 調査後状況





1. 3号墳 閉塞状況（奥壁方向をみる）



2. 3号墳 閉塞石除去後



1. 3号墳 石室と外護列石



2. 3号墳 石室と外護列石(床石除去後)



1. 3号墳 石室左側壁



2. 3号墳 石室右側壁



1. 4号墳 石室（東から）

2. 4号墳 石室（奥壁方向から前方をみる）





1. 5号墳 全景



2. 5号墳 閉塞状況(奥壁方向をみる)



1. 5号墳 石室と外護列石



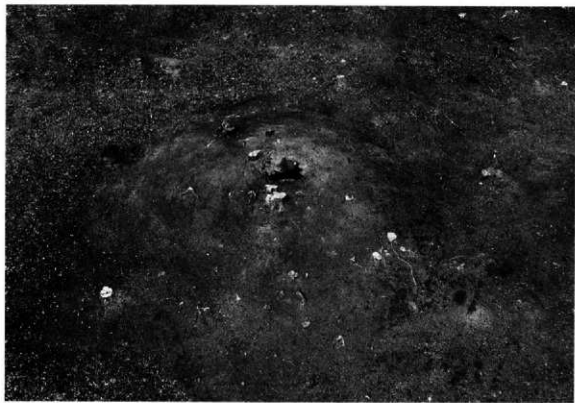
2. 5号墳 石室と外護列石



1. 5号墳 石室左側壁



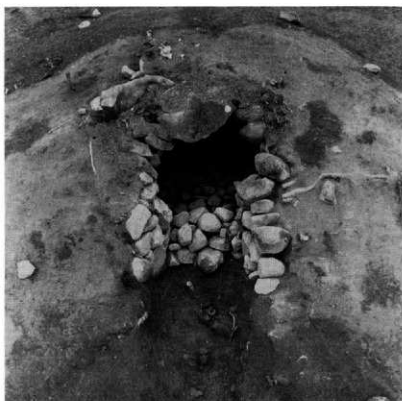
2. 5号墳 石室右側壁



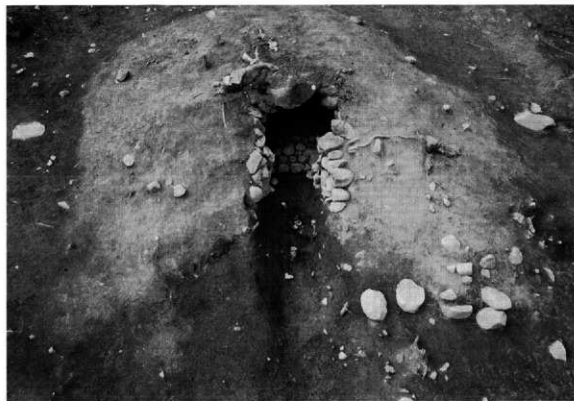
1. 6号坑 调查前的状况



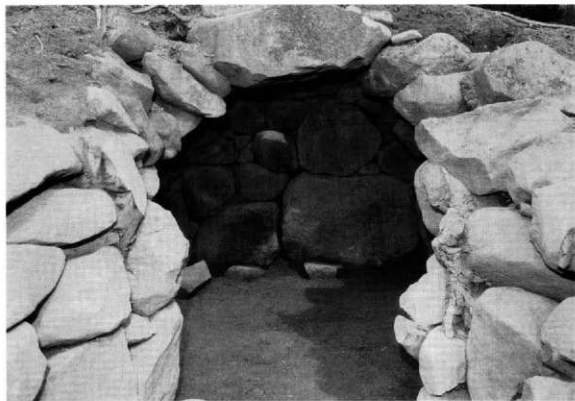
2. 6号坑 调查后状况



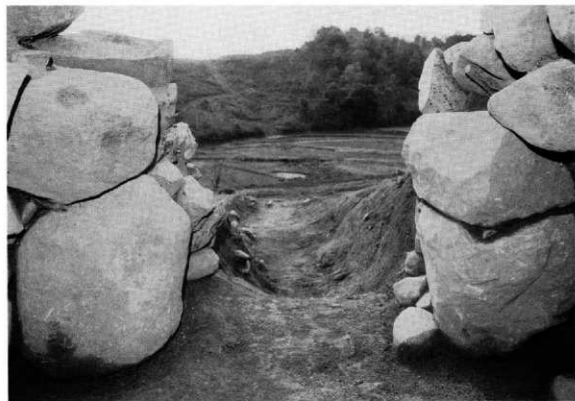
1. 6号墳 閉塞状況（奥壁方向をみる）



2. 6号墳 閉塞石除去後



1. 6号墳 奥壁



2. 6号墳 玄門



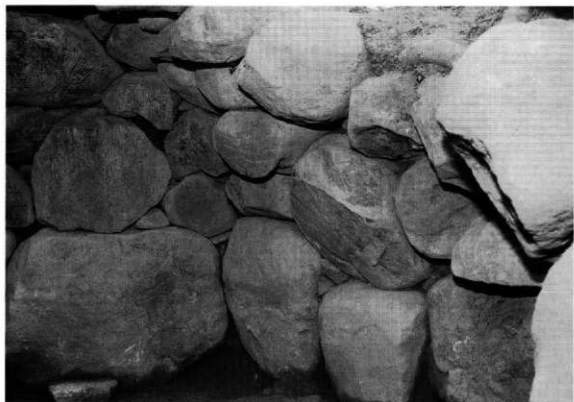
1. 6号墳 石室左側壁



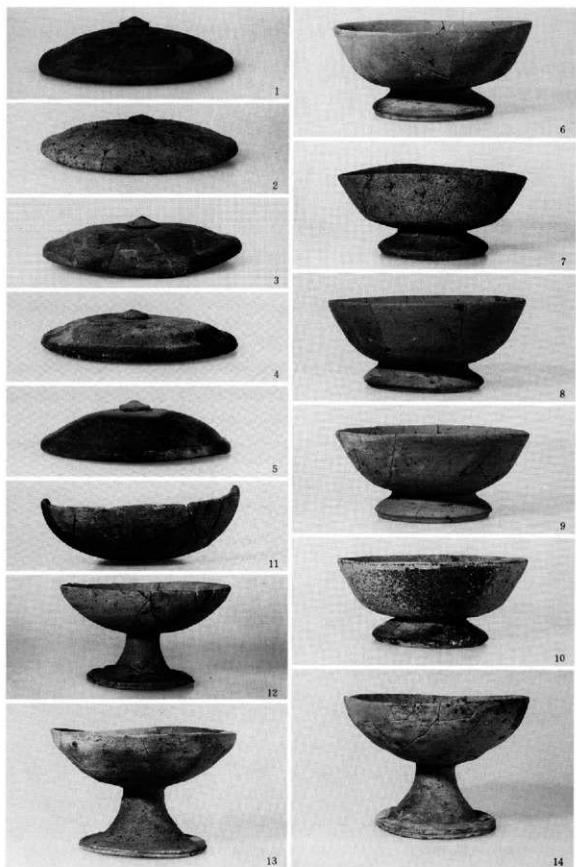
2. 6号墳 石室左側壁



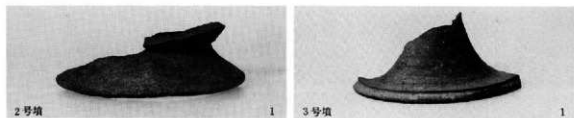
1. 6号墳 石室右側壁



2. 6号墳 石室右側壁



柔切古墳群 6 号墳出土土器



1. 2、3号墳出土土器



2. 6号墳 墓道出土遺物檢出狀況

第4章

頭無古墳群の調査

第1節 はじめに

第2節 遺構と遺物

第3節 小 結

第4章 頭無古墳群の調査

第1節 はじめに

頭無古墳群は、北側の葉切古墳群とは細長い谷を挟んで、周防灘に伸び、隣接する舌状丘陵上に所在する(付図1)。丘陵は南端で土取り工事、各種施設建設等、丘陵上も植木等の開墾による削平が著しかった。しかし、試掘調査では、丘陵尾根上に土壌状遺構、また古墳の露出(1号墳)も見られた。さらに、付近に山添古墳群(1号墳より北に200m)、破壊墳(1号墳より北東に30m、図版135-2)、そして既に消滅したが昭和50年に調査した頭無古墳(1号墳より北東に15m)等が存在することから、路線内での古墳群の残存が十分に考えられた(付図1)。

調査は、その対象面積を15000㎡と定め、昭和61年11月1日から昭和62年3月31日まで実施された。全面発掘をして遺構の検出を図ったが、やはり削平等が甚大で試掘調査で確認した古墳1基(1号墳)、土壌状遺構の他に、住居跡1軒を検出したに留まった(図版131-1、付図4)。

第2節 遺構と遺物

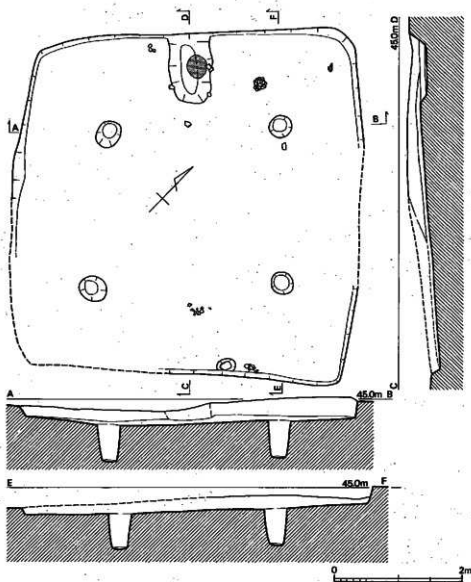
1. 1号住居跡(図版132、133-1、第121図)

調査区南端に位置し、1号墳とは南東に、1m程しか離れていない。5.5×4.9mの略正方形のプランを呈する。住居跡は東北側(1号墳側)の削平が激しく、壁体は10~30cm位しか残っておらず、一部ではプランを明らかに出来ないところがあった。住居跡は支柱穴を4本持ち、北北西側壁中央にカマドを付設する。カマドは破壊が著しく、焼土の一部残存でその位置を知るに過ぎなかった。床面および埋土中からは土器片が出土したが、いずれも小片で、磨滅を受けており、その器種、器形を知り得るものはなかった。

2. 1号墳

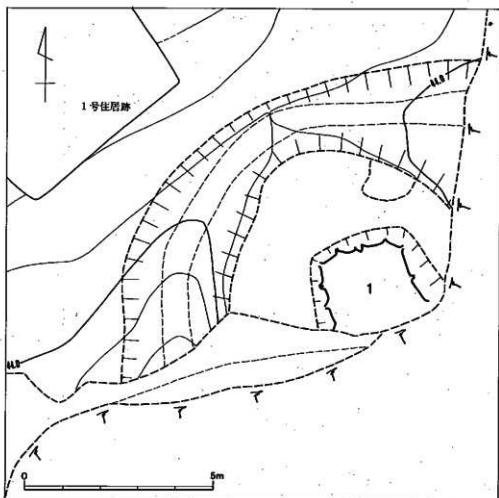
1) 位置と現状(図版132、133-2、第122図)

1号墳は、調査区南端に位置し、1号住居跡とは北北西に、1m程しか離れていない。土取り工事で半壊し、丘陵崖面に石室を剥き出しにしていた。標高44m付近に立地する。墳丘は削



第 121 図 1号住居跡実測図(1/60) アミ部分は赤変箇所

平でほとんど無い。発掘の結果、本墳は、等高線に直角で南南東に向かって開口する横穴式石室の内部構造を持つ円墳になると推定された。石室構造は、昭和50年に調査された頭無古墳とほぼ同形態をとる。

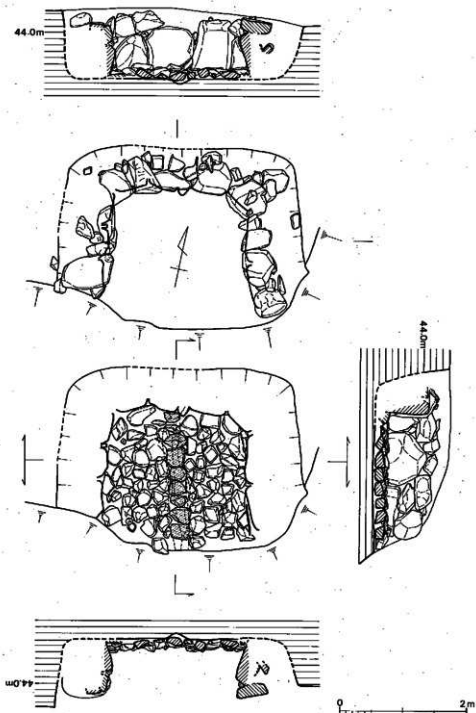


第122図 1号墳調査後地形測量図(縮尺 1/100)

2) 墳丘 (図版133、134-1、第122図)

墳形と周溝 (図版133-2、第122図) 1号墳構築における地山整形 (調査の時間的都合で墳丘全体を削いでいないが、墳丘に設定した東西北各トレンチからは、古墳後側の傾斜面を半周する馬蹄形周溝の掘削とその内側の墳丘基底面の整地という二つの作業から成っていると推定される。

馬蹄形周溝は、古墳後半部しか残っていないが、幅1.5~3m、深さ0.25mを測る。玄室真裏部では周溝が回り切らず、上方からの流水を左右の周溝に振りわけ、下方に送っていたことが



第 123 图 1 号填石室实例图(1/60)

分かる。周溝外側上端部の東西径は13.8m、周溝内側上端部での東西径は10m程度である。墳丘基底面は全体にテラス状に削り出している。

墳形は周溝の巡り方から径10m程度の不整形円形になると思われる。

墳丘 (図版134-1) 墳丘は周溝内側の整地面を基底面として、盛土を行っている。墳丘形成過程は石堂中後ヶ谷古墳群、菜切古墳群で見てきたような2段階方式をとる。

墳丘遺存高は、玄室床面から1.1mである。

外護列石 残存する墳丘上では検出できなかった。

3) 主体部 (図版134、136-2、第123図)

本墳の埋葬施設は、主軸をN-15°-Eにとり、谷に向かって開口する横穴式石室である。前半部は既に土取り工事で破壊され、玄門部、羨道部、墓道は消失している。破壊された玄室も、腰石とその上1段、床石を残すのみであった。しかし、玄室床面は殆ど動いておらず、床面から土器、鉄製品が出土した。

玄室は略正方形プランになる。玄室奥壁、側壁、床面を構築する石材は、安山岩の転石である。

閉塞施設 削平破壊により、全く残っていなかった。

玄室 (図版134、136-2、第123図) 奥幅2.12m、残存部前幅2.35m、残存部右壁長1.75m、残存部左壁長1.5mを測り、玄室平面形は、略正方形プランになると推定される。壁体の構成法は、奥壁で大小4石の腰石が面を揃え、内傾して据えられるが、左右端2石は特徴的な据え方をしている。それは、奥壁と左右側壁とで隅角を作らず、それぞれの端部に斜目にわたして、隅丸状を呈するのである。奥壁は主軸左側の一番大きな腰石上面に合わせ、2段目以上の石を置くようである。煉瓦積みで2段目まで残る。左側壁は腰石が2石残り、面を揃え内傾して据えられる。玄門側の1石は横位に据えられる。石積みは、奥壁側の大きな腰石上面に合わせて、2段目以上を置く。煉瓦積みと重箱積みを併用させ、奥壁側の大ぶりの腰石上、1段目の上面で水平方向に目地が通るようにする。天井部は既がないが、さらに数段積み上げてから天井石を架構したと思われることから、床面からの高さは約1.7mと考えられる。

床面は径20~30cm程の転石で敷かれ、主軸上には径30cm程の石が一直線上に並ぶ。床石除去後、その下から奥壁から玄門方向に伸びる排水溝施設が検出された。排水溝は、幅30cm、

深さ5cm程であるが、必ずしも玄門部方向に向かって深くなるということはない。

石室基底面 床石除去後、調査時間の都合で掘削が出来なかったので、不明である。

羨道 破壊され全く分からなかった。

墓道 破壊され全く分からなかった。

墓墳 (第123図) 墓墳は古墳裏側で標高43.86mから掘り込まれる。東西幅3.8mを測る。

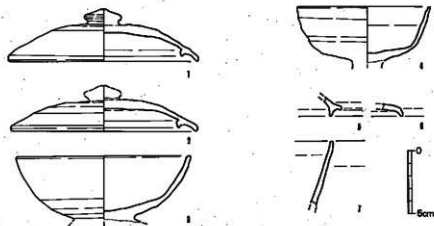
4) 出土遺物 (図版135-1、136-2、第124図)

出土遺物には土器と鉄製品があった。出土土器は小田編年のV~VI期で、7世紀前半~後半に当たる。

土器 (図版135-1、136-2、第124図)

蓋(1) 玄室床面右前部より4の高杯と重なって出土。口縁部内面にかえりが付く。口端部より突出することはない。天井部はやや膨らみ、頂部に扁平の摘みが付く。天井部上半部が寛削りで、その他は横なでである。口径15cm、器高4.2cmを測る。

蓋(2) 玄室床面より出土。口縁部内面にかえりが付く。口端部より突出することはない。天井部頂部の摘みは欠失している。天井部上半部は寛削りで、その他は横なでである。口径14.5



第124図 1号墳出土遺物実測図(1/3)

cmを測る。

杯(3) 玄室床面右奥壁側より出土。高台は欠失している。底部からやや内湾気味に上方に立ち上がり、口縁部に至る。端部は丸くおさめる。底部辺は鋭削りで、その他は横なのである。口径13.8cmを測る。

高杯(4) 玄室床面右前部より1の蓋の上で出土。脚部が欠失している。杯底部から口縁部へ逆台形状に広がる。底部と体部の境に凹線が回る。口縁端部は丸くおさめる。内外面共横なのである。口径10.6cmを測る。

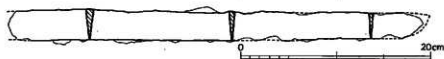
蓋(5) 墳丘盛土より出土。口縁端部で鳥嘴状になる。

蓋(6) 墳丘盛土より出土。口縁部内面にかえりが付く。口端部よりかえりが突出する。

平瓶(7) 墳丘盛土より出土。口頸部で頸部から斜目に直に立ち上がり、口縁部にいたる。端部は丸くおさめる。

鉄製品 (図版135-1、136-2、第125図)

鉄刀 玄室床面右前側壁際で側壁に平行になり出土。残存身長43.5cm、身幅2.6~3cm、身背幅0.5~0.8cmを測る。



第125図 1号墳出土鉄器実測図(1/2)

第3節 小 結

頭無古墳群は、先述してきたように、後世の甚大な削平もあいまって、ほとんど遺構が検出されず、古墳1基、住居跡1軒をみるだけだった。しかし、丘陵南側斜面には、現存する路線外の破壊墳、昭和50年調査の頭無古墳(消滅)を含んだ古墳群が存在していたことは確実である。従って、北側の山添古墳群とは墓域を異にすると考えられる。さらに、丘陵上には住居跡が数多く存在していたと推定できることから、集落と墓地との関係を考える上において、貴重な資料が提供できたと思われる。以下、古墳、住居跡、それら相互の関係について、若干まとめてみたい。

1号墳からは、玄室及び墳丘盛土中から遺物が検出できた。出土土器は、追葬時の片付けに

より型式差のあるものが混在する。小田編年でみた場合、V～VI期にまで及んでおり、築造から追葬完了まで約100年の時間差がある。つまり、7世紀前半から後半までと推定出来る。

1号墳は昭和50年に調査した頭無古墳と比較してみると、出土土器からその時期はほとんど同時である。石室は主軸をほぼ同じ方向に向け、開口している。しかし、規模は奥壁幅が1号墳で2.12m、頭無古墳で1.6mと1号墳のほうが大きい。さらに石室床石は1号墳のほうが石材が選定され、主軸上に排水溝施設を持つという丁寧な作りをしている。その上、1号墳では鉄刀が出土していることから、1号墳が頭無古墳より上位に立つことは明らかで、破壊墳を含んだところの1単位の集団の内部構造は、より優位な1基（1号墳）とそれに従う2基（頭無古墳と破壊墳）によって構成されている。換言すれば、中心的な1家族とそれに従う2家族からなっていたと推定できよう。その他に1号墳では、棺体配置についても貴重な資料を提供している。つまり、出土した遺物で、左右に寄せられるものと主軸上奥壁側にあるものに二分できる。前者は明らかに追葬時の片付けによるもの、後者は最終埋葬時のものであることが分かる。

次に、住居跡については、出土土器が小片で時期を決定できるものがない。しかし、住居跡の項でも触れたように、住居跡北東側は他の部位に比べ、壁体はかなり削平を受けている。これは、壁体際から1mと離れていない1号墳築造時の削平と考えられる。従って、その年代は、1号墳築造以前の7世紀前半以前と推定できる。

圖 版

1. 頭無古墳群全景（北西から）



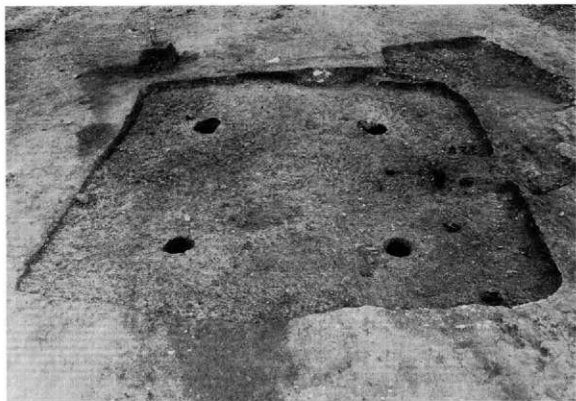
2. 頭無古墳群作業風景



1. 頭無古墳群 調査区近景



2. 頭無古墳群 1号住居跡と1号墳



1. 1号住居跡 全景（東から）



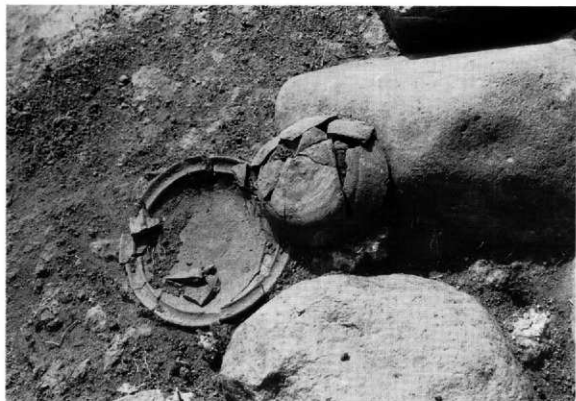
2. 1号墳 全景（東から）



1. 1号墳 全景（南から）



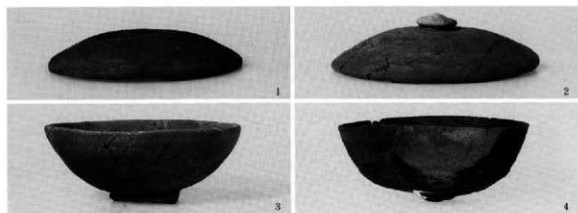
2. 1号墳 石室



1. 1号墳 遺物出土状況



2. 1号墳 南東側所在破壊墳



1. 1号墳 出土土器



2. 1号墳 出土遺物検出状況

第5章

おわりに

第1節 石堂中後ヶ谷古墳群、菜切古墳群、頭無古墳群の諸特徴と今後の課題

第2節 石堂中後ヶ谷古墳群、菜切古墳群、頭無古墳群に対する若干の考察

第5章 おわりに

第1節 石堂中後ケ谷古墳群、菜切古墳群、 頭無古墳群の諸特徴と今後の課題

以上のように、今回報告した3つの遺跡群(石堂中後ケ谷古墳群、菜切古墳群、頭無古墳群)は、一般国道10号線椎田バイパス建設に伴う事前発掘調査で明らかになったものである。それらは、福岡県築上郡椎田町に所在した古墳時代終末期の群集墳である。その内容については、位置と現状、墳丘、主体部、出土遺物という項目に分けて説明し、各章毎にいくつかの特徴的な事項を抽出してきた。ここでは、それらを順にまとめながら、特に注目される項目については、別途検討してみたい。

④分布、立地

3つの古墳群は、周防灘に伸びる舌状丘陵の南側斜面に分布している。立地は、標高約25~60m内外に取まる。古墳時代終末期の群集墳は、その墓域を平野部から隔絶した谷奥部に設定することが多いが、椎田町所在の古墳群は、海岸部に近い谷口部に墓域を設定する特徴をもつ。

⑤群集形態

古墳時代終末期の群集墳は、大きく散在型と密集型に分かれる。^(表1)三つの古墳群は、密集型に属するものである。特に石堂中後ケ谷古墳群は東西50m、南北40mの墓域の中に16基の古墳が群在する典型的な密集型群集墳である。7世紀前半から造墓を開始するが、それらは、強い規制下におかれ、墓域を指定・限定された新興中小首長層の群集墳と推定される。

⑥墳丘、外部施設

各古墳の墳形は、円形、楕円形、不整形の大きく3つに分けられる。しかし、墳形は元來、円形を基本形として築造されていたと考えられる。ところが、それぞれの古墳が、密集状態で、他墳との間に割け入って占地されたため、その墳形はおのずから制約されることになる。

また、石室規模が縮小するにつれ、墳丘も縮小する傾向がみられる。

外部施設には、墳丘裾を巡る外護列石がある。外護列石は、墳丘土層観察から、その墳丘基底面端部にのることがわかった。つまり、外護列石は、盛土流出防止を第一義にした施設であることが確認できた。しかし、中には菜切古墳群6号墳のように、外護列石という本来の意味が形骸化し、外部表象施設としてその存在を留めるものもある。

④横穴式石室の規格性と系統（図版93～96、第128図）

石室中後ケ谷古墳群、菜切古墳群、頭無古墳群の発掘調査により、計23基の古墳時代終末期古墳が検出できた。それらは、後期群集墳にみられる玄室平面形態の多様性に比べ、律令政治確立へ向けた中央・地方の一元化支配の強化の波を漸移的に受容することによる玄室形態、規模の規制が看取できるようになる。玄室形態は、大きく三つの形態（正方形、縦長方形、横長方形）に分けられ、次第に縮小化していく。しかし、こうした状況は、畿内地域で見られる古墳時代終末期群集墳が、縦長方形タイプの玄室形態で、画一的に縮小していくことは、極めて対象的である。それは、中央政権による一元化支配の過程が、各地で画一的に進行したのではなく、各地域毎に、その実情に合わせて、遅速をもって再編されていったことを如実に物語るものである。つまり、ここに地方における古墳時代終末期群集墳の動態を探る意義が大きくなってきたのである。このことについては、第2節で詳述することにする。

⑤副葬品

石室中後ケ谷古墳群の各古墳からは須恵器（蓋、杯、高杯、甌、椀、平瓶、長頸壺、甕、盤）、土師器（蓋、椀）の土器のみの出土があった。菜切古墳群では、須恵器（蓋、杯、高杯、椀）と共に、鉄鏝の出土を見た。また頭無古墳群では、須恵器（蓋、杯身）と共に鉄刀が出土した。

この時期の古墳群の副葬品については、祭祀等に用いられた土器、装身具である耳環等を除くと、実質的な副葬品はほとんど見当たらない。後期古墳まで副葬されていた非日常的な遺物は姿を消し、日常的なもののみが残るのである。こうした状況は、畿内各地の終末期群集墳で、既に指摘されている。

先述したように、石室中後ケ谷古墳群の副葬品は土器のみであった。各古墳群間での顕著な優劣関係は見い出せず、それぞれは均質的である。

これに反し、菜切古墳群では、その立地が標高により、上段（1、2号墳）、中段（3、4、5号墳）、下段（6号墳）の3つのグループに分けられる。それぞれに中心的家族の存在を窺わせる。中でも1・6号墳では、土器以外に鉄製品の出土があり、他墳との顕著な差が見られた。また、頭無古墳群では1号墳1基しか検出していないが、昭和50年に調査した頭無古墳、さらに北西に位置する破壊墳を比較をした場合、1号墳の石室規模や鉄刀の出土から、1号墳を中心とした血縁的集団が抽出できる。つまり、石室中後ケ谷古墳群では見られなかった階層差が、これら2つの古墳群では看取できるのである。

⑥古墳群の存続期間

各古墳の消長時期については、出土した土器から判断していかねばならない。既ね、その期

間は、7世紀前半から8世紀前半まで存続していたことがわかる。この期間の中で、古墳築造における上からの規制が働き、8世紀中葉までには、全く造墓、追葬活動を停止する。

以上のように、今回、調査した石堂中後ケ谷古墳群、菜切古墳群、頭無古墳群について、いくつかの項目を取り上げ、まとめてきた。

このうち、④と①について第2節で若干検討を試みることにしたい。特に④については、旧豊前国の上毛郡、築城郡に目を広げ、現在の築城町の安永古墳群、豊前市の黒部古墳群を含めて、その玄室プランの類型化を探ってみる。また①については、畿内地方の群集墳研究で注目される墓域再編過程の類型に着目し、ひき続いて類型化された古墳群の被葬者集団についても若干考えてみたい。

第2節 石堂中後ケ谷古墳群、菜切古墳群、頭無古墳群に対する若干の考察

1. 石室の規格性について（図版93～96、第128図、表6、7）

筆者は、第2章の第3節石堂中後ケ谷古墳群の小結の項で、玄室平面形態について3類8型の細分を試みた。そして、各類型は漸次縮小化の傾向を示しつつ、その造墓活動の停止にむかうことを確認した。

本項では、さらに、周辺古墳群でこうした類型化が指向できないかを検討してみる。

石堂中後ケ谷古墳群の他に菜切古墳群、頭無古墳群さらに同じ旧豊前国築城郡の安永古墳群、頭無古墳、上毛郡の黒部古墳群を取り上げる。

それぞれの内容については、第1章第2節の「位置と環境」で述べたので、重複の煩を避けるが、そこで取り上げていない安永古墳群については以下、若干の説明を加える。

安永古墳群は、昭和57年、福岡県教育委員会により発掘調査された。計4基の古墳が調査され、その出土遺物から7世紀前半から7世紀後半にかけての群集墳であることがわかった。玄室平面形態がわかるのは、3・4号墳で、共に正方形プランを呈する。

さて、先述した各古墳群の古墳の玄室平面プランと玄室長・幅の関係を石堂中後ケ谷古墳群の石室計測表、玄室法量表を基に表6・7のように表現してみると表6・7のようになる。

まず玄室平面プランは、正方形（玄室幅／玄室長比0.8～1.3）、縦長方形（玄室幅／玄室長比0.4～0.6）、横長方形（玄室幅／玄室長比1.4～2）の3タイプに分かれる。

さらに、玄室長・幅の関係から、正方形タイプは、a～d類に細分できる。

正方形a類：黒部古墳群3号墳。

表7 築上地域各古墳石室計測表

号数	墳形	主軸方位	墳丘規模		石室長		玄室長		玄室幅		表道長	
			長径	短径	右	左	右	左	奥	前	右	左
石室中後・古古墳群												
1	不整形	N-36.5°-W	7	-	3.04	3.06	2.02	1.9	0.74	1.02	1	1.17
2	不整形	N-69°-W	6.9	-	4.54	-	1.56	1.59	1.96	-	2.98	3.09
3	不整形	N-69°-W	5.8	-	4.18	-	1.73	-	1.93	-	2.45	2.43
4	不整形	N-19°-W	6	-	2.76	2.82	1.24	1.34	1.57	1.5	1.44	1.4
5	不整形	N-61°-W	10	-	3.62	3.94	1.2	1.12	1.9	1.8	1.25	1.25
6	楕円形	N-55°-W	5.5	4	2.38	2.24	1.44	1.4	0.7	0.8	0.92	0.95
7	楕円形	N-42.5°-W	-	5.75	3.7	3.72	2.16	2.1	1.1	1.1	1.85	2
8	円形	N-31°-W	9.2	-	2.88	2.6	1.15	1.2	1.78	1.72	1.67	1.47
9	楕円形	N-27°-W	5	3.1	2.51	2.5	1.65	1.67	0.84	0.74	0.75	0.86
10	円形	N-45°-W	-	5.3	2.76	2.62	1.16	1.22	1.7	1.68	1.45	1.35
11	楕円形	N-67°-W	-	7.5	2.3	2.4	1	0.96	1.94	1.9	1.25	1.36
12	不整形	N-55°-W	6.5	-	2.51	2.4	1.1	0.98	1.2	1.08	1.48	1.23
13	円形	N-49°-W	6	-	2.62	2.51	1.42	1.51	1.76	1.79	1.2	1.0
14	不整形	N-47°-W	8.1	7.2	3.1	3.2	2.21	2.13	0.94	1.04	1.04	1.08
15	不整形	N-32°-W	-	6.8	2.5	2.7	1.68	1.76	1	0.92	0.66	0.44
16	不明	N-57°-W	-	-	1.74	1.64	1.74	1.64	0.74	0.9	-	-
東切古墳群												
1	円形	N-26°-W	9.6	-	3.62	3.9	1.55	1.56	2.1	2.2	2.22	1.9
2	円形	N-29°-W	-	-	3.1	3	1.6	1.56	1	1.12	1.2	1.5
3	円形	N-44°-W	9	-	3.52	3.42	1.56	1.4	1.78	1.66	1.96	2.02
4	-	N-39°-W	-	-	-	0.95	-	0.95	0.35	0.44	-	-
5	円形	N-52°-W	5	-	1.68	1.7	1.12	1.12	0.7	0.84	-	-
6	円形	N-51.5°-W	9.6	8.8	3.2	3.3	1.8	1.98	1.7	1.9	1.5	1.25
頭無古墳群												
1	不整形	N-15°-E	10	-	-	-	1.75+e	1.5+e	2.12	-	-	-
頭無古墳												
1	不明	N-10°-E	-	-	-	-	1.65+e	-	1.6	-	-	-
鼻部古墳群												
2	圓九方形	N-34°-E	12	10	4.15	4.35	2.1	2.15	1.35	1.15	2.05	2.2
3	長楕円形	N-39°-E	23.4	21.7	5.8	-	2.7	-	2.4	-	-	-
4	円形	N-56°-E	16	-	4.65	4.45	3	3	1.25	1.05	1.65	1.45
5	-	N-100°-E	-	-	1.6+e	-	1.6	-	1.3	-	-	-
6	長楕円形	N-32°-E	16.2	-	8.2	-	1.7, 1.1	-	2, 1.9	-	4.3	-
安永古墳群												
3	-	N-5°-W	-	-	3.6	-	1.6	-	-	1.55	2.2	2.7
4	-	N-3°-W	-	-	3.9	3.85	1.7	1.75	1.75	1.9	2.2	2.1

(單位: m)

裝 邊 幅		袖 幅		衣 門 幅	衣 室 床 面 高	閉 塞	排 水 溝	衣 室 形 式	裝 邊 形 式	外 圍 列 石 形 式
美	前	右	左							
0.6	1.45	0.18	0.22	0.6	58.45	有	無	縱長方形b類	I-B	I
1.06	-	0.4	0.77	0.61	57.45	有	有	正方形b類	I-A	II
1.06	1.72	0.33	0.4	0.86	57.35	有	無	#	II-A	I
0.72	0.8	0.36	0.4	0.72	56.85	有	有	正方形c類	II-B	II
1.1	1.12	0.66	0.4	0.76	55.65	有	無	縱長方形a類	II-B	II
0.4	0.7	0.25	0.25	0.4	54.65	有	無	縱長方形d類	II-A	III
0.78	0.92	0.22	0.2	0.66	53.60	有	有	縱長方形b類	II-A	III
0.68	1.85	0.8	0.7	0.6	52.30	有	無	縱長方形a類	I-B	III
0.5	1.3	0.12	0.14	0.5	52.30	有	無	縱長方形c類	I-A	III
0.6	1.3	0.48	0.36	0.66	53.20	有	有	縱長方形a類	I-A	I
0.94	1	0.4	0.5	0.4	50.55	有	無	縱長方形b類	II-A	II
0.6	1.15	0.28	0.38	0.6	50.90	有	無	正方形d類	I-B	I
0.75	1.01	0.55	0.65	0.75	50.30	有	無	正方形c類	II-B	I
0.68	1.28	0.16	0.28	0.68	54.80	有	無	縱長方形b類	I-B	I
0.64	0.7	0.22	0.14	0.64	50.65	有	有	#	II-A	II
-	-	-	-	-	54.60	不	明	縱長方形c類	-	-
0.9	1	0.57	0.75	0.9	47.1	有	有	正方形b類	II-A	I
0.96	1.12	0.2	0.1	0.96	47.9	有	無	縱長方形b類	I-A	-
0.94	0.86	0.35	0.34	0.94	35.6	有	無	正方形c類	-	-
-	-	-	-	-	35.45	有	無	-	-	-
-	-	0	0	0.56	35.5	有	無	縱長方形c類	II-A	I
0.92	1.14	0.46	0.46	0.92	27.3	有	無	正方形b類	II-B	-
-	-	-	-	-	43.4	-	有	正方形	-	-
-	-	-	-	-	44	-	-	-	-	-
0.9	0.8	0.2	0.15	0.9	33.65	有	無	縱長方形b類	II-B	-
-	-	-	-	-	34.4	-	有	正方形a類	II-A	-
0.7	1.25	0.25	0.15	0.7	25.1	-	無	縱長方形a類	I-B	-
0.5	-	0.3	0.45	0.5	27.4	-	無	正方形c類	II-B	-
-	-	-	-	1.6	33.4	有	-	正方形b類	II-A	-
0.65	1.7	0.4	0.4	0.65	26.25	有	無	正方形	I-A	-
0.9	1.15	0.35	0.45	0.9	25.75	有	有	正方形	II-A	-

正方形b類：石堂中後ヶ谷古墳群2・3号墳、菜切古墳群1・6号墳、黒部古墳群6・7号墳、安永古墳群2・3・4号墳。

正方形c類：石堂中後ヶ谷古墳群4・13号墳、菜切古墳群3号墳、黒部古墳群5号墳、安永古墳群2号墳。

正方形d類：石堂中後ヶ谷古墳群12号墳。

また、縦長方形タイプは、a～d類に細分できる。

縦長方形a類：黒部古墳群4号墳。

縦長方形b類：石堂中後ヶ谷古墳群1・7・14・15号墳、菜切古墳群2号墳、黒部古墳群2号墳。

縦長方形c類：石堂中後ヶ谷古墳群9・16号墳、菜切古墳群5号墳。

縦長方形d類：石堂中後ヶ谷古墳群6号墳。

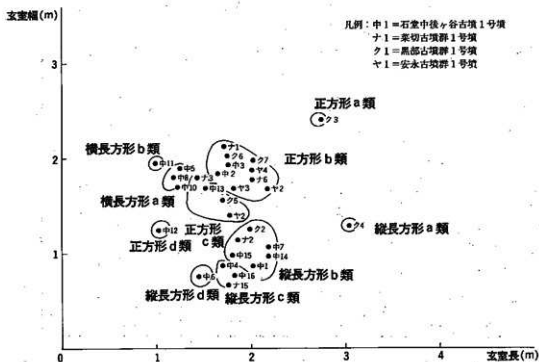
そして、横長方形タイプはa～b類に細分できる。

横長方形a類：石堂中後ヶ谷古墳群5・8・10号墳。

横長方形b類：石堂中後ヶ谷古墳群11号墳。

以上が玄室平面形態からみた類型であるが、表7を見ると、正方形a類の黒部古墳群3号墳、縦長方形a類の黒部古墳群4号墳は突出していることがわかる。しかし、これらは出土遺物か

表7 築上地域各古墳玄室法量表



ら、6世紀後半には造墓を開始している。ところが、7世紀代に入って、石室規模は、上からの強い規制のもとに、一定の規格性をもつようになる。それらが、正方形b類、縦長方形b類、横長方形a類である。そして、その後、漸次、縮小化していく傾向が看取できる。

2. 墓域再編過程の差による類型

畿内地域の群集墳については、白石太一郎氏が^(註3)が、その出現に関して、新しく台頭してきた中小共同体の首長層や共同体の有力成員層をヤマト政権が、その政権を構成する有力豪族による擬制的同族関係の設定という形で、その支配秩序に組み込もうとした結果の産物であるとした。その後、さらに具体的に、支配層基、群集墳の造墓の画期を取り上げ、それぞれには歴史的背景が存在し、古墳の終末、つまり終末期古墳の変遷過程を律令的支配体制の成立、展開との深い関わりの中で考えた。そして、「群集墳の消滅については、7世紀第1四半期と7世紀第3四半期の二つの画期をへて歴史的役割を終える。」としている。そして、第1の画期は、「高安型」と呼称し、6世紀代でほぼ造墓活動を停止するものとし、また、第2の画期は、「平尾山型」、「長尾山型」と呼称し、前者を7世紀代にも造墓活動も展開するもの、後者を7世紀前半に突然群形成を開始するものとした。

辰己和弘氏は^(註4)、群集墳の立地について、その特定墓域の存在を推定し、それを密集型と散在型の二つに分類した。前者は、限定された空間に十数基から数十基の古墳が密集して営まれ、約1町(100m)四方という極めて限定された空間に集中して作られる。そして、それらは、6世紀後半以降に出現し、短時間で集中して造墓されるとした。

また、後者は、古墳を築造する空間が限定される訳ではなく、長期間に亘って安定した造墓活動を継続するものとした。

楠元哲夫氏は^(註5)、中央政権が古墳造墓権保有者を一定の身分制度のもとに特定選別し、それら個々人を新秩序による政治機構の中に組み込むことを通して、支配法を再編強化するものとした。そして、その変遷過程については、大きく二つの画期を認め、第一の画期を、7世紀第1、2四半期の交わり頃、第二の画期を、7世紀中頃、第3四半期後半に比定した。さらに墓域再編過程については、3類4型に分類した。

I類 墓域再編の紐帯が家族という血縁的なものに求められる。

① I類A型「能峠型」 前代の群集墳の周辺で墓域の再編が企られたもので、奈良県能峠南山古墳群、同県丹切大谷古墳が該当する。

② I類B型「田辺型」 成立時、新たに墓域を出現せしめたもの、大阪府田辺古墳群、滋賀県横尾山古墳群が該当する。

II類 墓域再編の紐帯が地域という地縁的なものに求められる。

②II類A型「旭山型」 墓域再編領域の小さいもの、京都府旭山古墳群が該当する。

③II類B型「長尾山型」「旭山型」の群集墳が数個集合したもの、兵庫県長尾山古墳群が該当する。

III類 大規模な後期群集墳と同一墓域内に終末期群集墳が営まれるもの、奈良県龍王山古墳群、同県平尾山千塚古墳群が該当する。

ところで、これらの考えに対し、山中敏史氏は、群集墳の出現を、氏族、部族内部において、一定の自立化、階層分化を遂げつつあった有力世帯共同体の家父層層らによる氏族や集落共同体内部での高い地位を確保するための身分関係の表現とした。またその消滅については、ヤマト政権による規制や個人身支配把握の達成が主要因でなく、部族、氏族内部において、同族的結合が各世帯共同体を統合する原理として、動揺ないし崩壊したことに基本的要因があるとした。

以上のように、畿内地域における墓域再編過程については、様々な論考が提出されている。ここで、それらを詳述することは、紙幅の都合でできないが、大きく先述してきた考え方に集約されると思われる。

そこで、今回調査した石堂中後ヶ谷古墳群、菜切古墳群、頭無古墳群を見ていくと、出土土器からその出現は早くとも7世紀前半で、8世紀前半には造墓、追葬活動を停止している。これは白石氏の言う典型的「長尾山型」群集墳である。また、これら三つの古墳群は、ほぼ同時期にその造墓活動を行っていたと思われる。しかし、それぞれの関係については、先述したように、その群集形態のあり方、副葬品の内容等から、「等質型」の石堂中後ヶ谷古墳群と「隔差型」の菜切古墳群、頭無古墳群に分けられ、共に7世紀前半代に墓域を設定し、造墓を開始する有力首長層とその成員の古墳群であることがわかっている。こうして、それぞれの古墳群は、その墓域再編の紐帯を血縁的關係に求めることができ、さらに相互に地縁的關係をとり、在地有力首長層の系譜をひく「隔差型」の菜切古墳群、頭無古墳群に規制を受けつつ、新興有力首長層とその成員からなる「等質型」の石堂中後ヶ谷古墳群が展開していくことが理解できる。そして、それは、玄室プランの三段階の縮小化、副葬土器の時期差から大きく三つの画期をもって、その終焉へむかうのである。それらの画期は、ヤマト政権による大きな政治的事件と連動すると考えられるが、この築上地域では、直接的影響をすぐに看取することは出来ないものの、それらの流れに合致させて考えると理解しやすいかと思われる。

第一の画期は、7世紀前半の筑紫大宰設置である。ヤマト政権は北部九州に軍事的拠点を置き、律令制度確立へむけ、第一歩を築き始める。

第二の画期は7世紀中頃、663年の白村江の戦いの敗北があげられる。これにより、全国的緊張状態が進み、ヤマト政権の一元化支配の動きが活発化する。

第三の画期は8世紀前半、701年の大宝律令の発令があげられる。ヤマト政権は、政治的、軍

事的支配を確立し、中央—地方の一元化支配を貫徹させるのである。

このような状況を踏まえて、以下それぞれの古墳群の被葬者像を考えていきたい。

当該地域では、古墳時代を通して前方後円墳が造営されることはない。北側の京都平野と南側の駅館川下流域の宇佐平野の間には、全く前方後円墳が見られないのである。地方の有力豪族の拠点が、この二つの地域にあったことが窺える。ところが、7世紀代になると、この状況はにわかに変化していく。各小地域に爆発的に墓域を賜与された在地中小首長層が群集墳を造営し始める。こうした状況下で、石室中後ケ谷古墳群、菜切古墳群、頭無古墳群でも同様に古墳造営に入る。先述したように、石室中後ケ谷古墳群と菜切古墳群、頭無古墳群との間にはある程度の階層差が認められた。

従って、筆者は、石室中後ケ谷古墳群を7世紀代に入ってからの新興中小首長層とその成員の墓域と捉え、菜切古墳群、頭無古墳群を在地中小首長層とその成員の墓域と認めた。

このような墓域再編過程の契機となる墓域保有権の獲得については、次の二つの要素に注目したい。1つは、周防灘を目前に立地する豊前市黒部古墳群6号墳石室に描かれた船の線刻である。黒部古墳群は、その規模や副葬品の内容から、築上北部地域の中心的地集団のものと思われる。特に6号墳の船の線刻から、この集団が周防灘を中心にした海上交通に従事するものであったことがわかる。従って、ヤマト政権は一早く、海上交通権を掌握する意味で、当地域の中心的集団である黒部古墳群の在地有力首長層に造墓権を賜与する。そうして、当地域では、黒部古墳群の在地有力首長層を中心にして、墓域再編過程が進展し、新たに、菜切古墳群、頭無古墳群などの在地中小首長層に造墓権が与えられ、墓域を設定する。さらに、磐井の乱後、急増する渡来人集団の各地への進出に目をむけると、当地域でも「正倉院文書」に残る豊前国戸籍のうち上毛郡加久也里（現在の豊前市梶屋付近）に居住した渡来人集団が同時期に造墓権を得て、営造を開始するのが、石室中後ケ谷古墳群などの「等質型」群集墳であると考えられよう。これらについては、未だ実証的な資料が不足し、推論の域を出ないが、今後、周辺の住居跡等の集落や横穴群などの検討を加えることで、当時の豊前国上毛郡、築城郡の社会的状況が把握されるようになってくると思われる。

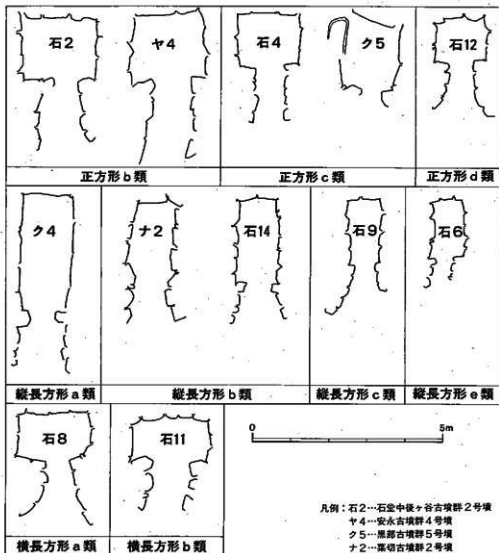
現在の群集墳研究は、森岡秀人氏^(註7)が指摘するように、以下の7点に集約される。

①出現契機^(註7)の政治過程追求、②分布型、地域性の研究、③構成単位の折出、④被葬者集団の階層、性格研究、系譜論、⑤初期・終末期群集墳の解釈、⑥群集墳と同時代集落との関係、⑦造営原理の解明である。このうち、本稿では、①、②、③、④については、ある程度の方向性を示してきたと考えている。しかし、今後、さらに各集団の階層差を生活面から把握していく上でも①の同時代集落との関係に注目していかねばならないと思われる。幸い、旧豊前国築城郡に入る、現在の築上郡築城町では、最近、一般国道10号線椎田バイパスの建設工事に伴い、昭和57、58年に調査された安永古墳群と同じ墓域内に入る古墳が、2基調査されている(広末・

安永遺跡)。また、それと同時期の大集落跡もすぐ北側で調査されている(赤幡・森ヶ坪遺跡)。

こうして、古墳時代のエポック地帯と思われていた旧豊前国上毛郡、築城郡地域でも、今回の石室中後ヶ谷古墳群、菜切古墳群、頭無古墳群の発見を契機にして、当地域における古墳時代終末期の様相が、具体的に把握できる第一歩を踏み出すことになり、今後に期するところ大である。

最後に、本報告書を作成するにあたり、常に適切な助言と指導を賜った、福岡県教育委員会



第 126 回 築上地域各古墳支室プラン分類図(1/100)

の副島邦弘、馬田弘稔、小池史哲、池辺元明の各氏ならびに直方市教育委員会の田村悟氏には、改めて記して深甚の謝意を表する次第である。

(註)

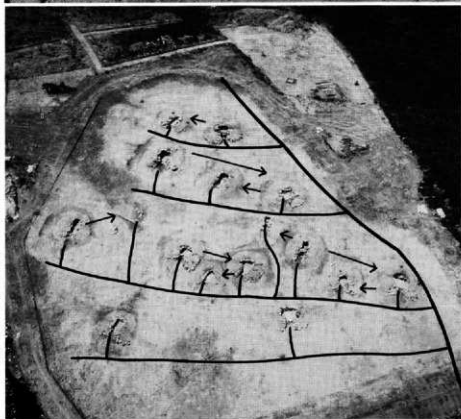
- ①辰己和弘「密集型群集墳の特質とその背景」『古代学研究』100号、1987年。
- ②「安永遺跡」『築城町文化財調査報告書第1集』、築城町教育委員会、1984年。
- ③白石太一郎「畿内の後期大型群集墳に関する一試考」『古代学研究42・43合併号』、1966年。
「大型古墳と群集墳」『福原考古学研究所紀要 考古学論改』第二冊、1978年。「畿内における古墳の終末」『国立歴史民俗博物館研究報告第1集』1982年。
- ④辰己和弘「密集型群集墳の特質とその背景」『古代学研究』100号、1987年。
- ⑤楠元哲夫「古墳終末への一状況」『能峠遺跡群Ⅱ、奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第51冊』、福原考古学研究所、1987年。
- ⑥山中敏史「律令国家の成立」『日本の考古学6 変化と画期』岩波書店、1986年。
- ⑦森岡秀人「群集墳の形成」『古代を考える 古墳』吉川弘文館、1989年。

圖 版

1. 石堂中後々谷古墳群墓道復元案①（列状配置を基準にした場合）



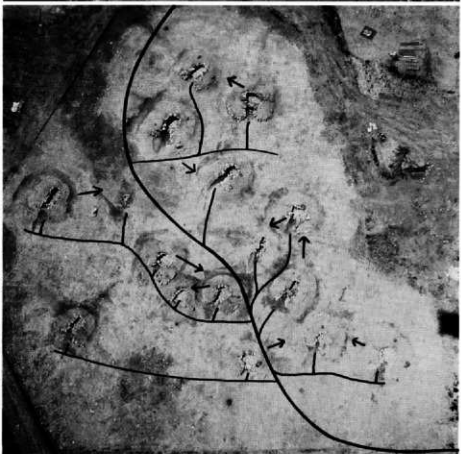
2. 石堂中後々谷古墳群墓道復元案②（列状配置を基準にした場合）



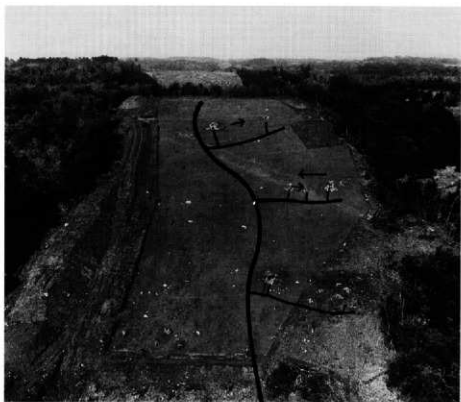
1. 石室中後々谷古墳群墓道復元案③（列状配置を基準にした場合）



2. 石室中後々谷古墳群墓道復元案④（周溝を基道として利用した場合）



葉切古墳群墓道復元案（列状配置を基準にした場合）





1. 推田バイパス建設工事に入った石堂中後ヶ谷古墳群 (1988. 12. 19)



2. 推田バイパス建設工事に入った栗切古墳群 (1988. 12. 19)

**椎田バイパス関係
埋蔵文化財調査報告
— 2 —**

平成2年3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印刷 錦天地堂印刷製本所
北九州市小倉北区大字町10番18号

福岡県行政資料

分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 元	登録番号 10

第 2 集

石堂中後ヶ谷古墳群
菜切古墳群
頭無古墳群

福岡県築上郡椎田町所在遺跡の調査

付 図

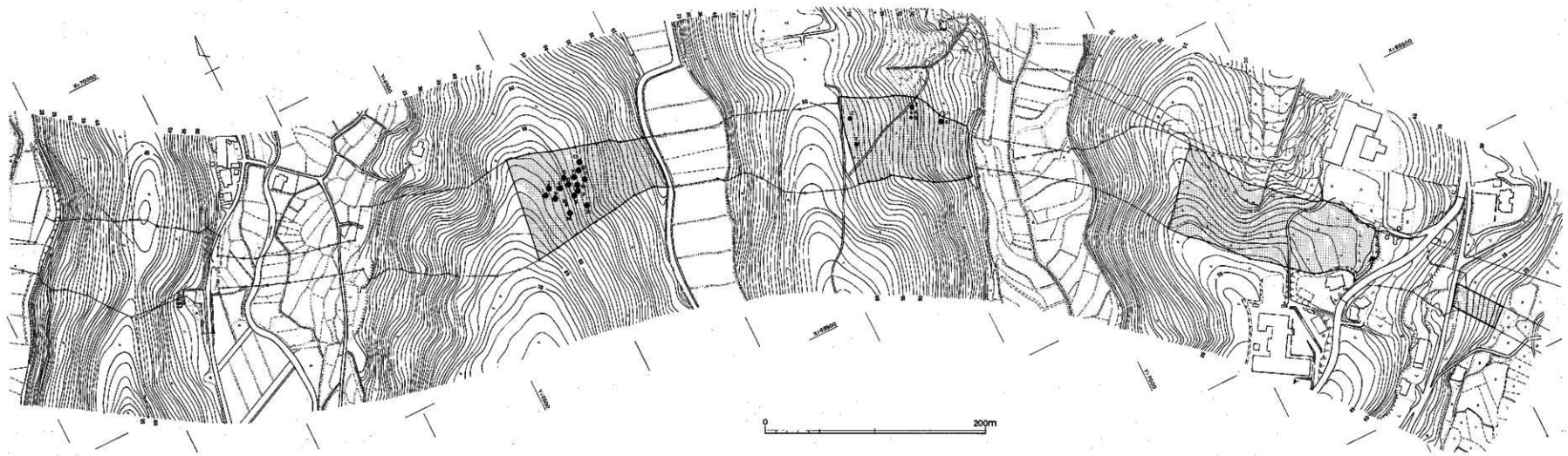
- 付図1 石堂中後ヶ谷古墳群、菜切古墳群、頭無古墳群発掘区地形図 (1/2,000)
付図2 菜切古墳群調査前地形測量図 (1/300)
付図3 菜切古墳群調査後地形測量図 (1/300)
付図4 頭無古墳群調査後地形測量図 (1/300)

石室中後ヶ谷古墳群

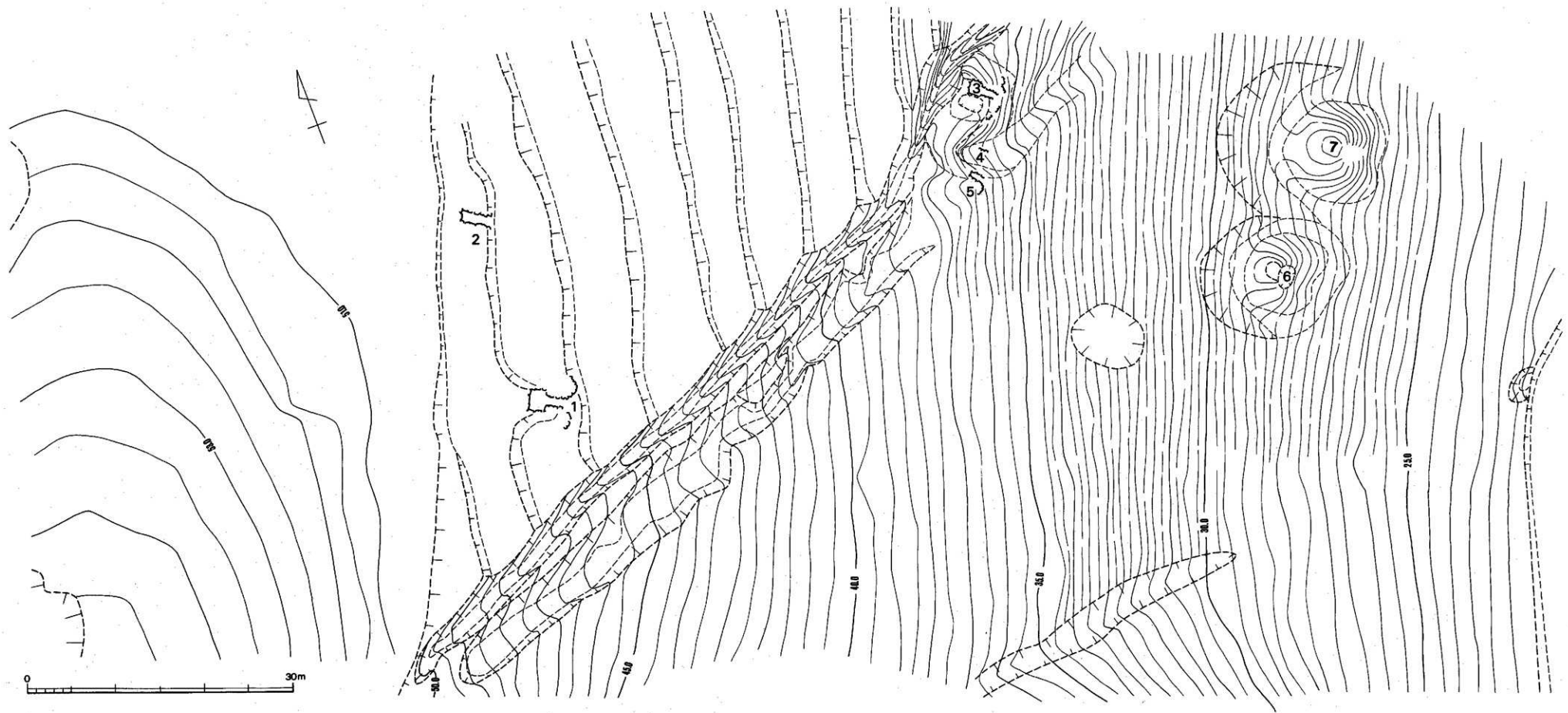
栗切古墳群

源無古墳群

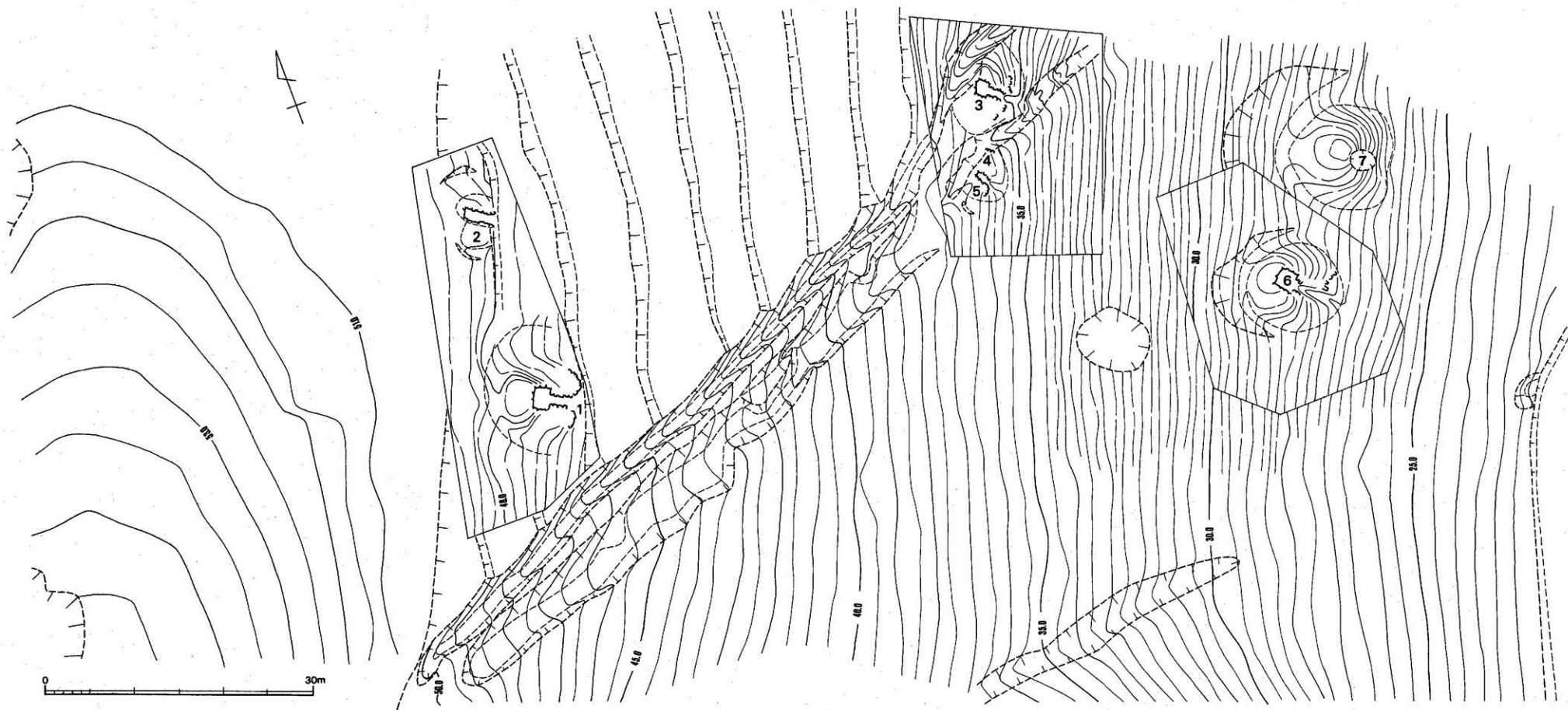
西一丁目遺跡



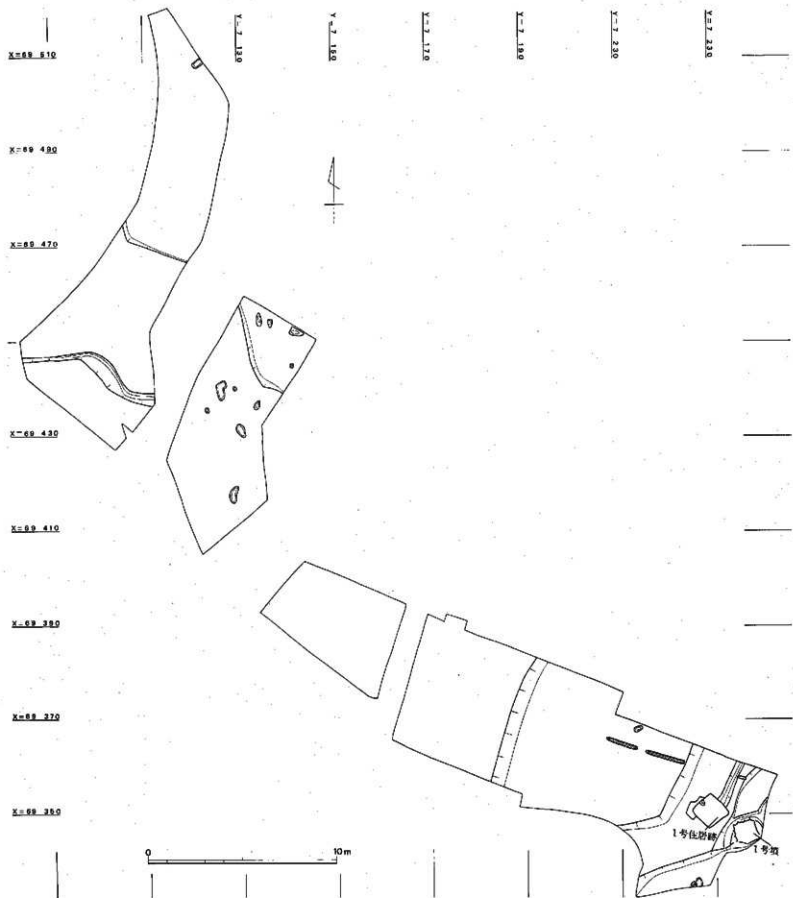
付圖1 石室中後ヶ谷古墳群、栗切古墳群、源無古墳群発掘区地形図(縮尺 1/2,000)



村圖 2 棠切古墩群調查地形測景圖(縮尺 1/300)



附圖 3 梁初古墳群調査後地形測量図(縮尺 1/300)



付图4 颍州古城群调查后地形图景图(缩尺 1/200)